東方魂合変

DHMO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方魂合変

【Ｎコード】
Ｎ０８２４Ｐ

【作者名】
ＤＨＭＯ

【あらすじ】
異次元から逃げてきた魂が身体に入ってしまい、それを追ってきた闇魔様とスキマ妖怪に幻想郷世界入りさせられる、的な話。オリ主チートっぽいです。現在序盤を修正中。

ＰＶ２００万、ユニーク１４万ありやとやしたー！読者がいるなら幾らでも頑張れる作者ですよ！

オリキャラ設定（前書き）

ネタバレ注意ったら注意。しつこいけど

オリキャラ設定

ネタバレ注意。本当に注意

水元（みずもと）　鉄生（てっしょう）

年齢：約５５０
能力：大地を操る程度の能力
　次元と空間を操る程度の能力
　時を止める程度の能力
　妖気、霊気、神気（人化時は霊気と神気のみ）
　言霊（対象は自分にしか取れない）
　妖術（言霊を起因にして発動する事でしか出来ない）
　主人公補正（作者の都合のいい時にしか発動しない。つかさせない）
外見：人化時は黒髪、ノーマルは白銀の髪に竜の角

竜神（後述）の魂が入った人間。バカでは無いけどみんなが面白いと思ってくれるなら幾らでも道化になれるタイプ
好きな人は幽香……だけど、基本的に自分に好意がある者には好意で返す。本人曰く相手の思いを無下に出来ないとかなんだこいつ爆

発しろ
本来なら能力無しだが竜神の力に当てられ『大地を操る程度の能力』を持った
『時を止める程度の能力』は次元と空間を操る程度の能力の副産物。次元の時を止めるか空間の時を止めるか選択可能。人化時にはある程度の制限あり
また掌握領域（鉄生が呼んでいる、自身が空間操作出来る範囲）で時止めを防げるが時が止められたかは判断不能。時止め又は時止められ時は空間操作が出来ない為それで判断するしかない。因みに時間操作時には瞳が紅くなる（全キャラ共通）
言霊は漣（後述）から教わった妖術を扱う術。自らの記憶にある妖術を言霊で引き出して使う
特殊な術により人化している時もある。その際は性能が全体的に下がる
漫画アニメゲーム好き。無くても生きてはいけるけど時々ネタを使わないとネタ欠乏症になる位には好き
基本的に近接戦が得意。遊びなら武器や素手、ネタスペカ。本気なら次空能力と岩、鉄、熔岩が乱舞する。最近では無限の剣製もやったりしてたよ
竜神の被害者なのに被害者らしくない、つか竜神の力を利用しまくりで幻想郷ライフをエンジョイしてる。なんなんだこの主人公

竜神（りゅうじん）

年齢：たくさん
能力：次元と空間を操る程度の能力

人間嫌い。超嫌い。どれ位嫌いかって言うと皆殺しにしたい位
ただ、殺すのが好きなんじゃなくてこの次元（若しくは幻想郷）が
生きて欲しいと思うが故の行動。邪魔するなら妖怪だって殺す
戦闘方法は弾幕が主。能力は防御にも攻撃にもと鉄生よりも空間操
作が上手い
鉄生の身体では鉄生の能力も使える
物腰は穏やかで理性的。ただ影が薄い。作者もちょっと忘れてた
性別は……知ってるか？神様って性別無いらしいよ？今決めてない
のかって呟いた奴表に出ろ

あ、後『龍神』じゃないからな。漢字間違えるなよ！

赤瀬（あかせ）　漣（さざなみ）

年齢：（鉄生と修行した頃の身体的年齢は）２０歳位　　転生し
た回数は数知れず
能力：言霊
　その他

退魔師。短剣などの投擲武器を主とする戦法を好む
転生者な為、豊富な知識や経験がある
固有の能力もあるけど秘密。今バラしてもつまらないし

ルーファス

年齢：（紅魔館に勤めていた頃）１００歳近く　　転生した回数は（ｒｙ

能力：言霊

その他

転生した漣

吸血鬼。しかし真祖ではなく後天的な吸血鬼

血を流し込んだのはヴィンセント（後述）。経緯は秘密。今バラしても（ｒｙ

因みにトシを取ると老ける。鉄生みたいに永遠の１７才（笑）ではない

ヴィンセント・スカーレット

年齢：たくさん

能力：感化されない程度の能力

二つ名だけが格好良かった一応真祖。しかし実力は本物

真祖っても月姫の物とは別で、生まれついての吸血鬼という意味

感化されない程度の能力で能力や術は無効化する。しかし愛娘には負ける親バカ。むしろこっちの能力の方がチート主人公っぽいと思った俺は悪くない

鉄生との出会いの経緯は片編変にでも書く為暫しお待ちを……
蘇芳色の服をよく着ている、らしいよ

ルクレツィア・スカーレット

年齢：女性に年齢を訊くんじゃありません
能力：場に溶け込む程度の能力

鉄生曰わくヴィンセントに勿体無い美人さん。能力による人付き合いの良さは衣玖さんを上回る

博麗（はくれい）　霊奈（れいな）

年齢：原作霊夢と同じ位
能力：空を操る程度の能力

見た目、能力までも霊夢にそっくりな博麗の巫女
能力は空を飛ぶ以外にも使い道がある。詳しくは片編変で
……ちゃんと考えてますからねッ！

博麗（はくれい）　霊緋（れいひ）

年齢：ちょっと年食った霊夢
能力：平和を司る程度の能力

のほほんとした博麗の腋巫女
能力により異変が起こるのを防いでいるが、完全に幻想郷が平和な訳では無い。現に暴れる妖怪は減っていない
戦闘はあまり得意では無い模様。能力が能力だし
霊夢の名前を決めるのが早かったのは勘です、勘。博麗代々の勘

オリキャラ設定（後書き）

分からない点があればどしどし作者にお伝えくださいー

一、転入生（修正）（前書き）

作者の駄文・ザ・ワールドにようこそ！存分に妄想してくだされや！

４／２９　修正しました

一、転入生（修正）

俺こと水元鉄生（みずもとてっしょう）１６才。

青春のせの字もまだ来てない青二才な高校一年の時、「彼女」は来てしまった。

「……転入生？」

「そう転入生！さっき職員室で話してんの聞いたんだよ」

「こんな時期にねぇ、珍しい」

「女？それとも男？」

「女だそうだ。ただ姿は見れなかったな……いや残念」

入学式、体育祭と幾つかの行事を終え、クラスメートとも打ち解けた六月中旬。朝来てみればどこからか手に入れた転入生の話題で持ちきりになっていた。どこのクラスにも情報通はいるものだなぁ。しかしそんな情報より抜き打ちテストの情報が欲しいと思うんだが。

「お、来たか鉄生。お前はどんな子に来てほしい？」

中身に弁当しかない通学鞄を机に引っ掛け、爺臭くどっこいしょとか言って席に着くやいなや前の席に座っている奴が問い掛けてくる。ふむ、まずは常識的に答えるか。

「そりゃもちろん、スタイル抜群の美少女とか少し内気な大和撫子とか夢やロマンが溢れる選択を」

「そんな子が来てもお前なんか見向きもされねえよ」

「高望みはよくないね」

「同感」

「同上」

バッサリ切り捨てられた俺のライフは残り僅かです、火の玉なんか打たなくともショックの2点ダメージで焼けますですよ？放蕩魔術師でもいいかもしれない。

そんなに非難されるなら仕方ない、本能が思うがままに答えよう！

「幽香とか紫とか小町とか咲夜さんとか胸がデカイ人が好みです」

『……』

本能は時に身を滅ぼす近道を教える、例えば場の空気が静まり返るような道とか。誰か俺に衣玖さんの能力をくれ。そうでなければ今すぐ俺を幻想入りさせてくれ。

「あー……鉄生」

「……なんだ？」

ザ・ワールドした空気の中で動いた空条もといクラスメートその１は俺の肩に手を置き、とんでもない事を言いやがった。

「咲夜さんの胸はＰＡ「神に祈る間をやろう」ぐべらぁ！？」

しょっぱなからネタを使いすぎてるような、と憂う作者はお構い無しにクラスメートその１の頭を握り潰す。たとえ握力が３０ｋｇ前後だとしてもッ！人体を痛めつけるには十分だッ！

そんな無駄な事ばかりしていると、スピーカーからチャイムの音が鳴り響いた。ちっ、今からこの愚か者に制裁を下そうとしていた時に……運がいい奴め。いや、さっさと握り潰してやろうか。

……なんかこの台詞は三下雑魚が言う台詞な感じがした。どうでもいいっすね、ハイ。

「予鈴鳴ってんだからサッサと手を離せ」

ゴッと出席簿の角で叩かれて獲物に逃げられた。なにをするだァー、でも生活指導が怖いので何も言えない恐怖政治に俺涙目。

何時の間にか現れた中肉中背国語教師にメンチを切りつつ席に着き直すと、なにやら不気味な笑顔を浮かべ始めた。皺が寄って醜いだけでっせ、先生。

「さって……今日はいい知らせがある。このクラスに転入生が入る事になった！」

歓声でも期待していたのか教室を見回しているが残念、殆どの奴らは知っている為ふーんとかへぇ～と適当なリアクションだ。そう思ってる俺も耳かっぽじってるし。

「先生、さっさと紹介して下さい」

クラス委員ですらそんな態度だから先生が完全アウェーでござる。こんな時に限って一致団結しよってからに……

そんな風に生徒達から無言の要求を呑まざるを得なくなった先生は足早に教室のドアまで向かった。

「入ってくれ、詠輝（えいき）。みんながお待ちかねだ」

先生はドアを開けて呼び掛けていたが、肝心の転入生はどうやら先生の影に隠れて見えない。はて、そこまで体格のいい先公では無い筈だが。そんなに背が低い奴なのか？

思った通り、先生がどいてもその姿は拝めなかった。が、代わりに見えたのは――

「帽子……？」

どこぞかで見覚えがある厳しい帽子がぴょこっと見えた。あんな奇抜なのを被ってなんにも言われないのか？さっきから疑問符ばかり頭に浮かぶ。

やがて壇上に立ったその姿を見て、俺は絶句してもうた。いやだっ

て……だぁって……

「初めまして、詠輝識（えいきしき）と申します。至らぬ点もあるかと思いますが、どうかよろしくお願いします」

……四季映姫様が自己紹介してるような光景とか、それなんて白昼夢？

隣の席のうぜぇニコ厨クラスメートその2をチラリと見るが、その顔に動揺の色は見えない。こやつは何時の間にポーカーフェイスを学んだんだ、いやいやまさかそんな器用な真似は出来まい、さすれば何故えーきっきを見て反応すらしないんだ？

「おい、おい！」

「ん？」

小声でクラスメートその2に話し掛けて、転入生……なんだあの画数多い字。ともかく、詠輝を指差す。

「お前、あいつの姿どっかで見なかったか？」

「え～、俺嫁以外の女子には興味無いし。覚えなんかねーよ」

「因みに嫁は」

「えーきさまに決まってんだろＪＫ」

どこら辺が常識か分からないが、取り敢えずこいつには詠輝は四季映姫だと見えてないよう……いやいやいやいや、そんな厨二妄想は

捨てた筈だろ。なんでそんなあり得ない回答を出すんだマイブレイン。

だが……壇上には確かに四季映姫が立っているようにしか見えない。帽子もそうだが、左右非対称の緑髪も服装もなにもかも、「東方」のそれだ。だがコスプレしてるような節は無く、そっくりそのまま現実になったような……

「じゃあ詠輝、一番後ろの空席に着いてくれ」

「分かりました」

そうこう思考を巡らせていると、四季映姫……詠輝は先生に指示により後ろに向かっていった。

……俺の妄想、なのか？

一、転入生（修正）（後書き）

タイトルに（修正）とついているものとついていないものは話は噛み合ってません。修正が済めば作者がその内（修正）は消しますので、修正版は新しい気分でどーぞです

二、逃亡者（修正）（前書き）

大丈夫、きっとなんとかなる

5／4修正しましたよう

二、逃亡者（修正）

英語と言う名の休み時間を終え、次の授業で出ている課題に四苦八苦していると教室の端に出来た人だかりが目に入ってしまい、そんな言葉がポロリと口から出てしまう。いや、ここは都立の一般高校であってコスプレエリアじゃないんだぜ？それなのに映姫（？）にわらわらと人が集ってるのは如何なものか。

「どうした鉄生？お前が美少女に反応しないなんて……」

「……なんだよ」

真剣な表情でクラスメートその1が見つめてくる。オイオイ、幾ら俺が男装の麗人に見紛う程の美青年だからと言って野郎と見つめ合う趣味が無いからどっかいってなさい。

「……酸素欠乏症か？」

「何故にそんな結論に辿り着いたのか知らんがちょっと自由落下運動しようか」

「柔らかい表現で俺に死ねって言ってるよこいつ！」

「言い方が問題なら紐無しバンジージャンプでもいいぞ」

「そんなのはお笑い芸人だけやってればいいだろぉ！」

ハハハ、俺が物凄い笑顔でマイフレンドと話しているのになんで皆逃げるのかな?さて、タウンページで棺桶屋を探さないと……いや、ぐちゃぐちゃになった遺体はそのまま焼却処分すべきか。

「待って下さい」

「ん?」

抵抗が思いの他強いので仕方無くCQCをかまして黙らせてると、予想外の方から声が掛けられた。

「シャバダb、違う……えいき、さんですっけ?」

「ええ、始めまして」

こっちはなーんか初対面って感じがしないんだが。えーきさまなんて東方かじった奴なら、まぁ見覚えはあるだろうし。

そんな事を思っていると、詠輝の視線が若干冷たいものになった。なんやねん、初対面なんにそんな目で見んといてや。俺のガラスのハートがブレイクしちまう。

「……あなたは私の自己紹介を聞いてたでしょうが、私はあなたの名前を聞いていませんよ?」

「あ、ああ。そゆことね」

びくった、てっきりもうなんか恨みを買ったのかと。

じたばたしているクラスメートその1を離して、詠輝に向き直る。

「俺は水元鉄生、気軽に鉄生と呼んでくれれば」

「そうですか、では私も識で構いません」

識、ね……本当に四季映姫なら苗字（？）だからあんまりフレンドリーって感じがせんな。ってだからそんな思い込みは如何ちゅうに。

「では鉄生。幾つか聞きたい事があるんですが、宜しいですか？」

「俺が答えられる範囲ならどーぞ」

質問？どうしてそんなに綺麗なんですか、とか聞かれても答えられんぞ。おいそこのモニター前の笑ってるお前ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしようか？

「さっきまで男子生徒に暴力を振るっていたのは何故ですか？」

「暴力？」

はて、暴力……なんかしてたっけ？

「えっと、覚えが無いんですけーども」

そう答えると、詠輝が怪訝な顔をする。どうでもいいけどさ、なんでみんな遠巻きに見つめるんだ？見世物じゃねえよ俺らは？

「さっきまで、あの生徒の首を絞めていたじゃないですか！何故あんな事をしていたんですか！」

……おお、そういえばんな事もあったね。

「でもあれは……なんだ、友情と言いますか。まぁ、本気じゃねえよ？」

「そんなことはいいのです。あなたは少し「説教にゃあ興味無いからなー」なッ！？」

ひらひらと手を振って聞く気が無い事を示す。だって面倒やし。

「そ、そんな風に人の話を聞かないのも含めて話があります！」

「俺には無いので遠慮を……」

……いや、ある事はあったか。ただなぁ……確証が無い内に電波な事を言ったらまた五月蝿そうな気がするし……

「とにかく放課後、話があります。どこか邪魔が入らない所に……」

「じゃー放課後」

肩を怒らせつつ詠輝が自席に戻っていく。……ここに悔悟棒があれば完璧なんだが。

「……あ、宿題忘れてた」

今からやっても……間に合わんよなぁ、先生入ってきてしまったし。運ねぇなぁ。

放課後、屋上入り口

「鉄生、抜け駆けはズルいってんだろ！」

「喧しい！俺にだって出会いの一つや二つぃいだろ！」

「お前はまだいいだろ、俺達なんざ今まで出会いすらなかったんだぞ！」

「その言い方はなんだ！俺がプレイボーイかなんかみてぇな言い方じゃねぇか！まだ告白した事もされた事もねぇってのに！」

嗚呼、彼女がいない歴と実年齢がイコールで結べてしまう哀れな男の醜い争い。俺は悪くない、出会いの機会が無いと嘆くだけの男共が悪い。だから俺がこいつらを殴り倒すのは正当化されませんね。でもお前らはついてくるな。話がややこしくなる。

「……余程私の説法を聞きたい様ですね……」

丁度最後の一人をに鞄を投げ飛ばしたところで背後から不穏な気配が。なんでそんなに気配を消したがるんだか。

「詠輝、もう来てたのか」

振り返ってみれば、教室と同じ姿のままのえーきさんがおりました。しかもジト目で。

「私だってさっさと済ませたいんです。まだアレが探し終わって無いのにこんな……」

「ん、どーした？」

「なんでもないです！早くこっちに来「なるほど、私を探してましたか」ッ！？」

あ？今誰がなんつった？けどこの場には俺とえーきしかいないし……

謎の声は、まるで俺から発せられるかの様に身体に響く。……まさか？いやいやいやいやだから厨二的発想はいらないからね？でもどうして勝手に身体が動くんだ？何故口が自由に動かないんだ？

「……あなたは……」

「漸く気付いてくれましたか。勘が鈍い所を見ると、まだまだ新米の様ですね」

……あれか、コレは夢か。俺はきっとまだ英語の授業で寝ている違いない。リアリストって訳じゃないがこんなのおかしすぎる。夢を信じるのはいいが夢追い人は身を滅ぼすんだぜ？

俺の身体はそんな想いを全く聞き届けず、悪夢は目覚める事無く続

いている。

「詠輝識……おかしな名前を使っていますねぇ。四季映姫、見習い閻魔様」

「み、見習いは余計です！やはり竜神、あなたなんですね！」

わたわたとしているが、威厳を保ったまま格好良く言ってくれた。

……カリスマ（笑）ってれみりゃだけじゃないのか。危ないなぁ、色々と。

「ええ、お久しぶりですね。今日は一体どういったご用ですか？」

……もーいい、そろそろ解説しよう。この馬鹿丁寧な言葉遣いの主は俺だ。だが俺はこんな口調を使う位なら筆談した方がましだ。

つまり……誰かが俺の身体を動かしてるとしか……嘘やろ……

「惚けないで下さい。私の裁判から逃げた罪、ここでまとめて償わせてもいいのですよ？」

「おお怖い怖い、只の人間も巻き込む気ですか？」

手を胸に当て、自分の身体を指差す……俺じゃなくて竜神か。一体どうなってんだ？竜神ってなんだ？訳が分からんぞ。

「この身体、『水元鉄生』はれっきとした人間ですよ？お陰で逃げる為の力が抑えられるし、弱った魂を休める事も出来ない。失敗ですよ、こんな“人間”しかいない次元に来てしまうとは……」

声の主……と言うのも変か。竜神とやらは本当に悔やんでいるようだ。悔やむのはいいが出て行ってくれよ、俺の身体から！

「……だからと言って、あなたを見逃す訳にはいきませんよ。それにあなたの言葉が真実とは限らないでしょう」

「……もし全力が出せるなら、とっくに貴女を殺して逃げてますよ。まッ、その時はこの身体を壊さなきゃいけませんがね」

おおおおおおおおおおおいいい！！？なんかサラリと俺殺すような事言わんかったか！？冗談じゃねえぞ何時の間にかいたもう一人のボクに殺されるなんて！ファラオの呪いっすか！？

声にならない叫びを上げていると、急に視界が傾き始めた。おおぅ、このままだと映姫の上に覆い被さる形に。なんというハプニング、それくらいの役得期待しても……

「ど、どうしたんですか！？」

……ちっ、期待させやがって。さっと身をかわした映姫は倒れた俺を見ると肩を貸そうとしている。背が足りないから俺は跪いたままだが。

「……申し訳ない。さっき言ったように、水元鉄生がこの身体にある限り、私の魂は安定してないんです。そう、だから弱いまま……」

「まさか……消えるのですか？」

口の端が弱々しく歪むのを感じる。よかった、消えるってんならさっさと消えてくれ。もう東方やらないから！咲夜さんすら拝めない

俺がやるのが間違ってましたから！早うどうにかしてくれぃ！

「……貴女なら、わかるでしょう？」

そんな呟きを最後に、身体が勝手に動く奇妙な感覚は終わった。……いやぁ、白昼夢ってこんな体験なのかーそーなのかー。

「……鉄生、どいてくれませんか」

「お、悪い」

肩に乗ったままなのでむすっとしている映姫からそそくさと離れ、ついでにこの場から離れようとするがそれは許されなかった。ずるずると手を引かれ屋上の中心ほどに来て、漸く映姫がこちらに向き直る。

「鉄生、さっきの出来事は覚えていますね？」

「おー見ろよ今日は空が青痛い痛い痛いサーセン！マジサーセン！」

ふざけたら脛をおもきし蹴飛ばされたし。そんな乱暴な子に育てた覚え元からありませんよ！？

「ハァ……あなたと付き合ってると真面目に話せませんから、単刀直入に言いますよ」

「オイオイ、付き合うだなんてまだ手しか繋いでなギャアアァァァァァ！！！」

今度は足の甲を磨り潰されたぜ。こ、これが巷で有名なツンデレで

すか！違いますね、ハイ。

そんな問答を数回繰り返して、やっと映姫が口に出来た言葉はある意味予想通りである意味期待外れな言葉だった。

「はっきり言いますよ鉄生……あなたは、人間ではありません」

二、逃亡者（修正）（後書き）

いきなり文がおかしくなっても仕様だよ？

三、初能力（前書き）

三話一気にとかいってすいません。手直しに時間がかかりました。

三、初能力

屋上に男女二人きり

そんな甘酸っぱい青春が満ち満ちているシチュエーションで、なんで人外宣言を受けなきゃならんのか。

「人間じゃない…？なら俺は…」

なんなんだ？まで言わせず、すばやく詠輝が言う。

「あなたには、竜神の魂が宿ってしまいました。
今は何ともないでしょうが、その内あなたの体を大きく変えてしまうでしょう。
そしてその時、あなたが自分の意思が強く保てないなら、おそらくその体は暴れまわってしまいます。
全てを、破壊してしまうことでしょうね…。」

「！？」

その話を聞いて竦みあがった。

別に自分の体が変わるのはいい。

だが、真っ先に思い浮かんだのは家族や仲間のことだ。

父さん、母さん、クラスのみんな――――。

その人たちに被害を与えるかもしれない。

「おそらく此処には退魔師なんていないのでしょう。あなたを殺すことができるような人も。
あなたは今、この次元で一番の危険な存在なんです。」

「…なら、俺はどうすればいいんですか？」

そこまで言われたなら、引き下がるしかあるまい。
家族や友人に危害は与えたくない。

「そうですね…とりあえず、あなたの能力を使ってみましょう。」

「能力ったって、俺は普通の高校1年ですよ？」

空を飛んだり、瞬間移動なんてできる訳がない。

「本来なら先天的に使えるか、修行をおこなってその使い方を体得するものですからね。
…しかたない、死ぬ気でやりましょう。」

そう言うと、離れて手をこちらに向けている。

「死ぬ気で？一体どうゆうげふっ！？」

いきなり何か投げてきた…光弾？

「ほぅ、耐えましたか。さすが竜神の魂、早速効果が現れているようですね。」

「耐えてなかったら…どうするつもりで…。」

「ほらほら、動かないと当たりますよ。」

詠輝が手をかざすと、次々と光弾が生成される。

「〜〜〜！」

怒りと痛みで声も出ない。とりあえず避けよう。

しっかり見れば、避けられない訳じゃない…はず！

来る位置を見極め、光弾の雨を掻い潜る。

俺から外れた光弾は、屋上の表面を削っている。気にしない。

何とか反撃しようと詠輝に近寄るが、飛んでいってしまった。

「ぬぁ？」

「ほら、妖気や神気を使えれば、こんな事容易いですよ。」

妖気？さっき言ってた、俺が喰ったって奴か？

「そんなもんっ、つかえるかよっ。」

詠輝を捕まえようとジャンプしてみるが、絶妙に逃げられる。

楽しんでやがる、こいつ。

「捕まえるのが先でしょうか？それとも撃墜されるのが先ですか？」

いつの間にか側面から光弾が二発迫っている。

一発を足に食らい、二発目が頭に迫る。

か、壁！なんかないのか？なんか！

しかし、無情にもそこにはコンクリートの床しかない。

頼む、壁を、壁を――――。

身構えていたのに、何も衝撃が来ない。

おそるおそる見てみるとそこには、土の壁が出来ている。

お、おお？これなのかな？俺の能力って。

「やっと何か出しましたね。」

少しくたびれたような声を出しながら、詠輝が近寄ってきた。

「なるほど、土を操る程度の力ですか…。」

なかなかの能力で痛っ！？」

最後まで言わせる前に、一発殴る。

「やるならやると言ってくださいよ。死ぬかと思ったんですけど？」

もうなんか敬語を使ってしまう自分が情けない。

「イタタタ…いいじゃないですか、手っ取り早くできたんだから。むしろ感謝してもらいたいぐらイタタタタタタすいませんごめんなさいゆるしてーーーー！」

なにやらムカつく発言をしようとしたので、こめかみを両手ですり潰す。

悶絶し痛さの余韻に浸かっている詠輝はそのままにするとして、階段の方が騒がしくなってきた。

下の奴らに気付かれたらまずいよな…。どーしよ？

四、逃避行（前書き）

やはりというか、なんというか、不定期連載になりそうです。

話を十話ぐらい吹っ飛ばしました。泣かせて

四、逃避行

屋上に上がる前に、追跡しに来た奴は蹴散らしたが、さっきの騒ぎの音で別の野次馬を呼んでしまったようだ。

先生方が来るのも時間の問題だろう。

「さて詠輝、どうやって逃げようか。」

「大丈夫です、ちゃんと準備はしてあります。」

「？いつの間にそんな事を？」

さっきまで詠輝は痛みに悶え苦しんでいた筈だが。

「いえ、私ではありません。…紫、見ていたのでしょう。早く開けなさい。」

ん？ユカリ？

・えいき　しき

・小さくて可愛い

・説教ください

・『…やはり貴女でしたか、闇魔様。』

・弾幕

・ユカリ

待て、これが当てはまる者と言えば――

「四季…映姫様？」

確信を持って言える訳じゃないが、たぶんそうだ。

「あれ、もう言いましたっけ。まあいいです。
そう、私の本名は――」

言ってる途中に、目の前の空間に裂け目ができる。…スキマ？

「は…く、とお…なさい。たも…ない…ら、はや…。」

音がよく聞き取れないが、女の声のようだ。

スキマを開ける人といえば…早く通った方がよさそうだ。

「やっと開きましたね。早く通りましょう。」

「は、はい。」

スキマを通ると、川岸に出ていた。

「はぁ…はぁ…はぁ…に、二度と手伝いなんかしないわよ。まさか、別の次元に繋げだなんて…はぁ…。」

「ご苦労様です。」

息が荒い女に、映姫は短く労いの言葉をかけた。

この女はやっぱり、あのお方なんだろう。

幻想郷最古参、八雲紫。

「で、この人間がそうなの？」

「はい、竜神はもう消えかけています。」

「ふーん…。」

胡散臭い笑みを浮かべながら、こっちに寄ってきた。

「始めまして、八雲紫よ。」

「…水元鉄生だ、よろしく。」

もうこーなったら、腹くくっていかなきゃダメだろう。

「さて…紫、貴女の協力には感謝します。ですが、貴女のそのいい加減な性格は早く直していただきたい。関係ないところでは首を突っ込み、呼んだら呼んだで早く出てこない。大体貴女には誠意というものが云々。」

「ねぇ鉄生。」

「なんだ?」

説教中に、紫が囁いてきた。

「あなたは、人間なの?」

「…違うらしい、俺はそうだと思ってたんだが。」

「へぇ…じゃあ自覚はないのね。」

「自覚?何の?」

「あなたの力。」

そう言うと、紫は説教中の映姫の足元へ手を振った、と次の瞬間!

「きゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!??????」

…四季映姫様がログアウトしました。

「さて、邪魔者は消えたし、後は…あら？」

三十六計逃げるに如かず、気がついたら全速力で紫から逃げていた。

五、竜と鬼<前>（前書き）

パンコンが無ければケータイを使えばいい

最近気付いた

五、竜と鬼<前>

「…こ、ここまで走れば、大丈夫だろ…。」

紫からとんずらこいて丸一日。

かなりの距離を走ったが、余り疲れてないのは妖怪クオリティ、だが…。

「腹減ったな…。」

走ってばかりで何も口にしてないから、もう腹の虫が大合唱している。

「なんか食えそうなのねえかな。」

探してみても、ヤバげな色のキノコしか見つからない。赤地に青の斑点は危険物だろう。

「そうだ、村にでも行ってみるか。」

事情を話せば泊めてくれるぐらいはしてくれるかもしれない。

そう思っていた時期も、僕には、ありました…。

「げぇえっ、妖怪！！」

とんでもない声を上げて逃げる村人。

妖怪？ドコにいるんだ？

「おのれ妖怪！キョロキョロしくさって！」

あ、俺か。

いつの間にか槍を持った人達に囲まれている。

「そんなに警戒しなくても、とって食ったりなんかしませんって。」

「黙れ妖怪！このまま刺し殺してやろうか！」

そんな野蛮なことを…

「殺したら、肉は処理しなきゃな。」

「俺、妖怪の肉って食ったことないんだよ。旨いのかな？」

なにこれ怖い

畜生、やっぱ戦わなきゃいけないのか？

そっちがその気なら…

「止めろ！」

ん？

「この妖怪は悪しき者に非ず、今すぐ手を引け！」

「ひぃぃ！」

何やら神様っぽい声が響く。

助かった、のか？

「そこの妖怪、我が社に参れ。」

え、なに、お呼びだし？このまま帰してくれよ、頼むから。

「早く参れ！」

「…はい。」

村人から親切な案内を受け、神社の前にきた。

「中に来い。」

しかし神社らしくない、禍々しい気を感じる。これが妖気か？

本堂に入ると、入り口の扉がバタンとしまった。

中は暗く、声の主が見えない。

「ふん…見た目は若いくせになかなかの力を持っているな。」

「あなたがここの神様ですか？」

なるべく上品に答える、これ話し合いの鉄則。

「いいや、ここには元々神などいなかった。空いていた神社だったんでな、俺様が使わせてもらってる。」

「それなら…人々の怯えようは？」

「ああ、あいつ等か。俺様の事を追い出そうとしたんでな、二、三人食ってやったらあの通りだ。」

「…なぜ、私をここに呼んだのですか。」

何かこう…胸くそ悪くなるやつだな。

だんだんイライラしてきた。

「貴様を式にしてやろうと思いついたんだよ。そうすれば、もっと人を食う事も出来るし、お前もおこぼれをもらう事を出来るぞ。」

ぷち

「悪い話では無いだろう？なあ？」

ぷちぷち

「さあ、我が式になるならば、その符に自らの名を書け！」

ぷちぷちぷち

「だが断る。」

考える前に露伴が、いや口が先に出た。

「…なに？」

「お前なんかの配下になれだと？ふざけんじゃねえ！」

こんな屑みたいな奴と会話したかとを思うと吐き気がする。

「…ならば、貴様は俺様に刃向かうと言うのか？」

あれ、なんか悪寒が…

妖気がどんどん増えているのを肌で感じる。

もしかして、ヤバい奴に啖呵きっちゃったか？

「面白い、少しは楽しませてくれ！」

「うわっ！？」

バキバキバキバキッ

いきなり奴が天井をぶち破って飛んでいった。

あわてて俺が外に出ると、臨戦態勢の奴がいた。

外見は…鬼だ。まごうことなき立派な角が生えている。

腕は四本、背中には無数の武器がちらついている。お前はドコのギルガメッシュかと。

「俺様の名は淵鬼。死に行く者よ、貴様の名は?」

鬼…淵鬼がこちらに刀を向けてくる。

「鉄生だ。死に行く者だと?そりゃお前の事だ。」

さて、生き残れるかな?俺。

六、竜と鬼<後>（前書き）

連続投下

なかなかバトルって書きにくい

六、竜と鬼<;後>

戦闘なんて、映姫様に弾幕を浴びせられたぐらいしかない。あれは戦闘なのか知らんけど。

ケンカもからきし…と言うかやったことない。

つまりは初陣です、初陣。

そんな初陣を、こんな強そうな奴が相手とは、インド人もびっくり。

「ふはははははは、死ねぇ！」

「危なっ。」

四本の腕で四本の武器を振るってくる。

幸い、一閃一閃は大振りでかわしやすいが、当たるとたぶん、いや確実に痛い。

「どおした貴様ぁ、避けるだけか？」

「まだまだ序の口だ！」

強がりを言うが、ちょっと限界っぽい。

避けながら土から槍を創り出し当てようとするが、なかなか当たらない。

「所詮、この程度か。」

淵鬼がそうつぶやくと、何やら構えらしきものをとった。

「喰らえ！」

「……ってえな。」

あー、死ぬかと思った。

「！？ば、馬鹿な。俺様の剣撃で死なないだと…？」

「ああ、俺も吃驚だ。」

まさかこれほど頑丈になっているとは…。

けど、ダメージはかなりデカい。ちょっと左足がおかしいし。

「ならばもう一撃！」

え、また？なんか必殺技っぽくやっておいて二回連続？

いくら何でもそりゃないぜ兄貴

お約束無視で再び構えをとる淵鬼、じょ、冗談じゃない！

『へぇ…じゃあ自覚はないんだ。』

『自覚？何の？』

『あなたの力。』

俺の力？何だ、土以外に操れるって事なのか？

そんな能力があるなら早く出てきてくれっ、早くっ！

手を前に出し、まだ見ぬ力に期待してっ！

「む…ぐぅ？」

気付いたら淵鬼が動いていない。なんだ、武士の情けなのか？

「きさま…なにを…。」

へ、俺なのか？

なんだなんだなんなんだ？全くわからない。

前に出した手を握ろうとした瞬間――

ぐちゃ

――トマト？

目の前にあった淵鬼は、持っていた武器を除いて『何か』に潰された。

それと同時に、俺の意識は無くなった。

「…なかなか派手にやったようね。」

戦闘の終わったところにスキマから八雲紫が顔を出した。

「あなたのその力は、私に必要なの…私の理想の為にはね。」

気絶している鉄生にそうつぶやきかけ、紫はスキマに消えていった。

七、守り神（前書き）

非常に微妙、はっきり言うと駄文

七、守り神

「……。」

見知らぬ、天井

下らないことはさておき、ここはどこだろうか。

起き上がり、辺りを見回そうとすると腹がなった。そういえば何にも食ってなかった、こんな状態でよく戦えたな。

失礼とは思いつつ、何かないかと家中を探していると、水おけを発見。

そうだ、起きたばかりだし顔を洗おう。

…頭に角がある。

いや、鬼みたいなああいう角じゃなく、なんだその、ＧＳ美神の小竜姫みたいな角だ。

それと髪、何故か長いし白い。

言っておくが俺は髪を染めるような不良青年ではない。

なるほど～だから妖怪ってバレたのか～。

…和んだように考えてないでくれ、俺の脳味噌。これからどうしよう。見た目で分かり易く人外なのはヤバいのでは。

悶々と考え込んでいると

「おお、お目覚めになられましたか。」

結構な年をいってそうな老人が話しかけてきた。

「勝手に歩き回ってすいません、ここはどこです?」

「神社の前に倒れていたのを見つけましたので、ワシの家に運ばせました。
ああ、ワシはこの村の長をやっておるものです。以後お見知り置きを。」

「どうも、俺は鉄生です。ありがとうございます、村長。」

「そんな堅苦しくしなくて、ワシの事は気軽にゲンちゃんと呼んでおくれ。」

「……ならばゲンちゃん、大切な用件があるんだが。」

「おお、なんだ?」

俺が厳粛な面持ちで尋ねた大切な用件とは…

「飯ある?」

その後ゲンちゃんと、今後の事を話し合った。

話を聞いたところ、どうやらこの村は今まであの鬼に頼らなきゃいけないぐらい、妖怪に襲われていたらしい。

淵鬼が村を独占する代わりに、妖怪から守る。そんな約束が交わされていたそうな。

しかし俺が淵鬼を殺してしまい、妖怪が今にも襲いかかってきそうなのだ。

そこで考えついたのは単純明快、俺が新しい守り神になることだ。

あの淵鬼を殺した妖怪と言う文句なら、大抵の妖怪は手出ししないはずだ。それでも来る奴は全力で立ち向かえばいい。

俺の家は神社（荒れ地と化した）の場所に新しく家を建てるらしい。

さて、家が建つまでは暇なわけだが、やることと言えば…

「能力の訓練でもやるか。」

家が建つ頃には、俺はかなり能力を使えるようになった。

まず一つ、【大地を操る程度の能力】

土や岩、果ては金属おも操れる能力。主に畑仕事に役立ちます。

もう一つ、【次元と空間を操る程度の能力】

恐らく竜神の能力だと思われる能力で、次元を越える事も空間同士を結合させて紫みたく移動も出来る。

もっとも、繋がる次元は落ち着かないので、使えたもんじゃないが。

それと、妖力や霊力、そして神力の扱いも出来るようになった。

妖力は妖怪の力、霊力は人間本来の力、神力は信仰の力…ようは、拝まれる程強くなる力だ。

ゲンちゃんは、村人たちには俺の事は守り神と説明し、悪鬼を倒すため来たと伝えた。

そのおかげで信仰を集める事になった次第だ。

なに?騙してるって?とんでもない、嘘も方便だ。

「さて、我が家はどんなになったかな?」

建設中の状況を全く見ていないので、どうなっているか楽しみだ。

「おお、竜神様。出来ましたよ。」

村人の一人が寄りながら、嬉しそうに語る語る。

村一番の出来だとか、いままでの人生で最高傑作だとか聞いたが、やはり見るのが一番だろう。

「どれ、どんな具合かな…おお!」

淵鬼が潜んでいた社をそのまま残し、隣に家を増設してしまったような造形だ。

「どうです、本堂も残してありますから、参拝も出来ますよ!」

肝心なところなのか、そこは。

力説している彼を見ていると、なんだかどうでもよくなった。

七、守り神（後書き）

あまり良い出来になりませんでした。
主人公の外見や能力の説明もこれで本当にいいのか分からない
能力の詳細は次回　ではでは

八、九尾狐（前書き）

何時にも増してヒドいかも

八、九尾狐

守り神として働き始めて早三年、こんな情報が入ってきた。

曰わく、九尾の狐が現れた、との事。

「狐かぁ…（にやにや）。」

「今はまだ食料が奪われるので済んでいるが、暴れ出したらたまったもんじゃない。
どうか懲らしめてくれんか、鉄ちゃん。」

「その呼び方はやめてくれ…狐かぁ…（にやにや）。」

「…もしも～し、鉄ー？」

「何だ？」

「いやぁ…なんだか…顔がにやついてるぞ？」

「そんなつもりは…無いはずだが…（にやにや）？」

いや、つい顔が笑ってしまう。

ここが東方の世界なら、九尾の狐と言えばアイツだろう。

スキマ妖怪の式、八雲藍。

いや、今はまだ紫の式になっていない頃だから名前は…何だ？公式

設定にはなかったか。

ともかく、藍か…いいなぁ…。特にあのしっぽとかスタイルとかしっぽとかしっぽとか。

…一度、会いに行ってみるか。

よし、思い立ったら即行動、早速準備に取りかかる。

俺の能力で入る空間をとんでもなく広くした袋から荷物を取り出す。

袋の中には淵鬼の残した武器やら、食料品、生活道具、その他諸々。

刀を腰に差し、服は灰色の甚平で準備万端。

「お、行ってくれるか。」

「ああ。」

ゲンちゃんに見送られ、妖気の強い場所に飛んでいく。

「…この辺だと思ったが。」

妖気は残っているが、姿を隠されたか。

「もしもーし、狐さーん。」

……

「ちょっと話に来たんですがねー。」

……

「居ないんですかー？」

……

「油揚げがあるのｎ「えっ！！」」

…本当に釣られるとは、いいのか九尾。

「！し、しまった！」

出てきたのはやはり、金髪に青い服、九つのしっぽがある女性…藍だった。

「どーも、九尾さん。」

「…お前は確か、この辺の妖怪を束ねている奴だろう。そんな奴がわざわざなんだ。」

「束ねてる訳じゃないが…まあいい。
最近、新参者のクセに調子に乗ってる奴がいると聞いて来たわけだよ。」

「新参者だと…？」

おっと、少し怒らせちまったか。妖気がだんだん高まっている。

こちらも強気にばーんといくか。

「最後通告だ、村を襲撃するのを止めろ。さもないとこちらも実力行使するが…。」

「断る！」

答えるやいなや、俺めがけて飛びかかってきた。

「いきなり、危ねぇなあ！」

藍の爪を避けつつ、俺も刀を構え応戦する。

爪と刀がぶつかり合い、火花が散る…て、どんだけ堅い爪なんだ？

「捕まえたぞ！」

さすがににわか剣法じゃ通用しないか、あっさり刀を弾かれた。

「これで！」

一気に間合いを詰めてきたが、まだまだ甘いな。

「仕方ねぇ、ザ・ワールド（ドキュゥウン）！」

「！？身体が…？」

いや、ザ・ワールドとは違うけどな。時を止めた訳じゃないし。

俺がやったのは空間固定。以前、淵鬼の動きを止めたのもこれだ。

「さぁて…どうする？」

首に刃を当て、脅しをかける。

「くっ、貴様…！」

…まだまだ闘志は消えてないようだな、どうするか……そうだ！

もふ

「へ？」

もふもふ

「ちょっ、何を…あぅう！」

もふもふもふもふ

「だ、ダメェェェェ！」

やらしい事に非ず、ただしっぽをもふもふしているだけだ。

「どーする？まだやるかー？」

「やりませんやりませんやりまんから離してくださいーーーー！！」

その後、ぐったりした藍に油揚げをあげて退散した。

八、九尾狐（後書き）

質が悪いので量を多くします、一つ一つじゃなく話数の意味で。

九、花時々雷（前書き）

こんなんでいいのか怪しい
バトル書けない…

九、花時々雷

神としての仕事なんて殆どは妖怪退治になっている。

この間の藍の時だって村に出入りする商人からの苦情だった。

それ以外だと村人から畑作業を手伝ってくれとか迷子とか酒盛りとか…最後は違うか。

とにかく、人から依頼が無ければ動かなくていいわけで…。

「は～暇だ～。」

現在無気力状態。

修行と思って刀や槍を振り回してもつまらんし疲れる。

下手に能力の訓練でもやって近隣に迷惑をかけたらたまったもんじゃない。

やることが無いからと、ゴロゴロ転がっていると…。

「…なんて格好してるんだ、この駄目神。」

「…いきなり他人の家上がりこんでそれかよ狐。」

しっぽ…もとい、藍が来た。

「暇なのかお前。」

「ああ、暇だな。」

あの後、よく藍が家に来るようになった。

どうやら帰りがけにあげた油揚げがお気に召したようだ。

「そんなに暇ならいい所があるぞ。」

「？何だ？」

「…山を越えた辺りに花畑があるから、そこに行ってみるといい。」

そう言うと飛び去ってしまった、はて何の用だったんだ？

「まあ、行ってみるか。」

暇潰しにはなるだろう。

「へぇ…綺麗な所だな。」

色とりどりの花が辺り一面に咲き誇っている。

確かにこれはいい場所だな。

「そうだ、何株かもらって育ててみようか。」

それなら毎日の暇潰し位にはなるだろう。

無断で持っていってもまぁ分からないと思い、軽い気持ちで花を採ろうすると、背後から異様な妖気が。

「あなた、私の花をどうするつもりなの?」

…しまった、花畑の時点で気付くべきだった。

「いやぁ、あんまり綺麗なもんだから、つい…。」

「残念ね、それが最後の言葉だなんて、間抜け過ぎるわ。」

振り返ると、すでに傘をこちらに向けた女性ーーー風見幽香がそこにいた。

「マスタースパーク!」

「うぉあ、冗談じゃねえ!」

なんとか上空に転移したが、幽香はお見通しだったようだ。理由?

転移した先に幽香がいたからだよ。

「逃がさないわよ！」

「っ！」

肉弾戦もお手のものかよ、こっちは防ぐのに手一杯だってのに。

「耐えきるなんて、並みの妖怪じゃないわね。」

「俺は妖怪じゃねえ、神さまもどきだ！」

神気は少ししかないし、社もアレだしな。

「えぇ？神様？」

呆れたような顔でこちらを見る幽香、そりゃそうか、神のクセに好き勝手にどっかに行くし、あまつさえ花泥棒だもんな。

「そんな事より、そらっ！」

「…！体が…何をしたの！」

またもや空間固定。便利だなーこれ。

だが流石大妖怪、完全に止まらずまだ抵抗している。

破られたら厄介なので、そのまま空間圧縮（小）に移行。

「！！や、止めて！お願い、潰れちゃう！止めて…っ！」

ああ、あの幽香が懇願してくるなんて……ハッ！いかんいかん、なんかヤバい扉を開きかけた。

圧縮を止め解放すると、幽香は地面に落ちていってしまった。いかん、締めすぎたか。

地上に降りてキャッチするが、やはり気を失っている。

「おーい、もしもーし…ダメか。」

しょうがない、家に運ぶか。

そう言えば藍は何のつもりで花畑の事を伝えたんだ?今度会ったら聞き出さねば。

九、花時々雷（後書き）

主人公能力に頼り過ぎだろ
殴り合いが嫌いなんだよ、きっと

十、押しかけ花嫁（前書き）

タイトル思いつかん

まあいいか

十、押しかけ花嫁

ｓｉｄｅ幽香

「…ここは？」

目が覚めたら、見知らぬ部屋で横になっていた。

私は確か、花畑を荒らそうとした男と戦って…負けてしまった。

大妖怪と呼ばれるようになり、花畑で誰とも過ごさなくなってからの、初めての敗北。

誰も挑まないようになり、私も鈍ってしまったのだろうか。自己鍛錬を怠ってしまったのか。

どちらにせよ、負けたことには変わらない。

「……。」

「てめぇぇぇぇぇぇぇぇ！！やっぱ確信犯だったんかぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ごめんなさーーーーーい！！」

…いきなり怒声が聞こえてきた。何だろう？

ｓｉｄｅ鉄生

幽香を抱えて自宅に帰宅し布団に寝かせ、夕食の準備をしていると藍が来た。

また飯（油揚げ）をたかりに来たのかと思ったが、俺が花畑に行ったかの確認の為だったと。

俺が問い詰めた結果、白状した。

「つまり、風見幽香があの花畑にいるのを知っていて俺に花畑について教えた、と…？」

「いや、まさか本当に行くとは思わなかったし、そんな波乱が起こるとは夢にｍ「はっきり言え。」…はい。」

ぷちっ

「てめぇぇぇぇぇ（中略）

「…何やってるのあなた達。」

何時頃からか幽香が部屋の入り口に立っていた。

「ん、起きたか。ちょっと待ってろ、今この馬鹿狐に灸を据えてやらなきゃいかんのでな。なあ？」

「ちょ、ちょっと待て！その手はなんだ！駄目だ、しっぽはやめろ！や、やめて！！やめてくださいいいいいいいいい！！！」

藍の悲痛な叫びを無視し、しっぽを鷲掴みにする。

「うわぁぁぁぁぁぁん！！」

「うふふ。面白そうね、私にも触らせて。」

幽香が楽しそうに笑いながらこちらに来た。

「ああ、どんどんやっちゃってくれ。」

「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

藍の慟哭が聞こえたが、はて気のせいかな？（現実逃避）

「…さて、そろそろ解放させてやろうか。」

「え～。」

「ううう～。」

九つ全てのしっぽに抱きつきながら、幽香は不満そうな声を出す。

いや、正直この光景は永遠に見ておきたいが…想像してみろ、目の前でゆうかりんが大喜びで藍のしっぽで戯れているの所を。

何というかね、そのね、理性とかそこらを吹っ飛ばしそうだったね。

「はぁ…はぁ…はぁ……。」

「ほら、藍も息づかいが荒いし、限界だろもう。」

がんばれ正気の表面張力。

「う～、しょうがないわね。今日はここで見逃してあげるわ。」

ふくれっ面で承諾する幽香。耐えろメルトダウン寸前の理性！。

「まだ自己紹介してなかったな。俺は鉄生、そこで転がってる九尾は藍、よろしく。」

「私は風見幽香、幽香で構わないわ。ところで鉄生？」

幽香が俺に詰め寄る。

「なんだ？顔近いぞ。」

「あの狐はあなたの妻か恋人？」

「なあ？！！」

いきなり何を言い出すのかこのお方わっ！

「そそそんなわけないでしょ！！」

死人の真似をしていた藍が飛び起き激しく否定する。なんか悲しい。

「だったら他に彼女とかは？」

「居らんわ！」

彼女いない歴＝実年齢だよちくしょー！

「もしかして男色家とか…やめてやめてやめて絞まってるからまた落ちるー！」

食らえ兄貴直伝チョークスリーパー！

「げほっげほっ…冗談よ、全くもう…。」

「冗談で人を男色家にするな！」

「まあそれは置いといて。」

置いとくのか。

「つまり、誰ともそーゆー関係になってないのね？」

「あーそうだ何かわりーかよ。」

どうせ俺は万年独り者さ、ケッ。

「悪い？とんでもない、むしろ好都合よ。」

「は？」

「ねぇ鉄生～？こんな広い家で一人なんて寂しくない？」

「い、一体何を考えている？」

ヤバい、何かその顔はヤバい。満面の笑みの筈なのに恐ろしく感じるのは多分気のせいじゃない。

「一人ぐらい一緒に住んでもいいんじゃないの？」

「何を言わせたいんだお前は。」

「よし決めた、今から荷物取りに行くから待っててね。」

「何で荷物を！？」

「決まってるでしょ、ここで住むため。」

「何で！？？」

「女は、強い男に惹かれるものよ。それとも私が来るのに何か文句でもあるの？」

怖い、幽香さん怖すぎ。

「…イエ、アリマセン。」

「じゃあちょっと行ってくるわね。」

…はぁ、どうしたもんか。

「あと狐、鉄生に手を出したら殺すわよ。」

「誰が手を出すか！」

……まあ、暇は無くなるかな。

十、押しかけ花嫁（後書き）

更新が遅れるかもしれません

質より量と書いたのはどの指か

十一、戦後処理（前書き）

出せるうちに出す

十一、戦後処理

コンコン

「鉄ー、起きてるかー。もう昼だぞー。」

……

コンコン

「用事がない日だろうが、ちと遅すぎやしないか？」

……

「しょうがない、開ける「待った！しばし待った！…あ、おはようゲンちゃん。」…なんだ、起きとったのか。」

「いやあ、朝はおはようだよ…な！いい天気だな本当！青天の霹靂って言葉が似合うぐらい！」

「何言っとるか、霹靂は雷だぞ。」

そうブツブツ呟いてはどこかに行ったようだ。

「…いや、そっちじゃなくて故事の方な。」

俺の部屋には、できれば人様（妖怪）に見せないほうがいい光景が広がっていた。

それは、床に散乱したおつまみと、酒杯と、酒樽と…

「…なんで二人が俺の布団に入ってるんだよ。」

いやいやいや、まあ落ち着け。まず布団の中を確認。

…一応だ。疚しい事は何一つ無いだろうが一応だ。

次に前日の記憶を辿る。

確か…幽香の引っ越しが終わった後、荷物から酒を持ってきて…そうだ、俺はずっとおつまみを作って、その間に二人が俺の部屋に移動しようとしたのを止めようとして、酒をおもきし飲まされたんだが…その後の記憶が無い。

何かやってないよな俺、この清廉潔白、文武両道、眉目秀麗の俺が何かやる訳がないっ！

なに？嘘つくなって？俺は真実を隠し通せる程面の皮は厚くないんだよ。

……すいません、やっぱ撤回させてください。

下らない事はさておき、そろそろ起こすか。

「幽香、藍、もう昼過ぎだぞ。さっさと起きろ。」

「「…む～、あと五分～。」」

何でそこは揃うかな。

「ほれ幽香、早く立て。」

「ああ～しっぽが～。」

「うううわっ！？」

俺が幽香を立たせようとして、幽香が藍のしっぽを掴んで、いきなりしっぽを掴まれた藍が跳ね起きた。

うーん、まさしく連携プレー…違うか。

「今から飯作るから、顔洗っておけ。」

「「はーい。」」

お二人共仲がいいようで…。

独りの時には味わえなった、何ともいえない気持ちになりつつ、台所に向かった。

十一、戦後処理（後書き）

指摘、批判は甘んじて受けます。

番外編～見習い閻魔四季映姫様～（前書き）

ＰＶ一万ありがとうございます

お礼の言葉もありません。

ありませんから言いません。

と言うわけ番外編です。

番外編～見習い閻魔四季映姫様～

私が地獄の仮裁判官になり、幾日も過ぎました。
十王様から抜擢された時は気合いを入れて白黒はっきりつけよう！
…と、意気込んでいましたが…。

「映姫ちゃ～ん、一緒にサボらないー？」

「何言ってるんですか、ダメです。」

「まあまあ、堅いこと言わずにさ～。」

…あまり真面目でない方が多く、些か戸惑っています。
さっきから絡んでくるこの方は小野塚小町（おのづかこまち）といい、確か三途の川で船頭をしている筈ですが、よくサボっていると有名な人です。
その癖上司が甘すぎるせいで懲りずに何度も何度もサボりまくる困った人です。

…やっぱりスタイルの良い女性は誰からも好かれるのでしょうか。
けれど私だってもっと時間をかければあれくらい…。大体あの胸が大き過ぎるだけで私はむしろ標準（以下個人的な愚痴につき大幅割愛）

「…？どしたの、あたいの胸を睨みつけて。」

「…何でもありません。」

「いやだって「な・ん・で・も・あ・り・ま・せ・ん！！」…は、はい。」

まったく、私がこの人の上司なら何時間でも説教するのですが…。

「こんな所で油売ってないで、船頭の仕事に戻ったらどうですか。それとサボるのに私を巻き込まないでください。」

「いやーそうしたいんだけどみんな忙しいみたいでね。ほら、最近人間だけじゃなく、強い妖怪が来ることも増えてきたから。」

「だったら貴女はなんでサボっているんですか…。」

呆れつつ、近年増えてきた死んだ妖怪について考える。

何故妖怪が多く死ぬのか。妖怪が死ぬ事は殺されるか、食われるぐらいしかない。寿命なんて無いも同然だから。

しかし雑魚妖怪ならともかく、何故ある程度力のある妖怪が？

妖怪同士、特に縄張りを張るような妖怪達は無闇に殺し合いはしない。

となると、可能性は二つある。

一つ目は、無差別に殺しまくる妖怪が現れた。

二つ目は、多くの人間が力を持ち始めたか。

無差別に殺すような妖怪なら、そのうち大妖怪等に狙われる筈。

しかし人間がそれ程強力な力を持ち始めたのなら、それは厄介になる。

人間は、妖怪に比べ、脆く弱いが数がある。徒党を組まれるといくらか強くはなる。

今まで人間には確かに霊力を使える者はいたが、数は少なかったはずだが、それが増えたのなら…。

「…はぁ、考えても無駄ですね。」

「何のこと？」

「貴女はいいから持ち場に着きなさい。」

「しょーがないなーもう…。」

そう言えば、竜神に同じような話を聞いた覚えがあります。
酒の席での事だからはっきり覚えてないけれど、最後にこんな事を言っていたような…。

『…だから、人間は今以上に危険になる可能性がある。それなら今のうちに悪い芽は摘んでおいたほうがいいでしょう、闇魔様?』

まさか、そんな事できる訳ないでしょう。

番外編～見習い閻魔四季映姫様～（後書き）

小町はまだ映姫様の部下ではない頃です。

批判、批評、指摘、暴言、妄言なんでも受け付けます。

十二、一抹の不安（前書き）

タイトルはあんまり関係ありません

それと前回の番外編は、第一話以前の話です。書くのを忘れてました

十二、一抹の不安

ｓｉｄｅ鉄生

「じゃ、こっちの方もお願い。」

「はいよ。」

俺達は今、幽香の花畑から持ってきた花を植えている。

俺の能力で土を掘り返し石や岩を退けて、そこに幽香が花を植える。

元々花を植えようと思って花畑から花を採ろうとしたが、まさかこんな風に植える事になるとはなぁ。

「よいしょ、と…これで終わりか。」

「ふぅ…そうね、お疲れ様。」

「俺よりも幽香の方が大変だっただろ、ずっと植えてたんだから。無理すんな。」

「無理なんてするわけないでしょ、これでも大妖怪って呼ばれてるだから。」

そう言いつつ胸を張る幽香。いやちょっと、目のやり場に困るんですが…。

「ああそうだ、そう言えばまだ誰にも言ってないんだよな。」

「なにを？」

「幽香がここに住むこと。」

藍にはまあ、伝えるというか巻き込んだだけだし。

「…人間に伝えるの？」

「そりゃあな、早いうちに紹介したほうがいいだろ。」

あれ、何故か幽香が暗い顔をする。

「もしかして、嫌なのか？」

「そうじゃなくて、今まで人間と関わってきたことなんてなかったから、少し不安なだけ。」

何か意外な一面が見れたような気がする。

「まあ適当に、巫女とかそんな風に言えばいいだろ。」

神様より巫女の方が強いのは問題がありそうだが。

結局、幽香はゲンちゃん以外の村人には竜神の嫁と説明された。

…何でこうなった？

十二、一抹の不安（後書き）

短い

最近は自分の納得できる文を書けない

以前から書けていた訳じゃないけれど

十三、暇潰し<前>（前書き）

執筆速度が下がる一方

俺の成績も下がる一方

十三、暇潰し<前>

いきなりだが、俺の能力である【次元と空間を操る程度の能力】だが、これは万能な訳じゃない。

俺が操作出来るのは分かりやすく言うと、『惑星（ほし）のさ○だれ』の『掌握領域』のような物の中だけだ。

掌握領域を分散させれば、弱い結界のように侵入を防げるし、索敵も出来る。

逆に密集させれば、範囲は狭いが完全に固定したり、そのまま押しつぶせる。

ようはイメージの問題だ。

だが俺はそのイメージするのが難しい。

考えるよりも身体を動かした方が早い。毎日幽香や藍と組み手をしているとよくわかる。

考えずに、反射的に体が動く。そんなもんか。

体術と組み合わせて便利なのは【大地を操る程度の能力】だ。

『鋼の○金術師』みたく想像してもらえると解りやすいと思う。

…漫画で例えるのが一番説明しやすいだよ。

そんなこんなで鍛練をやり続けて数十年。

妖力も霊力もいっちょ前以上になりましたよ。

神力？信仰されてない訳じゃないが、今までと変わっていない。

前から村人達からは便利屋ぐらいにしか思われていないのが原因か。

因みに村長は未だにゲンちゃん（１２０）。

一応妖怪ではない筈だが、化け物じみているとしか思えない。

それはともかく、村はかなり発展してきたお陰で…。

「…暇だな。」

「そうねぇ…。」

「そうだなぁ…。」

家の中で俺、幽香、藍の順に呟いていく。

最近は三人でゴロゴロしている事が多くなった。

…俺を枕代わりにしないで欲しい。

「…何かないかな。」

「さぁ…。」

暇が潰せるものとか…妖怪とか…。

「たのもー！」

いきなり表からバカでかい声がする。

「はいはい、今出るよ。」

「たのもーー！」

なかなかしつこいな。

「た・の・「やかましい！」あだっ！」

玄関前にいたのは瓢箪を片手に持った…鬼の四天王が一人、伊吹萃香だった。

「いきなりぶつことはないじゃないか。」

「神社の前で大声を出すな、バチ当たりな奴め。」

「そんな事はいいから。確か、ここには淵鬼って奴が居た筈なんだけど。」

あ、忘れてた。

「もしかして、あんたが倒したのかい？」

「…すまん、あの時はそうするしかなかったからな。」

ヤバいな、鬼ってかなり同族意識が強いらしいが…。

「いや、やっちゃったんなら仕方ない。」

「…は？」

「私はここらに山の住処から追い出された奴がいたなー、と思って来たんだが…そうか、あんたがねぇ。」

そう言って萃香はニヤリと口を歪めた。

「よし、私と勝負しろ。」

なぜいきなりそうなるかな。

だが、暇つぶしの代わりには丁度いいか。

「…いいだろう、だが、やるなら別の場所にしよう。」

ここでやりやって花を傷つけたら幽香に殺されるな。

十三、暇潰し<前>（後書き）

バトル描写は今度こそ上手く書けますように…

最近ネタが湧いては消えを繰り返すのは何故か

十四、暇潰し<後>（前書き）

時間をかけてもこんな出来。

戦闘難しい

十四、暇潰し<後>

俺と萃香は山の中腹にある、俺が以前能力の鍛練に使っていた場所で対峙している。
なお今回は・武器禁止・能力禁止の勝負とした。

…俺が能力使ったら間違って殺しそう。

「それじゃあ、そろそろ始めるか。俺は鉄生だ、よろしく頼む。」

「私は伊吹萃香、鬼の四天王だ～！」

うわ、子供みたい…と思っていると、目の前に萃香の拳が迫ってくる。

「うぉわ！あっぶね～。」

「まだまだこれから！」

間合いをどんどん詰めて殴りまくる萃香。

俺も妖力で強化した手足で応戦する。

「そんなんじゃ、全然効かないよ！」

「馬鹿力があればいいもんじゃねえ！」

何とか隙をついて一撃二撃と当てるが、全く動じていない。

なんつー体してるんだこの幼女は！
…つかその筋力をもうすこし身体付きの方に…。
「それっ！」
くだらない事を考えていると顎に一発もらってしまった。
「！！ぐっ…おお、結構、効くな。」
「へぇ、まだ倒れないんだ。」
実際には結構なんてもんじゃない。膝はがくがく言ってるし意識がちょっと飛びかけた。
これは洒落にならんな…仕方ない。
「よし、いっちょやってみるか。」
「お、何する気だ？」
萃香が興味を示したようで、攻撃を止めた。
さぁ、ぶっつけ本番で上手く行ってくれ。
右手に妖力、左手に霊力を蓄える。
妖力と霊力は本来反発しあうものだ。
だが二つの力を上手くバランスを保って合成出来ればかなりの力を

引き出すことができる。

だが残念ながら俺には某デスメガネのようにバランス良く気を出すことが出来なかった。

そこでなけなしの神力を使ってみるとあら不思議、少しぐらい気の大きさが違っても神力で包み込んでやれば出来るではないですか。

これが今出来る最強の自己強化、名付けて…なんだろう、考えてなかった。

「ともかく、よし…行くぞ！」

「！はやっ…！」

一瞬で萃香の目の前に移動して、そこから連打、連打、連打！

「くっ…なら、これで！」

そう言って萃香が俺の手を掴んで組み合った。

力比べなら勝てると思ったのか…甘いな。

「うおりゃぁぁぁ！！」

「ぐぅぅ…そ、そんな…。」

あっと言う間にねじ伏せる。

「…まだやるか？」

「いや…私の負けだ。」

「いやーあんた強いだね、まさか私が力で負けるなんて。」

「俺もかなり限界だったな、主に意識を保つのが。」

戦いがを終わるとすぐさま萃香は酒を飲みたいといいだし、社に戻って宴会を開いた。

…人数なんてたかが知れてるが。

「今度来るときは勇儀を連れて来なきゃな。」

「いや、流石にもう戦うのは勘弁だ…。」

『ネギ○！』もどきのあの技、実は使うと妖力、霊力、神力をスッ

カラカンにしてしまう荒技なのだ。
まだまだ改良の余地があるなぁ。
「鉄生〜、つまみ切れちゃった〜。」
「鉄生ー、酒持ってきてー。」
「あーへいへい。」
まったくここの飲兵衛達は…。
「酒はあるが…つまみになるのはもうないな。」
しょうがない、買ってくるか。

十四、暇潰し<後>（後書き）

次から話は加速する…はず。

期待なんて元からしてないでしょうが、少しでも期待されると作者は破裂します。

十五、月への誘い（前書き）

久々にあの御方が登場。

十五、月への誘い

「鳥と魚、後は…ん？」

つまみの材料を買っている最中、おかしなモノが目に入った。

「何だ…？リボンが浮いて…って、まさか！」

「よいしょ…と。久しぶりね鉄生。」

裂けたスキマから出てきたのは、かつて俺が生命の危機を感じて思わず逃亡してしまった…

「八雲…紫…さん。」

「あら、『さん』なんて付けなくていいのよ、紫って呼んで。」

「そいつはどうも、紫。で、何のようだ？」

コッチに来たばかりの時には感じなかった…いや、感じられなかった。

隠してはいるが、とんでもない妖気を持ってやがる。

やっぱり年の功って奴…などと言ったら殺されるな、確実に。

「今失礼な事考えなかった？」

「いえいえとんでもありません。」

アブね、顔に出てたかな。

「まあいいわ、今日はあなたに頼みがあって来たのよ」

「頼み？」

「少し手伝ってもらいたいんだけど。」

手伝いねぇ、何させるつもりだかな。

「取り敢えず社に行こう、詳しいはそこで聞く。」

「う……。」

「……おえ。」

「にゃはははははは！！何だい何だい、もう終わりかい。」

戻ってみるとそこには潰れ果てた幽香と藍、勝利の美酒を文字通り味わう萃香がいた。

「つまみなんて必要なかったな。」

「おお鉄生、紫も珍しい、あんたらもやるかい？」

「謹んで辞退させていただくよ。紫はどうだ。」

「私も遠慮しておくわ。」

萃香はなんだつまらんと呟き、また自前の瓢箪から酒を飲み始めた。

「さて、何をするんだったか？」

「ああ、そうね。私が手伝って欲しいのは、一緒に月に来て欲しいの。」

「月…って、あの月？」

「そう、あそこに攻め入るの。」

何だっけ、確か原作でもあったよな、月に攻め込む作品。

「何の為にだ？」

「…信じられないかもしれないけど、あそこはかなりの技術が集結した場所よ。あなたの元いた世界なんかよりもずっと、ね。」

「……。」

「私はあの技術が欲しいのよ。そのために、行くのを手伝ってくれないかしら？」

…なにか怪しい。

紫は何時も胡散臭いじゃんと言ってやるな、だがこれは怪しい。

だが…

「いいだろう、手伝う。」

「ありがとう。」

俺は何時も暇なんだ。こんな楽しめそうな事を逃すなんて冗談じゃない。

「そう言えばなんで幽香や九尾がいるの？」

「ああ、それらは勝手に居着いてるだけ。幽香とは顔見知りなのか。…萃香については訊かないのか？」

「あら、あの戦いの時覗いてたの、気付かなかったの？」

コイツは何処の盗撮魔だよ。

「…何回死にたい？」

「将来的に一回でお願いします。」

やっぱり顔に出やすいのか、気をつけねば。

十五、月への誘い（後書き）

ちなみに鉄生が作ろうとしてたつまみは鳥皮揚げと魚の骨せんべいです。

十六、暫し休憩（前書き）

はっはっはっ、こんなんでいいのか？

十六、暫し休憩

「幽香は一緒に行かないのか。」

「私はここで待ってるわ。留守にしたらこの子達が寂しいだろうし。」

幽香は花を一つ一つ、丁寧に手入れをしながら言った。ううむ、何とも絵になる構図。

…俺のイメージだと、幽香って戦闘狂って感じなんだが…。

……こーゆーのもいいなぁ……。

「な、何よ。そんなに見つめて。」

俺の視線に気がつき、幽香は顔を赤くする。

「いやあ、そうやって照れるのが可愛いくて。」

「ば、バカな事言ってないでさっさと準備してなさい！」

顔を背けてそう言うが、耳が赤いぞ、ゆうかりん。

それはともかく、紫が言っていた月への攻撃は次の満月、つまり後三日だ。

それまでに俺に出来る事と言えば、武器の手入れぐらいになった。

大剣四本、刀二振り、槍二本、斧三本、短剣無数。

その他用途不明な武器多数。

数十年の間に幾つか折れたり曲がったり消えたりあげたりしたが、十分過ぎる武器の量だ。

…正直、手入れなんかしなくても常に錆びも何もないから一々出さなくてもいいんだが…暇なんだよ暇！

「そうだ鉄生、紫には気をつけなさい。」

「ん？」

「あの紫ババアの色仕掛けとかにころっと騙されるんじゃないわよ、いいわね！」

「は、はい。」

だから怖いって幽香さん。

「あの節操なし、自分が気に入ったのはすぐ連れてくんだから…ブツブツ。」

…もしかして。

「妬いてるのか？」

「！！そ、そそそそそそそんな事ある訳ないに決まってるでしょ！！！？」

最後に疑問符が付いたのは何故か。

「わ、わたしはただ、ちゃんとこの社に帰ってきて欲しいだけで、別にあの紫ババアにあなたを盗られたくないとかそう言う訳じゃなくて…。」

「わかった、わかったから。」

それ以上言わせると後が怖そうだ。

「…絶対、帰ってきてよ？」

「勿論、そのつもりだ。」

死にに行くつもりは全くない、それに…

「…村人達に、妻を残して死んだ駄目神なんて言われたくないからな。」

「！？！？そ、それって…！？」

「さて、夕飯の支度でもするか。」

背後で固まった幽香を残して、台所に向かった。

その日の夕方、村全体に社の嫁さんの歓喜の声が響き渡ったとかなんとか。

十六、暫し休憩（後書き）

幽香と紫の口調の区別が付けにくい

どちらも俺は好きです

十七、出陣（前書き）

思いついたらすぐ書くようにしています

お陰で構成を考えにくい事この上なし

十七、出陣

夜空には雲一つない、絶好のお月見日和だ。
だが俺達は今日、月を見るんじゃない、月に行くんだ。

「さあて、どんな具合になるかしら？」

「…紫、訊きたい事がある。」

「何かしら？」

「何故俺を呼んだ。」

「簡単よ、頼りになる妖怪は多い方がいいでしょ。」

「成る程…それと？」

「…それだけよ。」

「違うな。お前は、俺を試しているんじゃないか？」

「！！」

「俺がお前の理想に叶うか、それを試すんじゃないか？」

「……。」

当てずっぽうだが、多分合っている。

「どうなんだ？」

「…その通り、私はあなたを試すために呼んだ、だけど月を攻め込むにはあなた程の力の持ち主が必要なの。だから…。」

「別に協力を拒む訳じゃない。気になっただけだ。」

「…そう、よかった。」

安堵したように優しく笑う紫。

「まったく、そうならそうと言えばいいものを。」

「そんなにはっきり言う事になれてないのよ、私は。」

「そんなんだから胡散臭いとか言われるんだ。」

「…何ですって？」

「…いえ、なんでも。」

危ない、月に行く前に紫に殺される。

「さ、さて、そろそろ行くか。」

「そうね、みんな集まったみたいだし。」

みんな――紫が協力を要請した妖怪達だ。

力自慢を集めたような連中だ。

「何だかな…。」

紫の演説を遠巻きに見ながら、少し不安に思う。

こんな脳味噌筋肉ばかり集めて大丈夫なのか？

「では…出陣！！」

「「「「応っ！！！」」」」

妖怪達が紫の開けたスキマに突入していく。

「さて…俺も行くか！」

十七、出陣（後書き）

さてさてどうなることやら～

…チャントカンガエテマストモ

番外編～暇な日常～（前書き）

ＰＶ三万突破ありがとうございます。

こんな駄文に付き合っている心中はお察しします。

そんな事より番外編をどうぞ。

番外編～暇な日常～

賽銭箱の中身がスッカラカンなのを見て、ああ、腋をひけらかしてるあの巫女もこんな心境かな～、と思いながらも社の前を掃除する。

まあお金が無くともお供え物だけで食うには困らないんだが。

「…暇だな。」

何時も言っている言葉である『暇』。

何時もが平和だから言える言葉でもある。

…そんな事より暇だ。

昼間からだが藍でも呼んで酒でも飲むかな、それより幽香と花の手入れをするか…。

「こんにちは、鉄生さん。」

「ん？お藤吉郎、どうした。」

俺に声をかけたのは、村唯一の酒店の跡取り、藤吉郎だ。

うちの御神酒もここのお世話になっているので、顔見知りになっている。

…結局は神様（俺）じゃなくて妖怪（藍、幽香）の口に入るんだけどな。

「いや今日は新作の酒を持ってきたんです。」

「なに、本当か！」

「どうですか、今から飲みません？」

「勿論だとも！」

「…何時からそこにいた、藍。」

背後から俺を押しのけて来た藍は、そらもう犬と見紛うばかりにしっぽをふっていた。

「あっはっはっはっ！喜んでいただいてこちらも嬉しいです。あの、ところで…。」

「どうした？金ならきちんと払うぞ。」

賽銭箱にお金が入れば

「いえ、それはいいんですけど、あの、その…。」

「何なんだ？」

まごまごしながら藤吉郎は恥ずかしそうに俯いてしゃべった。

「…か、風見さん、いますか…。」

「おー、幽香ならお前の後ろにいるぞ。」

「！！！うえぁあ！！？」

「…どうしたらそんな声が出るんだ。」

藤吉郎は気付かなかったようだが、酒の話をしたあたりから既にいた。

「あら、私に何か御用？」

「いえいえいえいえいえいえ別に何もありゃしませんよ！？じゃあさよなら！」

…若いなあ。

「本当、若いっていいわね。」

「うんうん。」

「いやお前らが言うと洒落にならんから。」

まったくこの年増ｰ　sは…。

「「…ねえ、死後の世界に興味無い？鉄生。」」

「残念ながらありませんっていやそんな怖い顔しないでお願いしますすいませんでしたやめてくださいいいいいいいいいい！！」

番外編～暇な日常～（後書き）

数十年の間の一コマを書きました。

よく考えたら一日に三つ投稿したのは初めてだな。

十八、月上の戦塵（前書き）

いつもよりちょい長め…のはず。

十八、月上の戦塵

「おーおーこれはまた大層なお出迎えで。」

わらわら向かっていく妖怪に対して、月の防御は堅固なものだ。

小火器中火器は当たり前。固定砲台に戦闘機のようなもの、元いた次元にさえ見なかった兵器まであるようだ。

「こりゃ負け戦かな…。」

紫も撤退用のスキマを開いている。

しょうがない、殿(しんがり)ぐらいはやってやるか！

「こっからは俺の独壇場だ！」

月面付近まで飛び、周辺の空間を一気に掌握する。

放たれる弾は止まり、戦闘機もどきはその場で動けずにいる。

よし、これなら足止めは…

「穢れよ、消え失せろ！」

「！！！」

危なかった、反応が遅ければ消されていた。

月面に立っていた女の子が扇子を振るったら、俺の掌握領域が一瞬で消えた。

ついでに遅れていた妖怪達も。

「危ない姫さんだな、人に向かって何ちゅうことを。」

「黙りなさい、月に刃向かう愚かな穢れめ。」

お前人じゃないだろ！と言うツッコミを待ってたんだが…。

とにかく、あの子の能力は俺よりも強いようだ。

「だったら、接近戦で決めてやる！」

一気に近づき、俺の妙技を見せつける。

空間圧縮の応用、空間短縮。

相手と自分の間の空間を圧縮して、距離を縮める。

転移するより距離は短いが、殴り合いで使えば北斗百〇拳も夢ではない。

それで両手に斧を持っているんだから凶悪そのもの。

「おらっ！」

「あぐっ。」

腹に蹴りをいれ、面白いぐらい吹っ飛んで行ったのを確認した。

「さて、そろそろ戻りましょう。」

「紫、何だ残ってるのは俺らだけか。」

「あの子と遊んでいるのが楽しそうだったから止めなかったの。」

「いや結構危なかったよ?消されかけ…危ない!!」

「え?」

バキィィ…ンと、とっさに受け止めた斧が何かによって砕かれた、しかも二つとも。

「大丈夫か紫。」

「え、ええ。よく反応できたわね。」

「そんな事より…素直に帰してはくれないようだ。」

周りを見ると、こちらに銃口をむけた兵士が一人、二人……何人だ?数え切れない。

そして目の前には神気を纏った女の子、にしては神様には見えないが…。

…いや、確かに俺だって神様には見えないよ?こんな戦いに行く衣装に上下黒の袴姿はむしろ御子みたいだしな。

そう言う意味でなく、人間にしか見えないんだが、何で神気を？

「この力…神降ろしね。」

「知っているのか紫。」

「要は、神様を身体に宿しているのよ。」

「その通り、つまりあなた達は神に刃を向けられているのです。」

「俺も神なんだけど…いえ、何でもありません。」

じろりと睨み付けられて思わず引き下がってしまった。

「さあ、素直に投降すれば、苦しまずに逝かせてあげます。」

「それは一一一」紫が手をあげた。同時に俺達の周りを掌握し

「一一一出来ねぇ相談だ！」言葉を次ぎながら空間を拡張した。

兵士達は弾を撃ったようだが、文字通り止まって見える。

これぞ空間短縮の反対、空間延長だ。

これなら時間稼ぎになるし、万一銃を撃たれても対応は容易い。

「さ、帰るわよ。」

紫が手を下げてスキマを開く。さあ帰ろうか…いや、そうだ。

「ああ、その前に……。」

「……そうね。」

二人で向き直り、月の皆様に対して

「「お騒がせしました。」」

十八、月上の戦塵（後書き）

第一次月面戦争…だっけ？

作者はよく知りません、悪しからず

十九、極の理想（前書き）

忘れた頃にあいつが来ました。

十九、極の理想

「なぁ紫、お前の言っていた理想って何だ？」

今回生き残れたと言う事は、紫の要望ぐらいにはなれていた筈だ。

それなら、その理想が何かは訊いても構わないだろう。

「…私達妖怪は、いずれ人間に全て殺されるわ。月の科学力のような力にも、退魔師のような存在にも…そして、忘れ去られる恐怖によっても。」

「？？つまり、存在自体が無くなると？」

「そう、だから私達には逃げる場所が必要なの。全ての妖怪、いえ、全ての幻想が受け入れられる場所が。」

「その場所が、紫の理想なのか？」

「ええ。幻想の集う、忘れ去られた者が集まる理想郷。」

「成る程ね…。」

「鉄生、あなたにもそれは手伝ってほしいの。お願い。」

幻想郷の作る手伝いなら、俺も喜んで手伝おう。

「勿論協力させっっっっっ！！！？」

全てを言う前に、身体に懐かしい感覚が走った。

屋上で味わった、あの感覚が！！

「ど、どうしたの鉄生？」

ああ、畜生。こいつ…まだ居たのかよ。

「…残念ながら、手伝えませんね。」

「え？」

俺の口は、好き勝手にしゃべり始めた。

「まさか貴女のような大妖怪がそんな事を言うなんて、老いましたか？」

「…あなた、誰なの。」

紫が警戒態勢にはいる。

「ああ、申し訳ありません。自己紹介がまだでしたね。私は竜神と言うものです、以後お見知りおきを。」

「竜神？そんな、貴方は鉄生に吸収されたって…。」

「あの見習いの言う事を鵜呑みにしたんですか？やはり年は取りたくないですね。」

わあお竜神、その辺にしとけよ。俺はお前と心中するつもりはない

ぞ。そろそろ紫の堪忍袋が心配になってきた。

「…なら、なぜ手伝えないのかしら？」

「…私も貴女と同じように、人間は危険だと思います。」

「だったら「ですが、何故逃げなければならないんです？」…え？」

「私達妖怪は、人間よりも強い。だったら話はカンタンでしょう？」

「何を…まさか！？」

「そう、人間を全て殺してしまえばいいんです。」

…何だと？

竜神は、まるで1＋1は2だと言うように簡単に言い放った。

「貴方…狂ってるわ。」

「貴女は他の次元を見ていないからそう言える。」

「何ですって？」

「地獄にいた時も、逃げている間も、私は色々な次元を見ていましたが、どの次元も人間が支配していました。息苦しい程の人間がひしめき合って、争い合っていた。」

「……。」

「人間がいるから、次元は荒廃していく。それを救うために、この身体に憑依したんですよ。」

「…貴方は、何で闇魔に追われていたの?」

「ああ、あれは裁判中に抜け出したからです。魂の状態になり、別の身体に憑依することによって私は消えた、と見せかける事が必要だったんです。その後、この次元に帰ってから、人間を皆殺しにすれば、私が言っていた事が証明されるでしょう?堅物には実際にやって見なければわかりませんからね。」

「貴方は誰かに殺されたの?」

「あの月の連中にです。あいつらは人が何か言う前にすぐ殺しちゃうんですよ。せっかく地上の『穢れ』が一掃出来る計画を話そうとしたのに。」

やっぱり、こいつおかしい。頭のネジが数十本単位で抜けてやがる。

「…貴方は、人間を愛していないの?」

「何というか、愛想が尽きましたね。」

「私は、この世界の全てが愛しいから、逃げを選んだ。人間は、私達妖怪にはかけがえのない存在なの。」

「私はこの次元だけは生きて欲しいと願った。だから私は、人間には死んでもらわないといけない。」

二人とも世界を愛しているから、理想を抱いたのか。だが、二人の

理想は全く違う。

「「理想の為に、あなたを殺す。」」

って、竜神が殺されたら俺はどうなるんだ。

十九、極の理想（後書き）

…強引かもしれない。

紫は人間を愛してたんだなーとか、竜神ちょっとアブナいじゃないかとか頭の中で妄想中。

次回はバトルです、生暖かい目でご覧ください。

二十、隙間と空間<前>（前書き）

竜神無双が始まります

二十、隙間と空間<前>

嵐のように光弾が向かって来るその戦場で、竜神は佇んでいた。

勿論紫は手加減なんてしていないが、その光弾が竜神に当たる事は無い。

飛んでくる光弾の通る空間を歪めて、その弾道を逸らしている。

竜神は自分から弾を発していないが、紫は自分の弾を避ける羽目になっている。

「私と水元鉄生と同じように考えないで下さい。彼は空間を操る事には素人同然ですが、その分格闘センスはあった。私は――」竜神が腕を前に出し、光弾を掌に収束させた。

「――その逆です。空間操作ぐらい訳ないし、弾幕なんて軽いものです。」収束させた塊を自分の力を込めて放った。

…悪かったな、弾幕が下手で。

「！やるわね。」

紫は一瞬驚いたようだが、すぐさまスキマに身を隠した。

当たらなかった弾は、周囲の地形を変えながらどこかへ飛んでいった。

「それなら、近くに寄れば！」

背後にスキマが出来、そこから紫が竜神を掴んだ。
その途端、竜神がさも可笑しそうに笑った。
「馬鹿ですね、そんな事分かりきっていますよ。」
竜神が掴んできた腕に領域を被せ…あ、危ないぞ紫！
「く…！」
「！？」
間一髪、俺が体を動かして振り払ったお陰で、紫は手を切断られるだけで済んだ。
「あああああああぁぁぁぁぁぁ！！！？」
「ちっ…。邪魔しないでいただきたい、水元鉄生。」
邪魔するに決まってんだろ！
「な、にをしたの…。」
紫は切断面を抑えながら、後ろに下がった。
「簡単です、貴女ごと空間を切断したんですよ。」
へーそんな事も出来たのか、って恐いなそれは。

「もっとも、距離が近くないと出来ないのが難点です…あれ、逃げちゃいましたか。」

竜神が講釈を垂れ流している間に、紫はスキマを開けて逃げたようだ。ふぅ、よかった。

「ふっ、安心していられると思いますか。」

は?あんたに追えるとでも?

「追えますよ、こうすれば簡単に…ね!」

竜神がスキマのあった場所に指をなぞると、ぴーっと線が出来て…スキマになった。

「ああ言うスキマは、空間に少なからず痕跡を残しているものなんですよ。」

紫、ヤバいぞ。コイツ基地外なのに能力を完全に使いこなしている。

「…一応言っておきますが、あなたの声、聞こえてますよ?」

あ、はい。

二十、隙間と空間<前>（後書き）

チート過ぎないかこれ、スキマ開けられるとか。

何か出してもらいたいキャラがいればご一報を。

二十一、隙間と空間<後>（前書き）

バトルはなかった　よかった

二十一、隙間と空間<後>

ｓｉｄｅ紫

危なかった、まさかあんな芸当まで出来るなんて。

切断面からの出血は止めたけど、回復するまでは暫くかかる。

それにしてもあの時、一瞬あいつが振り払ったのは一体…？鉄生が助けてくれたのかしら。

考えるのは後、休んで、態勢を立て直さはきゃ…

「逃げられるとでも思ったんですか？」

そんな考えを嘲笑うかのような声が背後から聞こえた。

そんな、そんな事…。

振り返るとそこには、姿は水元鉄生、だけど中身は狂気に駆られた化物－－－竜神がいた。

ｓｉｄｅ鉄生

怯えきった紫がこちらを見つめている。くそっ、逃げ切れなかったか。

「なんで…なんでここに…。」

「貴女のスキマを伝って来たんです。なかなか便利ですね、あれ。」

世間話でもするかのように話す竜神。一方紫は逃げる気力も無いのか、その場に立ち尽くしている。

「さぁ、今楽にしてあげます。大丈夫ですよ、閻魔様達は優しいですから、悪事をしていなければ地獄に落ちたりなんかしません。」

いや、紫が悪事をしていないなんてそんなバカな。じゃなくて、止まれ、止まれよこのっ！

体は俺の意志とは無関係に、右手で紫の首を掴んだ。

「さようなら、八雲紫。」

止めろーーーーーーー！

ザシュ

side紫

…まだ、生きてる。

「っ…げほっ、げほっ…な、にが…あったの…。」

首を掴まれたところまでは覚えているけど、その後は…。

「起きましたか、紫。」

「！！」

そこに立っていたのは数十年前、協力を依頼してきた、あの説教臭い…

「…誰？」

「なっ！？何で自分がスキマでボッシュートした人を覚えてないんですか！」

「ああ思い出した、四季映姫でしたっけ。」

「……まあいいです。それよりも、随分危ないところでしたね。」

「あ…、そうだ、鉄生は…。」

「ここにいます。」

映姫が指を差した方向には、右腕を切られた鉄生がその場で固まっていた。

「かなり手間がかかりました。結界の範囲を体体の形と同じにして、身動き一つ出来なくしてあります。」

「何でここに？」

「竜神から目を離すなと、十王様からいわれていたんです。まあ、まさか本当に消えてなかったとは驚きですが。」

流石見習い、やっぱり信用した私が馬鹿だった。

「これから鉄生をどうするのよ？」

「…竜神の魂を分けようにも、大部分は融合してしまっています。しかしこのままなら、また暴れるかもしれない。それなら、ある術をかけさせてもらいます。」

「？何の術なの？」

私の質問には答えず、映姫は鉄生に近づいていった。

「さて竜神、これから貴方は水元鉄生の魂に契約してもらいます。これからは、水元鉄生の自由を束縛せず、自身は水元鉄生に縛られるというものを。つまり、鉄生に全面的に従う契約をしなさい。」

……はぁ？

「断る権利はありません。今ここで二人共々地獄に堕ちるならいいですが。」

そんな馬鹿な契約、結ぶ訳ないでしょ。何言ってるのあのちびっ子は…

「……分かりました、契約成立ですね。」

「嘘！？」

side鉄生

切られた腕をくっつけながら、結界内外で起こった事を伝えあった。

俺は腕を切られた時には意識が飛んでいたので特になし。軟弱者？

違う、紫が首をハネられるのを見たくなかったからだ（多分）。

一方映姫によると、竜神は俺に逆らえないようになったらしい。

［これから宜しくお願いしますよ、鉄生。］

「…気持ち悪い。」

「大丈夫？鉄生。」

紫が背中をさする。いや、そう言う意味じゃなくて、頭の中に同居人がいるのはちょっと…。

［ちなみに、私と会話したい時には声に出してお願いします。いつもは普通の音しか聞こえませんので。］

…よく人の心を読む奴らよりはマシか。

［それはあなたの顔に出ているからです。］

「やっぱ心読んでるじゃねえかぁぁぁぁぁぁ！！」

「て、鉄生？頭大丈夫？」

「大丈夫じゃないみたいですね…。」

「さらっと酷い事言うなそこ！」

紫に心配されながら、映姫に呆れられながら、月明かりの下で俺は嘆いていた。

二十二、竜の願い（前書き）

菜種油と農民は絞れば絞るほど出てきます。

ネタは絞っても出てくるか否か。

二十二、竜の願い

社に戻ったら、幽香に「遅い、馬鹿！」と殴られた後、散々泣かれた。泣き止んだと思ったら抱き付くは離れようとするとだだをこねるわで甘えまくってきた。至福のひととき。

怪我をしている紫を藍に任せていたら、何時の間にか藍が消えていた。紫は素知らぬ顔をしていたが…。さよなら、藍の平穏な日々、次会う時は式になってるかな。

映姫は仕事があるとかなんとか言いながら焼酎を一気飲み×八回。「胸が無くたってよ～。」とか「あの馬鹿死神が～。」とか絡まれた。

…大丈夫かこまっちゃん、見習いの頃から恨まれてるようだぞ。

後から来た萃香は、月に行けなかったのが悔しかったのか俺に何度も勝負を挑んできた。それに竜神が乗り気になったり、幽香が勘違いして室内でマスタースパークを放とうとしたりと肝を冷やした。

俺？俺は終始つまみ作りと酒を運ぶのに精を出していた。あいつらが一人一ガロン飲むって言われても俺は信じる。

そんなこんなで夜は更け…

「すぅ…むにゃ…。」

「うぅん……ん…。」

「くー…、くー…。」

「ぐおぉぉぉぉぉ…。」

全員が眠りについたのは空が白みだした頃だった。

…約一名（鬼）が五月蝿い。

「やっと静かに飲めるな…。」

[あなたはこれから飲むんですか?]

「仕方ねぇだろ、さっきまで俺が飲めるような状況だったか?」

[…大変ですね。]

「おう。」

端から見たら酔っ払いが幻聴に対話してるように見えるだろうな。

…そう言えば。

「竜神、訊きたいことがある。」

[何ですか?]

「なぜ映姫に従った?」

こいつは人間を皆殺しにすると言う事をさらりと言ってのけた。

別にそこにしびれる憧れる何てことはないが、あそこまではっきりと意思表示をしておいてコロッと考えを変えるなんて事はないだろう。

ならば、何故。

「闇魔達に最初からマークされるなんてミスを犯してしまいましたから、これ以上は無理だなと判断したんです。」

「お前の考えはその程度だったのか？」

「…私は、この次元だけは助かって欲しかっただけです。それが出来ないなら代案を望むしかないでしょう。」

「代案？」

「八雲紫が言っていた理想郷、それです。あなたもそれを手伝うのでしょう？」

「…お前は、そのために従ったのか？」

「…人間には愛想が尽きても、妖怪は愛していますよ、私は。」

「…そうか。」

こいつは、助けたかっただけなんだよな。

世界を、人間から。

「あと一つ。お前って男なのか？女なのか？」

［……秘密です。］

「なしてさ。」

［とにかく秘密です。］

…？まあいいや。

俺は朝日が昇るまで、縁側でちびちび飲んでいた。

二十二、竜の願い（後書き）

幽香がマジで可愛い、可愛過ぎ。藍も紫も映姫も小町も可愛いです。

え？一人足りない？細かいこたぁいいんだよ！

二十三、基本訓練（前書き）

一日一話以上がんばります

二十三、基本訓練

「…出来ない。」

［もっと力を収束させるようにイメージして。］

「よし、ふんっ……。」

［……。］

「……。」

［……。］

「……やっぱ無理だ。」

［…望み薄ですね。］

今やっているのは空間操作の練習だ。

今までは我流でやるしかなかったが、元々の能力保持者がいるので教わってはいるが…出来ない。

「今使える位が十分だと思うがなぁ。」

［弱点を無くしたいから手伝えって言ったのはあなたですよ?］

「…さあ、今度は弾幕の訓練だ。」

［……。］

さて、東方と言えば勿論弾幕だ。

だが俺は何がなんだかさっぱり分からないまま墜ちていくイージーシューターもいいとこだった。

どうやらその苦手意識が強すぎたのか俺は弾をバラまいて打つのが出来ない。

デカいのを一発ぶっ放すぐらいなら出来るんだがな。

［弾幕は、妖術や符術が使えるならそれを補助で使えばわりかし簡単です。］

「いや、まずそれが使えない。」

［それ？］

「妖術とか、符術とか。」

［……は？］

幽香や藍に教わろうとしても何がなんだかさっぱりだった。

お陰で人間に化けたりも出来ないから、村から出たらいきなり退魔師に襲われた事もあった。

［え？じゃあ妖気とか霊気で普段何をしてるんですか？］

「空を飛んだり、自己強化に。」

普段からあまり使ってないがな。

［…宝の持ち腐れですね。］

「どうするか…これを機に教わろうかな。」

［誰にです？］

「勿論、あのスキマバ「何か不穏当な発言をしなかった？」美しい八雲紫嬢に決まってるだろ！」

［変わり身早いですね。］

危ねぇ、紫にスキマ送りされるところだった。

「で、鉄生。人の噂をしたぐらいだから何か用事があるのよね？」

「ああ、それはガクガクブルブルとそう言う訳だ。」

「怯えて竦んでるようにしか聞こえなかったけど、大体分かったわ。妖術を習いたいの？」

「そう言う事。頼めるか？」

思案顔になる紫。何を企んでいるのやら。

［悪そうな顔ですね。］

言ってやるな…。

「…教える前に、手伝って欲しいのだけど。」

「何をだ?」

「…友人に、会ってもらえない?」

友人?こいつに友達いたのか。

「今回は不問に処すわ。」

「いや冗談。友人って誰だ?」

…紫の友人って、大妖怪とかじゃないだろうな。

「…幽々子、西行寺幽々子よ。」

二十三、基本訓練（後書き）

やっと幽々子が出せる…筈。

二十四、お引っ越し（前書き）

クオリティが下がる一方。

テストの点数も下がる一方。

…このネタ前にやったなあ

二十四、お引っ越し

紫に連れられてやって参りました西行寺亭、白玉楼。

「何だこれ、結界？」

「そう、あの中にいる妖怪、西行妖が出している妖気を押さえ込むために張っているの。もっとも、封印されてるから後は妖気が浄化されるのを待つだけ。」

「だったら、危険な事は無いんだよな？」

「……さ、行くわよ。」

質問に答えて欲しかった。

門をくぐったところには、刀を二振り腰に差した男が箒を掃いていた。

「誰だ…と、紫様でしたか。」

「こんにちは妖忌。幽々子は？」

「今庭に居られるかと。」

「そう。」

「ところでこちらの方は？」

「ああ、俺は鉄生。よ…。」

…まさか挨拶している最中に切りかかって来るとは。

「……！刀が…！」

「成る程、反射的に領域を使う事は出来るんですね。空間障壁、いや空間固定ですか。」

「…もういいか？」

「申し訳ありません、尋常では無い妖気を感じたため、つい…。」

つい、で首をはねようとしないでくれ。

「私はここの庭師兼剣術指南をやっています、魂魄妖忌と申します。」

魂魄…魂魄？魂魄って言うと妖夢の姓じゃないか？妖夢の親族か何かか？原作キャラ？女の子以外のキャラって東方にいたっけ？ま、いいや。

「そう言えば、何で俺を呼んだんだ？」

「一つは、幽々子に会わせる為よ。妖忌、お願いできるかしら。」

「分かりました、ついて来て下さい。」

妖忌の案内を受け、立派な桜の木がある庭まで行くと、一人の女性が立っていた。

「幽々子様、紫様とそのご友人の鉄生様です。」

「あら紫。そちらがあの？」

「はじめまして、鉄生です。」

「西行寺幽々子よ、宜しくね。なによ、紫が話してたのよりずっと若いし優しそうじゃない。」

「…一体どういう話を？」

見た目が若いのは妖怪だから。紫や幽香を見てみろ、あんなに可愛いのにいくつ歳取ってんだか…。

「最近だと、大妖怪と三日三晩飲み比べして勝ったとか、月にいる兎を皆殺しにしたとか色々。」

「……それらは話半分ぐらいに聞いておいてください。」

紫とは後でじっくりお話しなければ。

「幽々子、この前話したのは覚えてるわね？」

「ん～、伊吹萃香が彼にぼろ負けして五体不満足になったって話？」

「ユカリ、チョットコッチニコヨウカ。」

「ちょ、違！私はそんな事言ってない！いきなり片言にならないで怖いから！」

「冗談よ、えーと…彼と闇魔様がそーゆー仲になった話？」

「……。」

「幽々子お願い真面目に答えて。でないと私が殺されるから。」

「コロスナンテソンナヒドイコトハシナイ…ヨ？」

「だから片言は！それになんで最後が疑問になってるの！」

紫いぢりはさておき、話を進めよう。

「この白玉楼を別の場所に移す話でしょ！」

「あ～そう言えばそんな話もしてたわね。いっつも鉄生さんの話ばかりだったから。」

「俺の？何で？」

「そ、それはいいからさっさとやるわよ。これが終わったら、妖術の修行やってあげるから。」

「おう。」

「……こんなものか。」

領域で包み込んだ白玉楼を空間から切り取り、冥界の入り口付近に固定する。

「後は冥道を繋ぐ作業だけだから、少し休んでて。」

「ふぅ…。」

そこまで疲れているわけじゃないけど、お言葉に甘えるか。

「ねぇねぇ鉄生さん。」

「幽々子さん、何です？」

幽々子が隣に座って俺の顔を覗き込む。

「紫のこと、どう思ってるの？」

「？どういう意味で？」

顔近い、顔近いから幽々子さん。

「言葉通りの意味よ、どうなの？」

はて、紫ね…。

「…まあ、いい友人ぐらいには思ってますよ。迷惑かけたりかけられたりと。」

「……。」

え、そのあきれ果てた目はどういう意味ですか？

二十四、お引っ越し（後書き）

感想だけでなく「俺の嫁に何してんじゃワレ！」とか「自重しろカス。」といったものもどうぞ。

二十五、家庭超（調）教師八雲紫（前書き）

タイトルは気にしないで下さい

二十五、家庭超（調）教師八雲紫

ｓｉｄｅ藍

不幸だ…。

鉄生が月から帰ってきた夜、八雲紫の世話を任されてしまった時から…。

少女（？）回想中…

「うわ～綺麗にいったな～。」

「いったな～じゃないでしょ！あいたたた…。」

「俺の責任じゃねえよ、文句は竜神に言え。」

「結局あんたでしょうが！」

「まあまあ、どしたの二人とも。」

「藍か。まあ色々あったんだよ。端的に言うと紫の手が切断された。」

「あんたらのせいでね！」

「どーどー紫さん、ほら見せてごらん。…これなら大丈夫だ、こっちで薬塗ってあげる。」

「あ、ありがと。」

「じゃ、任せたぞ藍。」

「これでよし、と。時間が経てば、その内手は生えるだろうから。」

「…ねぇ、藍さん。」

「何ですか？」

「気に入ったわ。」

「は？」

回想終了

気がついたらこの屋敷に送られてて、帰ってきた八雲紫に式を付けられた。

散らかった屋敷の掃除、食事、仕事その他色々色々こき使われてい

る。

スキマから適当にものを放り込んでくるから中はエラい事になっている。

それもこれも全部全部全部…

「お邪魔しま「お前のせいだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」…荒れてるなぁ。」

side鉄生

藍の盛大な怒声に迎えられ、八雲邸に到着。

「まさか本当に式にしていたとは…。」

「なかなか頑張ってくれてるわ、流石九尾ね。」

今に全面的に頼るぐうたらぶりを見せつけるクセに。

「それはともかく、妖術を教えてくれるんだろ。」

「ええ、それはもう死ぬほどね。」

「死ぬ必要は無いからまともにやってくれ。」

紫にやらせたら本当に死にそうだが。

「藍、今日からちょっと暇をあげるわ。」

「本当ですか！？」

「いない間は鉄生にやらせるから。」

「ちょいまち、なぜそうなる。」

「わかりました、失礼します！」

逃げ去るように飛んでいく藍。あいつ、あんなに薄情だったとは。

「さあ鉄生、お楽しみの時間よ。」

「……死なない程度にお願いします。」

紫の目が怖い。

s i d e幽香

鉄生が修行すると言い、外出してから約三年。

いくらなんでも遅すぎる。

藍が言うには紫の家にいるらしいが…

「私がいながら浮気かしら…？い～い度胸してるわね～。」

「……あの、私に言われ「黙りなさい。」は、はいっ！」

気のせいか藍が前より従順になっている。

「あの紫ババア、今度会ったらただじゃ済まな「お届け物でーす」紫！？」

空中に空いたスキマから出てきたのは…

「…ゴミ？」

「…惜しいが違う、鉄生だ。」

「どうした鉄生、そんなにぼろ雑巾みたくなって。」

「…藍、お前のご主人は凄いな。」

「え、何が？」

「…三年間ぶっ通しはキツ「マスタァァァァァァァァァスパァァァァァァァァクッッ！！！！！」ゲバラッ！？」

ｓｉｄｅ鉄生

「…何と勘違いしたかは聞かないでおく。」

「…ごめんなさい。」

いきなり紫にスキマ送りされたかと思ったら、目の前に幽香がいるし、何を思ったか特大マスパをぶっ放すは…。

「疲れた…。」

只今縁側で三人で並んでいる。両手に花。

「鉄生、紫の所で何をしてたの？」

「八雲印の紫式特殊訓練、それ以上は訊くな、言いたくない。」

「よく生きてられたと自分でも思うくらいですし。」

「ご主人は何を教えたんだ？」

「…対象、藍、動作、転移、場所、八雲邸。トんでけ、藍。」

「は？てうえぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

藍は星になった…良い奴だったな…。

「な、なにをしたの鉄生！？」

「霊力を使う言霊と妖術の混合技。言霊を使って俺の中にある妖術を引き出して使ってるんだ。」

これの為にまず妖術を一通り覚えて、それから退魔師の所で言霊を教えてもらった。

…嗚呼、思い出したくない思いでの日々。

「例えばこういう事もできる。対象、幽香、動作、束縛、期間、二時間。」

「えぇ！？ちょっと、ど、どうするつもりなの！」

俺の体が幽香に近付いていく。ああ、やっと…

「て、鉄生、私まだ心の準備が…て、あれ？」

「ぐー…、ぐー…。」

やっと、寝られる……

ｓｉｄｅ幽香

…寝ちゃった。

幸せそうにしちゃって…大妖怪、風見幽香様の膝の上で。

帰ってきたらどんなお仕置きをしようかと考えてたけど、思いがけないご褒美があったから許してあげる。

「まったくもう…、術なんか使わなくても、何時でもやってあげるのに。」

二十五、家庭超（調）教師八雲紫（後書き）

ゆ・う・か・り・ん！！！

キャラ崩壊？原作無視？だから何。

感想待ってます。

二十六、軽く幻想入り（前書き）

短いです、何か中途半端な気がします

二十六、軽く幻想入り

「こんにちは鉄生、元気してる？」

「ひぃぃ！きょ、教官！」

「食事中に来ないで紫、鉄生もいきなり敬礼しない。教官って何よ。」

「すまん、つい…。」

三年間のクセはなかなか抜けない。

…三年間

「…（ガクガクブルブル）」

「…どうしたの鉄生。」

「竜神、パス。」「…えー只今鉄生はトラウマに触れてしまったようなので、私が代わりに承ります。」

「竜神、鉄生は紫になにされたの？」

コワイコワイコワイコワイコワイ……

「…色々、ありました。」

「…触れない方が良さそうね。」

「ええ。鉄生に戻ります。」「…それで紫、何のようだ。」

「いつも立ち直りは早いですね。」

『は』は余計だ。

「そろそろあなた達も移住してくれない？」

「どこに。」

「私の幻想郷に。」

遂に来たか。

「幻想郷？」

「例の理想郷のことよ。この間、そう呼ぶようにしたの。」

「ふーん。で、移住って言うのは？」

「冥道の整備も出来たから、妖怪や人間達を連れ込んでいるんだけど、今妖怪達に人間を全部食われると面倒なの。だから、守り神をこっちでもやらないって話。」

「何で人間を入れてるんだ？」

「幻想郷の理念は来るもの拒まず、去るもの追わず、よ。忘れ去られた人間が来たりしてるの。それと…。」

「それと？」

「…結界を管理してる神社の巫女が、賑やかな方がいいって。」

「…あっそ。」

霊夢の先輩だからってあんなにドライじゃないのか。

「それで、来て欲しいんだけど。」

「んー、別にいいか。こっちに社を残せばいいんだし。」

「鉄生が行くなら、もちろん私も行くわ。」

もちろんってなんだよ。

「それじゃ、二名様幻想入り～。」

「って、いきなりかぁぁぁぁぁぁぁ！」

足元に現れたスキマによって晩飯のおかずを残したまま、俺達は落ちていった。

俺の秋刀魚ーーー！

その後、チビ鬼が勝手に上がり込んで社の御神酒を飲み散らかし、
それを見た村人が退魔師を呼びそうになったのは余談だ。

二十六、軽く幻想入り（後書き）

口から空想垂れる前と後にサーを付けんか馬鹿者！

こんな感じ

二十七、順応（前書き）

何だかんだ言って原作キャラが出せそうです。

二十七、順応

ｓｉｄｅ少年

「ハァ…ハァ…ハァ…ッ、ハァ…。」

何で、何で夜までに村へ帰れなかったんだろう。

「逃げないでー食べられないー。」

「食べようと、するから、逃げるんです！」

後ろから追いかけてくる妖怪、必死に逃げる僕。

村の決まりには『夜、森を歩くべからず』とあった。理由は妖怪に食われるから。

実際に妖怪を見たことはなかった。

けど、出てきたらやっつければいいと思っていた。

自分の剣技には自信があった。

だが、難なく避けられ現在に至る。

「ハァ…ハァ…ぐっ！」

妖怪が放った光弾が足にかすり、痛みでバランスを崩す。

「やっと止まった。」

駄目だ、止まるな、、止まるな

だが足は傷のせいか恐怖のせいか動こうとしない。

「じゃ、いただきます。」

終わるのか、これで。僕の人生は。

いやだ、いやだ、いやだ。

「助けて…誰か「呼ばれて飛び出てなんとやらー！」…え？」

妙なタイミングで現れたその姿は、上下黒の袴に、黒の長髪を後ろにまとめ、腰に袋を付けた…。

「「…誰？」」

「なっ！？」

ｓｉｄｅ鉄生

そんなに俺って知名度なかったのか…。

「じゃなくて、人化してるからでしょう。」

あ、そうか。急いで人化の術を解く。

「えーと、対象、自身、動作、変化解除。」

黒くなっていた髪が白銀に戻り、隠していた角が見えると、二人の顔が正反対に変わる。

「あー、てっしょー。」「竜神様！」

…泣きたい。顔は変わってない筈なのに。

「ルーミア、村の人間は襲うなって言ってるだろ。」

「だってお腹空いたんだもん、いいでしょ？」

そんな潤んだ目で見ても俺には通じん！…多分！

「いい訳あるか、食うならこれ食え。」

袋から何かの肉を出し、ルーミアに渡してやる。

何の肉かって？訊かないほうがいい。

「わーい！」

元気良く肉にかぶりつくルーミア。さてとお次はこっちのガキか。

ゴン

「痛…なにするんですか。」

「夜には村の中にいろ、じゃないと庇いきれん。」

妖怪は本来、人間を襲うものだ。特別な力を持つ人間があまりいない今の幻想郷では尚更人間は弱者になる。

そこで俺は妖怪達と協定を結んだ。

其の一、村の人間は襲わない、だが、妖怪の山に許可なく侵入した者と夜に魔法の森にいる者はその限りではない。

其の二、外来人はとりあえず保護する。

其の三、守らない奴は正義の鉄槌を下す。

この三つを締結した。

異議を申し立てる者は俺が薙ぎ倒したので交渉は円滑に進んだ。

何?それは交渉じゃない?気にしない。

「そう言う訳で俺もあまり妖怪に干渉できないんだ。」

「…あんまり、神様っぽくないですね。」

「ルーミア、やっぱこいつ食ってい「何時も人の為以外にも頑張っ

ておられるのですね！」うむ、その通りだ。」

最近の若者は礼儀正しいな、うん。

「本当ならあんまり助けられないんだが、今日だけは特別だ。さっさと帰れ。」

「は、はい！」

「いいんですか？多分あの少年、またやらかすでしょう。」

「そん時はそん時だ。ま、助けるだろうな、俺の事だから。」

人助けは嫌いではないし、守り神の立場からも、元人間の立場からもな。

「てっしょー、お腹減ったー。」

「早っ！」

ルーミアの手にはさっきまであった肉は跡形もなく。

「だったら、お前もあそこ行くか。賑やかな方がいいし。」

「どこ？」

「宴会場（博麗神社）。」

「行くー。」

俺が幻想郷に来て早五年。前の村にいた頃とやる事はあんまり変わっていない。

変わったのは、時たま紫に結界の外から妖怪や人間を連れてくるように言われるぐらいだ。

例えば、ルーミアは俺が連れてきた妖怪だ。初対面の時に頭をかじられたのは忘れない。

要は人間と妖怪のバランスを保つために連れてくる。

「鉄生、遅かったわね。」

「出迎えご苦労、霊奈（れいな）。ルーミアがまた人を襲ってたんでな。」

博麗霊奈、今代の博麗の巫女だ。容姿は腋を見せていない霊夢だ。違うところはお金にガメツくない所か。

彼女の能力は【空を操る程度の能力】で、それで空を飛んだり、空腹を操っているらしい。

「もう紫や幽香は来てるから、さっさと行った方がいいわよ。」

「わかった。」

あの二人を置いておくと必ず戦闘になるからな…。

「あ、それと久しぶりに四季映姫様が来てるから。」

「げ…。」

あの絡み酒、仕事はどうした。

酔ってなかったら説教で、酔ってたら恨み言を言われ続ける。厄介なお方だ。

「紅魔館の連中は？」

「ヴィンセントが来てるぐらい。後は子供のお守りに忙しいって。」

「少しは手伝えよあのバカ吸血鬼…。」

ヴィンセント・スカーレット、スカーレット家現当主。

実力はとんでもないが、性格がいい加減なので家の者からの信頼は薄い。

何時もよく村人達と釣りをしているのを見かけるらしい。

「ようせい達はー？」

「今日は来てないみたいよ。」

「そーなのかー。」

妖精、？（バカ）や大妖精の事だ。チルノがいないのは助かる。実力差も考えずすぐつっかかってくるから鬱陶しくてしょうがない。

…考えてみると、結構原作キャラに起因する奴が増えたな。

「ふむ、結構盛り上がってるみたいだな。」

賑やかな声が聞こえてきた。

二十七、順応（後書き）

ルーミアの口調はこれでいいのかわからない。

オリキャラを出したがこれでいいのか。

続け！

二十八、泡沫の日常（前書き）

旧作、はて、旧作。

…がんばれ俺、多分大丈夫。

二十八、泡沫の日常

「幽香、そろそろ帰るぞ…って、駄目か。」

「すぅ…すぅ…。」

気がつけば死屍累々。ヴィンセントはどうやったのかは知らんが軒下に寝ている。恐らく明日の夜まで帰らないつもりだろう。

「あ～あ、また飲み散らかして。」

霊奈が呆れている。昔の俺を見ているようだと思いながら幽香を担ぐ。

「飲み散らかさなかった日があったとでも？」

「……。」

そこで黙るって事はやっぱり無かったのか。

「よいしょ、と。俺は帰るぞ。」

「って、ちょっと、正気を保ってるなら片付けの手伝いぐらいしなさいよ。」

「いや、俺の背中にいる大妖怪がさっさと帰れって自己主張し始めたからな。じゃ。」

嘘ではない。寝てるくせにしっかり首に腕を巻き付けたり唸ったり

するからな。

「〜〜〜〜！！」

「いてっ、いてて、分かったから、早く帰るから抓るな。」

大妖怪らしくねぇ、むしろ子供に近い。

「とーちゃく、と。」

俺と幽香の家は太陽の丘と呼ばれるところにある。

村に住んでもよかったんだが、幽香が広い花畑がある方がいいとの事でここにした。

「ほれ幽香、立てるだろ。」

「…ぐーっ。」

分かり易っ。嘘寝下手だなー。

「全く…そんなに離れたくないのか？」

「っ…。」

図星のようで、幽香が額を背中にぐりぐりと押し付ける。

「別に今生の別れって訳じゃないのに。」

「…だって、この前行って、帰って来たばっかりなのに…。」

拗ねたように言う。いや実際に拗ねているのか。

「俺だって好きで行くんじゃないよ。幽香に会えないのは辛いし。」

「…ありがと。」

気のせいか背中が熱くなった。

「絶対戻って来るから。浮気もしないし。それで納得してくれ。」

「…絶対よ。」

「ああ。」

「……分かったわ。」

「それじゃ、降りろ。大妖怪様がそんな恰好だとどっかの烏天狗に激写されるぞ。」

「ん…。」

今度は素直に降りる幽香。…ちょっと残念。

「ね、早く寝ましょ、疲れちゃった。」

素早く幽香が腕に抱きつく。家に帰ると何時もこうやって甘えてくるのが楽しみでもあるのはよい子の秘密だ。

「ん、そうだな。」

それはいいけど、あの幽香さん、腕に特定の脂肪の塊が…。

～数時間前～

「鉄生、ちょっといいかしら？」

「何だ紫、顔近いぞ、酒臭い。」

「乙女にそんな非道い事を…。」

「乙女っつうなら左手に持った瓢箪を放してから言え。」

「…ちっ。」

舌打ちしやがった。

「そんなことより、相談と頼み事があるんだけど。」

「悪事には加担せんぞ。」

「……そんな事頼むわけないでしょ。」

今の間はなんだ。何を考えていた。

「まずはお願いから、また外に行って欲しいんだけど。」

「またか？俺か紫が幽香に殺されるぞ。」

「目標は力のある人間、数は出来るだけ多い方がいいわ。」

無視かよ。

「徐々に力関係を均等にするには必要なの。妖怪と人間の、ね。わかるでしょう。」

「……。」

確かにこのままじゃ、俺が守るのも限度があるからな。

自己防衛出来るならそれに越した事はない。

「…わかった。幽香には我慢してもらおう。」

「お願いね。それと相談は…。」

紫は声を小さくし、扇子で口を隠しながら話し始めた。

「…映姫が幻想郷の専属閻魔になっちゃったんだけど、どうすればいい？」

「…俺は知らん、どうもすんな。」

二十八、泡沫の日常（後書き）

この間単語登録でフランのスペカを全部登録した。

だからどうした受験生、勉強しろ。

二十九、挨拶回りの朝（前書き）

場繋ぎ

二十九、挨拶回りの朝

朝の日課として、武器を一つ練習する事にしている。

武術を妖忌や美鈴に教えてもらって、中でも一番印象に残っているのは『日々鍛練すべし』とのお言葉。

全くもってその通り、毎日鍛練しています。

今自分が自信を持って使いこなしていると言える武器は刀、両刃剣、槍、投げナイフ、それと体術。

普段から行っているとまあまあさまにはなるようだ。それでも戦う分には十分。

「挨拶回り？」

「そう。俺がいない間にどんな奴が来たのか知りたいからな。」

本音は、原作キャラがどれほど来ているのか知りたいからだ。

「だったら、妖怪の山にでも行ってみたらどう？あそこならそう言う情報が集まってるでしょう。」

「アイツ等か…嫌われてるかもな…。」

例の決まりを作った時、反対意見が多かったのは妖怪の山の連中だった。

鬱陶しいから俺が全員まとめて『説得』したんだが…それが裏目に出てなければいいが。

とは言え他に当てがある訳ではないからな。仕方ない。

「よし、行ってみるか。」

「夕方までには戻ってきてね。」

因みに家事をやっているのは8：2で俺だ。

幽香曰わく、『出来る方がやる』。俺だって上手い訳ではないんだが。

二十九、挨拶回りの朝（後書き）

手抜きじゃないです。時間がなかったんです。これにて御免！

番外編～皆様ありがとうございます～（前書き）

なん…だと…

番外編～皆様ありがとうございます～

作者「祝！ＰＶ十万＆ユニーク九千＆ポイント三百＆お気に入り百三十～～～！」

鉄生「ゴロ悪！まとめて祝うな！」

作者「だって１ヶ月たってないのにコレだよ！？嬉しいに決まってるだろ！」

鉄生「嬉しいかも知れんがゴロが悪いってんだよ！」

作者「まあそれはともかく、皆さん本当にありがとうございます。暇な時に書いた毎日出る以外能がない小説をここまで読んでいただけるなんて思ってもいませんでした。」

鉄生「暇な時に書いたって言うけど勉強しろよ受験生。」

作者「さて、ここで少し主人公の鉄生、お前の言霊について解説しようと思うんだが。」

鉄生「スルーしやがった…。」

作者「言霊は本来なら言葉で相手をコントロール出来る程強力なんだが、鉄生は自分に作用することしか出来ない。」

鉄生「つまりは自分に言い聞かせるようなもんだな。『逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ…。』とかを強力にした感じ。」

作者「それを使って自分が覚えた妖術を無意識に検索をかけ、最適なものを選び出すんだ。」

鉄生「自分の覚えてない事は出来ないのが弱点か。まあ紫に死ぬほど教えられたから不便な事は無いが…死ぬほど……シヌホド…（ガクガクブルブル）。」

作者「あー…、トラウマスイッチふんじゃったか、仕方ない、竜神。」

竜神「どうも。影が薄い私ですが、解説は何かありますか？」

作者「うーん、強いて言えば鉄生に服従している事か。」

竜神「と言いますと？」

作者「映姫様がかけた術は二つあり、一つは竜神が鉄生の身体から出れないようにするもの、もう一つは…。」

竜神「契約が反故された場合、私が消滅するものです。」

作者「契約は、鉄生に服従すると言うものだよな。」

竜神「その通り。おっと、鉄生が復帰したので交代します。」

作者「…まさか自分で二心同体の主人公を書く日が来るとは。」

鉄生「いまさら何を。」

作者「あと何か報告は…無いか？」

鉄生「さあてね、無いんじゃ「ちょっと待ちなさい！」紫！？」

紫「何面白そうな事を私に黙ってやってるのよ、私も混ぜなさい。」

作者「そんな事言ったって、もうすぐ止める所だったんだけど。」

紫「そんな事知らないわ、さっさと何か話しなさい。」

作者（さっすがゆかりん、誰にも真似できない事をさらりとやってのける！）

鉄生（そこにシビレる、あっこがれるぅ～！）

紫「そのネタ前に使ったじゃない。後喧嘩売ってるの作者。」

作者「何故に俺だけ。鉄生は？」

紫「それは…その…。」

作者「おおっとこれはもしやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

鉄生「スキマ送りとはえげつねぇ…。」

紫「読者の皆様、こんな駄目な作者が書いている小説を今後ともよろしくお願いします。」

鉄生「飽きられないような文章を書くように、作者を教育するので生暖かい目で見守ってあげて下さい。」

「「それでは、引き続き『東方魂合変』をお楽しみ下さい。」」

番外編～皆様ありがとうございます～（後書き）

と言うことで記念に書きましたキャラ対談。

面白かったんでまた書くかもしれません。

それにしても恋愛描写って難しい。

三十、吸血鬼に挨拶（前書き）

小さいレミリア登場。

レミリアは元々小さいって？気にするな。

三十、吸血鬼に挨拶

「おい。」

「…うーん、そこは…。」

「起きろー。」

「…そう、全速力で…。」

「もしもーし。」

「…ハンドルではなく、インド人を…。」

「起きろってんだよ！」

「ケバブッ！！？」

眠れる吸血鬼にボディーブローをかましたのは…

「何だ貴様か…。」

「何だとは御挨拶だな、寝てる間に白木の杭でも持ってくればよかったか？」

「それだと、いくら私でも痛くて寝てられんな。」

死なないのかよ。弱点って嘘だったのか。

「それはともかく、紅魔館の連中が探し回ってたぞ。早く帰れ。」

妖怪の山に行く途中、妖精メイドや小悪魔が飛び回っているのを見かけたので、事情を聞いて探すのを手伝っていた。

…事情ったって、ヴィンセントが帰ってこないと言う、ごく一般的な内容だったが。

「おっと今日は確か寺子屋でニンニク料理を披露する約束があったな。早く行かねば。」

吸血鬼がニンニク料理て。ちょい見てみたいが。

「あからさまな嘘をつくな。慧音に確認取ってやろうか。」

「…あ！風見殿！」

「えっ！？って騙されるか阿呆！」

「ちぃ…段々賢くなってきたな水元。」

「お前の騙し方が陳腐なんだよ、ヴィンセント。」

…こんな吸血鬼でも『畏怖と破滅の権化』とか『血に酔いし悪魔』とか呼ばれてたんだからな…噂って怖い。

「しょうがない、強制送還だ。対象、ヴィンセント、動作、転移、場所、紅魔館！」

「むおぉ！…なんてな。」

ちっ、やっぱ効かないか。

これがヴィンセントの厄介な能力、【感化されない程度の能力】だ。

「自身に作用される術や魔法を無視できるですよね。」

俺の解説が！じゃなくて、そう。ついでに他人の意見に耳を傾けないのもこれだ。相手の意見に感化されないとか。

「私を連れて行きたくば倒してみせろ！」

「あ、レミリアが泣いて「うわぁぁぁぁ私が悪かった！」…なっさけねえ奴だな。」

一人娘にはとことん弱いのがまたダメっぷりに拍車をかける。

「ほら、レミリアを泣かせたくないならさっさと帰れ。」

「むぅ…仕方あるまい。」

全く、紅魔館の奴らもこいつの行き先位は把握しとけばいいのに。やはり完全で瀟洒な従者がいなければ駄目なのか。

因みにヴィンセントは日に当たっても死にはしない。酷く日焼けするだけで済んでしまう。これも能力の一端だとか。

「あ、旦那様！やっと帰ってこられましたか。」

「美鈴が起きてる…明日は雪かな？」

「そんな、私だって何時も寝ている訳じゃありません。」

時々は寝てるんですね、わかります。

「そんな事よりレミィは？」

「奥方様とお茶を…って、行っちゃった。」

「はぁ、相変わらずの親バカっぷりだな。」

この後の展開はなんとなく分かるが、行ってみるか。

「あ、鉄生さん。ちゃんと鍛練は積んでますか？」

「毎日寝ている人に負けない程度には〜。」

「む、そんな事言うなら手合わせしましょうか？」

「帰って来たらな〜。」

出発前に身体を酷使する訳にもいかん。

「お父様、お酒臭い。」

「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！」

…クリティカルヒットだったか、相手の言葉に感化されない筈のヴ

ィンセントがのたうちまわっている。
そんな馬鹿は無視して、俺にすり寄ってきたレミリアを抱き上げてやる。
「鉄生さん。いらっしゃい。」
「お邪魔してます、ルクレツィアさん。レミリアも元気だったか？」
「うん、鉄生お兄様！」
ルクレツィア・スカーレット、ヴィンセントには勿体無い美人さんだ。ちなみに只今ご懐妊中。
レミリアは言わずもがな。小さい頃は暇があれば遊んでやってたからすっかり懐いてくれた。
…この俺に抜かりなし！
「何時もうちのダメ亭主がご迷惑をかけて。」
「いやぁ、もう慣れました。」
慣れたくはないが。
「そう言えばまた外に行くんですって？一緒にそこにいる喧しいのを連れてってくれないかしら。」
「ははは、小動物を勝手に放しちゃ駄目ですよ。」

「人を小動物扱い！？」

「お前は人じゃねえ。」

比喩でも何でもない、本当の事だ。

ん？レミリアが暗い顔をしている。

「どうした、レミリア？」

「…お兄様、また行っちゃうの？」

ぐはっ、そんな潤んだ目を…ルーミアとは次元が違う破壊力がっっ！

「…そうだな。」

「そんなぁ…。」

ヤバい、その涙目は二つヤバい。

一つは俺の罪悪感を猛烈に殴打している事。もう一つはヴィンセントがこちらを恨めしく睨んでいる事だ。

こうなると結構怖くなるのは親バカ故か。

「貴様…レミィを泣かせたか…？」

「ほ、ほらレミリア、今日は気が済むまで遊んであげるからさ。」

「ほんと？」

「勿論！それに、帰って来たらもっと遊んでやるからな。」

「じゃあ、早くお庭に行こっ！」

レミリアが遊ぶ時は、俺が能力を使って空間の壁を作り上げ日光を遮断しているので、安心して遊ぶことが出来る。

しかし何時も思うんだが、こいつら吸血鬼なのに昼型だな。

「ん～…ムニャムニャ…。」

久しぶりに会えたのが嬉しかったのか、何時も以上に張り切っていたレミリアは、俺の膝の上で寝息を寝息をたてている。

そして背後から殺気が。

「…水元、言い残す言葉は無いか？」

「なしてそうなる。俺がいない間に父と子の愛情でも深めてればいいだろ。」

まあ無理だろうがな。

「まぁ、早めに帰ってこい、お前には二人目の子供の名前を考えてもらいたいんだそうだ。」

「ルクレツィアさんが？」

「それとレミリアがな。」

ふぅん、俺がフランの名付け親、か…。

「考えておく。」

「そうしろ。」

「さてと、よし、俺はもう行かなきゃな。」

レミリアをヴィンセントに預け、さあ妖怪の山へと進路をとれい！

「帰りがけによれたら寄る、じゃな。」

「ああ、達者で。」

三十、吸血鬼に挨拶（後書き）

気付いた方もいるでしょうが、ヴィンセントとルクレツィアはアレです、屋敷のと滝の裏のです。

インターナショナル版はウェポンが増えてるそうな。

三十一、烏天狗に挨拶（前書き）

最近アクセス数の上がりっぷりが異常。

誰か回してる人いるの？しかも携帯で。

広く読まれているなら幸いですが。

三十一、烏天狗に挨拶

「…それで、以前の村には社だけ残して来たんですか？」

「そう、今も俺に神気があるのはまだ信仰してくれてるからなんだろうな。」

「あやや、本当に神様だったんですね。てっきり自称だったのかと。」

「そんなイタい奴と一緒にするな、天変地異起こしたろか。」

目の前のブン屋が青くなったのを見て少し清々した。口から出任せだったんだが。

「そんな事よりそろそろ最近来た奴について教えてくれないか？」

俺が今、この烏天狗の取材を受けているのは何も善意からと言う訳ではない。

侵入者として捕まった俺に射命丸が取材をしていいのであれば今回は見逃すし、情報も教えると言うからである。

…無論、捕まったのはワザとだ。抵抗してこれ以上天狗との関係をこじれるのはいやだからな。決して俺が弱いのではない。

「あ、最後に一つだけ。」

「何ですかぁ警部さん？」

「私が独自に調べたものでは、現在交友関係が深い女性は風見幽香、八雲紫、八雲藍、上白沢慧音、伊吹萃香、四季映姫、小野塚小町、西行寺幽々子、紅美鈴、パチュリー・ノーレッジ、ルクレツィア・スカーレット、レミリア・スカーレット、河城にとり、ルーミア、チルノ他妖精、プリズムリバー三姉妹、博麗霊奈、その他村人多数となってるんですが…」

「ちょいまち、最後の村人多数ってなんだ。」

それとボケ、ボケに…。

「え?けど聞いたところ『何時も気さくに話しかけてくれる。』とか『荷物を持つのを手伝ってくれた。』とかあるんですが。」

「そんなんで交友関係が深いんかよ。」

「多少の誇張は気にしないでください。それで…」

「後一つ、抜けてる奴がいる。」

「あややや、まだいるんですか?」

「お前だよ。」

「は?」

「お前だお前、射命丸文だ。」

「…えぇ!?」

目を白黒させる文、なんか変なこと言ったか俺。

「俺としては友人位にはなっていると思ったんだが？まあ、お前がイヤなら別に構わんが。」

「い、いやでもそのあの、しゅ、取材の為に追い回しただけで…」

「俺が話を逸らすためによった団子屋で誤魔化された上にしっかり奢りになってたクセに。」

前から取材を申し込まれてはいたが、面倒なので全部はぐらかしていた。

「で、お前は俺を友人と見てるか否か？」

「そ、それは勿論、友人だと思ってます。」

「ならいいじゃねえか。おっと話が逸れたな、で、その女性達がどうかしたか？」

「えっと…その中で、本命ってだれですか？」

「風見幽香。」

今の俺に選択権は無い…残念ながら。

文も予想通りだったようでそんなに驚いてはいない。

「ああやっぱり、怖くないんですか？」

「怖いから幽香って答えたんだよ。」

まだ命は惜しい。

「…わかりました。これで終わりです。」

「ふぅ…それで？最近の奴は？」

「今のところ、確認されてないようですよ。」

無駄足だったか。まあいいや。

「次は…白玉楼にでも行くか。」

三十一、烏天狗に挨拶（後書き）

本命予定リストの中に子供や人妻が入ってたのは秘密。

…そんな風に見られているのか水元鉄生。

三十二、挨拶…あれ？（前書き）

書いてるうちに作者があれ～ってなった。

気にしちゃダメ…か？

三十二、挨拶…あれ？

あっれ～？俺は確か、妖忌と幽々子に挨拶するために冥界に来たんだよな？

なのに何で映姫の自室で説教受けてるんだ？

「自室にいるのは私が非番だからです。」

「心を読むな、じゃなくて何で俺が説教を受けてるんだと。」

目の前に在らせられる四季映姫様は、何時もの厳めしい帽子を被っていないので随分小さく感じる。

「あなたがきちんと竜神を使いこなしていないからです。今あなたは人化の術で人になっていますが、それでは実力の半分も出ません。修練を積めば、神気を使うなりして竜神の魂を引き出して力を振るえる筈が次元は勿論、空間操作もままならない。竜神をあなたの中に置いたのは紫の理想の為でしたが、あなたが爆弾をしょっている事には変わりないんです。それなら挨拶回りなどせずに修練を積めばいいものを。」

ここまでを一息で言い切るんだから凄いよな閻魔、流石閻魔。

しかしそんなペースで付き合っていたら日が暮れてしまう。

「…だったら、ここに来て悪かったか？」

「？」

「俺が来たのは映姫に会うためだったんだが…嫌だったのか？」

［うわー…。］

「べべべべつに嫌な訳なんてある訳無いですがその時間を自分の為に使った方が良いのではないかと思っただけで決してあなたが嫌いな訳ではなくぶつぶつゴニョゴニョ…。」

さっきまでとは違うハッキリしない声でぼそぼそと呟く映姫。夕方までに帰らんと幽香に殺されるから、どうにかして切り上げねば。

「だから、自分が会いたいと思ったから、映姫に会いに来たんだって。それなら、自分の為だろ？」

［歯の浮くようなセリフをよくもまぁいけしゃあしゃあと…。］

やかましい竜神、俺だってこんな…ああ鳥肌がさぶいぼが。

「そ、れは…つまり…わたしに…会いたくて…来てくれたん…ですか？」

「ああ、その通り。だから説教はやめてくれ。」

今誤魔化せればいいから早く！終わらせて！

「…分かりました、それならこれだけで済ませてあげます。」

そう言うと映姫は手に持った棒を俺の頭に…

ドゴォォォォォォォ……ン。

「っっってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

明らかにおかしいだろ片手で衝撃波がでるとか！

［うぉ…。］

「ん、どうした竜神。」

［……。］

「竜神？」

「竜神は今気絶している筈です。」

え、まさかそんな事するためにさっきの一撃を？

「さあ、これで邪魔者はいませんからね…えいっ！」

「うわっ！？」

いきなり映姫が抱きついてきた…なしてさ！はよ帰らねば！俺の命が！

「さっき言ったセリフ、もう一回言ってください！」

「え…？」

「だから、ここに来たのは何でですか？」

いやあんた白玉楼の前で待ちかまえてたやんけ。そこから強制連行されたがな。

「…自分が会いたいと思ったから、映姫に会いに来た…で、いいか？」

「本当ですよね！」

ここで嘘と言えば俺の来世はミジンコかアブラムシかオケラかインフルエンザウイルスかになるだろう。

「ああ、そうd「良かったぁぁぁぁぁぁぁ！！」！？？」

何何なんだ、一体？

「…嬉しい、のか？」

「当たり前です、そんな事言われたら誰だって…。」

ぎゅうぅぅ…と、俺を抱く力が強くなる。

ふむ、年に見合わず外見に見合うピュアな心の持ち主のようで。

…仕方ない、こうなりゃヤケだ。

「あっ…。」

俺も映姫を優しく抱きしめ返す。一瞬ビクッと肩をふるわせた映姫だが、すぐに受け入れてくれた。

「……ですか？」

「え？」

「…浮気ですか？」

……な、に、を

自分から抱きついて何を言うか、俺は知らん。何にも言ってない。
ああ何も言ってないとも。

つか闇魔にまで俺は幽香の旦那にされてるのか。それは誇ればいいのかどうなのか。

「…そんな事言うなら引き剥がしてやろうか。」

「それは…イヤです、絶対離しません。」

どっちなんだよ四季映姫様。

…っと、そーだ。

「大体、部屋に連れ込んだって事は最初からそーゆーつもりだったんじゃないか？」

「べ、別にそんな事…。」

「ほら、顔赤くなってるし。そうだったんだ？」

「ち、違います！もーっ、いじめないで下さいよ！」

「悪い悪い、映姫が可愛くてつい…。」

「す、すぐそうやって…。可愛いって言っても許しませんよ！」

そう言う顔はとろけきっているのは伝えるべきか否か。

言葉の一つ一つでそうやって反応するんだからなぁ…

「だって本当に可愛いんだもの、仕方ない。」

「～～～～！！て、鉄生っ！！」

いきなり呼び捨てか、とツッコむ間もなく、映姫の顔が目の前に迫って…。

「ん……。」

「んむ…。」

…幽香にバレませんように。

三十二、挨拶…あれ？（後書き）

ほんとはもっと別の話が良かったんですよ。ほんとは。
書いてるうちに作者の脳がオーバーヒートを通り越して消し炭になりました。

ダメだコイツ…早く何とかしないと…。

話がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！読めねぇぇぇぇ！？

…まあ、なんとかします…明日までには…

三十三、結界の外（前書き）

…まだ頭は治りません

…気分転換に勉強するか

三十三、結界の外

出発の日、博麗神社。

見送りには幽香、ヴィンセント、レミリア、文、妖忌、幽々子、映姫が来てくれた。

みんなからそれぞれ旅の祈願や帰りの催促、お土産の要望や日々此鍛練と様々な言葉を受け取った。

霊奈からは幻想郷に転移するための札を何枚か、紫からは世界地図をいただいた。

…幽香からは口に、映姫からは頬に、レミリアからはおでこにご褒美を貰った。

今までとは違い、今回はノルマ無しの人材集めだからなぁ…苦労しそうだ。

「それじゃ、準備はいいわね。」

「ああ、何時でも行けるぞ。」

霊奈が結界に穴を開け、俺が掌握領域を使って安定させる。

下手に開けようとすると結界が丸ごと消える危機がある。

「それじゃ、またね。今度私が会えるか分からないけど…。」

霊奈が寂しそうに笑う。そりゃそうか。

博麗の巫女は代々普通の人間だ。多少異質な力を持っていても、人間であることは変わらない。

だから、寿命は普通の人間と同じ…いや、危険な仕事をしている分、短い。

「お前が輪廻に入る前に、会いに行くさ。それまで待ってろ。」

「それはどうかしらね。」

「待ちきれないなら俺がお迎えになってやろうか。」

「…全く。早く行きなさい、疲れちゃう。」

「ああ…またな。」

結界を過ぎ、穴が閉じていくときまで、みんなは手を振っていた。

そう…また、会える。永久の離別なんて、俺達には無い。

「……。」

山道を独りで歩く。

飛んでいけば楽なんだが、旅の始めはやはり徒歩だろう。

「……。」

「何時になく暗いですね。」

おっと…独り、ではないか。

「みんなと、また会えるか心配でな。」

「妖怪には、寿命なんてあるようでありません。忘れ去られないのならば、何時までも存在します。」

「…そうだな。」

…だが、それは竜神だから…妖怪だからだ。

俺や霊奈は人間だ。妖怪じゃない。そんな考え方が馴染めないだけか。

［人間も同じです。］

「？」

「人間も、みんなから忘れられたら存在しないのと同じです。逆に記憶がある限り、人は他人の中で生きているんです。」

「……。」

［やはり、妖怪と人間は同じなのかもしれないですね。］

覚えてもらう事で存在する。みんなの記憶に生き続ける。

「…難しいな。」

［でしょうね。］

…嗚呼、下らない、下らない。

「さあ、元気だして行くか！」

三十三、結界の外（後書き）

どんな人だろうが忘れられたらいないと一緒だと思ってます。

三十四、本物の神様（前書き）

短いです

三十四、本物の神様

「いけね、賽銭がない。」

［参拝だけなら必要ないでしょう。］

「そうか？俺は許さんかったが。」

［…セコいですね。］

俺が今いるのは神社、と言っても俺の社や博麗神社なんて比にならない位の豪華な造り。なんだが…

「…人がいないな。」

［一番有名な神社と聞いたんですがねぇ…。］

そう、参拝客どころか神主も巫女もいない。

賽銭箱に何も入っていないのはこまめに回収してるのか入れる奴が全くいないのか…。

「折角来たんだ、中を覗いてみるか。」

今の状況を説明する前に言っておくッ！俺は今奴の力をほんのちょっぴりだが体験した。い…いや…体験したというよりはいきなりで訳の分からなかったのだが……。あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『俺は誰かの部屋を覗きこみ、寝ている奴と目があったら何時の間にか吹っ飛ばされていた』。

な…　何を言ってるのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…身体がどうにかなりそうだった…。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

…ゴメン、一回やってみたかったんだ…。

「…まさか神社で寝込みを襲う奴がいるとはな。神罰を下してやろうか、人の子。」

地面に突っ伏してた俺に無慈悲な声を浴びせる注連縄。

「しかも早苗じゃなくて神奈子を襲うなんて…年増好き？」

俺にのしかかり枝でつつくケロ帽子。

「私はこんな卑怯な人は嫌いですね。はっきり言って最低です。」

誤解で俺の心を深く傷つける緑腋巫女。

「…救いようがないですね。」

お前まで！お前までが！

「…取り敢えず弁解させてくれ。俺は襲おうとしてた訳じゃない、部屋を覗いただけだ。それと俺は博愛主義者だ、年増好きじゃない。」

何か余計な事まで言った気がするが気にしない。

「「「……。」」」

おおう、お三方のアツい視線が…。

三十四、本物の神様（後書き）

ポルナレフネタはやってみたかった。

ただそれだけ。

番外編～聖夜の前夜～（前書き）

明日はクリスマス！

番外編～聖夜の前夜～

ジングルベージングルベー鈴がーなるー。

…この盛り上がりも明日には冷めてるんだろうなぁ。

スカーレット家クリスマスイブパーティーに夫婦でお呼ばれして思う今日この頃。

「お兄様どうしたの？具合悪い？」

俺が何とも言えない表情をしているとレミリアが心配してくれた。

「大丈夫、水元は殺しても死なないような奴だから、レミィは心配しなくてもいいぞ。」

そこへ空気の読めない馬鹿親が颯爽と登場、これにレミリアは？

「私はお兄様と話してるの、お父様はどっか行ってて。」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！母さん、レミィが、レミィが反抗期にぃぃぃぃ！！」

…嬉しいような同情するような。

「お父様はほっておいて、お兄様は？」

「大丈夫だ、レミリアの顔を見たら風邪も何も飛んでくから。」

俺の返答がお気に召したか、肩に乗っかるレミリア。ああ可愛い、ああ可愛い。あれ?イヤな悪寒が…。

「鉄生?なに小さな子供にデレデレしてるの?」

大妖怪、風見幽香が現れた!

「いや、別にデレデレなんか…っ。」

幽香の周りの景色が歪んで見えるのは気のせいだろうか?

ヤバい、下手に刺激しないようになだめねば…

「お兄様、このオバサンは?」

…死んだ。

「「「……。」」」

スカーレット家中庭。

「ね？これだけ謝ってるんだから…そろそろ機嫌、直してくれない？」

「……。」

レミリアの禁句のお陰で鳩尾と首筋と脛に痛恨の三撃を食らう羽目になった。

それだけならまだしも、食らった衝撃で意識と身体がお別れするところだった。

気を失ってる間、映姫と小町が二人で杯を交わしていたのを見てた気がする。

因みにレミリアにはお咎めなし。それなんて理不尽。まあそれはいい。

「も～、許してってば～。」

ベンチに座る俺を前後に揺らす幽香。

まあ、許しはしてるんだけど、慌てる幽香をもうちょっと見たいかなーとかそんな。

…もういいかな。

「…まあいい。水に流そう。」

「ふぅ…ずっと黙り込んでたから本気で怒ったのかと思った。」

「そこまで心は狭くない。それに怒るのはお門違いだろ。」

レミリアには後で人に失礼な事を言うなと教えるようヴィンセントに言っとくか。

何で俺が言わないかって?嫌われたくないからだよ!

「…パーティーに戻るか。」

「…そうね。」

幽香の手をとり、笑い声が聞こえる広間に向かった。

番外編～聖夜の前夜～（後書き）

と言うわけで次もだよ！

三十五、思い出話（前書き）

前回の続き?はっそんなわけねー。

…すいません、昨日の俺はテンションがヤバかった。

三十五、思い出話

「…と言う事があったのさ。」

「へぇー、そんな異国のお祭りがあるんだ。」

「…よくそんな怖い奥さんがいて生きてたな。別れようとか考えなかったのか？」

「いや、別れるなんてとんでもない。」

綺麗だしスタイルいいしゆうかりんだし。それに二人っきりだと甘えてくるのがもう可愛過ぎるし。

そんな俺ののろけはともかく、本日十二月二十五日。

昨年のパーティーを思い出してカエルとキャノンに話していた。

俺への誤解は晴れたかは分からないが、諏訪子が俺の膝にのり、神奈子が俺の横に寄りかかってきてるのを見るところ、打ち解けたんじゃないですかね。

…ええい、注連縄が邪魔だ。

「…なぁ鉄生。」

「何だ？」

「お前は…何だ？」

藪からスティックだな。あ、モニターの向こうから白い目が。

「言ったろ、元人間で現妖怪、時々神様だ。」

「…本当に神だったのか？」

「そうだ、村に悪さする人間や妖怪をこう千切っては投げ千切っては投げ。」

「あっそ。」

ありゃ、何故か呆れた声が聞こえる。

「うーん…疲れたな。よいしょ。」

「うあっ！？」

丁度抱き枕になる大きさの諏訪子を抱きしめ、神奈子の膝枕のお世話になる。

「夜更かししすぎたな…寝る。」

「ちょ、ちょっと鉄生！？寝るなら布団で…。」

時すでに遅し、すでに寝息を立てていた。

ｓｉｄｅ神奈子

「…何というか、傍若無人って感じだね。」

私の膝で眠る男に抱かれている諏訪子が、諦めたように呟く。

「こいつは、神をも恐れぬただの馬鹿だ。」

最初にあった時は、ただの変態かと思ったが、話を聞くともっと変な奴だった。

曰わく、幻想郷のツカイッパ。

幻想郷というのは聞いた事がある。なんでも、忘れ去られたものが集う場所だとか。

鉄生はそこの管理者、八雲紫から言われ外から力のある人間を連れて行っているようだ。

「…忘れ去られたもの、か。」

この神社も、昔は多くの信者がいたが、今は細々と儀式をとり行っているだけだ。

…我々が必要なくなってきたか。いずれは…

「うーあー、神奈子ー、こいつに抱かれてると何か落ち着くー。」

「…そうか。」

私の考えをよそに、無邪気な祟り神とそれを抱きながら安らかに眠る馬鹿と、二人を見守る軍神。

何とも微笑ましいじゃないか。

…我々は、忘れ去られ、消えていくのか。それならば…

自分達から此処を発とう。何時の日か。

三十五、思い出話（後書き）

成績を一つ下げちまったぞこら。

どないするか。どうもしない。

三十六、神々の決意と悪魔の子（前書き）

ははははやべぇ、俺の脳内が完全にバーストしちまった。

三十六、神々の決意と悪魔の子

「……。」

パチン。

「むぅ…。」

パチン。

「……。」

パチン。

「…駄目か。」

パチン。

「これで終い、と。」

パチン。

「…参りました。」

「ふー、なかなかやるじゃないか鉄生。」

「いや、あっさり抜かれるとは思わなかったから攻めただけで…さすが軍神。」

暇つぶしに神奈子と将棋をやっていたが、これが勝てない。
戦績は七戦二勝五敗。因みに二勝したのは竜神に助けてもらったからだ。
俺が卑怯なのはさておいて、神様がこんな暇だと言う事はつまり、信仰が薄れてきたんだろう。
お参りに来るのはよくて1日10人位、来ない時は1人も来ない。
俺もそうだったからな、今でも信仰されてるのが不思議な位だ。
「…鉄生。」
「何だ?」
「私達を、幻想郷に送れるか。」
…何だと?
「どう言う事だ?」
「そのまんまの意味さ、私達もいずれは忘れ去られたものになる。」
「それは今信仰がない事について言ってるのか。」
「…そうだ。」
今では妖怪も姿を見なくなってきて、それを退治していた者もいなくなった。

ならば神は？そこにいるのだろうか？

自分達が恐怖していた者と共に消えていったんじゃないだろうか？

そもそも神はいたのだろうか？

自分達がいると思い込んでいただけじゃないだろうか？

…俺の勝手な想像だ。だが実際はそうやって信心は無くなっていったんだろう。

「…ここを丸ごと持って行くことなら出来る、が、向こうで確認を取ってからな。」

「それでも構わない。」

「…なら、早めに聞いてみるか。」

懐から霊奈お手製の符を取り出す。

幻想郷に一方通行で転移出来るのはいいが、使い捨て何だよなこれ。

「じゃ、またな。」

「ああ、頼んだぞ。」

「…さてと。」

紫はどこにいるかなっと。

「おーいスキマババァァァァァァァ！！？？」

叫んだ訳じゃない、いきなり足元がなくなったんだ。

「私にそんな口の訊き方するなんて、随分度胸があるわね鉄生。」

「いやちょっとした不可抗力でしてはいそんな目で睨まないで下さいすいませんでした。」

「それよりも、何で帰ってきたのよ。」

「実は…」

青年説明中……

「…ふぅん、神様を、ね。」

「大丈夫か？」

「…まだその神様に信仰が集まっている？」

「一応は。」

「だったら今は止めておきましょう、ここもまだ安定してないから。」

「そうかい。ところで紫。」

「何かしら?」

「何時まで落ちてくんだ俺は。」

そう、さっきから目玉だらけのスキマ空間を落下中なんだ。

「もうすぐ紅魔館に着くわ、赤ん坊の名前を決めるんでしょう?」

「なして知ってるのかな…。何時生まれたんだ?」

「ちょっと前よ、私も会った事は無いんだけど…。」

「これは…一体…。」

紅魔館に落ちてみると、そこには半壊状態の館があった。

「紫、どうなってんだ！」

「私も来たばかりだから、知ってる訳ないでしょ！とにかく誰か…。」

二人で周囲を探し回る事に。すると入り口付近の瓦礫に挟まってる奴がいた。

「あ…鉄生…さん…。」

「美鈴か！一体何があった！」

「妹様の…能力が突然…。」

妹様？フランドールの事か！

「奥方様と旦那様が…止めようとしましたが…ゴホッ、ゴホッ。」

「…わかった、返り討ちにあったのか。」

「…はい。」

フランドールの能力…ありとあらゆるものを破壊する程度の能力か…畜生っ。

「レミリアはどうしたんだ。」

「ここに…。」

美鈴が挟まってた瓦礫の隙間に、気絶したレミリアがいた。

「…旦那様が…レミィを頼むと言い…私はそのまま…逃げてしまい…旦那様を…助けられなかった…っ。」

「…自分を責めるな、お前はよくやった。」

美鈴は今にも泣き出しそうだ。

「うぅ…は、い…。だけど…。」

「そのまま残って死ぬよりか、二人が生き延びれた方がよっぽどよかった。ヴィンセントもルクレツィアさんも感謝してるさ。」

「…有り難う…御座います、鉄生さん。」

さて、紫は誰か見つけたかな。

「鉄生、パチュリーと小悪魔がこっちにいたわ。そっちは?」

紫がスキマから上半身だけ出して報告してきた。

「美鈴とレミリアがいた。スキマで安全な所にやってくれ。」

「分かった。これの原因は?」

「…赤ん坊だ。」

短く答えて、館の中に入る。

「何ちゅう魔力だ…本当に赤ん坊か？」

ベビーベットに横になっている赤ん坊は、俺なんかよりもかなり強力な力を放っていた。

［…危険ですね。］

「んん？何だ、さっきから何にも言わないと思ったらいきなり。」

［私の掌握領域が壊されるんです。あそこを掌握しようとすると。］

空間すらも壊すのか…大丈夫か俺。

「ええい、一回位なら映姫も見逃してくれる筈だ！」

意を決して特攻！

泣き喚いている声が笑ったような気がしたのは気のせいだ。

「すぅ…すぅ…。」

何とかフランドールを寝かしつける事に成功。だが代償はデカいな…。

「鉄生…！その左目は…。」

「油断してたら壊されてちまった。まあ大丈夫だろ。」

紫に事情を説明し、名前はフランドールにする事、能力はありとあらゆるものを破壊する程度の能力だと言う事、俺が頑張って少しの間能力を封印出来た事、それと俺がちょい限界だと言う事を伝え、俺の意識は沈んだ。

三十六、神々の決意と悪魔の子（後書き）

鉄生の左目は壊されました。

ここおかしいだろ、とか、頭湧いてんのかこの作者、とかありましたら是非言ってください。そうしないと治りません。

あと明日から更新が滞るかもしれません。哀しいくけど俺、受験生なんだよね。

ＰＶ二十万超えました、皆さん本当に有り難う御座います！

十万になってからあんまり経ってなかったのに早過ぎる。何やらプレッシャーを感じる…そんなわけねー。

次回は出来れば番外編書きたいな…ネタはどないしよー。

それでは。

番外編～無礼講～（前書き）

ＰＶ二十万ありがとうございます

番外編～無礼講～

博麗神社にて、今日も宴会大盛り上がり。

『『イッキ！イッキ！イッキ！』』

大学生の飲み会かよ、一気飲みダメ、ゼッタイ。あーうるさい。

いつも通りすみで飲む事にするか。

「鉄生、なんでそんな所にいる？」

「慧音か、珍しい。」

青く四角い帽子を被った女性、上白沢慧音。

村で教師と守護者の二つの草鞋を履く忙しい人…いやワーハクタクだっけ？

ともかく、何時もは誘っても来れなかったんだが。

「何だその顔は。私がいては駄目か。」

「いや、単純に珍しかっただけだ。」

「そうか？まあ最近来てなかったからな。」

「俺は新参者だから、年長者の話は分からないよ。」

「…それはどう言う意味かな鉄生。」

「…失言でした。」

いかん、酒で口が軽くなってる。

「慧音は向こうで騒がないのか。」

「飲む時は静かに飲むのがいい。」

「ふぅん…。」

「そう言う鉄生はどうなんだ？向こうに奥さんもいるだろう。」

「…アレは今、人間の手に負える代物じゃない。」

もうみんなに嫁認定されてるのか、モニターの向こう側からの妬みの念が来るようで怖い。

「ははは、お前は人間じゃないんだ。大丈夫だろう。」

人間じゃない、ね…。全くもってその通りなんだが…言われるのは少しな。

「…？どうした、急に黙り込んで。」

「いや、何でも。それより…」

「おや～そんな所にいるのは鉄生君じゃあないですか～。」

「げ、映姫様…。」

つつつーっとフェードアウトする慧音。お前はそんな薄情な奴だったとは…俺は哀しい。

「ちょっと聞いてくださいよ～あのバカ死神がですね～」

「まだ何も言って無いのに愚痴り始めんなよ…。」

「…それでですね～。」

「あーはいはい、大変でしたね。」

静かな時がぶち壊しだ。愚痴愚痴グチグチと文句ばかり延べまくる映姫のお陰で。

「くわ～～～。…眠いです。お休みなさい…。」

「なしてそうなる！？」

伸びをして俺の膝の上で丸くなり始める。

「くー…、くー…。」

「早い…早過ぎる。」

俺は、間に合わなかったんだ…。

「鉄生、随分と災難な格好だな。」

「慧音、人を置いて逃げるなよ。エラい目にあったぞ。」

「そうだとしても、お前の膝にはそれに見合う代価がいるじゃないか。」

「俺に寝込みを襲えと。」

「阿呆。」

ガンッ

「～～～～！！いきなりなんばしょっと！？」

「いきなり方言になるなよ…。」

慧音の頭突きが痛いって本当だったのか…次から気をつけよう。

番外編～無礼講～（後書き）

何とか間に合った…

三十七、永遠亭（前書き）

ようやく永遠亭。でも短い

三十七、永遠亭

「……。」

見知らぬ…天井はやめよう。

「あれ、左が…ああ、そうか。」

見える筈がない、フランドールに破壊されたんだ。

体中が包帯だらけになっているため、首しか動かせない。

「起きたみたいね。」

聞き慣れぬ声の方を見ると、赤と青に分かれたナース服のようなそうでないような…って、何で永琳!?

確かまだ幻想入りしてなかったよな、ならばなぜ。

「あの、ここは…。」

「ここは永遠亭。あなたの横に寝てる八雲さんが連れてきたのよ。あ、自己紹介してなかったわね。私は八意永琳よ。」

「俺は水元鉄生です。そうですか、紫が連れて…ん?」

横で寝てる?

恐る恐る横を見ると…

「ん…ムニャ…。」

「幽香ならまだしもなぜ貴様がそこにいるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「…何で幽香ならいいのよ。」

「何時もの事だからな。」

目が覚めたら布団に入ってるなんて、入って来てない日を数える方が早い。

…疚しい事については想像に任せる。

そんな事はさておき。どうやら俺は左目以外にも結構怪我をしていたらしい。

詳しくは聞いてなかったが、普通なら救急車よりも霊柩車に乗せた方がよかったぐらいだったとか。

一番酷いのはやはり左目。義眼でも入れるかなーとか思ってたが、どうやら大体元通りになるらしい。流石永琳。流石月の頭脳。

その他は薬で治るとの事なので、暫く永遠亭に泊まる事になった。

「…ここを幻想入りさせていた？」

「そう。今頃気付いた？」

俺が剥いたリンゴを食べながら紫が事なげなく話す。

…立場が逆だろ、逆。

「永遠亭の皆さんは、逃げ場所を探してるみたいだったから、提供してあげたのよ。」

「あっそ。」

どうせ何か厄介な条件でもつけたんだろうな。

「…どうしてそんなに胡散臭い目で見るのかしら。」

「気にしない。」

気にしたら負けだ。

三十七、永遠亭（後書き）

次話からマシになる事を信じて…。

三十八、無事退院（前書き）

まあ、生暖かい目を忘れずにご覧ください。

三十八、無事退院

入院中、様々な奴が見舞いに来てくれた。

映姫が来たり、ルーミアが来たり、プリズムリバー三姉妹が来たり、チルノが来たり。

…説教を食らったり、食べられそうになったり、鬱になったりハイテンションになったり、？に勝負を挑まれたり、と変換できる。

まあそんなお陰で暇をする事はなかった。

もっとも、一番の暇つぶしは――

「てめぇ待ちやがれてゐ！今日こそ引導を渡してやる！」

「やれるものならやってみな～。」

――悪戯兎をひっ捕らえる事だ。

「何時も何時も手の込んだ真似しやがって！人が能力も何も使えないのを知ってやるとは貴様！」

曲がりなりにも怪我人なので、能力やらは使わないよう厳しく永琳に言われている。

「やーい、脳無し。」

「脳無し違う！」

［漢字が違いますね。］

広い永遠亭のほぼ全域を使った壮絶な鬼ごっこである。所々に罠があるから気をつけよう。

「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

あ、哀れな優曇華院の泣き声が…。

「ほ～ら、ここまでおいわぷっ！？」

「お、遂に観念したか、って…。」

曲がり角でてゐがぶつかったのは、修羅の形相の永琳先生だった。死亡フラグですね、わかります。

「あなた達、いい歳して何やってるの！！」

俺の心は何時までも十七才だ。ちょ、永琳先生やめて、人に向かって矢を撃つのはウィリアム・テルだけにして！頭の上に林檎は無いから！だからって頭を狙わないで！うがっ…。

「…どうかしら、ちゃんと見えてる？」

「うわ眩し。ちょっと待って…。」

ようやく左目の包帯が取れた…付けてる間は何か厨二患者っぽくてやだったんだよ。

「…ん、おお。ちゃんと見える！」

「なら良かった。元の眼球は使い物にならなかったけど、いる？」

「一応貰っておきます。」

袋に放り込んでそのまま忘れるだろうが。

「それじゃ退院おめでとう。竹林で迷わないようにね。」

「お世話になりました。それじゃ。」

三十八、無事退院（後書き）

感想待ってます。作者のパワーになります。

三十九、幻想郷春のニート撲滅運動（前書き）

ちょい時間を吹っ飛ばします。

まあ、今までおもんない話ばっかだったんで、少しは笑い要素を足したかった。ただそれだけ。

三十九、幻想郷春のニート撲滅運動

「鉄生、働かないか？」

「だが断る。」

［この場合の「だが」って用法おかしいですよね。］

うるせえ、ネタにツッコむな。

慧音が開口一番に言い放った言葉は、現代社会のゴミ虫共がショック死するような言葉だった。

「お前、聞くところによると全く働いてないようじゃないか。そんなのが村をふらふらしてるとうちの生徒に悪影響がでる。働け。」

「俺は常日頃この幻想郷の為に汗水流して働いているので失礼します。」

「もう六年になるんじゃないか？紫の手伝いを解任されて。」

「……。」

ちぃ、知ってたのか。

大怪我を負った事と家族（幽香）の強い要望があり、幻想郷のツカイッパはお役御免となってしまった。

今は完全自給自足ライフを送っていますが何か？

「お前も危険な事を止められるいい機会だっただろう。さあ、さっさと来い。」

「イヤだぁぁぁぁぁぁぁぁ！働きたくないでござるぅぅぅぅぅぅぅ！絶対に働きたくないでござるぅぅぅぅぅぅぅ！！」

「喧しい！！」

ドゴッ

「かはっ…。」

俺の心からの叫びは慧音には雑音でしかなかったようだ。

所変わって村の寺子屋。

「え～、今日はみんなに新しい先生を紹介する。鉄生、ほら。」

「はぁ…、何で俺が…分かりました。分かりましたから頭を振りかぶらないで！」

渋々教壇に立ち、自己紹介を始める。

「紹介に預かりました、水元鉄生です。コンゴトモヨロシク。」

「何故片言に…。」

「教える科目は国語と理科だ。算数は訊かないでくれよ、十中八九答えられないから。」

「胸張って言うことか…。」

「それで、何か質問は？無いならさっさと授業始めるぞ。」

「…おっと、もう時間か。じゃあ、宿題は３５ページの主人公の心情について、原稿用紙三枚な。忘れた奴は吊す。日直、挨拶。」

「起立、礼、「「ありがとうございました！」」」

授業が終わり、生徒達がぞろぞろと帰って行く。あーしんどかった。何だよ主人公の心情って、分かるかそんなの。

「なかなか様になってたぞ。授業も分かり易かったし、生徒も活き活きしていた。」

「そいつはどうも。じゃ、俺は帰るぞ。」

「ああ、明日は８時からだ。遅れるなよ。」

くっそ、ボイコットしてぇ…。

「お帰りなさい鉄生…って、何その紙の束？」

「ん～、仕事の資料。今日から寺子屋の先生になっちまった。」

「鉄生が？よっぽど人手が足りないのね…。」

それはどう言う意味だ幽香。俺だって反面教師ぐらい出来る筈！

…あ、いかん。自分で言って虚しくなった。

三十九、幻想郷春のニート撲滅運動（後書き）

今までニートだった鉄生君にやっと職が。

ははは、本編はしばらくないかも。常時番外編みたいな雰囲気を出したい。

四十、壇上の奇行師（前書き）

いつも通り短いっす。

パチュリーは長生きなんすよね？と言うわけで流して…お願い…。

四十、壇上の奇行師

働き始めれば、次第と慣れていくものです。こんな感じに。

「……星は季節によって見えるものが変わり……」

……

「……夏や冬には大三角と呼ばれるものも……」

……

「……ところでギョウザって言う星座は」

ぐぅ

「そこ信吉！寝てるんじゃねぇぇぇぇぇぇ！」

スコーン、とイイ音を立てて眠れる者の額にチョークではなく短剣の柄を当てる。

…刺してないよ。一応。

「…はっ！せ、先生すいませんでした！」

「俺の授業で寝るとはいい度胸だな。対象、信吉、動作、固定、場所、天井、期間、無制限。」

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！？」

悲しきかな信吉、罪には罰を与えねばならんのだよ…。

「ああ、明日漢字の書き取りテストやるから。じゃ、解散。」

テスト予告に不満な声を上げる生徒に号令をかけ、今日の授業は終わり。

え、校内暴力？いいえ教育です。お陰で生徒はやる気に満ち溢れています。

天井に貼り付けるだけだから慧音の頭突きよりマシだろ。

そう言えば今日は紅魔館に用があったな。そろそろ行くか。

「…また寝てる。コイツ本当に門番なのか？」

紅魔館に来てみると、美鈴はやはり寝息をたてていた。立ったままならともかく、横になって全力で寝てやがる。

取り敢えずデコに肉と書いておこう。

「まあいいや、勝手知ったる他人の家ってな。」

ズカズカと玄関を抜けて、目的の図書館へ向かう。

「よう小悪魔。パチュリーどこだ？」

「あ、鉄生様。パチュリー様ならもう自室に入られました。」

「そうか。この間借りてった本を返そうと思ったんだが…お前渡しといてくれるか。」

「分かりました。…あれ、これは魔法書？鉄生様、魔法を習うんですか？」

「興味はあるが、自分に出来るかわからん。」

パチュリーによると、魔法は努力云々よりまず才能（魔力）がなければ話にならないとか。

才能があってそれから努力が必要、難儀だなー。

「もう妖術を使えるから、必要はないけどな。それより、ちょっと本読んでいっていいか？」

「いいですよ。持ち出す時は言ってください。」

四十、壇上の奇行師（後書き）

因みにギョウザは星座ではありません。悪しからず。

四十一、春ですかそうですか（前書き）

タイトルは気にしない
今、春らしいですよ？

四十一、春ですかそうですか

一時間くらい紅魔館の巨大図書館で本を読み漁っていると…

「…ん？」

何やら地響きのような足音のようなものが聞こえ

「……てっっしょぉぉぉぉおおお！！」

「タワバッ！？」

俺は突然脇腹に突っ込んできた何かに意識を半分ほど刈り取られた。

「あわわわわ。妹様、そんなに強く蹴り込むと鉄生様が虫の息になってしまいます。」

小悪魔がそんな事を言うが…甘いな、俺はもう戦闘不能だ…あーいてて。

「ひどいよてっしょう、次ここに来たらまずフランに会いに来るって言ったのに～！」

「あ、あ…すまん、忘れて「言い訳はダメ！」のおっ！」

酷いのはどっちだフラン…。いきなりドリルキックした相手に追撃をかけるなんて。

「フラン、お客様にそんな事をしては駄目よ。」

「あ、お姉様。」

おおっとおぜうさま！早よう助けて！今まさにフロントフェイスロックをかけようとしてるこの幼女を止めて！

「お姉様、よだれ。」

「……。」

そこで負けるなよレミリア！丸くなってうー☆うー☆言ってないで！あ、ちょいまちフラン、意識がマジでや、ば……。

「危うくオトされるとこだった…。」

「てへへ。」

「てへへじゃない。」

客間にて脇腹をさする俺とフランが雑談中。

レミリアは自室で不貞寝中。紅魔館の主になってからカリスマらしきものを身に付けようとしているが…常にどこか抜けているよな。

フランは何時もは地下に閉じこめられて（閉じこもって？）いるが、俺がここに来ると元気よく、良すぎるぐらいに出迎えてくれる。

「しかし、もう夜中なのにまだ寝てなかったのか二人共。」

「きゅーけつきは夜の方がめいんだよ？」

ああそうか。夜行性だったっけ。

「そういえばフラン、背中のそれって…。」

「あ、これ？ちょっと前に生えたんだ。」

フランの背中には、小さいが七色の羽が生えていた。まだ小さくて空は飛べないようだが。

「へへー、きれいでしょ。」

「ああ、宝石みたいだ。」

嬉しそうに羽をピコピコ動かして、俺の膝に乗るフラン。

「てっしょう、今日は何であそぶ？」

「何でじゃなくて何してだろ。生き物を粗末にするな。」

「え～。」

能力の影響か知らんが、フランは物を壊したりする遊びが好きだ。

まあ、そんなに派手にやってはないが。

「せっかく捕まえたのに…。」

「捕まえた？何をだ。」

「これ。」

フランが差し出した袋に入っていたのは…

「春です「早く自然に帰してこい！」」

何でリリーホワイトが捕まってるんだよ！？

「勝手に入って来たから。」

「だからってな…。」

「じゃあ今からお姉様の部屋に行って悪戯するとか。」

「よし、そうするか。」

夜が明ける頃、家に帰ってみると幽香にシバかれた。

寺子屋に行ってみると張り付けにした生徒を戻すのを忘れてて慧音にシバかれた。

四十一、春ですかそうですか（後書き）

来年はイイ文章を書けますよう。

それでは良いお年を。

四十二、地獄の蟒蛇（前書き）

明けましておめでとうございます。

新年初の投稿、今年も駄文にお付き合い下さい。

四十二、地獄の蟒蛇

「んくっ、んっ、んっ……ふぅ。あら鉄生、もう終わり？」

「いや…まだだ…まだ終わらん…。」

「ふふふっ、どこまで頑張れるかしら。」

「そろそろ鉄生の顔色が危険になって来たんですが…。」

白玉楼にて花見改め、飲み比べ大会。

只今幽香ＶＳ俺、セコンドは紫と映姫でお送りしてます。

「降参するなら今のうちよ？」

「ここで退いたら男が廃る…！」

とは言え、幽香の酒量はとんでもない。恐らくまだ三樽位入るだろう。

俺はもう後三、四杯飲んだらぶっ倒れるだろうな。この前も確か潰れちまったけどあの時は…止めよう、思い出したくない。

「ほ～ら、どんどん行くわよ。」

「ううううう…。」

俺はっ、負けるわけにはっ、いかないんだっ！！……嗚呼、視界が

歪む。

「……。」

「ふふふふふふふ。も～意地っ張りなんだから～。」

「目が白黒してますね～はっきりしてませんよ～あはははは！」

「ちょっと闇魔様…あ、駄目だこりゃ。」

まわるまわる…桜がまわってる…。吐きそうだ…。

「…ちょっと変わります。」

あ？

ｓｉｄｅ幽香

なかなか頑張ったようだけど、鉄生はもうすぐ完全に酔いつぶれるわね。

これでこの前みたいに好き勝手出来るっ、服を脱がせて抱きしめさせてそれから…

「…よっと。」

「あら、まだ動けたの。」

さっきまで死人になっていた鉄生が起き上がり、近くにある瓶に…って!?

「ちょ、ちょっと鉄生!それは水じゃなくてお酒…。」

ごっごっごっごっ…

「…ぷはっ。さあ、第二ラウンドと逝きましょうか、風見幽香。」

「…竜神?あなたはまだ大丈夫なのね。」

「この程度で酔っ払う水元鉄生の神経が分かりませんね。それより、やらないんですか?」

……面白い。

「いいわ…貴方を全身全霊をかけて叩き潰してあげるわ。」

そして鉄生を我が手にっ!

「貴女のそのふざけた自信を…粉砕してあげます。」

「…聞いてますかゆかりぃぃ。あなたのそのうさんくさいのがぁぁぁぁ……。」

「分かりました、分かりましたから!ああもう、誰か閻魔を止めて

…。」

sideout

蛇足

その後、一杯差で幽香が負ける。

勝者竜神は立ったまま気絶していたのを白玉楼の庭師が確認している。

四十二、地獄の蟒蛇（後書き）

今日中にもう一本出したいな…。

四十三、入学式と白髪少年（前書き）

タイトルに深い意味はありません。

四十三、入学式と白髪少年

「…以上で、入学式を終えたいと思います。起立、礼。」

新入生がきびきびと礼するのを見ると、何やら心が休まるような。

寺子屋、春の一大行事である入学式が今終わった。

「今回はなかなか人数が多いな。」

「ああ。…何人かちょっと気になるが。」

慧音が不安な理由は主に二人だな。その内の一匹に話しかける。

「よう藍、久しぶりだな。」

「ん？誰かと思えば鉄生か。ほら橙（ちぇん）、挨拶しなさい。」

「は、初めまして。橙と言います。よろしくおねがいします。」

「ああ、よろしくな。」

「いいか鉄生。橙に手を出してみろ、生きてる事を後悔させてやる。」

「何時から俺はロリコンになった？」

しかし式を寺子屋に入れるって…何だかなー。

「おおおぉぉぉ！妖夢が！妖夢がぁぁぁぁぁ！」

「はいはい妖忌、そんなみっともなく泣いてないの。」

「…妖忌、お前は何をしている？」

何やら有り得ない物を見てしまったような…。

「あら鉄生さん。あの後大丈夫だった？」

幽々子さんがふわふわと妖忌を引きずっている。わーおシュール。

「一日中頭痛がするぐらいで済みました。それより妖忌が…。」

「ああ大丈夫。孫だからって可愛がり過ぎたのかしら。情が移っちゃったみたいで。」

「そんな犬猫みたいに…。」

何だろう、凄く既視感が…。つーか男の立場無いなー、幻想郷って。

「あとは誰か…ん？」

寺子屋から離れた場所に、一人ポツンと立っている少年がいる。
白髪に眼鏡と珍しい格好をしているが…うちに入学しないのか？
「そこの君。そんな所でどうしたんだ？」
「あ…いえ、何でもないです。」
「そんな訳あるまい、さあ中に入れ。」
「いえ、だから「慧音ー、一名様ご案内ー。」ええぇぇぇ…。」
周りから遂に少年愛好癖が…とか聞こえたような気がしたが別にそんな事はなかったぜ！

半ば強制的に連れてきたのが悪かったか、緊張しているようだ。

「名前は何て言うんだ？」

「…無いです。」

無い？

「変わった名前だ…とボケる訳にはいかんな。名前が無いのか。」

「…はい。」

うーん…名無しのゴンベイはキツいな。

「両親は？」

「…分かりません。物心ついた時にはもう。」

「なら、今はどこで暮らしてるんだ？」

「霧雨道具店という雑貨屋に居候させてもらってます。」

しっかりした受け答えが出来ている。そんなに畏まらなくてもいいんだが。

「そこでは何て呼ばれているんだ？」

「ボウズとか、小僧とか、決まってません。…霧雨さんによると、親がきちんとした名前を付けてくれるだろうから、と。」

「ふぅん…。」

名前、か…。如何したものか。

「ま、いいや。それより、ここに入らないか。」

「…すいません、好意は嬉しいのですが、道具屋の手伝いがあるので。」

「そうか、じゃあ気が向いたら来てくれ。」

「そうさせてもらいます。えっと…」

「ん？ああ、鉄生、水元鉄生だ。よろしく。」

「こちらこそ、ではまた。」

「今度会うときは名前があるようにな。」

四十三、入学式と白髪少年（後書き）

霧雨道具店は代々続く老舗です。うん、そうに違いない。

…橙とチビ妖夢の伏線を出したかっただけっすよ。まあ活躍するかは分かりません。

四十四、偏見（前書き）

新年早々ＤＱＮに絡まれた。はじめてのかつあげ（される側）。

みんなも気をつけよう～！金銭的な被害が無くてよかったが。

四十四、偏見

入学式の帰りに幽香に米を買ってくるよう言われていたのを思い出し、米屋に向かった。

「いらっしゃい…と、先生か。」

店に入ると恰幅の良いご主人が挨拶してきた。

「こんちわ。何時もと同じ量を頼む。」

「あいよ、ちょっと待ってな。」

椅子に腰掛け、袋から読みかけの本を出そうとすると、米屋の奥さんが寄ってきた。

「あら水元先生、何時もご贔屓にしていただいてありがとうございます。」

「ああ奥さん。こちらこそどうも。」

この人苦手なんだよな、すぐに噂話をするわ人の陰口叩くわで。

「そう言えば聞きました?今日の入学式に妖怪が来ていたそうですよ。」

「勿論知ってますよ、うちの生徒ですし。」

妖忌なんて直接頼み込んで来たからな。

「あら、そうだったんですか？でも注意して下さいよ、妖怪は何をするかわかったもんじゃありませんから。」

「大丈夫です、そんなに悪い子はいませんから。」

…妖夢は何かあるとすぐ刀を抜きそうで、橙自体は何とも無いだろうが子供の喧嘩に九尾狐が出そうだが。

「どうだか…うちの子も通っていますけど何かあってからじゃ遅いですよ？」

「ははは…そんな事起こさせませんよ。」

「ふぅ…全く、何で妖怪が村に来るのかしら。あそこの道具屋が引き取った子供も半妖って聞くし…。」

「…それって、もしかして白い髪の子ですか？」

「ええそうよ、不吉ったらありゃしない。それなのに他の人は何にも気にしないで…。」

…早く帰ろう、やはり腹が立つ。

「私はここに来て間もないけど、妖怪が近くに潜んでいる所なんて来なければよかった…」

「…妖怪の、全部が全部悪い奴って訳じゃありませんよ。」

俺の声が聞こえないのか、独り言のようにぶつぶつ言っている。

「そもそも妖怪がいなければ良かったの「黙れ人間。」…え?」

…りゅ・う・じ・ん・こ・の・や・ろ・う!!勝手に喋んじゃねえ!!それは俺のせり（げふんげふん）。

「先生~、用意が出来た…って、どうした?」

冷え切ったお粥よりも不味い空気を察知したご主人が声をかける。

「いいや、何でもない。ありがとう。」

素早く答え、米袋を抱えて飛び立った。あー寿命が十年位縮んだ。

「竜神てめぇ…勝手に出てくんじゃねえよ！！」

「あややや鉄生さん、何時もそんな独り言を言ってるんですか？」

「射命丸、今お前の取材を受ける暇はないから帰れ。」

独り言ではなく竜神に話してる、決して危険な人ではない。

「いやいや、『元村の守り神、危険な予兆～迫り来る精神病の恐怖～』と銘打てばうちの新聞の売れ行きも…て、何でこっちに手を向けてるんですか？いや、その妖気は尋常じゃないですよ？神気も霊気も一緒ですから、危険ですって。ね？落ち着いて話し合いましょうよおおおぉぉぉぉ！？」

「…悪は滅んだ、行くか。」

四十四、偏見（後書き）

竜神は次からちょっとフェードアウトします。竜神が好きな人すいません。

…なに？あんなの好きな奴はいない？そんな事分かっとるわ！

四十五、春眠暁を覚えない（前書き）

えーと、まあ、あれだ。

気にしない。それが一番。

四十五、春眠暁を覚えない

ｓｉｄｅ竜神

…損傷は激しいですが、これなら『器』に出来る。

どうすれば『欠片』を採るか悩みましたが彼女には感謝しなければいけませんね。

構築するのは時間をかけて、ゆっくりとやりましょう。それまではこれに憑きっきりですね…。

ｓｉｄｅ鉄生

うーん、眠い。だから起きない。

…ニートでもフリーターでも何でもないよ、ただ今日は何にも用事がないから寝てるんだよ。

それに、俺に抱きついていらっしゃる御方もまだ起きてないしな。

「んー…、てっしょぉ…。」

まんま抱き枕扱いだ。不満は無い。有るわけがない。

「ふぁあぁぁ…おはよお。」

可愛い声を上げ、幽香が目を覚ました。

「起きたか幽香、ならちょっと退いてくれ。朝飯をまだ作ってないからな。」

もう日が昇ってかなり経つが。

「おはよう鉄生。」

「…おい？」

「お・は・よ・う鉄生。」

「…おはよう、幽香。」

「ん、よろしい。」

何がやねん。まあいいか。

「じゃ、起きるぞ。」

「え～。折角の休みなんだから、もうちょっと一緒にいて。」

「折角の休みに昼前まで寝てるなよ。」

「う～。」

「それに今日は一日家にいるから…。」

「うう～～。」

「……。」

「うううう～～～！」

「……夕飯は作るぞ。」

「うんっ！」

何故に嬉しそうにする。俺？嬉しいに決まってる。そこ、笑うな。

「そう言えば、竜神はどうだった？」

「昨日と同じだ、反応無し。何時もは呼ばなくても話しかけてくるんだが。」

耳元で下らない事を宣われる事が無いのは喜ばしい限りだ。

「なら丁度いいわ、今日はずっとこうしてましょ！」

いててててて骨が軋む。

「分かったから、俺を抱き枕みたく扱わないでくれ。」

さっきから幽香が全力で甘えてくるので俺の全身が悲鳴を上げてい

る。いや、それ以外に…。

「何でよ、このままでいいじゃない。」

「…わからんかなぁ。」

幽香の拘束を解き真っ直ぐ向き合い、右腕を幽香の腰に回し、左手で頭を肩に引き寄せる。

「…さっきのままだと、俺が幽香を抱きしめられないだろっ。」

嗚呼、かなりハズい。顔がかなり熱くなってるのが分かる。

「て、っしょう……そんな事言うなんて…もう…。」

「似合ってないのは分かる。やっぱクサいか。」

「ううん…嬉しい！」

ちょ、それ以上くっつくとさっきまで腕に当たってた特定の脂肪の塊が。

「どうしたのよ、ほら遠慮しないで。」

「親しき仲にも礼儀ありって言うだろ、流石に密着するのは。」

俺が腕を真っ直ぐに伸ばすが、大妖怪と新米妖怪の力の差は非情だ。

「あら、力で私に勝てるとでも？」

「あ…はい。」

為す術無く幽香の胸に抱かれる。あああ落ち着け俺、ＣＯＯＬになるんだ。いやまあ俺も腕を回しておりますが。

「ふふふ、やっぱり鉄生はがっしりしてて、カッコいいわねー。」

そんな風に言われても力関係は明らかに…ねぇ？

「幽香は…柔らかいな。毎日庭仕事をしてるはずなのに肌も白いし。」

「褒めてるのかしら？」

「貶す所は全く見つからない。」

「っ…！もう、そんな事ばっかり！」

「いててててて抓るな抓るな。」

本当の事を言ったのに何故。

「…照れてるのか？」

「～～～～～！！」

いてててててててて骨が砕ける！

「分かってるなら訊かないでよっ！！」

横からしか顔色が見えないが…凄く赤くなってる。

「鉄生に抱きつかれるのだけですっごく嬉しいのに…そんな事まで言われたら…。」

そーいえば俺ってやられるばっかで、あんまり相手に何かをやるって無かったなー。

…やっぱり男の立場弱いな。

「どうした、顔が赤いぞ。」

「…分かってるくせに…。」

「さあてね。」

「…もう…。」

四十五、春眠暁を覚えない（後書き）

収拾がつかなくなるのでここで終わります。もっと書きたいけどこれ以上は無理です…。

…ゆうかりんといちゃいちゃしてるのを書きたかったんだよ！ちくしょー！

思うと同衾ネタが多いですね。どうするかな。

感想待ってます。

四十六、辻斬りじゃない<前>（前書き）

ひょんな事から妙な話が出来た。

四十六、辻斬りじゃない<前>

「待て！逃げんじゃねえ！」

「ヴァァァァァ！！」

俺の言葉に呼応するかのように、異形が素早く走り去る。

「くそっ、土蛇！」

土から巨大な蛇を作り出し、それに乗りながら槍を構える。

「おらぁ、迅雷！」

ズプッ、と槍が異形に突き刺さると同時に雷撃が走る。神気を錬る暇が無かったので威力は低いが、注意を惹き付ける事は出来た。

「ヴゥゥゥ。」

「そうだ、お前の相手は俺だ。」

袋から刀を新たに出し、神気と霊気を纏わせる。

「疾風！」

衝撃波のように纏わせた気を二発打ち出し、さらに相手との間合いを詰める。

「グヴェ！」

腕らしきものが切り落とされ、切り口からドロドロとした何かを噴出させる。

「アゞアゞアゞアゞアゞア゛！！」

「うるせえ、黙れ。」

頭部に刀を突き立て、串刺しにする。

「ゲアゞアゞアゞァ……。」

断末魔が消えたのを確認して刀を引き抜く。

「あーきったね、後でエチルアルコールでもかけるか。」

臭いし、なんかぬめってるし。

「終わったみたいね。」

「霊奈、もうちょい早く来てくれよ。」

空から霊奈が降り立って、異形の腕を蹴り飛ばす。

「こんなんなら、あんた一人でも大丈夫って信頼してるから遅れたのよ。」

「信頼の形を別のモノで示してくれ…。」

「ありがとうございます先生、巫女さん。」

「いや、礼を言われるような事は。」

「いやいや、これで多くの者が救われます。先生のお陰ですよ。」

「いやいやいや、当然の事をしたまでですって。」

「いやいやいやいや、先生には感謝してもしきれませんよ。」

「いやいやいやい「何時までやってるの！」あ、はい。」

無限ループが如く続く会話は、割って入って来た霊奈によって絶たれた。

「では、謝礼の方は…。」

「いや、謝礼なんていらな「二人分を博麗神社に送っていただければいいですよ。」せこっ。」

何だかんだ言ってもやはり貧乏なのかな。

「分かりました、ではそうさせますので。」

「はい、宜しくお願いします。」

「…へぇー、先生ってスゴいんだ。」

授業をするのがタルいので、生徒達に俺の昔話をしてやっていた。
そんな昔でも無いが。

「自分で言うのも何だが、幻想郷でも結構強い方だと思ってる。」

「うわぁ、そう言うの自画自賛って言うんだよ」

「喧しい。」

誰だ人にこんな事言うように教えた奴は。あ、俺か。

「ね～先生～他の話は～。」

「あーそうだな、永遠亭の姫様とか「勝手にうちの話をしないで！」
あれ、永琳？」

何時の間にか教室の入り口に立っていた永琳が怒鳴ってきた。

「別にいいじゃん、減るもんじゃあるまいし。」

「永遠亭の評判が落ちるのは止めて頂戴。」

「可哀想な輝夜、永琳にそんな風に思われてたなんて…。それはともかく、何でここに？」

「慧音に頼まれて、今から生徒の健康診断をするのよ。」

「へぇ。と言うわけで後は八意永琳さんが引き継いでくれるので宿題の質問はそっちに。」

「え!?あ、ちょっと何を「えーりんさんここおしえてー。」「ここもー。」えええぇぇぇ……。」

ふぅ、うまい具合にサボれる。

「あの、鉄生先生…。」

「うん?」

どこへ行こうか考えていると、一人の生徒に呼び止められた。

「どうした妖夢、お前もサボるか?」

「いえ、そうじゃなくて。先生は刀を使われるんですか?」

「一応な。」

「なら是非、私と戦って下さい!」

…はあ?

「いきなり何を言い出すかと思えば…。」

「お願いします!」

正直面倒臭いが…しょうがない、暇つぶしだ。

「…真剣は使わないで、木刀でやるぞ。」

「!は、はいっ!」

四十六、辻斬りじゃない<前>（後書き）

次話に続く。

四十七、辻斬りじゃない<後>（前書き）

扱いがひどいなー、誰とは言わないけど。

四十七、辻斬りじゃない<;後>;

ｓｉｄｅ慧音

「…なあ慧音、本当に寺子屋にいなくて大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。今日は健康診断だから授業は無いし、他の先生もいるからな。」

妹紅と二人で団子を食べながら寛ぐ。

最近は先生も増え、鉄生も真面目にやるようになったお陰で、こうやって暇が出来るようになった。

ずっと仕事をしていると体に悪いと言われ、みんなに勧められて今日は休ませられたが…

「…偶にはゆっくりするのも良いなぁ。」

「慧音が働き過ぎなんだろう。」

「ははは、それもそう「慧音先生ー！」ん？どうした諭吉。」

走って来たのは教師に成り立ての諭吉、寺子屋の卒業生で真面目な奴だ。

「て、鉄生先生が、決闘してるんです！！」

「はぁ？あの馬鹿何やってるんだ。」

妹紅が馬鹿にするのも分かるが、それより鉄生の相手が危ない。キレると見境無いからな。

「決闘の相手は？」

「生徒の、魂魄です！魂魄妖夢！」

なっ…

「「何だってーーー！？」」

ｓｉｄｅ鉄生

まだお互い木刀は抜いていない。妖夢は居合いで決めるみたいだが、俺はただ抜いていないだけだ。

既に睨み合いが二十分を超えている…大した精神力だ。

決闘とは説明したが、妖夢が俺に適うとは到底思えない。一撃入れられたら褒めてやろ。

「鉄生ー！何を血迷ったー！」

「なっ、慧音！？休みの筈じゃ…」

俺が警戒を解いたのを見逃さなかった妖夢は、素早く抜刀し俺の首を狙った。

俺は空間固定を反射的に行ってしまい、しかも止めた木刀をはたき落とし、妖夢の腹に蹴りを入れてしまった。

「あぐっ…！」

「あ、やべ。」

後悔先に立たず、覆水盆に返らず、気付いたら妖夢が吹っ飛んでい

た。

「さて鉄生…覚悟はいいか？お祈りは済んだか？遺書は書いたか？葬式場は決めたか？墓石は買ったか？言い残す言葉はあるか？」

「スイマセンでした…反省してます…本当に…。」

「反省してるか？」

「勿論です！」

「よろしい、ならば粛正だ。」

ドゴッメキッガスッポキッゴシャゴリボキン

「ふぅ…これ位にしておくか。魂魄が勝負を挑んで来たんだから、あいつも悪い。」

俺は反省してるのに何故ボコボコにされねばならんのか…。

「また鉄生さんがやられてるぞ。今月の当番誰だっけ。」

「うわー、何か腕の関節が三つほど増えてるんですけど。」

「大丈夫大丈夫、早々こいつは死なないから。」

薄れ行く意識の中、俺は思った。

こいつら俺を人間扱いしてねぇ…。

四十七、辻斬りじゃない<後>（後書き）

友人Mから年賀状が届いた。

やはり優曇華が描いてあった。

一人ぐらいそう言う奴がいてもいいじゃないか！

四十八、呪文符登場（前書き）

…暑い、息が辛い。

只今絶賛風邪引き中、だからって出来の悪さはそのせいにしないです。

四十八、呪文符登場

「ルール？」

「そう、ルール。人と妖怪が対等に決闘する為のね。」

いきなり現れた紫が話し始めたのは、人間と妖怪のパワーバランスについての考えだった。

「つまりは、そのスペルカードルールが人間が唯一妖怪に適うための決闘方法だと？」

「他に考えがあるなら聞かせて欲しいわ。」

スペカねぇ…そろそろかなと思って作っておいた技もあるからな。

いやだって必殺技はカッコいいのを考えるのは当たり前だろ？厨二病じゃないからな。

「…俺は構わないが、詳しい事は他の奴と話してくれ。小難しい事を考えるのは嫌いだ。」

「そう。ああ、後これがそのスペルカードよ、何枚か渡しておくわ。」

何枚かって…明らかに二十枚は超えてるんだが。

「幽香にも渡しておいて。…いっぱいあるからってあんまりイタい名前のはつけちゃダメよ？」

「やかましゃー！」

俺の怒声はスキマを越える事はなかった。読者ならともかく何故お前にそんな事言われなきゃいけないんだちくしょう。

「鉄生？話は済んだの？」

席を外していた幽香が部屋に入ってきた。

「ああ、相変わらず胡散臭い奴だった。」

「紫からそれを取ったら何にも残らないんじゃない？」

…それもそうか。

「そんな事よりお昼にしましょ、お腹空いたわ。」

「お昼にするんなら俺の背中にくっつかないんじゃないか？」

と言うより俺が作る前提かよ。上目づかいで見つめてきたので許す。

「分かった、それじゃ何を「こんにちわー文文。新聞の射命丸です！何かネタありませんか…と？」…何だ烏か。」

最近はいきなり来るのが流行ってるのか、射命丸がドアと雰囲気をぶち壊して入ってきた。

「おい射命丸、後で弁償し「これはこれは～、『四季のフラワーマスター、家では恋の花を咲かす』なんて記事は如何ですか？それと

も」今からお前の羽根毟られたくなければ黙れ。」

こいつは何だ、週刊誌の記者か。

「記事になるような事なんてうちには…あ。」

「何ですか?何でも良いから教えて下さい!」

「ここに行けばいい、ぞ!」

紫が通っていったスキマをこじ開け、そこに射命丸を放り込む。

「なあぁぁぁぁぁぁ!?」

「ふぅ…で、何作ろうか。」

「そうね、久しぶりにオムライスとか。」

幻想郷の日常の一コマでした。

その後、文文。新聞でスペルカードルールについての記事が大々的に流された。

同時に記者が暴行を受けたとの記事もあったがそちらはスルーされた。

四十八、呪文符登場（後書き）

うーん、スペカ出して良かったんかなー。

まぁ、気にせずゆるゆると、どうせバトルは少ないし。

番外編～幻想郷縁起・水元鉄生～（前書き）

２０１１／８／１１修正
ネタバレがあるのでスルー推奨

番外編～幻想郷縁起・水元鉄生～

名前　水元鉄生（みずもとてっしょう）

能力　大地を操る程度の能力、次元と空間を操る程度の能力（※1）、時を止める程度の能力（※2）

危険度　低

人間友好度　高

主な活動場所　太陽の畑、寺子屋

初対面の人には一応礼儀正しいらしい（※3）が、親しい仲では口調は砕け散り、わりかし話易い妖怪。
その人間らしさから、寺子屋で教師をやっていても全く違和感は無い。

普段の格好は一般人そのもので妖気は殆ど発していないが、本人によると常に人化の術（※4）と言うものを掛けているようだ。

能力が三つある理由は不明。大地を操る程度の能力は地面にある土、岩、金属までもを操れる能力だが、畑仕事位にしか使ってないよう

だ。

次元と空間を操る程度の能力は次元、つまり今いるこの世界とその空間を弄る事が出来る能力だとか。説明されても分からなかったが、彼もあまり理解はしていないようだった。

時を止める程度の能力はその通り、時間停止が出来る。便利ではあるが消耗が激しいのか、はたまた使うのを忘れているのか、あまり使っては無い様だ。

攻撃方法は近距離戦が主のようで、様々武具や格闘技等を使いこなしている。彼が言うには本気で殺すなら能力で、武器の操作は二流止まり、だそうだ。

妖術にもそれなりに長けており、聞くところによると八雲紫から直々に教えられたらしい（※５）。

また以前の彼は時々別人のようになる事（※６）があったらしく、その際の性格や戦闘方法は全く異なるようだ。詳細は不明。

証言

「授業は分かり易いし、空き時間では面白い話を聞かせてくれるんだ」（生徒Ａ）

「授業中寝てると直ぐ天井に張り付けにするし、その事を忘れて帰

っちゃう時もある」（生徒Ｂ）

寺子屋の生徒から好かれてはいるようだが、厳しい一面もあるようだ。忘れっぽい一面もあるのだろうか

「直ぐサボりたがる信用出来ない奴だが、信頼はしている」（上白沢慧音）

自習の時間が多いのも生徒から好かれている要因だろうか。上司としてみればあまり喜ばしい部下では無いのかもしれない

「なかなか素直になってくれないけど、優しくて、カッコ良くて、それと……」（風見幽香）

あの、ノロケ話はそれ位にしてくれませんか……。

「いい奴だとは思うが、私を紫様の式にした原因はアイツにあるしそれに……」（八雲藍）

あの、恨み事もそれ位に……。

対策

余程の事（※7）が無い限り、彼が自分から誰かを襲う事は無い筈。もし本気の彼が襲ってきたのなら、太陽の畑か博麗神社に逃げる事だ。但し、もし太陽の畑で草花に害する行為をすれば大妖怪の手厚い出迎えにあってしまうだろう。

※1……彼の話によると、二つ目の能力は自分の能力ではないとは言っていたが…どう言う事だろうか？

※2……こちらは次元と空間を操る程度の能力の派生であって、新たに発現したのでは無い。

※3……本人は礼儀正しいと言っていたが、そのような場面を見た者は誰もいなかった。

※4……姿形を変えるだけでなく、妖気や能力も抑える特殊な術のようで、解くのは簡単だが掛けるのは面倒臭いらしい。最近はやけに妖気が増えてきたので抑えるのが特に面倒だと言っていた。

※5……本人に真相を訊いてみたが触れないで欲しいと真顔で断られた。何があったのだろうか。

※6……詳しくは語らなかったが、その現象は殆ど起こっていないようだ。

※7……彼の家族や友人を傷付ける、又はそれに準ずる行為をすれば、本人曰く「肩甲骨をブチ割って！　上半身を腰寛骨まで鯵の開きのように裂」くのだそうだ。

番外編～幻想郷縁起・水元鉄生～（後書き）

幻想郷縁起読んだことないけど、これで大丈夫かな。

これおかしいんじゃね？とかこれ（作者の頭が）おかしいんじゃね？とかがあったら言ってください。

四十九、百物語（前書き）

スランプ…と言えるのか、今までがあんまり良くなかったからな…。

四十九、百物語

「それでは～、第一回白玉楼百物語を開催しま～す。」

「「「「わ～。」」」」

気の抜けた幽々子の掛け声と気の抜けた俺、幽香、紫、妖夢の歓声で、白玉楼（今年から）夏の恒例である百物語を始める。

「…白玉楼でやると洒落にならないと思うんだが。」

「まあまあ、涼しくなればいいんだから。」

百話話すと怪異が訪れる…既に妖怪と亡霊と半霊がいる時点で怪異なんてなぁ。

今回は一人二十話…は無理なので、一人五話づつ話すことにした。

「それじゃ一番手は、人の嫌がる事は進んでやる紫から。」

「…それはどちらの意味でとればいいのかしら？」

結構な御人だな、幽々子も。

「じゃあ…これは、私の友達の友達の体験何だけど。」

「…紫って友達いたのか？」

「さぁ…。」

と言うより、昔からあるのか、その常套句は。

「…助かった～、って思ってると、後ろから声が聞こえるの。『死ねばよかったのに』って。」

「キャァァァァァ！」

「きゃ～。」

「待て幽香、お前は嘘だろ。」

妖夢は（主に話と紫の顔と声色が恐くて）幽々子に抱きつき、幽香

は（主に抱きつきたいがために）俺に抱きついてきた。

「いや～紫流石、やっぱり年季が違うわね。」

「幽々子…あんたねぇ。」

「じゃあ次は妖夢、話してみて～。」

「えぇ！い、いきなりですかぁ！？」

「がんばって～。」

「それじゃあ…えっと、あ、ある旅館の話です。そこに泊まったお客さんが…」

夜の話は続く。

「あ、それって隠された部屋に文字がびっしり書いてあった、ってやつでしょ。」

「オチを言わないで下さいよ幽々子様！！」

…まだまだ、続く。

「…っと、これで終わりか。」

五度目の俺の話が終わった。

紫は都市伝説のような話を、妖夢と幽々子は幽霊達から実際に聞いた話を、幽香は怪談と言うより怖い話を、俺は寺子屋についての話をした。

「先生、さっきの教室で自殺した生徒の話って…作り話ですよね？」

「……さて、蝋燭を消すか。「質問に答えて下さいよぉぉぉぉぉ！！」ふぅー…っと。」

灯火が消え、障子を透ける月明かりだけが部屋を照らし出している。

「きゃ～怖い。」

「幽香…お前な。」

「さて、何が起きるかしらね。」

「ゆ、幽々子、お化けが出たらど、どうしましょう？」

「大丈夫よ～、そんなに怖いのが出るわけないでしょ。」

「そう、怖くないよ。」

「…何にも起きないわね。」

「よかったぁ…。」

「残念、妖夢がもっと怖がる所見たかったのに。」

「そろそろ帰りましょ鉄生。」

「そうだな、じゃ。」

四十九、百物語（後書き）

おかわりいただけただろうか…。

それでは、もう一杯ご飯いただこう…。

感想をもらえると作者の気力がエラいことになります。

五十、肝試し（前書き）

すみません、今回は調子に乗りました。

前回の怪異はおかわり…もとい、お分かりいただけましたか？

双刃食堂さん、クラッシャーさん、ＡｔｏＺさん、紫苑さん、感想ありがとうございました。みんなの感想が…みんなの感想がガン〇ムに！？

五十、肝試し

夏の風物詩と言えば何か？

蝉とか、かき氷とか、花火とか、答えは様々あるだろう。

前回は代表格である怪談、百物語をやったんだが、残念ながら怪異は訪れなかったようだ。

無事に終えられたのは良かったんだが、今度は…

「せんせー、みんなで肝試ししましょーよ。」

「うぇぇ…。」

寺子屋の生徒達が肝試しをしたいと言い出したのだ。

「やりたきゃ勝手にやればいいだろ、誰も止めやしない。」

「やるところがないんだよ。」

「あー…。」

肝試しと言えば夜やるのが当たり前だが、幻想郷の夜で肝試しを出来る場所か…。

魔法の森。ダメだ、危険過ぎる。

迷いの竹林。ノー、迷われたらたまったもんじゃない。

妖怪の山。無理、天狗や鬼に説明するのもたるいし、多分許さないだろう。

紅魔館。否、フランが暴れたら止める生徒を守る自信が無い。

白玉楼。やだ、誰があそこまで運ぶんだよ。

墓場。うーん…、慧音が許さないな。先祖の人を敬えとか言いそう。

「だから寺子屋でか…。」

夜の寺子屋に入りたい気持ちは分からんでも無いが…。

「先生達も集めて一緒にやればいいんだ。」

「ほら、署名も集めてきたから。」

「ちょっと待て、署名集めるなんて誰だそんな事教えたのは。」

「「「鉄生先生。」」」

「……。」

無駄な事と思っていた事が思わぬ所で役に立った、良かったね。

「そ、それと先生。」

「ん、どうした。」

「妖夢ちゃんが、この教室で自殺した生徒が何人もいるって言ってたんですけど、本当ですか?」

「……多分無かった。」

「今の間は何ですか!?」

噂話は尾鰭が付くな~。俺が話したのは生徒が一人自殺した、だけなのに。

「…と言うこと何だが慧音。」

放課後、職員室で話し合う事に。

「まぁ、いいんじゃないか？別に肝試し位。教師同伴で、だが。」

「はぁ…。」

「？珍しいな、こういう行事だと率先してやるくせに。」

「色々あるんだよ、人それぞれ。」

やるからにはキチンとやるがな。そう、キチンとな…。

「ところで鉄生、さっきお前の組の生徒がおかしな事を訊きに来たんだが。」

「どんな事を？」

「昔教室で集団自殺があったんですか～、って。」

どんどん話が膨らんでるぞ。だれが主犯格だ。

「何て答えたんだ。」

「多分無かった。そう言ったら泣きそうな顔で帰って行ったな。」

「…狙ってやった？」

「何をだ？」

「…いやいい。」

俺と同じ事言ったらそりゃあな。慧音に聞きに行ったのは俺の事を信用してないのか。先生悲しいぞ。

三日後、草木も眠る丑三つ時。

「これからみんなには二人一組になってもらい、各教室にある札をとって来てもらう。二人組はこのクジを引いて決めろ。」

寺子屋前には肝試しに参加する生徒が集まっている。残念ながら妖夢は来なかったようだ。

「…じゃ、一番から順に入って行くんだ。」

「「はーい。」」

小さな蝋燭を持った生徒がそろそろと校内に入っていく。

寺子屋内には特に仕掛けをしている訳ではない。

慧音は俺の見張りとして入り口に立っているだけだ。曰わくお前は何をするか分かったもんではないとか。

だが甘いな慧音！俺がそんな事で作戦を放棄するような奴か！

「キャアァァァ！！」

「うわぁぁぁぁ！？」

おお、そう思ってる間に悲鳴が。

「さて次の組行ってこい。」

「こっわぁ…。」「やだな…。」

ブツブツ呟きながら入っていく。ふはははは怖かろう。

「…お前は何もしてないな。」

「勿論。」

さて、ここでネタバラシ。俺は既にある細工をしてある。

まあ細工と言っても人魂らしきものを出すぐらいだが、子供を驚かすには十分だろ。

「ノォォォォォ！」

「ひえぇぇぇぇぇ！」

そんなに怖いかねー人魂で。

「…本当に何もして無いのか？」

「してないしてない。」

「……。」

「ほらほらーそんなに睨んでると綺麗な顔が台無しですから睨まないで下さい。」

「白状しろ。」

「私が悪うございましたっ！！」

怖い、慧音超怖い。

「はぁ～、本当にお化けが出たのかと思った～。」

「また鉄生先生か、懲りないな。」

「まぁ楽しめたし、良かった良かった。」

微笑ましい光景が繰り広げられるなか、俺は簀巻きにされて枝から吊されていた。

「そこで暫く反省してろ。全く、下らない噂は流すわ人魂を出すわ……。」

あー頭に血が上る、いや下がってるのか。

「……ああ、お前の協力者はどうしたんだ？」

「？何のことだ？」

「とぼけるな。それとも教室に置いた札をそこらにばらまいたり、妙な影や音を出したり、耳元で囁いてたのもお前か？」

はて、そんな阿保らしい事はしてないんだが…。

「人魂だって十分アホらしいぞ。」

「それを言っちゃ終わりだ。」

五十、肝試し（後書き）

春夏秋冬のネタをやったら多分話を進めます。

五十一、向日葵と昼下がり（前書き）

どうやらこう言う話を定期的に書かないと気が済まないらしい。だからって見捨てないで下さいね。

五十一、向日葵と昼下がり

「毎年見ているが…やっぱり綺麗だな。」

太陽の畑名物向日葵の咲き誇っているのを見ると、幽香の二つ名を思い出せずにはいられない。

まさしくフラワーマスターだな、と。

「さて、そのフラワーマスター殿はどこにいるのやら。」

そろそろ昼飯時なので呼んでやらねば。呼ばないと何時までも花といるからな。

「幽香ー！飯にするぞー！」

じーわじーわじーわじーわ

蝉の声がやかましく聞こえただけ。

何時もは呼べば文字通り飛んでくるんだが…。

「…またどっかで寝てるな。」

「…むにゃ……ふぅ…。」

向日葵畑から少し離れた木陰で、幽香は寝息を立てていた。

「起きろー。おーい。」

呼びかける位で起きるなら苦労しないが一応声をかける。

「……んん……。」

「……。」

「……くー…。」

やはり無駄か。

無理して起こさなくてもいいんだが…寝顔も可愛いし。けど後で文

句言われるのはな。

「よい、しょと。ゆ～か～、おきろ～。」

近くにしゃがみ、頬を指でつつく。あーすべすべして柔らけー。

「…む～…。」

不満そうに顔を背けるが指はそのままぐりぐりむにゅむゅ。

「うにゅ……だれぇ…？」

「こんな事お前にする奴なんて幻想郷にはそういないと思うぞ。」

寝ぼけ眼でこちらを見つめてる幽香、可愛いなぁ本当。

「…てっしょぅ？」

「そーだ、早く起きろ。」

上半身を起こし、欠伸やら伸びやらを一頻りやった後に幽香が一言。

「起こして。」

「あーはいはい。」

幽香の手を取り、ゆっくり引いてや「えいっ！」え？

引くつもりが逆に引っ張られ、バランスを崩した俺は…。

「もがっ！？」

何だ？柔らかくてあったかい…ってまさか！？

「逃がさないわよ～？」

「むむむー！？」

俺が幽香の胸から逃げようとしたら、頭をガッチリ押さえつけられた。

「ふふふ…。て～っしょう、私の眠りを妨げた罰よ、そこで思う存分苦しみなさい。」

「むー！むぐー！」

いやいや苦しむというかご褒美というよりトぶトぶ、意識と理性が。主に前者が。

「暴れたってダメよ、絶対許さないからね～？」

「むぐ…。」

ブラウス越しの幽香の体温を感じながら、俺の意識は薄れていった。胸の中で窒息死って何それ怖い。

かー、かー、かー、かー、かー…

「…もう夕方か。」

「そうよ、鉄生。」

目を覚ますと、幽香が微笑みながら俺に膝枕をしていた。

「やっと起きたのね、このお寝坊さんは。」

「ついさっき自分の胸で気絶させた奴に言う台詞かそれは。」

口笛を吹いて明明後日の方向を見る幽香。

「全く…早く帰るぞ。」

起き上がり土やら草やらを払う。

「怒らないの？」

「別に怒る必要無いだろ。」

それとも怒られたいのか…。

「……なら、こうしてやる。」

幽香のおでこに唇を、要はキスをする。

「ふぁ…！」

「俺だけじゃ不公平だからな。それじゃ帰るぞ。」

「～～～～～～！！」

「ちょ、そんなにくっつくなよ、飛びにくい。」

顔を真っ赤に染めた幽香がこの後甘えまくって来たのは割愛する。

五十一、向日葵と昼下がり（後書き）

後は何を書こうかな…夏祭りネタとか？

リクエストがあればどーぞ。感想もよろしくです。

五十二、人形夏祭り（前書き）

あ、なんか壊れた。

何時も通り気にせず行こうぜ！

五十二、人形夏祭り

ピーヒャラリードンドン、と元現代人からすると懐かしいお囃子の音が響く。

神輿を担ぐ声は盛り上がり、辺りの出店からは美味そうな匂いがする。

祭りだ。

「んー、夏ねぇ。」

「今更かい。」

紫の寝ぼけたボケにツッコむ。お笑いコンビじゃないんだから。

「あ、鉄生リンゴ飴買って。」

「人の財布をアテにしてやがってお前は、藍にでも頼め。」

「それが最近藍がケチになって、少しの出費も許してくれないのよ。」

八雲家の家計簿が真っ赤に染まったのを見て顔を真っ青に染めているのが目に浮かぶ。

「あんま藍に無理させるなよ。」

「こき使う為に式にしたのに何でよ。」

さぁ皆さんで可哀想な八雲藍に哀悼の意を。

「ほれ、２つ買ってやるから、橙にでも渡してやれ。」

「気前が良いわね、何か企んでる？」

「馬鹿いえ、さっさと行ってこい。」

俺は次どこへ行くか「シャンハーイ！」…ん？

シャンハーイ？

なんだいきなり話の「シャンハーイ？」流れをぶち折る「シャンハーイ！！」声を出すのは「シャンハーイ♪」？

「って五月蝿いわ！」

叩き落とすのは気が引けるので発声源の首の後ろを猫を持つ要領で首を摘む。ジタバタするのはちょっと可愛い。

「あ、それうちの人形です！」

パタパタと走って来たのは、金髪にカチューシャをつけて肩に人形を乗せた少女だった。…もう幻想入りしてたのか。

「飼い主さんか？」

「違います、この子達の作り主です。」

「シャンハーイ！」

「ホラーイ。」

人形には独自の会話方があるんだろう。俺にはわからん。鳴き声にしか聞こえない。

「取り敢えず返すぞ。」

「どうも。上海、おいで。」

だが上海は器用に腕を伝って俺の頭の上に乗っかった。

「……。」

「ちょ、上海！？人の頭の上に乗らないの！ほら降りてきなさい！」

「待った、嬢ちゃん待った、顔近いって。」

少女が正面から俺の頭の上に腕を伸ばしてるから、自然と顔が近くなる。

「はっ、ご、ごめんなさい！」

「いや、別に構わないが…。」

顔赤いぞ、初いな。いやそれはともかく。

「そういや名前は？」

「へ？あ、ああ、私はアリス・マーガトロイト、魔法使いで人形遣いです、この子は蓬莱「ホラーイ。」、あなたの頭の上にいるの「シャンハイ！」…です。」

上海の今の鳴き声は挨拶なのか、伸ばし棒なかったし。

「俺は水元鉄生、寺子屋の教師をやってる。」

「鉄生さんですか、よろしくお願いします。私、まだここに来たばかりで。」

「それはいいが上海を除けてくれ。アリスが動かしてるんだろ？」

今俺の頭の上では上海が髪の毛を弄って遊んでいるようにしか感じ取れないんだがそれはあれか、俺へ対する挑戦状か。

「上海は半自立人形で、私が完全に動かしてる訳じゃないんです。すいません、迷惑をかけて。」

「シャンハーイ！」と自信あり気な声が聞こえる。どうせ無い胸でも張ってるんだろうな。

「あ、私も出店を出してるんです。人形用の服とか売ってるんですよ。見てみませんか？」

人形用ね…まぁ知り合った縁もあるから、何か買う位してやるか。

「じゃあ、ちょっとお邪魔するかな。」

アリスの先導で人混みの間を通っていく、上海を頭に乗せたままだ

から目立ってしょうがない。

「……それでこっちのフリルがついているのは。」

「いやもう十分だ、ありがとう。」

十分過ぎる位説明を聞いてお腹いっぱいだ。まだ何も食ってないのに。

「上海、俺は別のところ行くからご主人のところに戻りな。」

「…シャンハーイ。」

「…うおい。」

髪の毛を掴んで放そうとしない。

「駄々をこねるなって、くぬ、いてて。」

「…あの、どうせだったら上海を連れてもらっていいですか?私以外に懐くことなんて珍しいし、その子も色々見て回りたいみたいなので。」

「人形なのにか?」

「人形にも意志位ありますよ。じゃ、よろしく。」

アリスは他の客に商品の説明を始めてしまった。残された俺と上海は…。

「…行くか。」

「シャンハーイ♪」

しょうがない、帰りに返そう。

さて出店、様々な店が並んでいる。

食い物屋は当然ながら、アリスのような土産物屋もある。

その中の一つ、宝石細工の店の前で、上海が反応した。

「何だ、アレが見たいのか？」

「シャンハイ！！」

「いらっしゃいいらっしゃい～、指輪、腕輪、ネックレス、色々あるよ～。」

確かに様々な色の宝石が加工されてアクセサリーになっているが…。

「高いなー…。」

いやまぁアクセサリーとしては破格の値段だが、出店レベルだと結構な金額だ。

「お兄さん、その子に何か買ってやんなよ。女の子は綺麗なものが好きだからね。」

「シャンハーイ！」

「そうだな…上海、お前の好きなの選べ。記念に買ってやるよ。」

ついでに幽香にも買ってやるか。そう言う装飾品なんて買ってやった事ないからな。

「じゃあその子にはこの指輪がいいんじゃないかな？大きさ的には腕輪になっちゃうがね。」

差し出されたのは薄い青色の宝石があしらわれた、銀色の指輪だった。

「これがいいか？」

「シャンハイ！」

「だそうなんでそれを。」

「…その子が何を言ってたのは分からないけど、まあいいや。毎度あり。」

早速上海の腕にはめてやる。

「おー、丁度ぴったし。」

「シャンハイ～♪」

喜んでいる…と思う。多分。

くるくる回っている上海を見ていて悪い気はしなかった。

五十二、人形夏祭り（後書き）

書いてるうちに楽しくなった。

上海が可愛く見えて来ちまった。

五十三、祭りに花を（前書き）

前回の続きです。

シャンハイシャンハーイ！

五十三、祭りに花を

「シャンハーイ！」

「…むぅ…。」

…やはり何言ってるか分からねえ。翻訳の術も効かないみたいだし、声の具合と状況から判断するっきゃないな。

「取り敢えず、また頭にでも乗っててくれ…って？」

今度は懐に入りやがた　いったい　これ　どうな　て。

「シャンハイ！」

「あー分かった分かった。」

気の済むままやらせてやろう。何か可愛いし。

ところで…

「さっきから俺の後ろ髪にじゃれてるのは誰だ？」

「にゃー！にゃにゃー！…はっ！一体何を…。」

ばか…、もとい化け猫がいた。

「何やってんだ橙、藍と一緒じゃないのか。」

それとも八雲家は基本的に放任主義か。

「あの…実は藍様が紫様を…。」

「？」

「シャンハーイ？」

「ちゃんと聞いてますか紫様！わざわざ頼んで来ていただいてるんですから！」

「藍…後で覚えておきなさい…。」

「紫、まだ説教が足りてないようですね。後二時間はここを動かしませんよ。」

「ううううう…。」

…成る程、藍もなかなかやるな。

「シャンハイ？」

「ん？ああ、あのちっこいのは闇魔様の四季映姫、前で正座して胡散臭いのは八雲紫、となりにいるしっぽの人は八雲藍だ。」

「あの、私の事は？」

「ついでにこの猫は橙。」

「ついで！？」

そんな事はいい。どうやら藍は紫を絞る為に映姫まで巻き込んだようだ。

「…面白いから放っておこう。橙、どっか行くか。」

「え？でも…。」

「お好み焼き食うか？」

「食べます！」

やはり忠誠心より食欲が勝るか、流石猫。

「美味しいですねぇ。」

「ああ全く。」

タコ焼きうめえ、幻想郷に海が無いのにどうやってタコを捕って来たのか気になるがうまいから問題ない。問題ないったら問題ない。

「鉄生？何やってだ小さい子連れて。」

隣の屋台から顔を覗かせたのは、頭に鉢巻きを巻いた妹紅だ。

「おお妹紅、焼き鳥食わせろ。」

「いきなりそれか、慧音の分が終わったらな。」

今の所、当たりは河童のぽっぽ焼きと焼おにぎりにタコ焼き位か。

さて妹紅のはどんなか…。

…すっかり食い道楽になってるな。

「あ、もう鳥がない。閉店でーす。」

「なぁ!?」

「おおすまんな鉄生、だが譲らないぞ。」

慧音が全くすまなそうにせず焼き鳥を頬張る。

「ちょ、慧音、食い物の怨みは恐ろしいぞこら!」

「先生みっともないですから、どうどう。」

くっそ俺の焼き鳥ぃぃぃぃぃ!!許さん、絶対に許さんぞお前たち!

「シャンハーイ…。」

上海の呆れたような声が聞こえた気がするが気のせいだ。

「くどくどくどくどくどくど……。」

「あのー閻魔様、それ位にしてあげて下さい。」

「許して…もう許して…。」

説教長いなー、紫の心をブロークンするには十分だろ。藍も止めてるし。

「どうしましょう先生、これじゃ帰れないですよ。」

「んー…。まぁいいか、そろそろ止めてやろう。」

円状に取り巻いてた野次馬から進み出て、二人の間に立つ。

「よー映姫、久しぶりだな。」

「くどくどくっ！鉄生！？」

「あんまり紫をせめてやるな、幻想郷の管理で大変だろうし。」

どうせ藍に任せたままだろうが。

「あ、あ、ま、まぁ、あなたがそう言うなら、今回はこれ位にしておきましょう。」

「良かった～。」

「…助かったわ。鉄生、ありがと。」

「いいからさっさと橙を連れて帰んな。」

開けたスキマに崩れるように入っていった紫。いいお灸になっただろう。

「さぁ、今日は祭りだ！もっと盛り上げて行こうぜ！」

「「「応っ！！」」」

ノリがいい奴らで助かる、声をかけるとすぐ太鼓やら笛やらを鳴り響かせた。

「映姫は…よっと。」

「きゃ！？」

最近会ってなかったからな、肩車をしてやる。

「い、いいいいきなり何するんですか!?降ろして下さいよ!」

「暴れると落ちるぞー。」

ハッと気付いたようで俺の頭に抱きつく。

「そうそう、子供は素直が一番。」

「子供じゃないですよ…。」

「何時も抱きついてくるのは子供のする事だが?」

小さい頃のレミリアとかフランとか、幽香は除く。

「そう言う事は言わないで下さい!!」

ベシベシと頭を叩く。あんまり痛く無いのが可愛い所だが。

そう言えば…祭りと言えばあれがなきゃな。

「…上げるか。」

「シャンハーイ?」

うーん、夜風が気持ちいい…って、寒！

「空に飛んで、何するつもり何ですか？」

「…面白い事だ、よく見とけ。対象、自身、動作、変化解除。」

人化の術を解くのは久しぶりだな、妖気が前回とダンチだ。

「シャ、シャンハイ？」

「よし…大盤振る舞いだ！」

下に被害が出ないように空間結界をしき、空には霊気と妖気の小さめな弾を互いが接触しないように大量にばらまく。

「うわぁ…襲撃でもするつもりですか？」

「とんでもない、もっと綺麗な事だ。」

大体配置を終えたら、今度は手のひらに霊気と妖気の弾を１０個ほど用意する。

「行くぞ、弾幕祭りだ！」

辺りに弾を投げつけ、素早く地上に転移する。

さて、覚えているだろうか、霊気と妖気は反発しあうと言う説明は。

ならばそれらをぶつけ合えば…？

バチバチバチバチバチバチバチバババババババババババババチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ

弾同士が反発しあって、強烈な光と音を発する。

「うぉ、結構音がスゴいな。」

「て、鉄生？一体何を…？」

「霊気と妖気の反発、それの応用だな。結界張ってあるから辺りに巻き散らない筈だから、安心しろ。」

「シャンハーイ！シャンハーイ！」

「すっげー、どうやってんだアレ！」

「本当、キレイ…。」

なかなか好評だな。問題は…どうやったら収まるかな、コレ。ヘタに手出したら俺も怪我するし。

「鉄生、たまには良いことしますね。見直しました。」

「そいつはどうも。上海も喜んでくれてありがとな。」

「シャンハーイ！」

辺りの提灯が消え始めた頃も、夜空は光り続けていた。

五十三、祭りに花を（後書き）

久々に映姫様を出せた、やはり説教。

そろそろ夏終わるかな。感想待ってますー。

シャンハ～イ！

五十四、幼く赤い月（前書き）

……スランプ？分かんね。

最近筆が進まない。

五十四、幼く赤い月

「ようこそ紅魔館へ。歓迎します、鉄生さん。」

「……ぶっ。」

いかん、レミリアがそんな事言うとは思わなかったから心の準備が。

「レミリア…慣れない事はするもんじゃないぞ。」

「何でそんな意地悪言うのお兄様！」

意地悪でも何でもなく、事実を言ったまでだ。すぐ地が出てるし。

「珍しいな昼間に起きてるなんて、夜更かし（？）はいかんぞ。」

「お兄様がわざわざ来て下さったですもの、眠気なんて吹き飛びます。」

そうは言うが話しかけないでいるとうつらうつらしている。

「ほら、眠いんじゃないかやっぱり。」

「そ、そんな事無いです！」

「よだれが出てる。」

「〜〜〜！」

真っ赤になりながら顔をグシグシ拭いて…小動物みたいだ。

「まぁいいか、ところでフランの調子はどうだ？」

「っ！……特に、何も。」

ん？何か今変な反応が。

「どうかしたのか？」

「……何にもないです。」

「そんなにむくれて言われても説得力が無いぞー。」

はて、フランについて訊くのが何かマズかったか？

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

…何時までキックオフしてればいいんだ？

「……ぐぅ。」

「…やっぱり。」

近付き揺らして起こす。

「…はっ！ね、寝てにゃいれす！」

「いや寝てたぞ。やっぱ横になった方がいいんじゃないか？何なら夜に出直すし、その頃にはフランも起きてるだろ。」

事情を言えば幽香も許してくれる…筈。夜出歩くと怒るから怖い。

「……何で。」

「え？何が？」

「何でフランの話しかしないんですか！何で何時もフランと遊んでるんですか！何で私と一緒にいてくれないんですか！」

いいいいきなり何だ！？

「フランには何時も甘やかして、私には何もしてくれなくて、昔みたいにかまってくれなくなって…やっと二人きりなのに何で…。」

あー、そういやそうだな。フランが狂気に駆られて何かしないように見張る事を含めてだったんだが、レミリアとの接点が減っていたのも確かだ。

「…レミリア。」

「何ですか…。」

「だったら、変なカリスマ気取ろうとせずに自分に素直になれ。」

涙目になりながら上目遣いは殺人的な可愛さだが話し続けねば。

「やって欲しい事があれば口に出せ。フランの前であろうと、俺の前であろうと。子供は素直が一番だぞ。」

「お兄様…。」

「さぁ、レミリアが今やって欲しい事は何だ?」

うぐぐ柄じゃねえ。つーかレミリアのして欲しい事って何だ?

「…撫でて下さい!」

「い?」

「だから、頭を撫でて下さい!」

「……。」

……何というか、子供やなー。

「お兄様~早く~。」

「レミリア、何かキャラ変わってないか?」

細かい事は気にせず、レミリアを膝に乗せ、お望み通りに頭を撫でる。

「えへへ…久し振りのお兄様の膝ー。」

「これでいいか？」

「もうちょっとー。」

やっぱりキャラ違う気がする…。

「…お兄様。」

「何だ？」

「抱きついてもいい？」

「別に了承を取らなくても、勿論いいとも。」

「ん……。」

こっちに向き直り、細い腕を俺の胴に巻きつける。

「わぁ…やっぱり大きい。」

「レミリアが小さいんだろ。」

「む、私だってもっと時間が経てばもっと大きくなります。」

それは困る、大きくなったレミリアって言ってもピンとこないし。

「…レミリアはそのままが可愛いと思うぞ。」

うおっ、いきなり羽の動きが活発に！？

「んー…。」

「……参ったな。」

俺に抱きついたまま、レミリアが眠ってしまった。不満は無いが、どうしたものか。

「誰か入って来たらマズいか「お嬢様ー、庭の手入れ終わりましたー。小悪魔とパチュリー様がお茶を用意して…ま……。」……よう、美鈴。」

ドアを開けた美鈴は、顔を何とも言えない色にしてから、消え入るような声でこう言った。

「……ゴユックリドウゾ、テッショウサン。」

「誤解、誤解だからお前の想像は。俺はロリコンじゃないからな。断じて違うぞコラァ！」

「…おにいさまぁ……うー…。」

俺が誤解を解く間、レミリアは俺から離れようとしなかった。途中から起きてたけど狸寝入りを貫き通していたのに気付いた時はちょっと理性がヤバかった。

五十四、幼く赤い月（後書き）

紅魔館を最近書いてなかったと思って書き上げた。後悔してる反省しよう。

五十五、豊作祈願談合（前書き）

その内多分、マシな文が書けると信じて…！ご愛読あり（ｒｙ

夏から秋になりました

五十五、豊作祈願談合

「何だその髪、気持ち悪い。」

「グハァ！！」

俺に２００ポイントの精神的ダメージ！

「…何も、そうはっきり言わなくてもいいじゃないか？神様っぽくて格好良いと俺は思ってるんだが。」

「お前が神の名を語るのは全ての神仏に対する侮辱だ。」

「お前キライ。」

「奇遇だな、私もお前の事が嫌いだ。」

俺と睨み合っているのは秋穣子、豊穣の神なので豊作を祈る為にお世話になるんだが、俺とはあまり仲は良くない。

それもその筈、俺の行っている農業は少しばかり反則だからな。神様に喧嘩売ってるとしか思えない。

大地を操る程度の能力を使って、地脈の影響を田畑に最大限与えられるようにしているので神様なんて関係無いね！

あー後、俺はまだ人化をしていない。面倒だからのもあるが、ちょいとこのままの方が都合がいい事があるので。

「全く、豊穣の神である私を何だと思ってるんだ。地脈を勝手に弄りまくって、異変が起こったらどうするつもりだ？」

「ああ大丈夫、もう起こした。大分前だがな。」

穣子が盛大にお茶を吹いたので俺の煎餅が濡れ煎餅になった。

「お、お前が起こしただと！？何やってるんだ！」

「昔の話だ、俺も若かったなー。」

確かあれは地竜異変と言われてると聞いた。

原因は、俺が能力の限界を試すつもりで地脈を弄ったら、何と四方位の中心を守護する黄竜を呼び出してしまったのだ。

黄竜と穏便に事を済ませようと話をしようとしたが、半分位耳を貸してもらえず俺が取り込まれて幻想郷のあちこちに土龍を召喚してしまい、結局霊奈と紫の世話になってしまった。

取り込まれている間の記憶は無いので、稗田の家にでも行けば詳細は分かる筈だが面倒臭いから聞いてなかったな。

まぁ今では良い思い出だ、黄竜と仲良くなるなんてそうそう無い経験だったな。スペルカードのアイデアにもなったし。

「それ以来は地脈の扱いも教えてもらったから、ミスる事は無いから大丈夫。」

「何が大丈夫だこの前科者！やっぱり駄目だ駄目！今年は何にもし

ないぞ！」

「ああっ、私怨で制裁カッコ悪っ！？」

「これの何処が私怨か！」

昨年まで気付かなかったクセに！言わなきゃよかった。

「頼むよ、豊作にしてもらわないと俺の立場が…。」

「元からそんな物有ったかどうか。」

「やっぱりお前なんかキライだ！」

畜生、この子酷い。

「……あ！出てきた！」

「どうだった鉄生、秋様は何と！？」

「お前中で何してやがった！」

「その髪どうしたんだ？」

「宿題忘れましたー。」

やっと一息つけると思ったら質問責めかよ。

「ええい、お前ら散れ散れ！関係ない事まで混ぜやがってからに。」

「それはいいから、今年の実りはどうなんだ？」

「やっぱり鉄生じゃダメだろ。今年は諦めよう。」

「あー、だから止めたんだよだから。」

「ちょいまち、俺はまだ何も言ってないぞ。」

人の事を勝手に決めつけてはいけません。

「今年も豊作は約束してくれた。ただし実った作物はお供えしろってさ。」

「おお！やってくれたか！」

「だから鉄生に任せとけば大丈夫って言っただろ？」

手の平返すような態度取りやがって。現金な奴らだ。

「そう言えば、何で今年は俺が、しかも穣子の説得に参加させられたんだ？静葉は？」

「村長が穣子は怖いから別の奴にって言ったから、それなら誰がやるかってなったら鉄生の名前が。」

「それなら村長は今、静葉と話していると…？」

「そーだね、あのおやじは。」

あんにゃろ人に面倒臭い方を押し付けやがって。まあいいや、追求するのも面倒くさい。

…こう言う思考を働かせると後ろから「誰が面倒臭い奴だって？」って声がするもんだが…って、あれ？

「何の話をしているかと思えば…貴様等全員神罰を下してやるーっ！」

「そんな無駄な事を…。」

「穣子ー、そろそろ帰る…何してるの。」

「お、お姉ちゃん、ううう…。」

「よお静葉、妹返すぞ。」

ボロボロになった穣子を差し出す。

「一体何してたのこれ、また弾幕ごっこ?」

妹を抱えてよろけながらも溜め息をつく。

「今度からは実力差を考えて相手に挑むんだな穣子。お前じゃ俺を倒せない。」

「くそ、今に見てろよ…いたた。」

「じゃあ私達失礼しますね、来年も宜しく。」

「ああ、じゃな。」

ふよふよ飛んでいった秋姉妹を見送り、さて帰るかな「鉄生！」

「…何だ五月蝿い。」

「お前、神様にも勝てる位強かったのか！？」

「いやー見直したよ、弾幕ごっこであそこまで敵の懐に入っていけるとは。」

「今度そーゆーの教えてよ寺子屋で！」

「分かったから黙れって、耳が痛い。」

俺ってそんなに下に見られてたのか…ちょっとショック。

五十五、豊作祈願談合（後書き）

秋姉妹の口調が分からない。

五十六、大運動会開催（前書き）

短いです。後更新遅かったです、すいません。

今回はセリフだけにしてみました。

五十六、大運動会開催

「それではー、第２０６回寺子屋チキチキ大運動会を開催しまーす。司会は私射命丸文、解説は八雲藍さんです。宜しくお願いします。」

「はい、宜しく。ちぇぇぇぇん！頑張れー！」

「いや個人的な声援はちょっと。それはともかく、今年も始まりました運動会ですが、何で私達が司会、解説として呼ばれるのでしょうか？」

「さぁ、私は橙の勇姿が近くで見れるから全く問題ないが。」

「あ…、はい、そうですか。えー、では赤組の生徒の入場です！今年の赤組はやけに気合が入った練習をしていたと聞きましたが？」

「練習内容を考えたのは鉄生だ。昨年は慧音の組にコテンパンにやられたから、そのお礼参りをしてやる、と意気込んでいたな。」

「あの鉄生さんが鍛え上げた赤組、これは手強そうです。対する白組は？」

「こちらは慧音が練習を担当していたようだ。と言っても鉄生の練習とは違い壮絶な練習はしていない。いないが…なかなかスパルタな方法だ。」

「慧音先生のスパルタと言えば頭突きでしょうか？一体どんな練習法だったんでしょう、気になるところですが、そろそろ一つ目の競技が始まります。一つ目の競技、百メートル走です！」

「あ、ルールを言うのを忘れていた。能力は禁止、それだけ。ではみんな、特に橙頑張ってー！」

「言い換えれば能力以外は全部オーケーです！後藍さん、贔屓はやめて下さい。」

「……放送が五月蝿いが気にすんな、お前らの全力を出せ！」

『サー・イエス・サー！』

「お前たちには敗北が許されているか？」

『サー・ノー・サー！』

「お前たちは今や強靭な戦士に生まれ変わった！幻想郷最強の人間に推薦してもいい！行け！目的を持った力と赤組に出来る事が何かを証明するのだ！」

『サー・イエス・サー！』

「無理して勝とうとするな、相手はとんでもない訓練を積んできた猛者達だからな。」

『ハイ、慧音先生！』

「よーし、勝てたらみんなに団子屋のみたらし団子を全員に奢ってやろう！」

『ヤッター！！』

「ただし、負けたら……分かってるな？」

『は、ハイ、慧音先生…。』

「声が小さい！」

『ハイッ、慧音先生っ！』

五十六、大運動会開催（後書き）

フルメタルジャケット…で良かった筈。

口から空想たれる前と後にサーをつけろ！！

五十七、運動会強制閉幕（前書き）

あ、あああああああああああ！

すいやせんでしたあああああああああ！！

五十七、運動会強制閉幕

第一種目、百メートル走

「えー、ではスタート準備入ります。いやー生徒は気力十分と言いますか、凄まじい気迫です。怖いです。」

「特に凄いのは、赤組の魂魄と白組のちぇえええええええええ――……ん、だな。」

「だんだん声に魂を込めて言うようになって来ましたね…さあスタートです！」

「よぉーい、ドン！」

「っ！」「はぁ！」

「ちょ、これ競走ですよ二人共！？いきなり斬り合いって……あ、他の生徒が吹き飛んだ。」

「ちぇえええええええええええええ「喧しいっ！」ぐはぁ！！」

「やれ妖夢！お前の剣術を見せてやれ！」

「鉄生先生っ、これは殺し合いですか！？」

「いまさら何を、はなからそのつもりだ！」

「橙、魂魄に構わずゴールに行け！これは競走だぞ！」

「どうします？マタタビでも持ってきましょうか？」

「いや、それよりかつお節だろ。」

「応援席からこの闘争を止めるものはいないようです、いえ、これは計画通りだったんでしょうか！？鉄生さんの顔が歪んで見えます！」

「ああっ、橙が押されてる。スペルカードだ、スペルカードを使え

橙！」

「何を危ない事を言ってるんですか藍さん！？」

「くぅ…なかなかやりますね、妖夢さん。」

「そちらこそ。だけど、コレで終わり！断迷剣・迷津慈航斬！」

「！ギニャアアァァァ……。」

「勝者、魂魄妖夢！やりました赤組、初戦から白星です…って、だからこれは競走ですよ！」

「うわぁぁぁぁ橙がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「……何かもうダメっぽいです。」

「よっしゃ、良くやった妖夢。橙をやれたなら他は恐るるにたらん

な。」

「……俺、ちょっと今日は仮病の予定があるんで帰ります。」

「そんな認めるか！さっさとヤって…もとい、走ってこい！」

「遅いわそんな言い直し！」

「…橙がやられてしまったようだな。」

「ふふ、あれは妖獣の中で最弱。」

「半人前にやられるとは白組の面汚しめ…。」

「ふふふ。鉄生、これで終わりではないぞ…。」

「怖いです。凄く怖いです。本当にこれは運動会なんでしょうか？ともかく次の種目は親子参加の玉入れです！父兄の方は入場門へどうぞ。」

「よし、橙の恨み、ハラサデオクベキカーッ！！いざ出撃！」

「え、あ、ちょっと！ら、藍さんが壊れていくーっ！誰か止めてー！」

「父兄参加か……妖夢、幽々子と妖忌の配置は？」

「既に。…あの、先生。」

「何だ？」

「これは戦争じゃなくて運動会ですよね？」

「……アタリマエダロ？」

「何で片言に！？」

「…さぁ始まります、玉入れの名を借りた弾幕ごっこを。選手は既に校庭に集まっています！妖気と霊気がえらいこっちゃになっています！」

「幽々子と戦うのは久し振りね…楽しませて頂戴。」

「橙…見ていてくれ…お前の仇は私が討つ！」

「…皆さ～ん、逃走経路はお早めにお決めくださ～い。」

「他でない鉄生の頼みだし、少し張り切っちゃいましょうか～。」

「妖夢、爺ちゃんはやるぞ。一世一代の大勝負だ！」

「えー、では…始め！皆さんさようなら、射命丸文がお送りいたしましたわばっ！」

翌日

「…慧音先生や。」

「どうした？そんな変な顔をして。」

「いや…確か昨日、運動会があったような…？」

「ははは、何を言っている。気のせいだろ。」

「そうか？ならいいんだが…。」

…慧音の能力のお陰で、今日も平和な寺子屋であった。

五十七、運動会強制閉幕（後書き）

こんなんだよ畜生！！いいのかこれ！！何はともわれすいやせんでしたあああああああああああああああああああ！！

こんな殺人鬼がいるところで寝られるか！俺は一人で寝るぞ！

五十八、芸術騒霊（前書き）

何と部屋には作者の死体がっ！「キャアーーーー！」

それはともかく芸術の秋でございまする。ネタが思いつかないって怖いなぁ。

五十八、芸術騒霊

今日もゆっくり、明日もゆっくり、あぁ働きたくない。花畑で横になる日々。

「～～～♪」

「ん？」

この何とも言えない不安定になる音楽は…まさか。

「プリズムリバーか？」

「「大当たり～！」」「……当たり～。」

「…相変わらずルナサだけ声が小さいな。」

プリズムリバー三姉妹、ポルターガイストの楽団である。

長女ルナサは弦楽器、次女メルランは管楽器、三女リリカはキーボードらしいものを担当しているとか。

「私は弾こうと思えばどれでも弾けるんだけど？」

「リリカがキーボード以外のを弾いてるのは見たことないし。それはおいといて、何のようだ？」

「いやー用って程でも無いんだけどまた一緒に演奏してくんないかなーって思ってねー！ねールナ姉！」

「……うん。」

何だこの音量の落差は。つーかメルランうるせえ。ガッするぞガッ。

「お前らだけでも十分だろ?俺がいなくとも丁度いいし。」

「ダメだよ、三人だけだと打楽器をやる人がいないんだよ。」

「そーそーなんだよー参ったねーこりゃ!」

「……うん。」

打楽器?ああ、ドラムの事か。

コイツ等と出会ったきっかけは気紛れに作ったドラムをしっちゃかめっちゃか叩いていた時だ。気付いたら何時の間にかプリズムリバーズが集まっていて、音楽家として固い握手の代わりに弾幕ごっこをしたのである。

「俺だってそんなに巧く無いんだが。ドラムも埃被ってるだろうし。」

「「「えっ。」」」

「えっ。」

ルナサがまともな音量の声を?

「はぁ!?あんた馬鹿なの!自分の楽器の手入れもしてないなんて

最低じゃない！」

「これはお仕置きが必要だぞーあっはっは！」

「……うん。」

「ちょっとまて、そこまで怒る意味が分からんぞ俺は。」

「「自分の胸に訊けーっ！」」「……訊けーっ。」

「「「大合葬『霊車コンチェルトグロッソ』」」」

自分に胸が無いと言うのに人には胸に訊けとな。こいつぁナイスなジョークだ。

「お前らいきなりかよ、元符『次元切断』」

目の前の空間を斬り弾幕を次元の狭間に追いやる。

「今度はこっちからだ、岩符『石柱乱舞』」

地面から大量の御柱ならぬ石柱を生み出して発射する…が、当たるわけねー。所詮は岩だし。

「神弦『ストラディヴァリウス』」

「冥管『ゴーストクリフォード』」

「鍵霊『ベーゼンドルファー神奏』」

「って三人同時は無理だろ！」

くそ、避けられない、ならば…

「受け止めろ！鉄符『大魔神』！」

地中の金属を呼び集め、作り上げたるはハガレンのレト像宜しく人形兵だ！行けや超合金！

「きょ、巨大な人！？」

「うわーうわーうわー本当に巨人だー！」

「……！」

よっし、これはあの決め台詞を言わねば。

「お前ら、神の鉄槌食らっと「何してんの鉄生ー！」ケニブッ！？」

突然傘でヘッドショットを決めてきた幽香は、さも当然が如く俺を踏みつけて騒霊三人の前に立った。

「一人で面白そうな事して無いでよ、私も混ぜて？」

幽香…踏んでる踏んでる。俺を踏んでる。誰か気付いて。

「風見幽香……！これは分が悪いわね。」

「じゃーねーしーゆーあげいんサヨナラ！」

「……またね。」

どうやら帰って行ったらしいプリズムリバー三姉妹。何故『らしい』なのかって?頭を幽香に踏まれて見れないんだよ。

「行っちゃったわね…残念。あら?そう言えば鉄生は…?」

「ここ、ここ。下にいる…。」

「え?きゃ!何でそんなところにいるのよ!」

お前が投げた傘に当たって倒れたところに踏まれたからだよ…。

「あ、頭の後ろにこぶが出来てる。誰がこんな酷いことを…。」

「お前やがな!」

倒れながらもツッコミが出来たなら俺は本望だ…。

五十八、芸術騒霊（後書き）

個人的にはルナサが一番好きだったりするプリズムリバーズ。

ルナサフラグを何時か立てるかはてさて。

五十九、秋の実り<前>（前書き）

取り敢えず前後で今まで出したキャラが出せたらいいなー。

五十九、秋の実り<前>

目の前の畑では、土蛇が動き回り作物を収穫している。見た目はミミズが３０匹程タッパーの中で蠢いてるような感じ。気持ち悪い。

「芋が掘り終わったら、みんなに持って行くか…。」

俺が育てている作物の殆どは村に振る舞っている。俺と幽香の消費量なんてたかがしれてるしな。

「自前で作ってるなら働かなくてもいい気がするんだが…まぁいいや。」

何だかんだ言って、教師の仕事はかなり続いている。何度か辞めようかと考えたんだが、そのたびに慧音に捕まって説教をされる。

曰わく、暇ならば人の為に働け。全くその通りでございます。

紅魔館、中庭

「あー、美鈴？そんなにがっつかなくても芋はまだまだあるぞ？」

「むぐ、むぐ…ぷはっ、いやー三日振りの食事だったのでつい…。ありがとうございました。」

また飯抜きにされてたのか、持ってくるべきではなかったな。

「てっしょー、お芋おいしいね！」

「そーか、それは良かった。」

ああやっぱ子供は癒される。顔をほころばせているフランを撫でながら一人で痛感した。

…俺はロリコンじゃないぞ。何度でも言うが。美少女は全人類の宝で（ｒｙ

「まぁ、なかなかいい出来じゃないの？鉄生にしては。」

「レミリア、今度からはカッコつける前に口元を拭ってからにしと

け。ほら顔出せ。」

「……うー、お兄様の意地悪。」

相変わらずのレミリア。おお顔が赤い赤い。

しかし前回とはまた違った方向のカリスマ（？）を習得しようとしてたな。

「あれ？小悪魔、パチュリーの姿が無いけれど。」

「ああ、パチュリー様なら太るから食べないそうです。」

「あの日陰紫もやしは…。」

図書館に引きこもっているのは太る要因では無いのか。美鈴と一緒に太極拳かパ○ッパ○ッパーでもやればいいのに。

魔法の森、アリスの家

「こんにち「シャンハーイ!!」うおビックリした!」

アリスの家のドアを叩いた途端、上海が飛びついてきた。

「あら、鉄生さん。どうしたんですか?」

「いやなに、芋が余ったんでお裾分けに。後上海、お前は少し落ち着け。」

「シャンハーイ!シャンハーイ!」

「上海も会えなくて寂しかったんでしょう、その指輪も絶対外そうとしなかったし。」

確かに、上海の腕には買ってやった銀色の指輪がまだはまっていた。

「気に入ってくれたのなら、俺も嬉しいぞ。ありがとな。」

よしよしと上海の頭を撫でてやる。何か爺臭いな俺、こんなに撫でてると。

「ん。じゃあ俺は行くぞ」

「シャンハ～イ！！」

後は…あれ？

「こんな所に家なんてあったかな…？」

魔法の森の入り口付近に変な建物を見つけた。

形的には店らしいが、ゴミ屋敷みたく中から物が溢れている。

「お邪魔するよ～ってなんだこりゃ。」

一言で言うとガラクタの山。二言で言うとちょーガラクタの山。

「いやそんな今日び誰も知らないようなネタはいいから。」

あ、けど新装版が出たからな…ってもういい。

「誰かいませんかー？もしもーし。」

しばらくすると、棚の裏から白髪眼鏡の少年が出てきた…って、あれ、どっかで見たような。

「はいはいっと、何か御用ですか……あれ？」

向こうも俺に見覚えがあるようだ。うーん…男の名前なんてあんまり覚えないからな。

「確か…寺子屋の水元鉄生さんですか？」

「そうだが…はて思い出せない、誰だったか？」

「霧雨道具店の手伝い小僧ですよ。」

「……ああ、思い出した。あの名無し少年か。」

「間が結構ありましたね。」

それはご愛嬌。気にしたら負けだ。

「少年は何でこんなガラクタ置き場みたいな所に？」

「ガラクタ置き場って…ここは、僕の店ですよ。まだ開店はしてないですが。」

「みせぇ!?」

「霧雨さんからこの店をもらったんです。かなり老朽化が進んでますが、河童や鬼に頼んで直してもらうつもりです。」

いやそっちじゃなくて。

「お前まだ子供だろ!何で店なんか?」

「……。」

あれ、空気が重い。

「…霧雨さんが言うには、僕が優秀だから店の一つや二つ位経営出来るだろう、って。」

「そんな滅茶苦茶な、いくら何でも無理だろう。」

「ええ……。多分、霧雨さんは僕を遠ざける為に、わざわざそんな事を言ったんでしょう。半妖の自分がいて、どれほど迷惑だったのか…分かったもんじゃないですね。」

「……。」

「けど、お陰で自由にもなれたんだし、悔やむ事は無いですね。」

「……強いんだな。」

「まさか、楽観的なだけです。」

明るく笑いかけるその顔には、暗い感情は一切感じられなかった。

「……そうか。ああところで、名前はどうなった？」

「名前ですか？……実は、まだ無いんです。」

「おいおい……そうだ、コレを機に自分でつければいいだろ。」

何時までも親を待つ必要もあるまい。

「おお、そうですね。うーん……どんなのがいいですかね。」

「自分の今までとこれからを示すようなのとか？よう知らんけど。」

「今までと、これから……よし、決めました。」

「早いな、何てのに？」

自分の名前なのにそんな早くていいのか？俺の親だって名前考えるの一週間はかかったのに。

「森近、森近霖之助（もりちかりんのすけ）にします。」

「ふむ、その心は？」

「魔法の森に近いで森近、霧雨さんの雨と林を組み合わせて霖之助、

です。」

「へぇ、いいんじゃないか？字画の占いなんて知らないけど、お世話になった人の名前を入れるなんて。」

「霧雨さんには、まだまだ色々教えてもらいますから、完全に離れる訳ではないですけどね。」

当たり前だ、魔法の森は子供一人で何とか出来るところじゃない。

「よし、そろそろ行くか。あ、これ俺のところで作った芋、後で食べて。じゃな。」

「はい！店が開いたらその時は是非ご贔屓にー！」

「考えとくー！」

森近か、これからどうなるかね。

五十九、秋の実り<前>（後書き）

ルーミア以外だと大阪しか「そーなのかー」が似合わない気がする。
どうでもいいですね。

森近霖之助、やっと名前を出せた。けど出番は推して知るべし。

六十、秋の実り<後>（前書き）

永遠亭と守矢神社を書けなかった…すみません。

六十、秋の実り</t>後>

妖怪の山、天狗の集落

「……何でまた捕まってるのかな俺は？」

「許可無く忍び込もうとした罰ですね。」

射命丸が片手に焼き芋を持ちながら俺を縛り上げる。器用な奴だな。

「いてて、親友同士仲良くやろうぜ、なぁ？」

「何かネタがあるんだったら考えます。」

ネタの切れ目が縁の切れ目ってか、ひでぇ。

「ほら、芋持ってきてやったんだからさ、それに免じて。」

「芋に免じてって何がですか、美味しかったですが。」

「それなら「それとこれとは話は別です。」…この鳥類モドキ。」

脱出出来なくは無いんだけど、天狗に追いかけられるのはイヤだからなー。

…仕方ない、奥の手だ。

「レミリア、フラン、美鈴、パチュリー、小悪魔に妖精メイドの各種情報と生写真。それと紅魔館への侵入経路でどうだ？」

「詳しく訊かさせていただきます。」

素早く俺の縄を解き、手帳を構える射命丸。

所詮はブン屋、ちょろいもんだぜ。

…罪悪感？なにそれ食えんの？

「紫。」

……。

「ゆーかーりー。」

……。

「スキマババ「何ですって!?」…出てきたか。」

どうせ聞き耳立ててるんだろうと思ったけど、本当にそうだったとは。

…ついでにこの登場方法って藍に被ってないか?八雲家伝統?

「人をババア呼ばわりして、まさか用事が無いなんて言うんじゃないでしょうね…?」

「ああすまん。ちょいとお前にお裾分けをな。ほれ。」

「何コレ…芋?」

「ああ、安心の水元印だ。」

「ふーん、後で藍に何か作ってもらおうかしら。用事はこれだけ?」

「後、地底に行くにはどうすればいい?萃香や勇義にも分けてやりたいんだが。」

「地底に?ダメよ、地上との接点を無くす為に地底に住んでもらってるのに。萃香ならどうせ宴会の時に会えるでしょ。」

それもそうだ。わざわざ地底に行っても会えるのは鬼とか蜘蛛とか

釣瓶とか猫とかとか色々、ともかく行く必要無いな。

「んじゃ、俺は行くぞ。」

「ええ、今度はまともな呼び出し方にしなさい。」

白玉楼

「やはりここが最後で正解だった…。」

宇宙の胃袋を持つ幽々子を見ながら一人呟いた。

「先生、本当にありがとうございます。今月は食費が苦しかったので…。」

妖夢は料理を運びながら、苦労人の顔で言った。

「うん、まあ、役に立ったなら良かっ「よ～む～、おかわりは～？」「あ、すぐ行きます！」…頑張れ。」

こっちよりも台所の妖忌が大変そうだな。

「そこの！さっさと粉を混ぜんか！幽々子様はまだまだお食べになるぞ！お前らも食べられたくなければ早くしろ！」

…パワフル爺さんだな。幽霊をこき使って料理を仕上げていたようだ。つーか幽々子って幽霊食うのか。

「妖忌、手伝「鉄生か！暇ならお前も芋を刻め！」アイアイサー！」

妖忌隊長の号令に従い、袋から自前の戦闘服（割烹着）を着て戦場（台所）に突入する。

俺、この料理が終わったら、家に帰るんだ。待っている奴がいるんだよ…。

…死亡フラグが現実になるところだった。安易に立てるモノじゃないね。

あの後幽々子は俺の知る限りで芋を約１００本、米を約１２俵、ゴボウニンジン大根等を沢山（途中で数えるのがアホらしくなった）を完食した。なにそれこわい

人の体型を見るのは気が引けたが、食べる前と後でのウエストの違いが無いようにしか見えなかった。なにそれもこわい

「鉄生さん、こんなにいただいちゃって悪いわね」

「いや、覚悟はしてましたし。」

どうも幽々子と話すときは敬語になってしまう。何故だろう、何故だろう。

「俺食器片付けるんで、台所行きますね。」

「何から何まで助かるわ～。」

ふわふわと左手をふりつつ、右手で饅頭を取る幽々子。マジでアイツの胃袋は宇宙なのか？中にゲート・オブ・バビロンでもあるんじゃなかろうか。

妖忌と横並びに立ち、皿を洗っては拭き洗っては拭きの繰り返し。

「…鉄生。」

「何だ？」

妖忌が手を動かしながら真剣な声を出す。

「儂は…旅に出ようと思う。」

「……そうか、遂にお前も幽々子に耐えられなくなったか。」

「いやそう言う意味じゃあないぞ、勘違いするな。」

「じゃあ何だと？」

「……妖夢の親、儂の息子夫婦を探しに出ようと思う。」

息子夫婦？

「そう言えば聞いてなかったな、妖夢の親がいない理由。」

妖夢は俺が幻想郷の外での最後の仕事をしている間に来ていた。

『原作キャラじゃないですか！ヤッター！』とか思うばかりで来た由縁を全く聞いていなかったんだよ、悪いか！

「…実は、妖夢は親に捨てられた子でな。息子の嫁が捨てたのを儂が拾って育てた。」

ガチャン

思わず手を滑らせて皿を割ってしまった。

「捨てられた…？一体何で！」

「儂の息子も嫁も人間だ。だがその間に生まれた子は…半人半霊だった。先祖帰りと言うのかね、儂の血が濃く出てしまった。」

「だから捨てたのか、たかがそんな理由で！」

「そうだ。だが二人からすれば気味が悪かったんだろう。自分の子が人間じゃなかったんだから…。」

「そんな…！」

俺には到底信じられなかった。親が自分の子を捨てるだと？理由が自分と違うからだと？そんなの許されるか！

「儂は二人に…いや、もう嫁の方は死んだだろう。息子に会おうと思う。アイツの四分の一は人間ではないから多少は長生きだろう。とにかくアイツに会い、今妖夢と会うのか問い質す。」

「…会わないと言われたら？」

「その時考える。」

妖忌はまた口を噤み、手元に集中した。

俺はその間、ずっと妖夢の親について考えていた。

妖忌の話を頭の中でぐるぐるさせながら、俺は家に着いた。

「…ただいま。」

「お帰りなさい鉄生。遅かったわね。」

すでに夕食の用意をした幽香が、エプロンで手を拭きながら出迎えてくれた。

「…なぁ幽香。」

「なあに？」

背中越しに、彼女に質問をする。

「もしお前の子が、人間だったら…妖怪じゃなかったら、お前はどうする？」

一瞬、沈黙。次の瞬間――

たっぷり、愛情を注ぐに決まってるじゃない。

――満面の笑みを浮かべた幽香が、こちらを見ながらそう答えた。

「…そうか、それなら良かった。」

「何？今の質問はどう言う意味なのかしら？もしかして私達の子供を今ｙ「それ以上しゃべったら今後一切部屋に入れないぞ。」…素直じゃないわね。」

「…けど、質問に答えた礼はするか。」

「え、何をっ……！」

幽香が反応する前に素早く口付けをする。

「さぁ、早く飯食おう。冷めちまうぞ。」

ぼおっとした幽香を置いて食卓に向かう。正直顔を見ると赤くなりそうなのでさっさと歩いてるだけだが。

六十、秋の実り<後>（後書き）

予定を大幅変更しました。だからどうしたと言えばそうですが。

多分次から冬になります。

六十一、鬼再来（前書き）

季節関係無いです。

疲れた…。

六十一、鬼再来

目の前にはデカい鬼。既に戦闘態勢をとって俺を待ち構えている。

はて、何故こんな事になってしまったんだろう…。

これまでの経緯

萃香が宴会の為に人を集める。

俺、幽香、紫、アリス、慧音、レミリア、美鈴が集まる。

ついでに地底から鬼の長の鬼神が来る。危険を察知して慧音が帰る。

飲み始める。レミリアが酔いつぶれ美鈴がつれて帰る。

萃香が俺についての話を鬼神に話す。不穏な空気を感じアリスが帰る。

俺が萃香に勝ったのを聞き、鬼神が勝負を仕掛ける。俺涙目。

そして現在に至る。

「避けるだけでは詰まらんだろう、萃香を倒した力を見せてみい。」

「当たったら死ぬから避けてるんだよ！」

だって地面が当たらないで削れてるんだよ？死ぬだろそれは。

「くそっ、召喚『八叉之土蛇』！」

足元に現れた八つの頭を持つ蛇が鬼神の四肢に喰らいかかる…が。

「くすぐったいのぉ。」

一言発してぐしゃりとひねりつぶしやがった。

「そんなチャチなモノじゃなく、体でぶつかって来んかい。」

「俺に死ねと言「こんな風にな。」

言い返そうとしたら腹に一発もらった。

何とか数メートル吹っ飛んだ所で踏みとどまり、膝をつく。

「あれ位で参ってしまうんか、若いもんは根性が無いの。」

「……。」

痛い。スッゴく痛い。言葉なんて出せない。

久し振りだ、ここまでの攻撃を出す奴と出会えたのは。だが会いた

くなかったな。戦いってあんまり好きじゃないし。

「もう降参か？萃香も変な奴に負けたもんじゃ。」

「……まだ終わりじゃねえぞ。」

ついた膝を起こし、能力を発動させる。

「肉弾戦がお望みならそうしてやる――土気『咸卦脈』」

地脈を無理矢理身体に通し、咸卦法を発動させる。

「おお！やれば出来るではないがぁ！？」

無駄口を叩かせない。一気にたたみ込む！

「肘打ち、裏拳、正拳、とおりゃあああああああぁぁぁぁぁ！！」

「ぐおぁ！がへぇ！ぬぁぃ！」

「ヒィィィィィト、エン「そこまで！」」

萃香が間に入り、俺の乱打を止めた。

「鉄生、あんたの勝ちだ。鬼神もそれで良いだろう？」

「……あぁ、そうだな……。」

鬼神が立ち上がり俺に近寄る。

「またやろうではないか、若いの。」

手を差し出して来たが、俺は握手をする事は出来なかった。

「……遠慮する…よ。」

無理し過ぎ。視界が真っ黒になり身体が崩れ落ちた。

六十一、鬼再来（後書き）

時間がちょっとヤバかったので変な終わり方。後で書き直すかも。

戦闘描写の部分は心の中の想像でカヴァーして下さい。

六十二、冬の湖<前>（前書き）

前後編にする必要が無いかもしれない。

最近執筆時間が取れないなぁ…。

六十二、冬の湖<前>

ｓｉｄｅ鉄生

寒い。

…寒いっ。

寒過ぎる…！

季節は冬。

だったら寒いのは当たり前じゃないかこのもやしっ子と言われるかもしれないが、ちょいとこの状況を見て欲しい。中まで完全に凍りついた湖に頭だけ出しているなーんて、普通のもやしだったら死んでるよーあっはっは。

…ＯＫ、現実逃避は止めよう。

まぁこうなった原因は３０分前に遡る。

爆音が響く夜の森。

「あはははは！楽しいね、てっしょー！」

「そーかいそーかい、俺は笑ってられない位楽しいよ。」

地下にいるフランのストレス発散の為に、定期的に弾幕ごっこを行っている。

俺も弾幕の練習になって良いとは思うんだが、女の子が笑いながら弾幕を放つのはなかなか狂気を感じる。

「どうしたの、攻撃が止まってるよ？もっと楽しもうよ。禁忌『レーヴァテイン』」

「っ！なに、少し考え事をなっ、刃器『疾風迅雷』！」

世界を焼き尽くした炎を持つ剣と、神気を練った刀がぶつかり合い火花が散る。

どちらも譲らず、刃を互いに押し返しあっている…のはいいが！

「あちっ、あちちっ！燃える！」

熱が！レーヴァテインの熱がこっちにも！

焦げる前に空間転移をし、フランが気付く前に背後に周り込み、刀を首に突きつける。

「……ゲームセット。終わりだフラン。」

「あ～、あと少しだったのに～！」

フランが剣を消し、地面に大の字になってバタバタと暴れる。うお、地震か？

「俺も危なかったな、焦げるかと思った。」

「てっしょーって弾幕ごっこは下手なのに斬り合いだと急に強くなるよね、なんで？」

「それはほら、神が俺に弾幕の才能の代わりに肉弾戦の才能をだなんてあほな事は言いませんからそんな冷たい目は止めてくれフラン。」

レミリアは潤んだ目で攻撃するが、フランは呆れた目で俺を痛めつけるから非道い。

「…てっしょーは何時になったら壊せるかなー。」

「さらっと恐ろしい事を言うなよ。」

既に一部は壊されたし。

「お前が俺を壊したら元に戻らないかもしれないぞ？俺に会えなくていいのか？」

「えー、それはヤダ。」

「なら壊すなんて言うな、死んだら会えなくなるんだぞー。」

いくらフリーダムな幻想郷でも、生死の法則を超える事は無い。

死んだ者は帰ってこない、永遠に生きる事は無い。

「てっしょー！汗かいたから泳いでくる！」

「ん、そーか……って！？」

今何月だと思ってんだよ！

「おいちょっと待てフラン！お「そこの白い髪の、アタイとしょーぶしなさい！」…あー何でこんな時に！遊ぶならコイツにしとけ、岩符『モアイによるモアイの為のモアイ艦』！」

「え？何でこんなデカいのがってきゃーーー！」

バカにはそれで十分だろ、早くフランを止めないと。

湖の畔まで来て、帽子と服が脱ぎ散らかされているのを発見。アイツは女の子なんだから恥じらいを持てよ…。

「湖にもう入ったのか？けど見当たらないんだが……。」

まさか下着姿で帰る訳は無い。

どっかに彷徨いてるのもありえない。

だが湖に泳いでる影は無い。

「まさか溺れてる訳ないよなー……フランッ！」

服も脱がずに湖に飛び込む。

霊力も妖力も使い切った後だが、残り少ない体力を頼りに潜り続ける。

身体に水が鉛みたいに絡み付く。息が苦しい。肺が空気を求めてる。

くそっ、どこだ、どこにいるフラン……いた！

月明かりが照らす湖の底に、小さな影が沈んでいる。

手足を必死に動かして近寄り、それを掴む。

よし、早く上がろう…これ以上は息が続かねぇ。

「……っは、げほっ、げほぉ！」

水面に顔を出し、一気に空気を吸う。

「はぁ…はぁぁ……後は、岸に、運べば…っ？」

身体が動かない。

いや、疲れで動かないんじゃなく、浮きも沈みもしなくなった。

湖面を見ると、氷が張っていた。

「ヤバい！」

無理矢理腕を持ち上げて、フランを岸まで投げあげる。

お尻から落ちたけどまあ大丈夫だろ。

「…チルノか？」

「そーのとおりよ！」

空に浮かんだチルノがふんぞり返っていた。

「よくモアイ戦艦を突破したな…それはいいから能力使うの止めれ。」

「ふふん、アタイの能力に手も足も出ないようね。さっすがアタイ！」

問答を繰り返し、交渉しようともしたがバカと交渉しようとした俺がバカだった。

死ぬ、死ぬぞこれはこの温度は。

身体の震えが止まらない。カタカタと歯が鳴って止まない。

あー、意識が霞んでいく……死んだらごめん……。

sideout

六十二、冬の湖<前>（後書き）

また気絶オチ、嗚呼どないしようか。

次回に続く

六十三、冬の湖<後>（前書き）

何とか早めに書けた…

さぁ、鉄生は生きてるか？

六十三、冬の湖</t>後>

湖の畔でフランは目覚めた。

身体が濡れているのを察すると、やはり自分はさっき湖で溺れていたんだ、と認識する。

おそらく鉄生が乱暴に下ろしたんだろう、お尻が痛い。

しかし、周りには鉄生の姿は無い。

「…てっしょー。」

名前を呼んでみるが、来る気配は無い。

「…どこなの？」

立ち上がり、キョロキョロと見回すと、何かがおかしい事に気が付いた。

湖が凍り付いている。

表面だけでなく、スケートリンクみたいに中まで凍っているのだ。

「きれー…。」

白く染まった氷に月光が当たり、湖自体が輝いて見える、確かに胸を打たれるものがあった。

見とれていると、湖に黒い影が二つあった。

一つは人が横たわったような、もう一つは人の頭のようなものがポコンと飛び出ていた。

「何だろ…？」

近付いてみれば一目で分かった。

小さな影は確か氷の妖精、そしてもう一つは――

「てっ…しょう?」

一一一真っ青な顔をした鉄生の頭だった。

恐る恐る触れてみると、感触は確かに皮膚のそれだが体温が全く感じられない。

「うそ…。」

試しに髪止めの紐をほどく、耳を引っ張る、目を突っつく。

だが、何時もなら髪をバラけさせるのをすごく嫌がる筈なのに反応しない。

耳を引っ張っても『NO!』と叫ばない。

目を突っついても『目が!目がぁぁ!』と騒がない。

「うそ、うそ、うそ…。」

鉄生が死ぬ訳ない、死んでる筈がない。

なら、なんで動かないんだろう?

「…こいつだ!」

原因を素早く判断し、寝ているチルノに掴みかかる。

「…?な〜にぃ…もう食べれない…。」

「起きろ起きろ起きろ！」

ぶんぶんと振るい無理矢理目を醒まさせる。

「……何よ、きゅーけつきの妹じゃない。」

「あんたの仕業でしょ！てっしょーを早く戻して！」

「てっしょー？ああ、アイツならアタイの天才的な能力を食らって凍り付いてるわよ。」

「そんな事分かってるから戻せって！」

「だったらアタイと弾幕ごっこで勝負しなさい！」

そんな暇は無い、とフランは思った。確かに、今助ければ間に合うかもしれないが、時間が過ぎれば過ぎるほど危ない。

躊躇していると、チルノが顔を覗き込みからかってくる。

「どーしたのよ、アタイと戦うのが怖いの？」

「……。」

「まぁアタイは天才で優しいから、お願いしますってアタマを下げたら助けてあげるわよ。」

「……。」

「ほらどーするの〝っ！？」

「……いい加減にしろ。」

チルノの首を左手で掴み、ドスの聞いた声を出す。

「ちょっ、と……苦しい…止め…」

「てっしょーを早く戻せ、さもないと－－－」

－－－キュッとして、ドカーンするよ？

そう言いながら、フラン右手でチルノの背中にある氷柱の“目”を握り潰した。

バラバラに砕け散った音を聞き、チルノは目に涙を浮かべる。

「ね、どうする？」

笑いながら、首を掴んでいた手の力を抜く。

首を放されたチルノは泣きながら、ただただ頷くしか出来なかった。

ｓｉｄｅ鉄生

「……だから鉄生さぁ、四季様に気があるんだったら告っちゃえばいいんだよ！」

「俺は幼女に手を出す程落ちぶれちゃいねー！」

え？キスしたのはって？それ位はオーケーだろ。

三途の川の岸辺で、何故か古町が一人で酒を飲んでたので俺も失礼していた訳で。

あんまり死んだ感じは無いなー。

「大体さぁ、あんた風見がいるのに何で女の子引っかけるんだい？四季様もそうだし、人形遣いの娘の人形とか、吸血鬼姉妹とか、後は……」

「精々それ位だろ。俺はそんなつもりは（あんまり）ないんだが…。」

「今何か心の声が。」

「気のせい気のせい。」

口が軽くなるのは酒の席ではご愛嬌。

「…？何か引っ張られる感覚が。」

関節の後ろに付いた糸が引かれるような。そんな事したこと無いけど。

「あぁ、やっとかい。あんたの肉体が魂を引っ張ってるのさ。まだ肉体は生きてるみたいだからね。」

「へぇ～。じゃあ肉体が死んでたら戻れないんだ？」

「そうそう。尤も、死んで時間が経ったら肉体があってもアウトだけどね。」

そーなのかー、と返そうとしたが口から声が出なかった。

「本当は霊は喋らないから、あ、こりゃ臨死体験してるな、と思って川を渡らせなかったんだよ。」

嘘つけ、明らかにサボってただろ。

「……。」

目覚めてみれば、豪華な赤い天井が目に入った。

「紅魔館、か…。」

相変わらず目に優しくない色合いだ。

「あれ、鉄生さん起きましたか。」

ドアを開けた音の方に目を向けると、銀色の盆を持った美鈴が立っていた。

「美鈴か。何で俺はここに?」

「妹様が引きずって来られたんです。あの時は驚きましたよ、妹様は下着姿だし、鉄生さんは死んだように冷たくなってましたから。」

いや、実際死にかけてたし。お花畑は見えなかったが。

「そうか…手当てしてくれたのは？」

「パチュリー様が。呆れてましたよ、冬の湖に飛び込むなんてバカのする事だって。」

「ははは……っ！」

「あ、まだ起き上がらないほうがいいですよ。下半身はまだ凍傷が治ってませんし。」

先に言え。感覚が無いかと思ったらそう言う事かい。

「大人しく寝てるか……ああ、美鈴。」

「何ですか？」

「何でお前がここに？俺の看病なら妖精メイドで十分だろ。」

俺の質問に、美鈴は苦笑しながら答えた。

「本当はあの子達に頼みたいんですが…怖がっちゃってて。」

「別に捕って食ったりなんかしねえよ。不味そうだし。」

美味ければ食べる訳ではない、多分。

「いえ、鉄生さんじゃなくて……。」

美鈴が指を指したのは…布団?

中を覗いてみると、成る程、妖精メイドが怖がる理由が分かった。

「まだ怖がられてるのか…いや、仕方がないか。」

「ええ、それじゃ……あ、襲ったりしないようにして下さいね。」

「誰がするか!後美鈴、飯は置いてけ。」

「え~、だって私、まだ昨日の朝ご飯食べてないんですよ?」

「知るか、寝てる奴が悪い。」

しかし、よくもあの寒空の下で寝てられるな。

「じゃあ、失礼します。」

名残惜しげにパンを見つめながら、美鈴は下がっていった。

「さて、俺は寝るか……おやすみ、フラン。」

布団に入った、小さな吸血鬼を撫でながら、俺はまた眠りについた。

六十三、冬の湖＆lt;後＆gt;（後書き）

俺はロリコンじゃない。

だけど美少女は好きです。

どうでもいい？ですよね

ん？こんな時間に誰か来たようだ…。

六十四、奇妙な能力<前>（前書き）

またもや冬関係無し。

ちょっと首を括りたい。

六十四、奇妙な能力<前>

「こんちはーっ、文文。新聞の射命丸文でーす！今回の怪我はどういった経緯で？」

「何故お前がここにいる、何で怪我したって分かった、後そのスープは俺のだ。」

「あなたが教えてくれた侵入通路を使ってきて、怪我したのは周りの妖精が騒いでいたのを聞いて。最後のはいいじゃないですか。」

紅魔館のレミリアから貸してもらった部屋で、寝起きと早々に烏ならぬ九官鳥がやってきた。あー喧しい。

「大まかな流れは聞いたんですが、やはり本人に訊くのが一番だと思って。」

「お前に話す事なんざ無い。フランにでも訊いたらどうだ？」

「う、それは……ちょ～っと遠慮したいですね。」

だろうな、出来れば俺も遠慮したいし。

「取り敢えず、今から俺着替えるから部屋から出てくれ。」

「あやや、そうですか。では失礼しました。」

射命丸が部屋から完全に出たことを確認し、素早く施錠。荷物をまとめて窓を開ける。

「ふーっ、清々しい朝だな。」

やっぱり寒いなー流石冬。

しかしそんな日に部屋に籠もっていていいのか？いや良くない！（反語的表現）

さぁ、こーのーおーぞらにー翼を広「どこ行くつもりですか？」

…飛び立とうとしたら突風に巻き込まれ無様に地に落ちた。

「何でお前が外に！？さっきまで中にいたのは何だよ、生き霊か？」

「いきなり鍵閉められたらそりゃ警戒しますよ。で、取材受けて貰えませんか？」

もうやだこいつ、ネタの為なら地獄の果てまでついて来そうだ。

「俺に取材を受けさせたいのならば…。」

徐々に領域を広げ、自分から射命丸、さらには紅魔館全体まで覆い尽くす。

「何ですか？弾幕ごっこでも？」

「…俺を捕まえて見せろ！」

食らえ、俺が昨日レミリアに殺されかけた時に発動させた技を！

「鉄生さん、お嬢様が夕食にいらして下さいと。」

「別に飯ならここで食っても同じだと思うが？」

まだ歩くのはちょっとキツいんだが。

「とにかく来てください。もうすでにお嬢様も妹様もお待ちですから。」

「因みに美鈴、お前は？」

「……仕事に行ってきます。」

あ、そう。また食事抜きか。

「……レミリア。」

「何でしょう、お兄様？」

優雅にワインを飲みながら俺を睨みつけるレミリア。流石に怖い。

「別に睨まなくてもいいんじゃないか？」

「そう言うのであれば、その膝の上にある物を退かして下さい。」

「お前は自分の妹を物扱いか。」

「そうだよ、何でフランが物なの？」

「フラン、早くそこを退かないとお仕置きするわよ。」

状況を説明しよう。

俺が空間を移動してスカーレット家の食卓に着くと、フランが俺の膝に乗ってきた。

レミリアはそれを見て大層ご立腹なご様子。

「お兄様、早くしていただけませんか？我慢にも限度がございますよ？」

「フラン、そう言う事なのでさっさと部屋行って寝ろ。」

何故だろう、レミリアの目にはフランの狂気に勝るとも劣らない殺意が。

「う～、じゃあまた明日ね。お休みてっしょー。……ちゅ。」

ブチン

あ、今俺の死亡フラグが立つ音が聞こえた気がする。

「お、おいレミリア。何も子供のやった事に目くじら立てるのはレディとしてだなそのあの「神槍『スピア・ザ・グングニル』」止めてくれぇぇぇぇぇぇ！！！」

レミリアの手から、必ず獲物を貫く神の槍が放たれた。

「止めろ、あぶね、ちょ、誰か助けてくれぇぇぇぇぇ！？」

空間転移にもキチンと反応してきやがる。それなんてホーミングランチャー？

壁の端から端に、天井からテーブルの下まで、あらゆる所に追いかけてくる。

「はぁ、はぁ、レミリア、いい加減に……っ！」

レミリアに声をかけても、何にも応答が無い。おいおい人が死にそうなのに見殺しかい？そりゃないよジョーン（ＨＡＨＡＨＡ）。

冗談を言っていたらもう妖気が切れて飛べないただの妖怪に成り下がった。

「くそ…止まれ…止まれよ化け物！」

空間障壁も停止もお構い無しに突き破って進むグングニル。ヤバい、マジでヤバい。なにがヤバいって超ヤバい。

「止まれって、何でもいいから…。」

この空間を、次元を、全てを止めてくれ――

その時、紅魔館の『全て』が止まった。

六十四、奇妙な能力<前>（後書き）

…タイトルはあれです。今日ゲーセンでパート４の主人公の人形取れました。だからどうした。

ネタバレはすんなよ、絶対すんなよ！？

六十五、奇妙な能力<後>（前書き）

自己解釈とか色々あるかも。

やっとオリ主チートって言える。言いたくないけど。

六十五、奇妙な能力<後>

「……あれ？」

身構えていたが、何時まで経っても槍が突き刺さる感覚がこない。

「…寸止めとは、レミリアも意地が悪いな。」

目の前には一ミリあるかないか位の所でグングニルが止まっていた。

ずるずると壁から崩れ落ち、溜め息をつく。

「はぁ…冷や汗かいちった。レミリア、水貰えるか？」

「……。」

いてて、足がちょいと痛い。やっぱ病み上がりにこの仕打ちは無いだろ。

「……レミリア？」

「……。」

幾ら声をかけてもレミリアが反応しない。

「へそ曲げたか？なら妖精メイドにでも……あれ？」

俺が部屋を逃げ回っている間、妖精メイドは隅で身を屈めていた。うん、それはいい。だが今も屈んだままになっているのは何故。

「お前ら、もう追いかけっこは終わったから動いても大丈夫だぞ。」

「……。」

動こうとしない。何だ？新手のサボリの方法か？

「おい、ふざけてるのか？お～い。」

妖精メイドを掴んで揺さぶってみる…いや、揺さぶろうとした。

「あれ、ふんっ、ふんぬぎぎぎ……。」

う、動かない…だと…。妖精メイドはそのまま、怯え竦んでいるポーズをとっている。

「何だってんだ……？」

「……参ったな、出ることも出来んとは。」

全く動く気配の無い扉にもたれかかり、一息入れる。

動きが止まった状態から三時間は経過した。時計が動いてないので正確なのは分からないが。

分かったのは、俺以外の全てがその場で止まっている事。

「……何で俺は動けてるんだ？」

やはり俺が何かやらかしたんだろうが、しかし俺にこんな事は出来ない筈。

俺が持っている能力は大地を操る程度の能力と次元と空間を操る程度の能力。

大地よりも次元の能力の方が原因っぽいな。しかしどちらにしてもこんな事出来るか？

ちょっと空間を探ってみるか……

……なんてこった。

「……時間を、止めてるのか。」

空間を解析してみると、目に見えない筈のものが止まっているのが分かった。

それは、時間の『流れ』。

どうやら俺はグングニルを止めるために、この次元の時間の流れまでもを止めてしまったようだ。

「すげぇ…三時間は止まっているって事はＤＩＯや承太郎とは比べものにならねえな。」

スタンドは土や岩から作ればいいんだし。やった、矢に射抜かれなくてもスタンド使いになれた！

「じゃなくて。まぁ原因が分かれば後は何とかなるな。」

止めた時を戻すにはあの言葉が必要かな？いや、同じ事を言わなくてもいいか。

「そして…次元は、動き出す。」

現在

「俺を捕まえてみろ！元世『ザ・ワールド』」

時を止め、射命丸の周りにナイフをバラまいておく。これでよし、と。

「じゃーな、っても聞こえないか。」

射命丸はさっきの格好のままカメラを構えている。

家に戻るまでは時を止めておこう。奴のことだから怪我なんてお構いなしにすぐに追いかけてきそうだ。

しかし、この能力まだこんな使い方があったとは知らなかった。

試してみるか…色々と。

六十五、奇妙な能力<後>（後書き）

え？パクリ？いいえ、インスパイアです。多分

取り敢えずやりたい事が一つ出来たので満足してます。

で、この小説何書きたかったんだっけ？分からんなってきたよ。

六十六、年の終わりは雪合戦（前書き）

あ、ヤバい。ザ・ワールドは鉄生を調子づかせるようになっちゃったか。と書いてて思った。

ネタ知らない人はつまらないかもしれません。しかし反省はしてない。

六十六、年の終わりは雪合戦

様々な検証による結論、俺の能力は実質一つ増えた事になった。

その名も『ザ・ワールド』もとい『時間を止める程度の能力』だッ！！…そのまんま過ぎるか。

内容は次元全体の時を止めるか、領域内の時を止める事が出来るというもの。

次元全体と言うのは俺以外の全て、世界中の時を止める事。範囲は関係無い。

一方、領域内限定だと時を止められる対象を選択出来る。範囲は領域内のみ。

…自分でもよく分かっていないから気にしなくていい。

とにかく、この能力のお陰でかなり時間に余裕を持つことが出来るようになった。単純な事務なら一秒も掛からず終わるし、移動する時の時間も短縮出来るから楽な事この上ない。

あ、今更説明するが俺の空間転移ってあんまり長距離には出来ない。精々自分が見える範囲だ。

そして今、俺は時止めをフル活用している。

「ぎゃあぁぁぁぁぁ！」

「しまった！え、衛生兵、衛生兵ーっ！」

阿鼻叫喚が木霊する妖怪の山。その声はまるで最前線を彷彿とさせる

「木を陰にしても木ごと吹き飛ばされるぞ！回り込め！」

「どないして回り込めと！？」

妖怪対人間の年納めの一大行事、雪合戦だ。

人間の軍勢は村の男衆と慧音、俺。妖怪は烏天狗が大半だ。

明らかにパワーバランスがおかしいが、何故か二、三年に一度には人間側が勝つんだからどうにも。

「鉄生、負傷者の回収は？」

「大丈夫だ。早く攻めねえと数で押されるぞ。」

ルールは互いの大将を制圧するか、相手の全員を打ちのめすかのどちらか。妖怪の大将は射命丸文。人間は俺が大将だ。

それと妖怪側は妖力の使用禁止、人間は武器禁止、互いに殺さない程度ようにとそれだけ。

単純なルールなのでいくらでも抜け道はあるが、如何せん人間側の人数が少ないので物量に押されると危険だ。

「今から壁を出す！みんなそこに隠れろ！」

雪の下から遮蔽物を作り、そこから雪玉を投げる。

「あぁくそっ、何時もなら幽香と一緒にストーブの前で暖まっているのにっ、何をトチ狂ってこんな行事に参加しちまってんだかっ！」

「喧しい！一緒にいる人がいるだけましだろう！私は誰もいないのに！」

「あ、慧音はまだ独身だったっけ。」

「行き遅れとか言うな！」

「大丈夫、きっと出会いはあるか危なっ、こっちに投げんなよ。」

「鉄生、殺されるか手を動かすかどっちかにしろ。」

慧音なら引く手あまただろうに、とは言うまい。つまらないから。

「慧音さーん！敵方が何かよく分からないものを！」

「よく分からないもの？」

「俺が見に行く。慧音は指揮を頼む。」

時間を止め、玉を避けながら前線に向かう。

「て、鉄生、あれ、あれっ！」

わたわたと男達が逃げてくるのは正直気持ち悪い。大の大人が逃げんなよ。

「あー見りゃ分かる。あんなの作るのは河童の連中か。」

上方から雪玉が雨霰のように降ってくる。その先にあるものは誰がどう見ても機銃です本当にあり（ｒｙ

「あんなものまで持ち出しやがって…少し灸を据えてやるか。」

袋から瓶と灯油、布切れを取り出す。

「なんだそれ？」

「まぁ見てろ、面白いもん見せてやるから。」

またもや時を止め、弾幕を張っている河童に近付く。

「よぉにとり、ご機嫌だな。」

「そりゃーこんだけ実験が出来るんだから……って、鉄生が何でここにいるのさ！」

河城にとり。我が家の様々な装置の開発者でいらっしゃる。ストーブやらドラムやらの開発もコイツに手伝ってもらった。

「いや、ちょ～っと退いて欲しいだけだ。友人に手荒な真似はしたくないからな。」

「駄目だよ、ここを食い止めないと射命丸に何を書かれるか……。」

アイツの新聞って読んでる奴いるのか？うちは取ってるけど。

「そうか…そういえば、この機銃お前が作ったのか？いい出来だな。」

「あ、そう？いやーそれ程でも。」

頭を掻き照れながら構造を説明していくにとり。その間もノリノリで玉を乱射してるからスゴい。

「…それで火薬の熱を雪玉に伝わらないようにしたんだよ！」

「ほほう成る程ー。つまりここらにある箱は火薬が入ってるのか。」

「そうだよーって、何持ってんの？」

「ははははいや……サヨナラだ河城にとり！」

手に持ったものは灯油を入れた瓶に布切れを詰めたもの…即ち

「それってもしかして火炎び」

にとりの足元に叩きつける寸前に退避し、後は想像でお楽しみください。

「よっし、進めえぇぇぇぇぇぇ！！」

妖怪の山、山頂

「え～、お前達は完全に包囲されている～。速やかに投降すれば危害は多分与えない～。」

「多分ってなんじゃい！」

調子に乗って山頂の本拠地に攻め込んだのが良くなかった。

基地にいたのは囮で、すぐさま天狗の本隊が後方部隊を叩き合流出来なくさせ、俺達十人を山頂に閉じ込めてしまった。

「俺だけなら何とか逃げられるな、よし。」

「何一人で逃げようとしてるんだよ！ひでぇ！」

さすがに指揮官が部下を置いて逃げる訳にも行かず、ジリ貧になっている。いやぁ責任者はタイヘンだね！

…しかし如何したものか、このまま粘ってても麓の慧音が落とされればいずれこちらに全て動員するだろう。

「……そうだ、いい手がある。」

単純明快で簡単な手だ。

「何だ？」

「敵の大将、射命丸を先に潰す。」

出来る筈だ。つーかやる。

「しかし弾幕ごっこじゃなくて雪合戦だぞ？勝算は？」

「何、バレなきゃイカサマじゃあないんだぜ。」

「何やるつもりだあんた！」

あんたそこは『無敵のスタープラチナで何とかしてくださいよーッ！』だろ。

「…お、出て来ましたね大将。降参ですか？」

周りに天狗を引き連れた姿はなかなか様になっている。だがそのカメラが全部台無しだ。威厳のくそもない。

「いや、そちらの大将との一騎打ちを所望する。」

「……何を考えてますか？」

「いや何も、二人でやれば簡単に済むだと思ったからな。」

「……あなたは何をしでかすか分からないんですよねぇ…。」

「まさかまだ前の事根に持ってる？」

「当たり前です！ナイフがいきなり刺さったと思ったらいないし、自宅にいったらマスタースパークに迎撃されるし、恨まないのがおかしい！」

「マスタースパークは知らん、幽香に言え。」

「問答無用！成敗！」

結局やるのか、前振り長いなあ。

だが、お前に俺は倒せない。雪玉が当たる前にスペルカードを発動させる。

「元符『次元固定』――時は止まる。」

射命丸が投球モーションで止まったのを確認し、土を操り雪を持ち上げる。

「これが……『世界（ザ・ワールド）』だ……射命丸。おまえは埋まったことにさえ気づいていない。何が起こったのかもわからない……。」

そのまま雪を射命丸の上からかけ、埋め立て完了。

「そして時は動き出す。……はい、俺の勝ちだな。」

周りの天狗は『あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！『雪玉を投げていた大将が何時の間にか埋まっていた』。な…何を言ってるのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。』って顔をしている。

そりゃ周りからしても本人からしても分かんねえよな。なんせ時が止まってるんだから。

無駄無駄無駄

六十六、年の終わりは雪合戦（後書き）

ある友人との会話

作「いかん…。」

友「ん？」

作「ゆうかりん分が不足してきた。」

友「ゆうかりんぶん？」

作「そうだ、ゆうかりん分だ。」

友「それは…糖分とか塩分みたいなものか？」

作「その通りだ、他のキャラの妄想していると減ってくる。ゆうかりん分が足りなくなると、疲労や集中力・思考力・ネタの純度や新鮮味の低下等の症状が現れる。」

友「ゆうかりん分は…ゆうかりんに含まれているのか？」

作「はっはっは当たり前だろう。」

友「大変だ！作者が…作者がもうダメだ！！」

作「ゆうかりん書きたいなぁー。」

友「書きゃいいだろアホ。」

作「…はい。」

日常の風景。ゆうかりん最近書いてなかったから……。

六十七、行く年来ない年（前書き）

…幽香のデレを期待した方すいません…

何か上手く書けませんでした…

六十七、行く年来ない年

「へ、へ、へくしょん！」

「……三十八度九分、風邪だな。」

大晦日、除夜の鐘が鳴り響く夜に部屋で二人きり。何時も二人しかいないが。

「う～…何で風邪なんか…。」

「さてな、横になって早く治すこった。」

大妖怪が風邪とは…世も末だな。

「鉄生～寒いから一緒に寝てよ～。」

「それは俺にも風邪を伝染すつもりか。」

「なら抱きしめる位でいいから。」

「次ふざけた事抜かしたら裸で外に放り出すぞ。」

幽香の戯言を適当に返しながら、お粥やら水やら薬やらを運ぶ。

「便利よね、その新しい能力。」

「全くだ。時間の無駄が無くていい。」

新しい能力…時を止める程度の能力。

止まった時の中で料理するのはコツが必要だったが、今ではお茶の子さいさい。物体の時を動かしてやれば、その物体を動かせるのだッ。

「それのお陰で、鉄生と離れなくて済むし。」

「俺は存分に離れてるがな。」

「…何か今日の鉄生、冷たくない？」

「気のせいだ、ほら器下げるぞ。」

さて賢明な読者諸君なら、俺が幽香に冷たい理由が分かるだろう。

…昔からあるだろ！看病の同情心と恋愛感情を間違える事！それを防ぐ為だよ！

何言ってるか分かんないって？つまり端的に言うと、俺が幽香をお、押し倒すような事にならない為に冷たくしてるんだよ！分かったか！つーか分かれ。

「…何か顔赤くなってない？」

「それも気のせいだ。さっさと薬飲んで寝ろ。」

「口移しなら……。」

「直接口の中に転移させてやろうか。大人しく飲め。」

「すー…、すー…。」

「…やっと寝たか。」

口移しやらの辺りで理性のたかが外れそうになった…。

「そろそろ年明けか…散々な年納めだな。」

寝ている幽香の髪を撫でながらそっと呟く。

「…俺も幽香の事が好きだがね…そうそう態度に出す訳には如何だ

ろ。」

その辺は男としてのプライドが云々。

「…これからどうなるか分からんが、お前とはずっと一緒に居たいもんだ…。」

願わくば、死んでもまた会えるよう。

鐘の音を聞きながら、俺はゆっくりと眠りに「ありがとね、鉄生。」

「……何時から聞いてた。」

「最初から全部。」

あああああああああああああああ恥ずかしいいいい！！！！！

新年から俺の叫びが木霊したとかなんとか。

六十七、行く年来ない年（後書き）

次話から時は動き出すッ！けど更新出来ないかもしれませんッ！

六十八、時との邂逅（前書き）

時を百年位吹っ飛ばしました。

何かプロローグみたいなの

六十八、時との邂逅

「…冷えるな。」

寺子屋からの帰り、月を眺めながら一人呟く。

満月…いや、慧音が変身したのは昨日だから、今日は十六夜月か。

こうやってしんみりとするのは年寄りの悪い癖だな。

…年寄り、か……思えば長く生きたもんだ……。

「…長く生きて分かったのは、人間は同じ事を繰り返す事か。」

眼下の森に見えた小さい影。それを追う無数の歪な影。

「…見ちまったんだからしょうがねえ、助けるか。」

「こりゃあ…一体…。」

降りてみれば文字通り死屍累々。異形達が殺されている。

「…どれもこれも頭を刺されて死んでいる。さっきのちっこいのがやったのか？」

なら助けなくても大丈夫か……いや待て、里に妖怪と立ち回れるような、しかも頭を正確に貫いて殺せる奴なんていたか？

「外来人…しかも相当な手練れか。めんどくせぇな、話が通じる奴でありますよう…。」

祈りながら、小さな影を追跡する。

見つけた……はっやいなー。

前方に見えるのは、ぼろ切れみたいなローブを頭まで纏った小柄な奴だった。さっきまで追われていたからか、全力で走っている。

「おーい。」

「……。」

「もしもーし。」

「……。」

「このっ…止まれってのー！」

ローブの裾を掴んだ瞬間、フードの下の目が合った。

赤い、瞳ーーーそれを認識した途端、奴の腕が動いた。

「っ！？」

額目掛けて飛んできたモノに気を取られていると、あっという間に

奴は消えていった。

「…今……一瞬……。」

まさかな、俺以外にいる訳無い。そう、いる訳が無い……。

投げつけられたナイフを握りながら、そう自分に思い込ませた。

六十八、時との邂逅（後書き）

言うなよ、絶対に言うなよ！

たとえ分かったとしても言うなよ！

後活動報告にも書いたんですが、連載が止まるかもしれません。本当にすいません

六十九、早くも再会（前書き）

唸れ俺の妄想！響け俺の指！

六十九、早くも再会

はて、さっきの奴は何だったんだか。手に包帯を巻きながら玄関を抜け、居間に入る。

ガチャ

「……」

ピシャ

落ち着け……落ち着くんだ俺。いいから落ち着け、とにかく落ち着け。こう言う時はあれだ深呼吸をするんだ。吸ってー吸ってー吸ってーって何時までやるんだよ！

一人でボケてツッコんでると、居間から幽香が顔を出した。

「鉄生ダメよ、女の子が着替えてる時に入るなんて。」

「ナンデミズシラズノオンナノコガイマニイルンダヨ。」

ダメだ、俺は社会的に抹殺される。女子の着替えを覗くとか学校なら帰りの会で吊し上げだろう。

「さっき転がり込んで来た子でね、泊めて欲しいって言ってるんだけど、いいでしょ？」

「ああ、構わないが……。」

何でわざわざこんな所に泊まるんだ？人里から大分離れてるし、妖怪もうようよいる。

さっきの外来人ならこれるかも知れないが、奴の瞳は赤で、あの子は碧だったし……ああ、そうか。って何思いだそうとしてんだ。如何忘れろ、すぐ忘れろ。俺はロリコンじゃない。

「……どうしたの鉄生、顔赤いわよ？」

「何でも無い。そろそろ着替え終わったんじゃないか？」

幽香が中を確認し、許可が出たので部屋に入る。

「……どうも。」

部屋には先程の銀髪碧眼の少女が、何故か幽香の着ている赤チェックのベストにスカートの格好をしていた。

「……何で？」

「着替えも何も無かったから、私の小さかった頃のを着せたの。なかなか似合うわね。」

いや、胸の辺りがおもきし余ってるぞ。

「さ、夕ご飯にしましょ。鉄生、よろしく。」

「へいへい。」

適当に手を振って答える。

「あら、その手どうしたの？」

幽香が手の包帯を指差す。

「ん、ちょっとな。」

まあ、いずれ分かるから言わなくていいだろう。

「……ご馳走様でした。」

「お粗末様。」

「いやそれは俺のセリフ。」

黙々と全部食べてくれたので料理人としては嬉しい限りだが、食べながら人の顔を見るのはやめて欲しい。食いづらい事この上ない。

「さて、と……先ずは自己紹介から。俺は水元鉄生、そっちは？」

「……十六夜、咲夜です。」

やっぱりか、だがその名前は確か……。

「何時からここに来てたんだ？」

「多分、一昨日の夜から。」

「二日間は寝食はどうしてたんだ？」

「紅魔館と言う所でお世話になってました。」

「……成る程ね、そこの主からその名前を貰ったのか。」

それなら合点がいく。

「何でその事を？」

「さあ？それより、何処か行く当ては？」

「……ありません。」

ふむ、そんな事だろうとは思ったが。

「だったら、うちで暮らさない？」

幽香がパン、と手を叩いてそう言った。

「えっ……？で、でも、初対面の人にそこまで……。」

「俺とはさっき会ったけどな、森の中で。」

懐からナイフを取り出し、咲夜に渡す。

「あ……。」

「多分反射的に投げたんだろうが、時を止めて額に投げるなら妖怪も一撃だな。恐ろしい。」

「……ごめんなさい！」

「？別に謝らなくても。」

「いえ、本当にごめんなさい！」

「怪我したのに謝ってるなら必要無いぞ、すぐ治るし。」

「それでも……。」

「いいの、鉄生なんて死んでも生き返るような人だから。」

幽香、それはフォローか？

「で、どうする？ここに住むのか？」

「……よろしく、お願いします。」

「こちらこそ、咲夜。」

笑いながら、咲夜の頭を撫でる。

六十九、早くも再会（後書き）

と、言う訳で咲夜が娘に。

イヤッハァアアアアアアアア！

七十、一人十二匹家族（前書き）

注意　今の咲夜さんは子供です。サイズ的にはレミリア位です。
その辺を脳内補完してお読み下さい。

七十、一人十二匹家族

カポーンって擬音は古いか。

「い～い湯だな、と。」

湯船に浸かって疲れた身体をほぐす。

今日は色んな事があって疲れた……授業中に生徒と花札やって慧音にど突かれて、休み時間に俺が華麗に職員室のドアを叩き割り慧音にど突かれて、職員会議の議題に上がった『制服は着物かセーラー服かブレザーか』について男性陣に大真面目に演説して慧音にど突かれて……。

……何時もやってる訳じゃないぞ。特に最後の。

後は、咲夜についてか……。

「……いきなり家族なんて、無理だと思うんだがなぁ……。」

順応性云々以前、見知らぬ妖怪に育てられるのには抵抗は無いのかねあのちびっ子は。

と言うより、咲夜にも両親がいただろうに何で幻想入りしたんだ？紫の気まぐれかそれとも迷い込んだか。

幻想郷は外と完全に隔絶されている訳じゃない。紅魔館のように丸ごと持って来た跡には『裂け目』がある。

俺が空間を閉じて入れないようにはしたが、なにせ三百年は前だ。
もう効力が無いかもしれない。

「……そう言えば、咲夜のナイフ。確かあのナイフは……。」

「何故こうなる。」

ベッドに横になって一言。

一人用のベッドに左から俺、咲夜、幽香と川の字になって寝ている。

狭い。

「く、苦しいです……。」

「堪えろ。俺もそうした。」

幽香に抱きつかれて肺が押しつぶされるのは経験済み。

「なに、女同士何だから恥じらいは無いだろ。」

「だからってこれは……うぐぐ。」

まあ、ね。色々当たってハズいだろうが俺は〈検閲により削除〉や〈禁則事項〉や〈見せられないよ！〉な事があったからもう吹っ切れたが。

「耐えられそうもないか？」

「はいぃ……。」

「ならしゃーないな、っと。」

幽香の拘束を外し、素早く咲夜を持ち上げて体の上に乗せる。子供一人位なら重さもあまり感じないし、これならレミリアやフラン相手で慣れている。

「これなら狭くないな。」

「こ、これはこれで恥ずかしいですよう！」

咲夜が手足をばたつかせて抵抗のようなものをする。

「ならさっきのままプレス機にかかってるか？ついでに騒いでると起きるぞ。」

「……。」

諦めたのか、力を抜いて大人しくなった。

「……咲夜。」

「何ですか？」

頭を撫でながら、疑問に思っていた事を話す。

「色々質問する事はあるがまず一つ、あのナイフはどこで手に入れたんだ？」

あのナイフは間違いなく俺の持っていたものだ。だがアレは確か……

「あれはもらった物なんです。」

「誰から？」

「ルーファスって人から「なっ！？？」

馬鹿なまだあいつ生きてたのか？いやあいつは長生きはそうだろうがいやしかし

「水元さん、知ってるんですか？」

「ちょっとな……成る程、それなら分かった。そいつからナイフ投げやらを教わったのか？」

「はい。捨てられてた私を拾ってくれて、ここまで育ててくれた恩人です。」

恩“人”ってのは……まぁいいや……ふむ、把握。何となくだが把握。

しかしルーファス……あいつまだ……ううむ……

「み、水元さん、また苦しいですっ！」

「お、すまんすまん。」

腕の力を緩めてやると、咲夜が膨れっ面で睨んできた。何これ可愛い

「……そう言えば、咲夜の目って碧色だよな。」

「それがどうしたんですかー。」

むくれたままで答えられても。

「いや、森だと赤かったから、多分時を止めてると赤くなるのかと思ってな。」

「……なんだその顔。」

「水元さん、時間が止まるの分かるんですか？」

「一応な、詳しくは明日。もう俺眠い。」

七十一、赤い波（前書き）

前回オリキャラ出した。

一日経ってやっと後悔した。

七十一、赤い波

あいつと初めて会ったのは５００年前、紫の修行で出会った。

退魔師をしていたあの時は『赤瀬（あかせ）　漣（さざなみ）』とか名乗っていたな。

その変わった名前と妖怪退治に短剣と言霊しか使わないというのが紫の目に止まり、俺の指導役にしてしまったのだ。

漣が和製サンジェルマン伯爵だったとは知る由もなく。

サンジェルマン伯爵とは実際にヨーロッパ辺りにいた人物で、前世からの記憶を全て持っていたらしい。逸話にはシーザーに会っただの、ダイヤモンドの傷を消す方法を知ってたとかなんとか。

要するに、漣は前世からの経験を引き継いで生きていたのだ。

……言霊なんて人間がまともに使えるのには少なくとも百年はかかると言うのを二十歳そこらで完全に習得していたからおかしいとは思ったんだが、まさかこんな奴だったとは。

漣とは戦った事は無いが、明らかに俺なんかとはダンチな性能を誇

っていた。投げナイフもかなりの腕前で、リンゴを頭に乗せた俺の角にクリーンヒットさせる位の命中精度を誇っていた。

二度目に会ったのは外にあった頃の紅魔館、そこで名乗っていた名前がルーファスだ。

名前は当時紅魔館の主だったヴィンセントが関係してる、らしい。詳しくは聞いてなかったが。

紅魔館の執事として勤めていたルーファスは、そこに近寄る者をナイフで狙撃してくるようなヤバい奴になっていた。

ある勘違いから戦闘になってしまい、何処ぞの黒い執事よろしくナイフ乱舞に理不尽な言霊を使われてもう俺のライフはゼロなんて言われそうな時にやっと俺だと気付いてくれた。あの時は本っ当に死ぬかと思ったな……。

紅魔館を転移させる時にあいつだけ残ったんだが、まさかまだ生きているのか、未だにルーファスって名前を使っているのか。

とにかくあいつはイヤだ。言霊がえげつないのもあるがあいつの能力がイヤだ。

あいつの能力は……って、嗚呼クソッ！なんであいつの事を夢にまで見なきゃいけないんだよ！

「……悪夢……なのか？」

良く分からない夢、と言うより解説臭い夢だった。

「……それはともかく幽香、お前起きてるだろ。放してくれ。」

今の状況は俺が幽香にスリーパーホールドをかけられてるように見えなくもない形になっている。

「……な・ん・で。」

「ん？」

「何でわざわざ咲夜を乗せて寝てるのよ……。」

「……成り行き？」

「どんな成り行きよぉぉぉぉ！「やめ、やめんか締まるオチる！」」

起きたと思ったらすぐ落とされるなんて、パソコンだったら御法度だぜ？

「そういや何で咲夜を抱いて寝てたんだ？」

「可愛かったから。」

男だったら間違い無く捕まる発言だな。

「それと、鉄生が襲ったりしないようにと思ったんだけど……手遅れね……。」

「……何時までも俺にはそんな称号が付きまとうのか。」

クマの真似はしたく無いのでこれ以上は話さないでおく。

「ほんと、咲夜の髪って綺麗ね……鉄生と同じ銀色だから、本物の親子と間違われるかも。」

「そんな、水元さんってまだ若いじゃないですか。親子だなんて……。」

仲良くほのぼのして……若いって言われるのは嬉しいが。

「……ハァ。」

幽香が咲夜の髪をとかしているのを眺めながら、今後どうするかを考える。

咲夜の能力指導はルーファスがしてそうだ。俺が指導出来るのは時止めだけだからそれは助かる。時間の加速減については専門外だか

らな。

問題は……どうやら咲夜が迷い込んだ幻想郷への道は紅魔館跡地、つまり、そこで俺が閉じた空間が開いているという事。

いや、咲夜の能力で空間操作も出来なくはない。それの影響で開いてしまったのかもしれないが。

とにかく、これは博麗大結界では対処出来ない問題だ。何せ紅魔館の空間と直接繋がってしまっているから、結界も何もお構い無し、ワームホールが出来た様なもんだ。

いずれ咲夜が紅魔館で働くなら、空間を閉じても再び開く可能性がある。だが何か策を講じなければ外と繋がったままになる……。

ヤバいよなぁ……紫にバレたら丸投げされるだろうし、バレなくとも外に繋がったままなのは危険だし……。

……こう考えると、白玉楼も危険かも知れんな。あそこも丸ごと持ってきた場所だ。

「……ちょっと鉄生？聞いてるの？」

「聞いてない。」

ガッシ！ボカッ！

「……そんな某ケータイ小説みたいな表現で殴るなよ。」

作者の文章力がまた無くなったと思われるぞ。

「はぁ……紅魔館から招待状が届いてるの。またパーティーだって、どうする？」

「……そうか、ふむ……。」

「さてあの傘はどこ置いたかし「いや聞いてるって。分かった、準備しとけ。」

丁度良い。レミリアもそのつもりで招待状を出したんだろうが。

「あら、自分から参加するなんて珍しいわね、あそこに用事でもある？」

「訊きたい事と、伝えたい事が少しずつ。昼まで咲夜借りるぞ。」

「え？ちょっと、何するつもりなの？」

「色々だ。咲夜、行くぞ。」

「あ、はい！」

事前に色々しとくべきだろう、説明とか。

七十一、赤い波（後書き）

その内外伝とかを他の連載にして出すかもしれない。蛇足だろうが。

べ、別に以前は何にも考えて無くて、今になってやっと話を思いついた訳じゃないんだからねッ！

七十二、はじめての買い物の筈（前書き）

書けば書くほどデレ幽香を書きにくくなってるような。

後五話位待って下さい……。

七十二、はじめての買い物の筈

八雲紫、幻想郷で最も胡散臭く又ぐーたらと名高い大妖怪。

「……それが、この？」

「そ。ついでに結界の管理も式に任せきりだから現在無職。」

「ちょっと、何でそんな嘘言うのよ。」

「嘘じゃねえだろ。」

しかも一日の大半を寝ている事からカビゴンの異名を持つ者としても知られている。

「大体その子誰？見覚え無いけど……まさか鉄生と幽香の子！？」

「んーと……説明面倒だからそれでいいや。」

義理だが家族になった訳だし、別に困る事もあるまい。

「そんな……。」

「あ？」

「幽香に先を越されるなんて……。」

……話が拗れるとイヤなのでスキマを閉めて黙らせる。何を競ってるかあの行き遅れ年増は。

「行くか。」

「はい。」

背負ってる咲夜に声をかけ、再び空を飛ぶ。

あの紫ババアは何でいきなり現れるんだ、バレたのかと思ったぞ全く。

……あいつまさか誰かに伝えないよな？射命丸にでも知れたら面倒だ。

「まぁ幻想郷関連の説明はこんな所か。何か質問は？」

「いえ、特に。」

「……話が退屈なのは分かるが俺の髪はいじるな。」

あんまり髪触られるの好きじゃないんだよ。あ、こら三つ編みにするな。

手を繋いで歩いてると本当目立つ。只でさえ目立つ髪色してるのにそれが二人で手を繋いでるんだから当社比三倍の目立ち易さが（ｒｙ

下らない事はいいとして、こーやって人里に来た理由は二つある。

一つは服を買いに。早めに咲夜の普段着を買っといた方がいいだろう。何時までも（主に胸部のサイズが合ってない）同じ服だけじゃなあ。

……今思ったが幽香って小さい頃から胸デカかったのか。いやだからどうしたと言えばそうだが。

幼少期の幽香巨乳疑惑はさておき、二つ目の理由。それは……

「一応慧音に話しておこうかなと。」

「？」

「いや何でも無い。」

寺子屋への入学をどうするかである。咲夜の場合は基礎知識もあるし必要無いだろうが、慧音に後からグチグチ言われるのはヤだからな。

「それよか服をどうするか。女物の服なんて俺には良く分からんから店の人に訊かないと。」

「お母さんなら分か「ブッ!?」え?」

何だいきなりお母さんて、え、ホームシック?

「お母さんって……ああ、外に置いてきたのだよな。」

捨てられたとか言ってたけどまあ恋しくなるのは当たり前だよね。

「いえ、幽香お母さ「ブフォァ!??」ええ?」

ちょ、気持の準備以前に、え、ギャグ?

「家族になるんだったらこう呼んだ方がいいかなって。」

「え〝、じゃあ俺は?」

「……お父さん?」

何だその間と最後の疑問型は。

「でも見た目的にはお兄ちゃんの方が「もういいお父さんでいい。」

お兄ちゃんはレミリアとちょい被ってるから流石に。いやでもお父

さん……嬉しいとは思うがハズい。それと何か物悲しい。嗚呼俺も歳食ったなーって。

「……まぁそれはともかく、そろそろ服屋に着「こんちはー清く正しい射命丸文で御座いますッ！紫さんからの情報ですが鉄生さんに子供が出来たとか！？」……後で紫締め上げる。」

あんにゃろ何考えてやがる。デジョンかけてやろうか。

「あやや、おんなじ銀髪ですか。けど鉄生さんって黒から銀に染めたのに何でお子さんまで銀色に「染めてないから、あれ化けてただけだから。」あ、そうでしたか。それとその子のお名前は？」

「い、十六夜咲夜です……。」

どうするか……このままだと咲夜は射命丸のペースに流されそうだし、さっさと逃げるか。

咲夜の手をしっかり握り、足元の地面を緩くしていく。

「名字が違うんですか、その理由は……って、あれ？」

「うわわっ、じ、地面が？」

「咲夜、息止めとけ。」

これぞ土遁の術ならぬ泥遁の術。気分は底なし沼に嵌った感じだが。

「じゃーな射命丸。今は逃げさせてもらうぞ。」

「またですか！毎回毎回違う技で逃げるんですねあなたは！」

いや、倒して進むには後味悪いし一般人の前だし。お前が時間停止にも反応するようになっちまったから手を変え品を変え頑張ってんだよこっちも。

と言おうとしても既に頭が土の中。腕を伸ばして親指立てるのが精一杯だった。

七十二、はじめての買い物の筈（後書き）

次から作者も予想しなかった展開がッ！いや分かるだろうけど。
行く所分かったら感想の方にでも。いや分かるだろうけど。

七十三、ちょい暴露（前書き）

あー……疲れる。
信じられるか？俺、明日入試何だぜ？やだー

七十三、ちょい暴露

痛い。背中がものっそい痛い。

いや、まさか地面を抜けた先に空洞があるとは思わなくてな、全く身構えてなかったもんでしこたまぶつけたんだよ。

「……お？」

俺は一応無事だが咲夜は大丈夫だろうか。確認したいが体が動かんし。

「……ふむ。」

最近危険な事が無かったから鈍ってたかね。しょっちゅう幽香や美鈴と手合わせしとるんだが。

「よいしょと。」

因みに幽香との組み手では一度も勝った事が無い。情けない奴と言われるかもしれないが歳の差幾つあると思ってる？百単位じゃきかないだろ多分。

……ところで、さっきから誰かに運ばれてるような気がするんだが。

「いやーこんな所で親子の死体を見つけるなん「死んでねぇぇぇぇぇぇ！！」うにゃ！？」

あーびっくりした、このまま燃やされるとこだった。

「し、死体が蘇った！」

「失礼な、美人薄命とは言うがまだ死ぬ気は無いぞ。」

あ、はい、調子乗りましたすいません。

「俺は水元鉄生、そっちは？」

「火焔猫燐。お燐って呼んでね、お兄さん。」

お燐……だとすればここはやはり

「はい、地霊殿です。」

……何時の間に背後にいたんだか。姉妹揃ってスネーク張りのステルス性を。

「古明地さとりさんで？」

「はい、水元鉄生さんに、十六夜咲夜ちゃん。」

うーん、出来れば原作知識は読まれたくないな。厄介な事になりそうだし。

「原作知識？」

「……手遅れかよ。」

まぁいいや、それより咲夜を横にさせてやりたいんだが。怪我して

るかもしれんし。

「分かりました。お燐、運んであげて。」

「りょーかい、さとり様。」

「……。」

「……。」

さっきから俺は咲夜の治療、さとりはお茶を飲むか茶菓子を摘むか

しかしていない。お燐？猫になって俺の髪でじゃれてる。可愛いが止めて欲しい。

「……と、これで終わりだ。」

「……。」

俺が言った『終わり』とは咲夜の治療ではなく、俺がさとりに読ませた事に対してだ。

つまり、俺が別次元の人間でこの幻想郷については元から知っていた、と言う事。どうせ俺にゃあ隠すなんて出来ないだろうしそれならさっさと言ってしまおうと。

「……。」

「……さとり？」

何かショックでも受けてしまったか？いやでも心配する程の事でも無いと思うぞ？ほら、さとりはさとりでゲームとかそーゆーのちゃうしそれに「ふふっ」ん？

「大丈夫ですよ。ショックなんて受けてません。」

「……？」

「あなたが読ませてくれた事が真実だとしても、それは次元が違う事。そうでしょう？」

……随分、大人な発言をされて。俺だったら相手に殴りかかる位は

しそうだが。本当に何とも無いのか？

「ありがとう、心配してくれて。私はそんなに細い神経してませんし、それに短気は損気ですよ？」

「は、はぁ……。」

何だろう。今まで精神年齢が同レベル以下の奴らとしか接してなかったからか？こうやって窘められるような事には慣れとらんな。

「ま、いいや。とにかく咲夜が起きたら地上に帰ります。」

もう昼は過ぎたし、早く帰らねば幽香を待たせる。

「いいお父さんなんですね。その子にも奥さんにも。」

「んな事まで読んだんかい。」

七十三、ちょい暴露（後書き）

さとりんが上手く書けないーけど書きたいー。
地底編まだやるよ！多分
感想まっておりまする

七十四、黒歴史（前書き）

短いよ！
どうでもいい話だよ！

七十四、黒歴史

人であって人であらず。

妖であって妖であらず。

神であって神であらず。

幻想郷最強、齢五百を越える漢……

「……それが俺、水元鉄生だッ！！」

「「おお～！」」

猫と鴉が羨望の眼差しをくれる中、さとりの視線は冷たかった。あれ、外したかな？

いやね、暇なもんだからペット達に挨拶をしようと思ったもんだが、まぁちょっと位は厨二っぽくしてみていいかと。いいじゃん、俺の心は何時までも十六歳だぜ（キリッ

……最強？うん、多分（男の中では）。

「今のは話半分に聞いておくとしても確かにお兄さん強そうだね。」

「うん！こんな大風呂敷広げられるんだから強いに決まっていたたたたたたた！」

「お前ら喧嘩売ってるのか。」

お燐お空コンビをアイアンクローで沈没させる。ふははどうだ怖かろう。

「人のペットを握って威張らないで。」

「……はい。」

だってこいつらまるで俺が嘘吐きみたく言うからついカッとなってやった。生き物なら何でも良かった。今では反芻している。

「二十四時間耐久灼熱地獄でよろしい？」

「かまぼこ工場長と申されるか。」

「常夏のビーチに降り注ぐ日光が如く延々に続くスクラッチを提供します。」

いや読んでる人引くから止めろよ、分かんねえよ灼熱なんて。

……ん？

「……山。」

「川。」

……んん？

「……流派！東方不敗は！」

「王者の風よ！」

……んんん？

「……押すなよ、絶対押すなオブェァ！」

……何、だと？何故さとりが俺のネタについて来ている。

「ほら、さっき読ませてくれた時にちょろっと「俺のプライバシィィィィィィィ！！！」

さとりにさとられるのって俺が直接思ってる事だけだと思っていた俺バカス。今考えてる事だけならいいが黒歴史でも触れられたらもお

「お　れ　は　も　う　に　げ　な　い　！」

「逃げないんだぁぁぁぁぁぁぁ！！」

如何、逃げたくなってきた。

七十四、黒歴史（後書き）

只今活動報告でアンケートを行っております。詳しくは読んでね。

ご意見ご感想お待ちしております。後ネタに対するツッコミも。

七十五、技の一号力の二号（前書き）

私立合格ッ！イエーイ！

第一志望は都立高専なんでちょい早いＺＥ

七十五、技の一号力の二号

ヌウウ……まただ……今……また…何者かに見られている感触を味わった…ぞ。

下らない事を宣いながら、気配の出所を探る。

さっきから――俺がさとりに黒歴史をバラされてる辺りから――何やら見られているやうな気がしてならない。

てっきりスネーク娘だと思ったんだがはて無意識を操れるなら俺が見られている事を『無意識』に感じ取る事は出来なかった筈だ。ならば誰だ？

「……伊吹萃香！貴様！見ているな！」

いやまあ想像ついてたんだかね。このネタやりたいが為に引き延ばしました。延びてないが。

「今更？随分前からいたんだけど。」

辺りの霧から萃香の声が響く。何か気色悪い。

「空気を読んでただけだ。姿出してくんねか？」

「いや、私は案内が目的だからね。ちょいと面貸して。」

案内？旧都のか？

「んー……お空、咲夜が起きたら連れて来てくれるか？」

「いいよー、誰を連れてくんだっけ？」

「咲夜。そこで寝てる子な。」

「うん、で、どこに連れてくんだっけ？」

「俺の所。どうせ酒場……だよな萃香？」

「ああ、うん。そうそう。」

「分かった、で、誰を連れてくんだっけ？」

「だから咲夜だって。」

「うん、で、どこに連れてくんだっけ？」

……三歩歩いて無いのに忘れるとは、地獄鴉は鶏より進化していたか。

「ごめん、お燐もついて行ってやってくれるか？」

「はいはい。」

「え～、私一人でも「「大丈夫じゃないッ！！」」

霧がまとわりつきながら、地底の街並みを見物する。霞んで見えないのは仕様。

「観光ったって上とそんなに変わらないだろう？」

「確かにな。上じゃ妖怪が道を歩くなんて出来ないが。」

ついでに道端に飲んだくれて伸びてるような奴はいない。

「あれ？鉄生や慧音は普通にすごしているじゃないか。」

「そりゃお前、俺の人柄があってこそに決まってるだろ。」

あ、霧の粒一つ一つから冷淡な視線が。

「妄言は聞き流すとして、そろそろ着くよ。」

「妄言って……。」

大丈夫、俺はちゃんと嫁がいるリア充だから妄言ではないッ！

……あ、今度は画面外からの嫉みの視線が。ちょ、モニター殴らないで！！

「謀ったな！謀ったな萃香！！」

「君は良い友人であったが、君の実力がいけないのだよ。フハハハ

ハ！！！」

セリフの順番が逆だとか何で萃香にネタが通じるのかなんて俺が考える余裕なんぞ無かった。いや余裕があるならこの場から逃げてる。

『第二万三千二十回チキチキ腕相撲大会』
『飛び入り参加ＯＫ！』
『ポックリもあるよ！』

こんな事が書かれてる看板が店の前に出てる所で警戒すべきだった……迂闊。

「現在のトップは星熊勇義だぁ！今度は誰が挑戦するんださあさあさあ！！」

冗談では無い。さっきから試合を見ていたが俺が相手になる訳か無い。辺りにくたばっている鬼を見れば良く分かる。

「俺はまだ死にたくないぞ、やるならお前がやれ。」

「いやぁ私は負けちゃってね、男なら一発かましてきな～！」

ベシィ、と背中を殴られよろけながら勇義の前に出される。おわ、胸デカい。

「おや、見ない顔だと思ったら幽香の婿じゃないか。あんたが次やるんだね？」

「い、いや、俺は「おおっとぉ！？次の挑戦者はなんとあの大妖怪、風見幽香の夫だそうだ！これはいい勝負が期待出来るぞ！さあ両者

位置について……」まだやるなんて言っとらんぞおい！」

俺の怒声は周りの歓声に掻き消され、やむなく円状のテーブルの前に座り腕を出す羽目になった。

「ふふふ……楽しませてくれよ？」

「……お手柔らかに、な。」

咸卦法、咸卦脈フル発動。霊力と妖力が徐々に減っていくのを地脈でカバーする。

「それでは、レディー……ファイッ！！！」

「「おおぉ！！！」」

全力を込めて腕を左に傾けるが、勇義は微動だにしない。いや、勇義もかなりの力を出しているようだ。

「なかなかやるね……こうでなければっ。」

「勘弁してくれ……。」

少しずつ、少しずつだが勇義の腕が左に傾いてきた……もうちょい、強く！

「仕方ない……全力出すよ！」

「嘘ぉ！？ぐぁえぉ！？」

メキメキと握られる手が軋んできた。クソっ、早く片付けるにはどうすれば……そうだ！

「幽波紋『第三凍結』！食らえぇぇぇぇぇ！」

「スペルカードか、い！？」

空間圧縮を一方向のみかけるその効果さながらエコーズだッ！

「く、おおおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

「ＡＣＴ３　ＦＲＥＥＺＥ！射程距離５ｍに到達しました。Ｓ・Ｈ・Ｉ・Ｔ！（シット）」

「……勝負あり！勝者、挑戦者です！」

気がついたら勇義はテーブルと椅子を突き破って床にめり込んでいた。

七十五、技の一号力の二号（後書き）

久々に書いてて吹っ切れた。

感想待っとります～。

番外編～V作戦始動！～（前書き）

ＰＶが遂に百万になりましたぁ！
これも皆様のお陰で御座います！
つーことで今回から番外編を続けてやりますよ！

ふはははははははは。バレンタインなぞ滅びてしまえ！

番外編～V作戦始動！～

さてここは紅魔館の大図書館。時折授業のネタ仕込みにも利用させてもらうのだが、今回はあるお人からお呼ばれがあったのだ。

「何の用だ、パチュリー。」

「随分な言い方ね、やっと登場出来たのに。」

んな事言ったらレティも輝夜も椛もはたてもメディスンもミスティアも出とらんわ。

そんな事はさておき、動かない大図書館の異名を持つパチュリー・ノーレッジ。何故かは知らんが真夜中に来いとの指令を出して来たのだ。

「まずはこれ見なさい。」

差し出したのはぶ厚い紙の束。羊皮紙かね。

「何々……惚れ薬制作依頼人リスト？」

「そ。最近そんな行事があるって烏天狗が五月蝿かったでしょ？」

「……ああ、成る程。」

十二時を過ぎた今日は二月十四日。バレンタインデーか。

「惚れ薬ねぇ……普通永琳に頼むんじゃないか？腐っても薬師だし。

」

「永琳に頼んでるのは大抵男よ。あの迷いの竹林を抜けていけるような執念を持った、ね。」

「恐ろしや、男の怨念は迷いすら断ち切りますか。」

……ん？だとすれば

「このリストは女性が主って事か？」

「一部は男もいるけど、殆どは。」

ふーん、嫌だねぇそんな薬入りチョコは。

「で、それが何で俺が呼ばれる原因なんだ？」

「よく読んでみなさいよ。」

リストには依頼人の名前、依頼日、発送予定日、実際の発送日、そして……

「……あ？」

使用予定者という欄に、俺の名前がびっしり並んでいる。

「……なんじゃこりゃ。」

「見ての通りよ。モテモテね。」

いやいや。そんな話をして前話で読者にオラオララッシュ並の鉄拳を貰ったんだが。

「悪用されたりしたら困るからこれに書かせたんだけど、まさかこんな事態になるとは思わなくって。」

悪用て、惚れ薬なんぞ何に利用するか。

「因みに効果の程は？」

「少量ならちょっと気を惹く位だけど、大量に飲むと死ぬわよ。」

「んなもん惚れ薬に使うんじゃねえ！」

「薬は毒にもなる事があるの。それ位は知ってるでしょう？」

ハッ、だとすれば……

「俺が調子に乗ってこのリストに乗っている奴らからチョコを貰ったら……」

「鼻血出して死ぬ前に致死量で死ぬわ。」

おう、なんてこったい。

「一人一人には致死量ギリギリまで渡してあるから、安全に食べられるのは一人分しか無い、って考えた方がいいわね。」

「何故俺がそんな綱渡りなバレンタインを送らねばならんのだ……。」

神よアナタは残酷だ。俺も神（笑）だがな。

番外編～V作戦始動！～（後書き）

悲劇。
バレンタインに家族以外から貰ったチョコが

男子からだった。

詳しくは活動報告にあります。興味があればどうぞ。

後アンケートはまだやってるんでそちらも宜しくです。

番外編～蛇ーな任務～（前書き）

いきなりですが宣伝。
作者がもう一本書いている小説があります。
『幻想慰労庵』と言う物です。そちらも宜しく。

番外編～蛇ーな任務～

さてこのリスト、よく読むと使用予定者の欄には俺以外の名前も挙がっている。当たり前だが。

「……寺子屋の男共の名前もあるし、何より森近のが多いな。」

あいつは大丈夫かね、一応教えておいた方がいいか？

「……しかし。」

それよか差し迫った事情がある。俺は今ダンボールを被って空間に溶け込んでいるがそれでもアラートが鳴りそうなんて何それ怖い。何時ものおちゃらけた妖精メイドがスカウト兵になってるよ何それも怖い。

「こちらスネーク。やはり出入り口に見張りがいる、とてもじゃないが気付かれず通るのは無理だ。」

『やはりね、別ルートを探すわ……何よスネークって。』

「ノリ。気にすんな。」

煙草を吸ったりはしないがな。百害有って一利無しだぜ。

『紅魔館の中なら私と通信出来るけど、外に出たら自分で切り抜けなさいよ。』

「……お前が他の奴と繋がってる、て事は無いよな？」

『さぁ？信じないなら信じなければいいわ。』

「ま、そりゃそうだ。俺は一応信頼するがな。」

『一応ってのが引っかかるけど……ＯＫ、一旦地下の入り口まで戻って、そこから連絡し直して頂戴。』

「了解した。さーて、逃げ切れるかな。」

パチュリーのバカのせいで俺の死亡確率が跳ね上がったので、少しでも死亡イベントを回避する為にパチュリーの提案から始まった完全ステルスミッション。

一度でも見つかったらゲームオーバーだよ！コンテニューなんて出来ないよ！打ち止めだよバーロー！

「俺の事だからな……どうせスカーレッツに涙目にされたら死亡確定だ。」

俺がどれほど女に弱いかなんて俺自身が知ってる。殴ったりするのには躊躇しないんだがねぇ。弾幕ごっこで油断したら間違い無く死ねるから。

「ええい、こちらスネーク。地下入り口にも妖精メイドが居座っている。」

『それもお見通しか……流石レミィ、抜け道まで完全に把握してる。』

「俺はあちこち走らせてると践んでいたんだがな。」

ジッと出来ないと言うか、手足をバタバタさせて待ちくたびれるようにしか想像出来ないが。

『あなたがいなければレミィもカリスマに溢れてるんだけどね……。』

「な、なんだってーっ！？」

『ちょっと、大声出すと……』

何時も俺が来ると寝起きみたいなボーっとした顔するレミリアが？
自分で紅茶を淹れようとして緑茶の葉と区別が出来ないレミリアが？
砂糖と塩ならまだしも片栗粉やら重曹やら硝酸と間違えるレミリアが？

帰ろうとすると文字通り後ろ髪を引くレミリアがカリスマに溢れているだと？

「パチュリーその話は後で詳しく「誰だ！」あ、ヤベ。」

妖精メイドにダンボールを取り囲まれ、非常にピンチな俺。ええいここは仕方がない。

「……ニャ～（裏声）」

『うわっ、キモっ。』

紫もやし手厳しいっ！しかし妖精メイドなら切り抜けられる筈だ！

「……何だ犬か……。」

そのまま別の場所に行くメイド達……まぁ、バレなかったからいいか。

「パチュリー、次の指示を頼む。」

『ええ……そのまま地下のフランの部屋に入って。』

「敵の本陣じゃねえか、危険だろ。」

『けど、あなたには丁度いいんじゃないの？』

丁度いい……？一体何の事……

「……ああ、そう言う事か。了解だ。」

番外編～蛇ーな任務～（後書き）

ヤバい、こんなペースだとV作戦がかなり長引きそうだ。
気長に書きますとも。ええ。
気長過ぎるのもなんですが。

感想があると作者は永遠に頑張れます。

番外編～迫撃、ダブルスカーレッツ～（前書き）

変えられる所は変えてく事にしました。

今回の変更点　台詞の後の。を無くしました。

番外編～迫撃、ダブルスカーレッツ～

カツーン、カツーン、と足音を立てながら石の階段をゆっくりと降りていく人影。無論俺である。

『分かってるわね。少しでもミスったらアウトよ』

「まーなんとかなるだろーよ」

右側の壁に手を付き、意識を集中させる。外までの距離、深さ、障害物の有無、これらを確認しながら逃走経路を画策しているのだ。俺だってバカちゃうよ。

「……もうちょい下「見ぃつけた！」ッ！」

階段の上方から聞こえた声に振り返ると、八つの赤い瞳がこちらを見つめていた。

「フォーオブアカインド……フランか」

「そうだよてっしょー。逃げようなんて思わない方がいいよ？」

四体の内の一人が手に持ったチョコを持って前に出てくる。……なんか変な形だな。心臓型？

いやはや、リア充って本当は大変なのかもな。こういうヤンデレもどきにはどう対処すればいいのか位は習って良いかもしれない。

「フラン、どうせパチュリーから聞いてるだろ。そのチョコ食った

ら死んじまうって」

パチュリーによると使う人間が被ってる場合は説明はしてあるとは言っていた。通じてるかはさておき。

「え？大丈夫だよてっしょー」

何がじゃ。どこにそげな根拠がある。

「だって、フランのだけを食べたら死なないでしょ？」

「まぁ、そりゃ、そうだが……」

それは俺が幽香に殺される選択肢だろ。残念ながらそんな選択肢は無い。

「……アディオスアミーゴ！」

触れた壁から岩壁を弄り上への道を塞ぎ、一気に駆け下りる。

『あんな壁、すぐに突破されるわよ』

「足止め位には「ならないよ」……あ、はい」

忘れてた訳じゃないよ、吸血鬼が妖怪の中でもかなりのチートクラスだったって。

何時の間にか一人が俺の右腕を、一人が左腕を掴み、一人が背後に回り羽交い締めにし、そして一人がチョコを突きつけている。

「てっしょー、そろそろ腹括ってみたら？」

「ええい、だが断る！この水元鉄生が最も好きな事の一つは自分で強いと思ってる奴に『ＮＯ』と断ってやる事だ！」

おお、拘束されながらこの台詞を言えるとは。長年の夢Ｎｏ．３が叶ったな。

「ふぅん……じゃあ無理矢理やるしかないか」

「おいネタをスルーす「えいっ！」モゴァ！？」

口の中に甘い感覚が広がり、すぐさまフランの手が俺の口を塞ぐ。

いや、甘いと思ったがなんか鉄の味がするぞ？まさか血入れやがったか！

「どう、てっしょー？」

「ボラボラボラボラ……」

如何、変な声しか出ない。

二分程して、チョコがキチンと喉を通り過ぎて行ったのを確認したフランは漸く手を放し、分身も消した。

「へっへ～、お姉様に勝ったね」

えっへん、とばかりに無い胸を張るフラン。いやレミリアよりはマシか？いやいやどうだか……

「甘いわよフラン、それにお兄様も」

あ、噂をすれば。先程俺が作った壁の瓦礫にもたれながら、レミリアが見下ろしている。

「なによお姉様、負け惜しみ？」

「いいえフラン。寧ろあなたが負けているよ、お兄様にね」

「……ふむ」

確かに成長はしてるようだな。

「それは本物のお兄様ではないわ。本物は……」

言いながら壁に腕を突っ込み、服の端をつかんで引きずり出される。

「……ここにいるわ」

「え……ならこっちは！？」

ふむ、そろそろいいか。術を解かれ段差に溶けるように消える俺の分身を見ながら、レミリアに引きずられていく。

「さぁお兄様、もう逃がしませんよ？」

「……て、てっしょーのバカァァァァァ！！」

泣きながら階下に消えていくフラン。少し心が痛むような痛まない

ような。

『……よし、もう出て良いわよ』

「ふぅ……しかし、こうも上手くいくとはな」

ズルリと天井から降りながら、辺りの壁を直していく。発つ鳥跡を濁さずだよ。

「やっぱ、どっか抜けてるな。レミリアは」

先程レミリアが連れて行った俺。実はあれも石人形だったのだ。こ

れぞスペカ「幽波紋『上面』」だッ！

『早く脱出しないとまた警戒態勢に入られるわ。急ぎなさい』

「わーってるよ」

しっかし、ジョジョ以外のネタスペカ作れないかねぇ。

番外編～迫撃、ダブルスカーレッツ～（後書き）

ネタスペカ大量量産中。本当、ジョジョネタが多いなぁ。

番外編～香霖堂、血に染めて～（前書き）

今更ながらガンダムっぽいタイトルだなぁ。

番外編～香霖堂、血に染めて～

ｓｉｄｅ美鈴

夜霧の中に一人、中の騒動に忘れられた門番が突っ立っていた。

「ふぁ～……」

門番として失格かも知れないけど、やっぱり夜は眠いなぁ……けど寝てたらまた朝食抜きだし……。

「……そう言えば、今日は鉄生さんが来てましたっけ」

あの人はよく食べ物を持ってきてくれて、何時も助けられてる。

「どうせ朝に帰るだろうから、その時に貰えるかな……」

それまでちょっとだけ自主的に休憩を……ん？

「なんか……地響き？」

足下から掘り進むような音と振動が……しかも徐々に近付いて来てるような？

「……まさ「だらっしゃぁぁぁぁぁぁ！！」キャアアアアアア！！？」

突然地面から出てきた銀色で円錐形の物に吹き飛ばされて私の意識はどこへやら。嗚呼やっぱりサボリは良くなかったみたい……

side鉄生

「悲鳴が聞こえたような……」

ゲッター2風のドリルを腕から取りながら、辺りを見回してみる。

「……？気のせいだったか。こちらスネーク。パチュリー、聞こえ

るか？」

『……待って、今レミィがぐずってて……ああもう泣かない泣かない。後で掛け直して！』

一方的に通信が切られた。バックにワンワン泣いてる二重奏が聞こえたような。

「……カリスマはどこへやら。先に森近んとこでも行くか」

しかし美鈴も凄い寝相だな、木の上にぶら下がるなんて。

まだ明けてない空を飛んで、香霖堂の前に到着する。

「寒……忠告ついでに茶でも貰おう」

どうせ本を読むのに夢中で起きてるだろ。思いつつ扉に手を掛けようとすると中から声が聞こえる。

「……なん、だと？」

戸の隙間から見えるはアリスの後ろ姿と楽しそうに笑う森近の姿。二人を挟んでいるカウンターには二人分のカップとチョコが乗った皿……

「……これはこれは……」

袋から射命丸御用達の河童特製超望遠レンズ付カメラを取り出しポジションを決める。

「……ああクソ、望遠レンズ付だと邪魔になるな。ちゃんと外して……」

え？何でマーシー紛いの事をするかって？馬鹿野郎！こんなナイスなタイミングを見逃すなんて俺には出来ねえよ！からかうネタなんて幾つあっても足りない位だ。

因みにｍｙアルバムには幻想郷の住人殆どの写真がある。書こうと思えば射命丸なんか比にならないのゴシップ記事が書けるぜ。書いたら最後、幻想郷から追い出されるだろうが。

「よっし、後はシャッターチャンスを待つだけだ……」

しっかり三脚をセットしてシャッターボタンに手を添える。寒さ？そんなの吹き飛んだね。

「シャンハーイ？」

「違う違う、シャッター」

「シャンハーイ！」

「だから違うって……ん？」

次の瞬間、ファインダーから見える光景が赤一色になった。

「ってそんな冷静なモノローグうわぁ！？」

カメラにベッタリへばりついた上海を引き剥がしながら慌てて口を塞ぐ。如何、ここで気付かれたら折角のチャンスが。

「シャンハイ！」

「ちょ、喋るな！いいや鳴き声か？ともかく静かに！」

上海の口らしき所も塞ぎってああ！これじゃ俺の口が塞げないではないか！

「ただ喋らなければいいんじゃなくて？」

「おお、それは妙案だ。早速……」

よし、これならバレやしないな。再びファインダーを覗き込んで撮

影態勢に……

「……？」

今度は青色しか入らない。はてゴミでもついているのか？

疑問に思っていると前方から巨大なエネルギー（殺気）が。そしてパターン（服の色）青！使徒、じゃなくて……

「そこで何をしていやがるのか説明して下さいね？鉄生さん」

「……あ、はい……」

恐る恐る上を見てみると、般若も赤子に見えるような形相をしているアリス・マーガトロイトさんが二王立ちしていました　まる

「で、用事はなんですか？」

アリスによるキュベレイも吃驚なオールレンジ攻撃四時間耐久戦が終わった後、店の中で勝手に茶を飲んでると森近が声を掛けてきた。

「いきなり用件とは性急な。寿命長いんだから、そう急いては事を仕損じますぞ？」

「自分は半分妖怪ですが、半分は人間なので。性急なのは性分です、申し訳無い」

可愛くねぇ、男が可愛くとも俺は気色悪いと思うが。

「ま、いいや。取り敢えずコレを見てくれ」

懐から例の羊皮紙を取り出し、パチュリーがした説明をする。

「……へぇー」

「反応薄いなオイ」

相手の恋心が凶器な殺人事件が発生するやもしれんのに。……おお、なんかこの台詞格好いいな。後でメモっておこう。

「いや、実はうちでも似たような品物があるんですよ」

「……なに？」

ニヤニヤしながらカウンター下から森近が取り出したのは細い小瓶。

「アリスさんが提供してくれた惚れ薬で、まぁ鉄生さんが言っているのと同じでしょうね」

「待て、お前ら里に毒薬を撒き散らすつもりか？」

つかここに買いに来る客はいるのか？と疑問をぶつけても顔をにやけさしたままだ。

「一度に売るのはごく少量ですし、これの効果も毒素も一日二日で抜けますから」

え、なにそれ聞いてない。カスタマーセンターに連絡しなくちゃ。

「しかし、どうして紅魔館の魔女に頼みに行くのかしら。私の方が腕は……」

「アッチは全方位攻撃して来ないからじゃないかー？」

俺の明らかに挑発した物言いにまたもや青筋を立てるアリス。前はあんなに素直だったのに、誰だオールレンジ攻撃なんて教えた奴は。俺だった。反省してない。

溜め息をついて茶の注いである湯呑みを取ろうとすると……

「……？上海、なにしてんだ？」

こそこそと上海が湯呑みに何かを垂らしている……ってオイ！

「おま、それ、そこにあった惚れ薬じゃねえか！なにサラリと入れてんだ！」

「……チッ」

「え、舌打ち？」

「シャンハーイ？」

いや、今一瞬ナニか黒い物が見えたような気がするんだが。

「……アリス、上海吊れてってくれるか」

「え？ええ、構わないけど……」

外に出て臨戦態勢を取っていたアリスに声を掛け、上海を押し付けた後に素早く店を後にした。

紅魔館の門の修理代、タダ（美鈴が直す為）

俺の超望遠カメラ、胡瓜一年分

俺の（色んな意味での）思い出のアルバム、プライスレス

お金で買えない価値がある、買える物は香霖堂で。

……あれ？幻想郷ってお金があんまり要らないような気がするな？

番外編～香霖堂、血に染めて～（後書き）

ゲッターロボいいよね。漫画は中々スゴいけど。
ムサシの死に様はスゴかった。いやもう、ね？

番外編～寺子屋に花は咲くのか～（前書き）

後一、二話で番外編は終わりまするよー

番外編～寺子屋に花は咲くのか～

妖怪だって生き物だ。寝不足なら眠くもなるさ。

しかーししかし！今俺には寝る事は許されていない！下手したら針にフライドチキンが混入なんて目じゃない位になるかもしれないのだ！

簡単に言うと寝てると慧音にヘッドをクラッシュされるからなんだがな。いやー厳しい。ほら、寺子屋内なら何か飲まされるなんて無いだろうし？

「だ・か・ら寝るなッ！」

……いや、厳しいと言うか、酷い。

「あのな慧音、俺は今日寝ずに紅魔館からの脱出とオールレンジ攻撃耐久戦をやってきたんだぞ。そんな疲れ果てた奴にお前はそんな制裁を「喧しい！」ヒデブッ！？」

「どうせ身から出た錆だろう。能書きを垂れる前に働け」

「……はい」

頭をさする俺の事務机に乗った大量の書類。はて、紙はそんなに幻想郷に流通していたかどうだか。

寺子屋の教師は大変だよ。授業だけでなく慧音がやっている『里の守護』の手伝いもしなければならないから。

大した仕事では無いけど、たまに博麗の巫女が働かない時に――何時もだろ？と言ってはいけない――代わりに妖怪退治を行ったりもする。

俺の仕事は実務とその妖怪を退治する是非を決める事。レティやらみすちーが挙がってた時は何とか止めさしたさ。

つまり、俺の机にあるそれは妖怪退治の依頼書である。妖怪の姿形、大きさ、種族、被害状況等が事細かに記されている。

それを幻想郷縁起又は俺の原作知識と照らし合わせ、危険だと認められた場合は退治をする。

正直、あまり俺はこの仕事は好きではない。事務方もそうだが退治するのは……いや、一応妖怪の立場からして。同胞みたいなものじゃないか？

まぁ仕事はキチンとしますがね。これは人間サイドからしての感情。

「……またルーミアが挙がってる。これで何度目だ？」

「そりゃそうだ、今度は牛が五頭食われたってさ」

ぼやいていると横から同僚（年の差２００弱）が口出ししてくる。

「ハァ、何時も言ってるだろうに。美少女は人類の宝だって。多少のドジは見逃してやればよかろうに」

「……鉄生先生の名前が挙がるのはそう遠くないか？」

「お前、そりゃどうゆー意味だ？」

え？幻想郷の住人に手を出す？そりゃお前、自殺行為。狂気レベルの弾幕かわせる自身があるなら別だが。俺はやんないよ！

「……ハッ！」

如何、ちょっとウトウトしてた。まぁ寝てても慧音が起こさなかったなら大丈夫だ……ろ……

「……」

「……」

椅子の背もたれから身体を起こすと、呆れた目で慧音が睨んでいた。

「アー……オハヨウケイネ」

何言ってもキレられそうだが挨拶を。社交辞令おーけー？

「もう昼過ぎだが？」

「え゛？」

なん……だと……？校庭を見てみるとなんとそこには元気に走り回る子供の姿が！

「ヤバッ、俺の授業どうした！？」

「私が代わりに務めた」

え、慧音が？一体どういう風の吹き回しで

「鉄生、今日はもう上がっていい。お疲れ様」

「お、おお？いきなりどないしたんだ？」

予想だにしない反応。え、まさか解雇通告？いやいやまさか、幾らサボってるからって。

「そんなに疲れてるなら早く家に帰って休め。お前がいなくともここは大丈夫だ」

「……」

なんと、意外！それは心配ッ！

「……？なんだ、変な顔して」

「いや、まさか心配してくれるとは思わなかった」

俺はいま最高に感動しているッ！そんな心境。

「別に私は無理して働かせたい訳じゃないぞ。まぁお前がまだするって言うなら別だが？」

「いえ滅相もない、帰らせてもらいます」

よし、さっさと帰れば安全だろ。その途中で誰かに会わなければいいが……

「おっと、忘れるとこだった。鉄生、口開けろ」

「？」

呼び止めた慧音の手にあったのは、丸くて茶色い物体……あれ？

「モゴッ！？」

「確か今日はバレンタインとか言う日だろう？義理だが渡しておくぞ」

いや、口に直接入れただろあんた。

「さ、早く帰って幽香にでも肩揉んでもらえ」

「いや、幽香にやらせたら肩が砕けるから遠慮する……けーねも早くいい男見つけ「メメタァ！」メゴシャァ！！」

しまった禁句だった。蛙の下にあった石が砕けるような声を出してしまったではないか。どんな音か分かるまい。俺も分からない。

番外編～寺子屋に花は咲くのか～（後書き）

慧音にあんましイイ出番が無かったと思った。
メメタァメゴシャァは気にせず。ノリです

番外編～恐怖、起動ユカリン～（前書き）

何だろ、今までで一番タイトルが馴染んでる気がする

番外編～恐怖、起動ユカリン～

いやはや、バレンタインは里にも結構していたようだ。発生源は文文。新聞だと思って侮っていたか。

と言っても、真に迫るような告白をしている奴は早々いない。殆どはお世話になってるお礼位の感覚だ。

元の次元では全く貰わなかったのだが、こうやって義理チョコを貰うだけで泣けてくる（要約；義理チョコすら貰えなかった）。貰えなかったのはアレだな、俺が美し過ぎてみんなから高嶺の花のように思われていたに違いない。ああそうだともそう思わなきゃやってらんねーよこんちくしょう

「……随分哀しい思い込みをしてるのね」

「誰がか！」

突然現れたスキマに少し動揺しつつ睨みつける。お前はさとりんじゃないんだから心を読むなよ。

「何だ紫、俺はさっさと帰りたいんだが？」

「だったらさっき女の子に告白の仕方を教えてたのはなんだったのよ」

げ、見てたのか。いや紫が色恋沙汰に首を突っ込まない訳が無い。慧音と同様に幻想郷の独り身女性ＴＯＰ５に入っているからな。因みに順位は適齢期からどれほど外れているかで計測しています。一

位永淋、二位輝夜の三位紫、四位が慧音で五位は妹紅（水元調べ）

「さっきの子のチョコはミディアムにしてやったけど、あなたはどれ位の焼き加減がいいかしら？」

「ごめん、俺ベジタリアンなんだ」

「ふざけた事ぬかしてるとウェルダン通り越して消し炭にするわよ」

そんな恐ろしい事をさらりと言ってのける……いや、痺れも憧れもしないが。

「で、もう一回訊くぞ。何だ紫。」

今度は可哀想な物を見る目は止めて、胡散臭い笑みを浮かべ顔を覗き込んでくる。

「バレンタインに美少女が主人公に用と言ったら一つしか無いでしょう？」

「美少女、今貴様美少女と申したか」

自分で言うものでは無かろう。ついでに主人公言うな。

「何だ？チョコでもくれるのか？」

「ふふふ、ただのチョコじゃないわよ。何せ製作期間に半月はかけたんだから」

誰が。紫じゃない事だけは確かだ。

「藍！盛ってきなさい！」

大きくスキマを開け高らかに言い放つと、布が掛けられた大きな物を乗せたキャスター台を藍と橙が押して来た。

「藍……なんかやつれた？」

「当たり前だ、家事を全てこなしながらコレを作らなければならなかったんだからやつれ無い方がおかしい」

「……お疲れ様」

確かにしっぽ（尻尾に有らず）に生気と言うか、艶と言うか、何時ものふさふさ感が全く無い。

「さぁ！私達三人が作り上げた八雲家特製チョコレート、遂に御披露目よ！」

つい最近まで熊の如く寝ていた紫。どこからか永遠亭製の栄養ドリンクを取り出し飲む藍。ぺしょっとしたキツネしっぽに櫛をかけている橙。

……八雲家って何時からカースト制度があったんだ。初めからか。

そんな事を思いつつ、チョコに掛かった布を下ろされ隠されていた物を見……

「……」

空気が死んだ

「どう？『一分の一スケール八雲紫チョコ』を見た感想は」

そこには茶色ではあるものの、扇子を持ち腰に手を当ててしっかり胡散臭い表情まで浮かべた紫がいた。帽子のフリルやリボンまでも精巧に再現されている。

どや顔を浮かべる紫を無視し、藍に話掛ける。

「……藍」

「……なんだ」

「同情する」

「……同情するなら睡眠時間をくれ」

大きく溜め息を吐いた後、二本目の栄養ドリンクの蓋を開けている。哀れなり藍。

「ちょ、ちょっと、モデルには何も言う事無し！？」

「従者を大切はしてやれ、ただそれだけ」

正直今すぐデジョンしてやりたかったけど、いくら何でも藍の苦労を一瞬で無に帰するのは可哀想だ。

「何よ、私だって作るの手伝ったのにそれはないんじゃないの」

「どこを作ったんだ？」

「……下の、土台」

やーいばーかばーかうっさいわね三百歳児何だと紫婆ならそっちは子泣き爺ね加齢臭のクセに生意気だぞよろしいならば弾幕だ

番外編～恐怖、起動ユカリン～（後書き）

次回で番外編終わらせます……多分

番外編～俺らが求めた戦争だ～（前書き）

いきなりガンダムX　関係無いけど
そしてまだ続きます……スミマセン

番外編～俺らが求めた戦争だ～

ｓｉｄｅ幽香

椅子から足をブラブラさせて、時折時計を見ては嬉しそうに顔を綻ばせる。

鉄生が仕事を始めた時は一緒にいられる時間が減るとしょげていた事もあったが、今ではこうやって待っている時間が楽しくて仕方がない。

それに今日は……

「……ちゃんと一人で作れたし、完璧ね！」

あの馬鹿烏によれば、今日はバレンタインと言う女が男にチョコを渡して告白をすると言う日らしい。

里の店で買ってきた物を渡しても良かったけど、やっぱり手作りのを渡してあげたい。

と言うことで、内緒で材料を買い込み、藍から強奪（もら）ったレシピを元に夜な夜な台所で試行錯誤を繰り返して遂に完成させたチョコ。今テーブルの上にあるものがそれだ。

……少し、失敗が多かったような気がするけど。そこは触れないで

「とにかく、後は鉄生が帰って来るだけ……ふふっ、楽しみ……」

自分の作品の出来映えを眺め、ふと日が暮れてきた窓に顔を向けると二つの影が見えた。

ｓｉｄｅ鉄生

里の上空での弾幕ごっこは慧音に殺されると悟り、家に帰りながらの時間制限付きのものとした。

そしたらほら、もう全力で殺しにかかって来てるとしか思えん。スイマセン、スペカは二枚打って良いんですか？一枚じゃ駄目なんですか？

「ほらほら、怒ると顔にシワが出来るぜー」

「うがぁぁぁ！結界『生と死の境界』ッ！！境符『四重結界』ッ！！！」

何だろう、からかいがいのあると言うか、いじりたくなるような。見てると笑える。弾幕の密度は笑えんが。

「ヒョヒョイの、っと。二百そこらのガキに避けられるなんてな。やっぱ歳は取「幻巣『幻光虫ネスト』！」おうわっとぉ！？」

接近するといきなり目の前にスキマが開いたかと思えば、中から出る大量の弾幕に圧倒される。つかキレ過ぎやしませんかね。血圧が心配だ。

「誰のせいでこんなに怒ってると思ってんのよ！！」

「いやーそうやって反応するのが可愛くて」

「なっ……！」

紫の弾幕が止み、口をパクパクさせてこちらを見つめてくる。心なしか頬に朱が差しているのは計画通り。

「……ふむ、使い回しでも紫には通用するのな。あ、安心しろ嘘だから」

さて、読者の皆様には何時使った台詞か分かるかな?答えは感想にでもー

「……てっっっしょぉぉぉぉぉぉお!!」

あ、紫が愛と怒りと哀しみのスーパーユカリンに。格闘だけで一万越え余裕でしたの領域になりやがった。ミノフスキークラフトは必須だよね。

「乙女の純情を弄んだ罪は重いわよ……」

「乙女じゃなくて乙女(笑)だろ。鏡見ろ」

ブチ

「お前がッ!死ぬまで!弾幕をッ!止めないッ!紫奥義『弾幕結界』ッ!!」

「無駄無駄無駄

またもやスキマが目前に開き、中から勢い良く紫が蹴りを出してきた……が

「さよならー」

「って、きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

肉弾戦なんてやろうとするから……俺に受け流された紫は、そのまま我が家に突っ込んでいってしまった。

「あ～あ……今度河童にでも頼んで直してもらわねばな」

崩れた壁の近くに降り、中を覗いて見ると酷い有り様になっていた。台所から居間にかけて突っ込んだらしく、食器棚は倒れ、シンクは瓦礫に埋もれ、テーブル付近もメタメタになっている。

「ったた……何で避けるのよ鉄生！」

這い出て来た紫が理不尽な怒りをぶつけて来たがスルー。幽香が巻き込まれてなければいいが……

「……っと。幽香、大丈夫か？」

幽香はテーブルがあったであろう場所にへたり込むようにして座っていた。

「……」

「おい？ゆ～か～？」

声を掛けても反応しない。はて、蹴りのショックでとかそんな事ではあるまい。幽香がそんな細い神経している訳が無い。

「何？幽香がどうかし『ドグチァ！！』カハッ……」

……紫が、幽香に、瓶で、ぶん殴られて、墜ちました。えるしってるか　きょうきにしかならない　がらすびんは　えがあかい

「……じゃなくて！幽香、一体ど『ガッシ！』ボカッ！」

……この効果音は将来的に本編で言う気がする。そんな事を思いながら俺は地に伏した。

番外編～俺らが求めた戦争だ～（後書き）

さぁ、暴走する幽香を止められるか鉄生！
次回〈私の幽香は凶暴です〉。お楽しみに！

……ネタだよ？変態じゃないよ？

番外編～哀　戦死～（前書き）

お待たせ致しました……番外編最終回です
分かった事は、デレさせようと思って書くと難しいと言う事です
前みたくもっと妄想に身を任せて、流れるように書きたいなぁ……

番外編～哀　戦死～

文文。新聞夕刊　　見出し

〈白昼の狂行！妖怪の賢者、フラワーマスター宅を襲撃！？〉

本日二月十四日は過去に本紙で取り上げた外界での行事、バレンタインデーである。

里では人間が、妖怪の山では天狗や河童が自らの恋を成就させんとする中、一つの事件が『幻想郷のエリア５１』と名高い太陽の畑で発生した。

なんと、あの大妖怪『風見幽香』他一名の家の壁を妖怪の賢者『八雲紫』が破砕させたのだ。幸い八雲氏の破壊活動での怪我人はいなかったが、逆上した風見氏が『鈍器のような物』で八雲氏と自らの夫である水元鉄生の頭を殴打する事態に至った。

取材班が現場に向かった頃には風見氏はその場におらず、二匹の妖怪（八雲氏、水元氏）が転がっていた〈後略〉

s i d e 幽香

「あの～……お客さん、そんな飲み方だと身体に「黙ってさっさと酒持ってきなさい！！」はっ、はいぃぃ！」

あぁもう……何だって言うのよ……。ぐしぐしと皿に盛られた鰻をつつきながら、グチグチと恨み言が口から漏れてしまう。

「あたしはちゃ～んと作ったのに……あんな風にしてさぁ～……あんのバカババア……ちょっと？きーてんの鳥頭！」

「聞いてます聞いてます聞かせていただいてます！？」

すぐさまミスティアが酒瓶を持ちながら現れた。

「よるに一緒にねられないのをガマンしてたのにさぁ～……せっかくのどりょくをど～してくれるのよ！っとに……」

バン、と屋台のカウンターを叩くとイヤな軋み方をした。

「た、大変でしたねぇ。それはそうと屋台をあんまり「でしょ～も～なんで場末の屋台でこんな……」……ええはいそうですねはい」

最早愚痴では無く無意味な文字列と化してきた呪言。誰を呪う訳でも……

「……あのスキマババアわぁ！」

再びジョッキを叩きつけるとカウンターよりも先にジョッキが粉々に砕けた。ミスティアの声にならない叫びを聴いたような気がするが気のせいだ。

と、その時――

「……荒れてるな、幽香」

――一気に酔いが醒めた。

side鉄生

目を覚まして見れば何故か射命丸がカメラをこちらに向けていたので捕縛。状況の確認をする。

今回についての取材を受ける事を条件に幽香の場所を探るように頼むと、ミスティアの屋台にいるらしいとの情報が入ったので射命丸を地中深く埋めて屋台の場所に向かって見れば……

「……荒れてるな、幽香」

うん、そう言う他無い……いやだって、この惨状を見ればそうとしか言えない。

カウンターや地面に撒き散らされた皿の破片、料理の残骸。周囲に熨された妖怪達の死屍累々。そして毒々しい程立ち込めている妖気。

「……」

すごく、怖いです。はい。声を掛けた途端にブツブツと呟いてたのが止まったのも余計怖い。

「幽香、一体何でそんなに怒ってるんだ？」

「……」

ただただ黙り込む幽香、それを後ろから見る俺、屋台の端で隠れているミスティア。

沈黙は金、雄弁は銀とか言うだろ？俺は黙ってた方が特だとしてもこの状況なら喋りたいぞ。つか軽口の一つでも叩かないとプレッシャーが

「……別に」

「ん？」

幽香が何時もより数段小さな声で喋り始めた。

「別に、鉄生に怒ってる訳じゃないわよ……あのバカが……私の作ったのを……ッ」

「作った？」

はて、幽香が何を作ったんだ？壁を粉砕して壊れるもの……花瓶……ないないそれはない、幽香が花を摘む訳が無い……ならば台無しになるものとか……料理……しかし夕飯にはまだ早かったし……絵画……ウチにはキャンバスも絵の具も無い……部屋の掃除……最早

作ってすらいないなオイ。

……思いつかん。

「作ったって、何をだ？」

「……」

むぅ、だんまりだとどうしようもないんだが……

「……幾つ？」

「あ？」

「……チョコ。幾つ貰ったの？」

チョコ……あーそゆことか。

「……そんなに、手作りのが渡せなくて残念か？」

木材がへし折れる音がしたかと思えば、どうやら幽香が手をついて立ち上がった拍子に今度こそ屋台がぶっ壊れたようだ。

「夜中にやってたみたいだけど、俺にはバレバレだったぞ」

「……」

徐々に、幽香の耳やうなじ辺りが赤く染まってきた。本当、弄りがいがある奴らばっかりだな、ココは。

「食器や器具の位置が何時もと違ったり、台所で妙に甘ったるい匂いがしたり。後は……毎晩一緒に寝てる奴がいなかったり。これじゃ俺じゃ無くとも気付くだろーな」

「うぅ……」

ぷるぷると身体を震わせて、両手を握り締めている幽香。何だろう、凄く可愛い。

「……何でわざわざチョコを渡したがる？」

「っそ、それは……その……」

漸くこっちを振り向いてくれたその顔は、泣いていたのか、目が少し腫れていて、頬は酔いからか照れからか分からないが真っ赤になっている。嗚呼如何、直視するとこっちまで顔が赤くなりそうだ……

「……それは……鉄生が、好き、だから……気持ちを伝えようと……けど、あんなになっちゃって……どうしたらいいのか分かんなくて……」

俯いて途切れ途切れだが、はっきりと俺には届く声で話してくれた。

「つまり、想いを届ける筈のチョコが台無しになったから怒った、と……」

「……う…ん」

……ま、紫が悪いなこりゃ。え？弾幕ごっこはお前もしてただろって？喧しい。

「幽香、チョコを作ってくれたのは嬉しい。ありがとう」

「え？あ、う、うん……」

俯いた顔を上がり目が合うと恥ずかしそうにまた地面を見る。落ち着け俺、ビークール。

「だけど、俺はチョコなんて貰わんでも別に構わん。里の奴らからも貰えるしな」

「……そう、よね……」

今度は残念そうな顔を上げ、三度俯く。

「よーするに俺が言いたいのは、想いが俺に伝わってれば、それで俺は十分だ、って事だ」

「……？」

レミリアもフランも上海も。

惚れ薬を使うなんて歪んでると思うかもしれない。だけど、俺には彼女達の想いは伝わった。それこそ十分に。

ま、伝わっていたにせよ薬は飲めないが。なにせ……

「……俺はまだ、大切な人に想いを伝えて無いから、な」

「」

何も言わせない。幽香を強く、強く抱き締める。

戸惑いながらも、幽香はそれに答えるようにゆっくりと俺を抱き締め返し、俺の肩に火照った顔をうずめる。ヤバい可愛い超可愛い。震えるぞハート！燃えつきるほどヒート！！刻むぞ、血液のビート！！！いやこれは違う。

「……あんたら」

「「ん？」」

声を掛けられた方を見ると、そこには何時の間にかミスティアが。

「……ミスティア、何時からいたっけ？」

「最初からだよ！あんたらのせいで皿も酒も屋台もみ～んな台無しになっちゃったじゃないか！」

見てみれば、何という事でしょう。あんなにしっかりしていた屋台がまるで瓦礫のように

……まぁ、それはあれだ。

「平和の為に犠牲は付き物ＳＡ☆」

「夜雀『真夜中のコーラスマスタァァァァァァァ』！！帰れぇぇぇぇぇぇ！営業妨害だお前らぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

怒られた。つか今日はよくスペカを撃たれる日だな。自業自得？大きなお世話だ。

「雑魚が……！きさまのスペルカードが一番……なまっちょろいぞッ！霊波紋『上面～世界～』！」

サーフィスの変異版、見た目をザ・ワールドにそっくりにさせた土人形をミスティアの目の前に出現させてやる。

「う、わ？」

「時を止める能力は無いが、その姿でやる方がいいだろ……オラァ！」

さて、今までのを見れば分かるとは思うが俺のふざけたスペカはＪＯＪＯに、まともなスペカは咲夜さんに結構影響されている。いーじゃん好きだし。ナイフ投げだって赤瀬に教え込まれただけで同じ得物の方が仲良くなり易いかなとかそんな不純な動機は（ｒｙ

まー俺の技なんてたかが知れてるが。赤瀬やルーファスなんかには遠く及ばないしな。無論、美鈴や妖忌にも。人間が勝てる相手じゃねえ……っと、俺は人間じゃなかったか。

「鉄生？どうかしたの？」

「いんや、何でもない」

気付けばミスティアは既に沈んで、幽香は何時もの様に俺の腕を抱き締めている。さっきまでとは打って変わって晴れやかな顔をし頬擦りまでしていやいや落ち着け俺素数を数えるんだ俺。

「……まぁ、帰るか」

side映姫

「……ハァ……」

目の前のシンクに繰り広げられた有り様を見ると、思わず溜め息が出る。

「チョコ、作ろうとしただけなのに……しただけなのにこんな……」

最近鉄生に会ってないから顔を見に行くついでに渡そうと思っただけ……なのに。やっぱり手作りにしなければ良かったのかな……お店で買っておけば良かった……

ガチャガチャと歪んだ調理器具を片付けていると、厨房の外から声が聞こえる。

「……四季様～？ど～こで～すか～？」

古町が呼んでいる……と言う事は、仕事の時間になったと言う事。

ハァ……結局今日中に渡せなかった……クスン

三角巾とエプロンを外し、唯一まともな形になった焦げ茶色の塊を袋に入れて、厨房のドアに向かった。

「せめてこれだけでも明日渡しに行こっと……」

まぁ、鉄生だったら失敗したのを渡しても怒らないでしょう。

ｓｉｄｅｏｕｔ

翌日、太陽の畑で凄まじい弾幕ごっこらしき殺し合いがあったのは余談。

番外編～哀　戦死～（後書き）

番外編終了！ンッン～～♪実に！スガスガしい気分だッ！歌でも一つ歌いたいイイ気分だ～～……フフフハハハハ！ちょっと前に例大祭のカタログを手に入れたが……これほどまでにッ！絶好調のハレバレとした気分はなかったなァ…フッフッフッフッフッ、皆様のお陰だ！！本当にありがとうッ！最高に『ハイ！』ってやつだアアアアアハハハハハハハハハーッ！！！

はい、とゆーことで次からやっと本編です
もっと早く書くようにしますんでこれからもよろしくッ！

七十六、読心者の憂い（前書き）

うーん……まぁ、前話の反動と言いますか、短いです
そして分かり易い伏線です。あんまり真面目に読まない方が作者は助かります

七十六、読心者の憂い

「……それじゃ、迷わないようにね」

「だいじょーぶだいじょーぶ！行ってくるねー！」

空回りとも思えるテンションの高さで咲夜ちゃんの手を引くお空。緊張しつつもその脳天気な雰囲気に顔を緩めている咲夜ちゃん。それと……

「……本当にお空だけで大丈夫なんですか、さとり様？」

何時もは心配なんてしないだろうに、膝の上でお燐はしっぽをくねくね動かして分かり易く心配している。心を読むまでも無いわね。

「大丈夫かって言うのは、お空の案内の事？」

「そうですよ。と言うかそれ以外あります？」

そんなにお空の頭は信用されて無いかしら。確かに忘れっぽい質ではあるけれど。

私が心配なのは咲夜ちゃんの義父ーーー鉄生さんの方。

心を読んだ時にわざわざ記憶まで読み取ったのは、鉄生さんの心が普通の妖怪とは異なっていたから。どう異なっていたか、それはーー

「二つあった……」

「？」

「……何でも無いわ」

私の独り言に反応して顔を覗き込むお燐。よしよしと背を撫でてやると丸くなって目を閉じた。

そう、鉄生さんの心は二つあった。人間なら強いショックや何らかの影響で多重人格になり、心が増える事もあると聞いたが、妖怪でそんな事は有り得ない。妖怪の魂は、心は互いに寄せ集まり易い性質があるから。

心が二つあると言う事は、その人格が統合されていないと言う事。確か鉄生さんは竜神と言う妖怪の魂が身体に入り、この次元に来る事を余儀無くさせられた、と心中で語っていた。時間が経つにつれ何時の間にか現れなくなったから消えたと思う、とも。

しかし、鉄生さんの心にはその竜神の心が多少結び付いていた。それは竜神が消えてなんかいないと言う事。

竜神の心から辛うじて読み取れたのは、激しい憎悪と哀しみ。何に対してとも分からない、読む側が辛くなる程の感情。

しかしそれ程の感情がありつつも、心の出所が、竜神の魂が見当たらなかった。魂と言うより意思だろうか。鉄生さんからはそれを感じ取れ無かった。

記憶を読んだ限りでは竜神がどうこうする事は無かった筈なのに、竜神の存在は確認出来なかった……何故？

竜神は今、一体何をしているの？心が読めないからかしら、こんなにも不安になる相手は初めて。

「……鉄生さん、気をつけて……」

ふっ、と口から漏れた言葉は、膝の上にいる猫しか聞いていなかった。

七十六、読心者の憂い（後書き）

まだ地底に観光中の親子。後一、二話はいる予定ですよー

七十七、闘争から遁走（前書き）

ああ……更新速度が。
本当に申し訳無いです。
そして気付けば９０話。いらない話とか削れば８０話分も無いと思うがねー

七十七、闘争から遁走

ｓｉｄｅ咲夜

「あの、お空さん」

「ん？なにー？」

「本当にコッチで合ってますか？」

「だいじょーぶだいじょーぶ、ここらはあたしの庭みたいなものだから、心配ごむよおだよ！」

……不安しか感じないなぁ。何故だか。

お空さんの案内でお父さんがいる筈のお店に向かってるんだけど……何か、いい加減といいますか、子供っぽいといいますか。お願いだから道が分かれてるからって脇道に入ろうとしないで下さい。猫を見たらすぐにお燐さんだと思って追い掛けないで下さい。店先のガラス玉が綺麗だからって持ち帰ろうとしないで下さい。

そんな感じで今歩いてる小道が本当にあってるのか不安でたまらない。やっぱりお燐さんやさとりさんがついてきてくれれば良かったのに……

「咲夜ちゃん、顔色悪いよ？休もっか？」

「いえ、そうじゃなくて……早くお父さんに会えないかなーと」

「へぇ～。咲夜ちゃん、お父さんの事好きなんだ？」

好きも何も会って一日位しか経ってないけど。

「……まぁ、優しい人だとは思いますけど」

「ふぅ～ん。あれ、そう言えば咲夜ちゃんのお父さんって誰だっけ？」

……ハァ、もういいや。話してると色んな意味で疲れる。

「あ！ほら、大通りに出たよ。やっぱり間違いなんて無かった～」

確かに、賑やかな商店が立ち並ぶ通りに出た。ここからお父さんのいる場所に行けるかは分かんないけど。

「……ん？なにかなアレ？」

「え？」

お空さんが指差した先には鬼？の集団がこちらに押し寄せて来る光景が。その集団の先頭……いや、その集団に追われていたのは……

「……お父さん！？」

ｓｉｄｅｏｕｔ

キラークイーン第三の爆弾『パイツァダスト（負けて死ね）』ッ！

……いや、書いてみたかっただけ。要は少し時間を戻しますって事。

ｓｉｄｅ鉄生

あいたたた手が痛ぇ……流石鬼、握力はとんでもねぇな。

「けしかけた私が言うのも何だけど……まさか勝てるとは思わなかったよ」

「勝ったっつっても能力使ってだ。全力出されてたら確実に潰れてたのは俺だろ」

ＥＣＨＯＥＳが勇義に通じて助かった……いや、最初から全力じゃなくて本当に良かった。あいつが俺の事を舐めてかかってたからか。

「ま、それより。次は誰とやるんだい？」

「あ？」

周りを見てみれば、目を爛々と輝かせた鬼がこちらに歩み出ていた。

え、なにその顔怖い。

「まさかすぐ帰れるなんて思ってた訳じゃ無いだろうね？みんなが満足するまで上には帰さないよ！」

ジリジリと逃げると何時の間にか酒屋の入り口から最も離れた壁際まで追い詰められている。どーすっか……咸卦法で霊力も何も無いし、咸卦脈しようにもこれ以上ここに地脈を通す訳にはいかないし、ザ・ワールドしようにもこう囲まれたらなぁ……

「……しゃーない、強硬突破するか」

掌に空間を圧縮した領域を作り出し、入り口の方向に腕を伸ばす。さぁ、ショータイムだ！

「ふん、そんな事出来るガベラァ！？」

圧縮した空間を一方向に解放させてやるとあら不思議、あんなにうようよいた鬼共が吹き飛んで行くではないか。楽チンだ。

「んじゃさいなら～」

ポカンとしている萃香を無視し、十戒が如く割れた間をひょいひょいと通って外に到着。

「さて、咲夜はどこに「待てぇ！」おろっ？」

「しれっと逃げようとすんじゃない……って逃げるなって！」

鬼の前でそんなに長居するか。回れ右してすぐさまダッシュしていた。

逃げたまでは良かったと思う。だが後ろの軍勢は何だ。

萃香を先頭に魑魅魍魎がその後をついて来ている異様な光景。ああ成る程これが小さな百鬼夜行の由縁なのかそーなのかー。

「……じゃなくて！いい加減にしろ萃香！」

「する訳無いよ～！地底なんかに来る奴ぁそーそーいないんだ、逃がしゃしないよ～！」

なら一人で追いかければいいものを、大勢で追いかけるなよ厄介な！

「時止めする余裕も無いし、如何したものか。せめて咲夜がいれば……」

「咲夜？誰だいそりゃ？」

「一応俺の娘。人間たがな」

「ハァ！？」

走りながら呆れた声を出すとは中々やるようになったな萃香。

「鉄生に娘ぇ？しかも人間だって？」

「そんなに驚く事かよ」

「いやだって、お前みたいないい加減な奴に子育てなんて……」

「子育てっても、咲夜はもうそれなりの歳だし、俺がやるこたあんまねぇよ」

大体、なんで萃香に子育て云々言われにゃ如何のだ。こいつこそダメっぽいのに。

「あ、今こいつだって子育て出来ないとか思っただろ！」

「ご明察、正解者にはこの土人形をあげよう！霊波紋『上面～緑玉法皇～』ッ！」

食らえエメラルドスプラッシュ！と言う事で石つぶての弾幕を放ち

距離を保つ。

「さて……これからどうす「お父さん!?」ん?」

そんな風に俺を父親みたく呼ぶような奴は一人しかおらんな。ふぅ、探す手間が省けた。

「いよっ、咲夜。やっと起きたか」

七十七、闘争から遁走（後書き）

次の次辺りに地底編は終わります多分。
次話はもっと早く更新したいです……。
感想待ってます～

七十八、お迎えでごんす（前書き）

書き直しましたー

七十八、お迎えでごんす

俺に気付いた咲夜が急いで走り寄り、その後をお空が飛んでくる。
……鴉が早いのはさておき、全力で走ってた俺に余裕で追いつくとは咲夜何もんだよ。自信無くしそう。

「おー咲夜、初めて会った時はこんなに小さかったのにまぁ大きくなって」

親指と人差し指をくっつけて見せるとナイフを投げられた。往年の老人ギャグが通じんかったとは。

「そんな小さい時に会ってる訳無いでしょお父さん！状況を考えて冗談言って下さい！」

「何時でも何処でもフルスロットルでふざけるのが俺の信条っとあぶね！親に向かってヘッドショット狙うな！」

そんな風にじゃれあってると突然辺りが薄暗くなっ……

「……な、なんだってー！？」

陰った方向を見ると、そこには大きい萃香が仁王立ちしていた。

「その子が咲夜？鉄生には勿体無い美人さんじゃないか」

「まて、まず言う事がそれなのかチビ鬼」

「人間だと嫁にするなら若い方がいいんだろう？てっきり風見から

こっちに乗り換える腹積もりかと」

咲夜さんは好きだけど咲夜はまだガキじゃねえか、喰いはせん。え？成長したら？おいおいここじゃＲ１８はご法度だＺＥ☆

「……お父さん、ちょっと刺していいですか？」

「落ち着け咲夜、何もお前の胸が薄い云々は関係無ぁぶね！」

ガキのクセに色気づくのは早いなおい。徐々に遠慮が無くなって来てるのは嬉しいが。

「……ねぇ、あたし帰っていいかな？」

「あれ、まだいたのかお空」

何故か泣いて飛んでった。出番があるだけマシだろうに。

「っと忘れてた。萃香、何デカくなってんだ？」

萃香を見上げて話すなんて一生に一度あるかないかだからな、拝んどこうかね。

「なぁに、二対一ならこれ位のハンデは許してもらえるだろ？」

「「は？」」

今何つったこのロリ鬼は、と呆然してると巨大な拳が迫ってきた。

「おい！何時から戦う事になってんだよ！」

「ここは地底だ！地底のルールに則って売られた喧嘩は買っていけ！」

どこの戦闘狂だこいつ。と言うか地底の奴らってこんなんばっかなのか。こりゃ咲夜を先に逃がした方がいいかな。

「咲夜、一人で逃げられるか？」

「え？ま、まぁ、出来るには……だけど」

「だけど？」

「……地上に出る道が分かりません」

……おお！俺も分からない。どうしよう。

「何やってんだい二人共！来ないならこっちから行くよ！」

固まっていると萃香の踵落としが炸裂したので左右に分かれ、領域で咲夜を囲み完全に護る。

「お前の相手は俺だ萃香！元符『マーダードール』ッ！」

咲夜の目の前だしな、少しは原作を意識してやるか。四方八方にナイフをばらまきながらジャンプし萃香の懐に入る。

「甘いよ！」

鳩尾を狙った蹴りは鎖で受け止められ、そのまま足が拘束された。

「さぁ、これで五百年前の借りを返さしてもらうよ」

……ああ、忘れてた。そんな事もあったっけか。

「お父さん！」

咲夜がナイフを構え投げようとするが、俺の領域に阻まれて手を出せないでいる。

「んな情けない声出してんな咲夜、黙って見とけ」

言うのは簡単だけどどうすっかなこの状況。ギリギリ地面に手が届くし、殺っちまおうか……と考えていると、咲夜を護る領域空間にある干渉をされた。

「ッ！？これは……咲夜！こっちこい！」

無理矢理咲夜を俺の腕の中に転移させ領域を解除すると咲夜の周りに魔法陣が浮かび上がり、ふわりと浮かぶような感覚と共に目の前が真っ白になった。

七十八、お迎えでごんす（後書き）

次は同じ位の時間帯から別の場所からのスタートです

七十九、待つ側からのアプローチ（前書き）

今回は三人称視点を目指した
文が単調になりそうで難しいっす……

七十九、待つ側からのアプローチ

紅魔館、図書館。小悪魔に指示を出しつつ本の虫干しをしていたパチュリー・ノーレッジは、ある気配を感じた。

「……むきゅ？」

何時も紅魔館を包んでいる自身の結界が揺らいでいる。直接的に破られるような衝撃では無く、何かの余波に当てられて軋んでいるのだ。

「こぁ、妹様は起きていたかしら？」

「まだ地下でご就職中かとー。それよりパチュリー様、お茶を飲む暇があるなら手伝って下さいよ」

そう答えた小悪魔は埃にまみれ、両手一杯に本を抱えたその姿は分かり易くパシられている。

「使い魔が主人に手伝えって言うの？しかも私が喘息だって知っておきながらあなたみたく埃まみれになれと？黙って働きなさい」

涙目で本を整理していく小悪魔を見送ると、さっきより強く結界が揺らいだ。

妖精達が紅魔館の周辺で騒ぎを起こす事は有り得ない。フランドー

ルが暴れている訳でも無い。

「予測するより直接見に行った方が早いわね……こぁ！私がいなくともちゃんとやってなさい！」

背後から聞こえる小悪魔の恨み言を無視して、パチュリーは外へと向かった。

恐らく美鈴が余波の原因に気付き対応しているだろうと思い、正門の結界の外まで足を浮かべて運んでみると凄まじい妖気の煽りを受けて吹き飛びそうになった。

「くッ、これは……こんなに強い妖気を持った相手だと、美鈴でも危ないんじゃないかしら……」

なんとか妖気の発生源まで進むとそこには二つの人影が激しくぶつかり合っていた。

「どうしたのかしら紅、寝過ぎて頭が働いてないの？」

「頭を使わずとも、そんな突きでは簡単に避けられますよ！」

一方は瞬間的に妖気を発し加速した拳と蹴りを繰り出し、もう一方はその攻撃を紙一重でかわした上でカウンターを放つ。

そのやり取りを一瞬の内に済ましている二人はともかく、それを眺める者には早過ぎて訳が分からない。精々見えるのは拳筋の残映かそれを回避する者の残像。覗いていたパチュリーはそれを追うのが精一杯だった。

「……二人とも楽しそうね……」

時折見える美鈴と幽香の表情。そして交わし合っている言葉。それらだけに注目すればともすると猫のじゃれあいにも見えなくも無い。要は、二人共本気では無いのだ。動きが見えずとも、パチュリーはそれを読み取った。

「けど、いい加減にして欲しいわね……」

確かレミィは美鈴に今夜のパーティーの調理を任していた気がする。そんな事を思いつつ、持ってきていた読みかけの魔導書を開いた。

気が付けば日が大分傾いており、二人の大迷惑な組み手はドローで終わっていた。息一つ乱していない所を見るとやはり本気では無かったようだ。

「あーいい汗かいたー……あれ、パチュリー様。どうしてここに？」

「どうしたもこうしたも。結界に何が干渉したのか見に行ってみればまさか門番がパーティーの招待客と遊んでるとは思わなくて。早く晩餐の用意をした方がいいんじゃない、と言おうと思ってたんだけど？」

元々図書館整理の手伝いをするつもりは無いので図書館に戻っても

よかったのだが、今あそこは埃っぽい上に小悪魔の恨み節を聞きながらの読書は精神衛生上よろしく無いと思ったから暇つぶしに待っていた――とは言わない。

青くなって走っていった美鈴を見送り、今度は幽香を見る。

「で、あなたはどうしてここに？」

岩に突き刺していた傘を難なく引き抜きながら曖昧に幽香が口を開いた。

「ちょっと、ね……鉄生はまだ来てない？」

「まだよ。何時も二人一緒に来るのに、今日はなんで分かれて？」

そう言うと、幽香は顔をしかめながら理由を話した。

今朝方にあの子、咲夜と共に人里に向かった事。昼前までに帰ると言いつつも戻らなかった事。

「それで、先に紅魔館に来てたのかと思ったんだけど……」

門を通り過ぎ、玄関のドアに手を掛けながら溜め息を吐いた。そこまで暗くなる事かと言いたくなるが口には出さないパチュリー。

「……鉄生が咲夜と一緒にいるなら、探す手段があるわ」

図書館脇の実験室に入り、すぐさま魔法陣を書き込む。

「何をするつもりなの？」

不安げに呟いた幽香に早口で答える。

「咲夜にはレミィの指示である陣を仕込んであるの。あの子位霊力が高いなら術の媒体としては充分だから反対はしなかったけどまさかこんな風に使うとは思わなかったわ。この陣で咲夜の陣をこちらに繋げて私が転送呪文を送り咲夜の陣に展開させて発動させる二つの術を同時に使わなければいけない高度なものだけどその分研究のしがいがあった。中々媒体になる人間がいなかったから上手く行くかは分からないけれど……」

「……ふぅん」

半分以上聞き取れなかった幽香だが取り敢えず相槌を打っておいた。

「……よし、これで術を繋げれば……出来たッ！」

薄暗い部屋が陣から出る僅かな光で照らされだした。そして今度はパチュリーがブツブツと呪文を呟き始めた。

「……」

つつつーと壁の隅に下がる幽香の心境は何とも言えないものだった。魔術については何も分からない為か、パチュリーの呪文が独り言の様で不気味さがＬｕｎａｔｉｃとしか。

暫く朗々と続いていた呟き声が何時の間にか途絶え、徐々に陣の光が増してきた。そして――

「ッ！！」

「眩しッ！？」

――輝きが一瞬で最高潮となり、ドサッと何かが落ちる落ちる音が部屋に響く。

二人が目を開いると陣の上には男が転がっていて、その腕には子供が抱かれていた。

七十九、待つ側からのアプローチ（後書き）

やっと、やっと紅魔館に到着
時は動き出すとか書いといてやっと本編っぽい話への足掛かりとか
泣ける。だってまだふざけたいんだもん仕方ない

八十、宴への前に（前書き）

最高に『ハイ！』ってやつだアアアアアハハハハハハハハハハーッ！！！？

前回に続いて書いてたらテンションがＤＩＯってた。よし、そろそろ毎日いけるか？分からない。

他の小説も早めに書くぜぇ～！

八十、宴への前に

……最近背中から落ちる事が密かにブームだったりするのか。そんなに高さがあった訳じゃないからいいけどさ。

「……ここどこだ？」

暗い石室？墓場じゃあるまいに。大方紅魔館の実験室だろうが……

「良かった……成功ね」

「鉄生！咲夜も無事ね！」

パチュリーが出したであろう安堵の声が聞こえた方を向くといきなり誰かに抱き締められた。いや予想はつくが。

「幽香……人前でそんなにくっつくな……」

俺の声はお構い無しに抱きつく幽香を宥めながら、咲夜を解放する。

「あれ……ここって、パチュリーさんの実験室？」

「そう。ここを出る前に咲夜に仕込んだ陣を発動させて運んだの」

疲れたのか椅子を何処からか取り出し腰掛けたパチュリー。いや、休む前に幽香を何とかしてくれ。

和やかに話すパチュリーと咲夜を尻目にイチャイチャしようとする幽香をどうにか正常に戻すと（俺の歯の浮くような台詞に咲夜は顔

を真っ赤にし、パチュリーは溜め息を吐いた。溜め息吐きたいのはこっちじゃ）、今度は俺と咲夜の服に目を向けている。

「鉄生も咲夜も服汚れてるわよ。パチュリー、シャワーと服貸して貰える？」

「いいわよ、妖精メイドを呼ぶわ」

服？咲夜はともかくとして、俺は別にいいだろう。確かに土埃やら汗が凄いが袋にストックがある筈だ。

「おい幽香、俺は代わりの持って……？」

腰の辺りにぶら下げている袋を取ろうとすると手が空を切った。見てみれば何も変哲も無い帯しか腰には無い。

……袋が……無い、だと？

服のあちこちをまさぐり、部屋の隅から隅へと探し回るが見つからない。

ヤバいぃぃぃ！あそこには俺の数々のコレクチオンがッッッ！！淵鬼からパクった武器もそうだし、自分が作ったナイフやら等身大スタンド像やら霊奈の呪符やら地龍の爪とか石仮面とか弓と矢とかシルクハットとか盗撮用カメラとか思ひ出のアルバムとかドラムセットとかブルーリボンとか手裏剣とかワードナの護符とかｅｔｃ

……整理？してないよ。生物とか平気で入れてるけど大丈夫かな。偽物かどうか？さあてね、俺は語るまい。

「……鉄生？」

「い、いや、何でもない。俺もご厄介になるとするか」

引きつった笑いでごまかして、三人に部屋を出るよう促した。

空間を遮断して幽香の侵入を阻みながらの入浴を終え、用意された服を見る。

こういうの何てったっけか。スーツ？燕尾服？

黒いネクタイとワイシャツ。蘇芳色（赤っぽい黒、らしい）の執事

が着るような儀礼服……ん？

「コレ、もしかしてルーファスが着てた服か？」

だとすればサイズがぴったりなのが薄気味悪い。上着の内側やズボンのあちこちにナイフホルダーみたいなポケットがあるんですけど何これこわい。どこの危険人物か。

「ま、いいや。着れれば文句は無いしな」

覚束ない手つきでネクタイを締め、備え付けの姿見で格好を確認する。

「……今だけ人化の術掛けとこうか」

髪の色と角が見事に服と不協和音を奏でている。これはひどい。

「対象、自身、動作、人化……領域内に妖気を封印……」

封印した妖気を咸卦法の要領で神気と同化させそこから霊力に変え、徐々に量を減らしていく。それに伴って白銀髪が黒くなり、角が頭に収まる。

やがて、領域内の妖気を全て消費したら今度は体内に宿る妖力を散らす。神気を体内に巡らせ残さず変換をする。こうしないと体内の妖力が溢れ、真っ先に身体に影響が出るからだ。

「……よし、出来たか」

久しぶりの自分の黒髪をうざったくないよう背中に沿うように纏め

る。髪を短くすればいいだろうがどうやら髪は霊力と直結してるらしく、切ると霊力まで減ってしまう。

「幽香も待たせてる事だし、行きますか」

誰に言う訳で無く呟き、革靴を履いてからふと思い当たった事が一つ。

「……俺、なんで今まで黒袴なんて着てたんだ？」

八十、宴への前に（後書き）

……話が短い？ただ話をぶつ切りにしてるだけ？
きりのいい所で止めないと止まらないだもの。仕方ない
書く時書く時に話を考えるから筆の進行スピードに上下のふれ幅が凄いっすよ

八十一、紅い運命の悪戯（前書き）

レミリアの能力の自己解釈あり。けどこれはかなり納得のいきそうな理由っぽいけどなぁ。

八十一、紅い運命の悪戯

黒髪になった俺を見て幽香は多少は驚いたようだがすぐさま何時ものように腕に抱きついてちょっ胸を当てるな耳に息を掛けるなどこ触ってんだオイ！いや失礼。

咲夜はかなり衝撃を受けたようで、自分の髪色とお揃いで無くなったのが残念だったようだ。あくまで俺が見たようでは、だが。

因みに、咲夜も幽香のお古から着替えて何故かメイド服を着用。何で？え？これしかサイズが合うのが無かった？マジですか。似合うからいいけど。

「……んな事はいいから」

俺の外見を変えてその解説なんて得だよとしか言いようが無いので今日の目的を果たそう。もう結構前の話になってしまったので忘れている読者もいるかも知れないが、今回紅魔館に来る事を決めたのはレミリアに話があるからだ。俺？忘れてる訳ナイジャナイカ。

「さぁて、御当主様は何処にいらっしゃるかね……っと」

ふとテラスに出て見ると、紅い月が輝く下に件の吸血鬼がいた。

「こんばんはお兄様。良い月夜ですね」

「……ふぅむ」

成る程、流石に真面目な話をする時位はカリスマを無くさないか。

「どうせ何時もみたくだらけてると思っていたでしょうが、残念でしたね」

「こんだけ生きててまだお子ちゃまだと俺ぁ泣くぞ。漸くまともになってくれたとしか言えねぇ」

頬を膨らませる位ならまだまだ子供だがな。これ以上弄ったら話が進まん。

「ちゃっちゃか訊くぞ……何故、咲夜を俺の元に差し向けたか。何故、あの子に『十六夜咲夜』と名を授けたか。取り敢えずこの辺を伺おうか」

俺の質問を聞くとレミリアは目を閉じ、手に持ったグラスから紅い液体を飲み干すと静かに喋り始めた。

「まずは二番目の質問にお答えします。あの子に『十六夜咲夜』の名を付けたのは、あの子の運命とお兄様の運命を括り付ける為です」

「括り付ける……？」

目を開き空のグラスを手すりに置くと手を顎に当て、言葉を選ぶようにゆっくりと語る。

「運命を操る程度の能力……これから起こり得る運命を見通し、そしてその運命を起こす、もしくはその運命を防ぐ動作が見える能力……」

「……？」

「要するに、私が運命を操るにはある行動が必要なんです。例えそれが操る運命と全く関係無くとも……だから、私はあの子に十六夜咲夜と名を付け、お兄様の元に行けるよう運命を定めた……名を授けた訳は他にもありますけど」

おーけーすとっぷ意味がよく分からないぜ。誰か分かり易い解説をプリーズ。

「……まあいい、なら何で俺んとこによこしたんだ？」

「それは……」

少し身を引く動作から躊躇っている事が分かる。珍しいな、レミリアが躊躇するなんて。

と思っていたその瞬間、全身が総毛立ち――

「久し振りだな転生、また会えて嬉しいぞ」

――出来れば聴きたく無かった声を、聴いてしまった。嗚呼何てことだ、またこいつが俺に関わるのか。

恐る恐る声がした屋根の方を見ると、黒いローブを頭から被り、僅かに見える顎には髭を蓄えた老人が立っていた。右手には杖、左手は裾に隠しているがナイフを仕込んでいるのが分かる。いや、覚えている。

俺が今まで会った中で最も危険で最も不明な転生者。

「……赤瀬師匠……いや、ルーファス……」

八十一、紅い運命の悪戯（後書き）

これから段々とネタを減らしてシリアスに突入します。ごめんなさい、しかしこれはやらねばならないシリアスなのです

……とか書いといて三話位後にはっちゃけないかなぁ？

八十二、道化の宣誓（前書き）

はっちゃけすぎでも笑って許して下さい
うん、まぁ、一人の読者が笑ってくれれば俺は書き続けます

八十二、道化の宣誓

冗談じゃねぇ……俺も大概だが、これ以上原作介入するチートキャラがいていいのかよ。

目深に被ったフードから聞こえた文言により身体が拘束された時になって漸く俺の目の前にいる存在が認識出来た。

「全く……師匠を闇討ちしようとする弟子がいるか。私とて実力行使に心が痛まん訳では無いんだぞ？」

「生憎、似非吸血鬼と師弟関係を作った覚えは無いんでな」

少し腕を動かしただけで弟子を仕留めようとする師匠なんて知らん。空間障壁で阻まれたナイフを空から抜き取り、ルーファスは軽く笑いながら言い放った。

「私こそ、お前の様な不出来の弟子を持ったつもりは無い。言霊をロクに学べぬ馬鹿弟子が」

理不尽としか言いようが無い。一部だけだが三年で習得出来たのはかなり優秀だと思うんだが。

「それより、彼女に訊きたい事があったんだろう？確か『何故咲夜を自分の元に送ったか』だったか」

彼女て、幻想郷の八割は女性で出来ている中で彼女と言われても特定が難しいんだが多分レミリアの事だろう。

「私が代わりに言ってやろう。何故鉄生君へと咲夜を送らねばならなかったか……それは」

ビシッと杖が俺に突き付けられた時、ローブの奥から異質な眼光を感じたのはそこから放たれた言葉が原因か。

「お前が近い内に死ぬ運命にあり、それを防ぐ為だ」

……？

いやいやいや落ち着け、まだ使って無いネタ、素数を数えるんだ。2、3、5、7、13、17……よし、世界を一巡させる位には落ち着いた。ではさっきの言葉を反芻してみよう。

オマエガチカイウチシヌウンメイニアリ、ソレヲフセグタメダ

……いやいや～、カタカナは無いだろ。ちょっと変換してみよう

御麻江蛾地階宇痴弐氏濡雲眼射弐蟻、曽００布施愚溜田

……何か違うなぁ。もうちょっと直して見ようか。

お前が近い内死ぬ運命にあり、それを防ぐ為だ

……おお、これはぴったりだろ。ん？死ぬ運命？

「……な……ん……と」

……だ……

固まったなんとか口を開き途切れ途切れに驚愕している事を伝えた。

いや、いきなりんな事言われたらびびるて。

「咲夜がいる事は直接的に必要な条件だが、まだ足りん。まだ運命は変えられていない」

「生き死にの運命を操るのは並大抵の事ではありませんし、私も成功した試しはありません。元々許されざる事ですが……お兄様の運命は……あまりにも……」

「ちょちょちょっと待った二人！お前らまさか前から面識があったのか！？」

咲夜を云々と言う事からして、咲夜を育てたルーファスと咲夜に名を与えたレミリアに繋がりが無ければ不可能だろう。

「ええ、二十年位前からの付き合いです。お兄様にも伝えた方がいいと思ったのですが……」

「私が言霊で安全装置をつけておいたから今の今まで私の話題に触れられなかったのだ」

貴様はどこの漫画家かと。最初は言霊が必要だったのにその内実体像を持ち始めるじゃあるまいな。

「～～～まあいい！とにかく、近く俺が死ぬかも知れない、そうだな？」

「……ええ、そうです」

終始カリスマを保ったままのレミリアが暗い顔で答えた。……甘い

なレミリア。

「……上等だ」

「「？」」

首を傾げるのが同タイミングなのは血の影響か。二人を気にせず天を仰ぎ、宣言する。

「俺はお前らみたく運命を見えねぇんだ……精々残った余生をもがいてもがいて生き抜いてやる！運命なんてねじ曲げてやるさ！！」

そうだ、下らねえ事に捕らわれててどうする。俺は今を生きる、それだけだ。運命を他人が操ってどうする。月並みだが、運命は自分自身で決めてみせる。

道化師として幻想郷を生きてきたが、これからもその生き方を変える事はあるまい。これからも面白おかしく、運命さえも嘲って生きてやる！

それが俺の今まで、そしてこれからも変わらない生き方ッ！それが不変の真理ッ！

「俺が死んだとしても！俺はこの幻想郷に生きていた事には変わらない！俺はこの幻想郷に……その生きた軌跡を残す！」

八十二、道化の宣誓（後書き）

シリアスなんて俺にゃあ無理だったと言う訳で
次回からもネタ乱舞で行こうかどうだろうか

八十三、宴の陰で（前書き）

まだまだぱーてーは始まったばかりだ！
本編やっぱつまんないなぁ

八十三、宴の陰で

「……ハァ」

紅魔館の外庭。窓を全て閉め領域を結界の隅から隅まで展開しているが全く効果が表れない。何のって？忘れたか貴様ッ！

「大体、異なる空間を繋ぎ合わせるなんて無理なんだよ……」

そう、外との繋がりが出来てしまっている空間の切れ目を閉じようとしているのだがこれが難しい。俺が能力を使ってる間はいいのだが、力を抜くとすーぐ開いてしまう。

せめて咲夜かルーファスがいてくれればいいのだが咲夜は射命丸に捕まっているしルーファスは知り合いに会いに行くと言って何処へ消えてしまった。

「……紫にバレなければいい「バレないとでも？」……」

……ＯＨ。モルダーあなた疲れてるのよ。だから幻聴が聞こえるんだそうだＳＡＷに違いない。

「現実逃避してるとこ悪いけど全部口から出てるわよ」

滅多に使わないネタを使ってたら扇子ではたかれた。Ｘファイルもジグソウも好きなのになしてさ。

「スキマにアブダクションされたくなければ素直に吐きなさい」

「うるせえデジョン喰らわすぞすいませんごめんなさい許して下さい」

流石に年季が違い過ぎる妖気に気後れしてしまい語るに落ちた。今度はここらでスキマが怖い。

「……で、現在に至ると」

「……」

空間のあれこれそれどれを教えると紫は少し考えた後にこう言った。

「……あなたがここで暮らせば？」

「それは幽香に殺されろと？」

二人揃って移り住むにしても、幽香が育ててる花をこっちに持ってくる訳にもいくまい。そうじゃなくともスカーレッツと揉めそうだ。

「ルーファスっていうのは？」

「あいつは当分戻って来ない。知り合いに会ってから冥界に行くってたからな」

何が目的なんだか。取り敢えず俺は暫く冥界に行かない様にしよう。あ、でもそれだと映姫に会えんか……

悶々と考え込んでいると、館内から声が聞こえた。

「……紫様ー！まだですかー！？」

藍の声か。そういや、紫ってなんでこっち来たんだ？

「紫、文句なら後で言えばいいものを、なんで今俺んとこに来たんだ？」

俺の言葉を聞くと紫は笑みを浮かべながら手を差しのべた。

「一曲踊る相手を呼びに、ね？仮にもパーティーなんだから、暗い話から離れましょうよ」

その顔には何時もの胡散臭さは感じられず、ただただ一つの感情の

み感じられた。

「……ハァ」

幽香になんか言われそうだが……立場を逆転させてまで誘ってくるレディには、それ相応の態度を示さねばな。

「……喜んで。お手をどうぞ」

差し出された手を取り甲に軽くキスをし、壁に開けられたスキマへとエスコートする。

……全く、紫にまで優しくされてるなんて。俺そんなに落ち込んでる様に見えたんか？

八十三、宴の陰で（後書き）

更新速度が安定しない……
他の小説も書き上げねば

八十四、にちぢょう（前書き）

ア〝ア〝ア〝……

憑かれてます……

取り敢えず、お待たせして申し訳ありませんでした……

紅魔館のパーティーの続きは片編変でお願いします……

八十四、にちぢょう

Q．今までは俺以外に時を止められる能力を持ってる奴がいたけど、これからは咲夜がいるからどーなんの？

A．鉄生が能力を発動すると咲夜以外の時は止まるけど、咲夜が止めると俺の領域が勝手に時止めを防ぎます（その間は空間操作不可）

「……いきなり解説してんじゃねぇ！」

昼寝をしていると思わず空にツッコんでしまったが、はて俺は何にツッコんだんだか。

忘れた事は仕方ない。さて、どんな具合になってるかな。

「咲夜ー、まだ生きてるか……ダメか」

特訓用の閉鎖空間（笑）を覗いてみると、今まさにゴールド・エクスペリエンスが咲夜を殴り飛ばしていた。やり過ぎカッコ悪い。

「流石に百人組み手は無理があったかね……」

幻想郷を生き抜く為、を名目に暇潰しに咲夜を鍛えようとしたのだが、正直弱過ぎ。

最初は幽香がやって咲夜をぶっ飛ばしたのはいいとして、俺の場合は師が同じの上に基礎の性能が違い過ぎたので勝負にならなかった。

なら手加減しろって？無茶をいうな、こちとら反射の域でやり合わないと幽香と組み手すら出来ねぇよ。身体に染み付いた技はそうそう抜けない。それでも幽香には勝てんがな！

で、それなら俺の土人形でやらないか？となった訳だが……無理か？適当に組んだ式を乗せた霊波紋人形でも無理か？

ボロボロの咲夜をお姫さまだっこし、霊波紋人形を土塊に戻してからこう思った。

「……やっぱ、幻想郷の標準がおかしいよな」

五百年も経つとさ、幽香が元々どんな奴だったか忘れるよね。ベッドで隣にに座ってるのが本物か分からなくなる。

「あ～～ほんっと可愛いわ～！ちっさくて肌もキレイですべすべで……」

「あうあう……お、お母さん！そんなにギュってしないで……ううう……」

あれ？でもそんな子煩悩だったっけ？ＵＳＣとか言われてなかったっけ？鈍器のようなもので俺を殴打した後、すぐに咲夜を抱いて風呂場に向かったのはどうなんだろう。

「怪我が無くてよかった～……鉄生、ちゃんと手加減しなさいよ」

「手加減が出来ない身体にした張本人が言うかそれを」

俺の声には全く耳を傾けず、お互い下着姿のままで咲夜と戯れている。べ、別に羨ましい訳じゃないんだからねっ！

「お父さん助けて！」

必死になって幽香の腕から逃げた咲夜は俺に飛びついてきた。何だろう、俺の能力に子供に好かれる程度の能力が追加されそうだ。寺子屋でも人気だし。

「だったら私も！」

「て、おいぃ！？」

咲夜なら小動物みたいで可愛いが幽香だといやあの色々当たってます、はい。

「なんだかんだ言っても鉄生だって抱きしめてくれるじゃない」

「……むぅ」

条件反射って怖いね。それはいいけど幽香さん、咲夜を胸で潰してますよ。

八十四、にちぢょう（後書き）

ヤマナシ
オチナシ
イミナシ
……鬱？いいえケフィアです
すいません……まぁ、頑張ります……はい……

八十五、博麗の巫女（前書き）

更新が滞ります、多分
高校が始まるのと同時に、神・夜っちＥＸ氏の小説の丁稚をやるようになっちまったのです
すみません、ですが……面白くなりそうで楽しみなんです

八十五、博麗の巫女

久しぶりの博麗神社。作者は忘れてないよ！ただ博麗の巫女にいちいち名前を付けるのが面倒なだけで（ｒｙ

そんな事はさておき、この腋巫女の腕にいるのはなんだ。

「霊緋（れいひ）、誰の子だその赤ん坊」

「私の娘」

掠めとった茶を噴いた俺に非は無い筈だ。え？博麗の巫女に娘ってなにそれおいしいの？ついでお前未婚だろ待てコラ

「冗談冗談。この前妖怪から外来人を助けてあげたんだけど、この子を置いてどっか行っちゃって」

「ハァ！？」

いきなりの超展開はどういう事？

話をまとめると、霊緋が博麗の巫女に代々続く第六勘が反応し森に行ってみればなにやら妖怪に食われかけてた夫婦を見つけ、それを助けて神社に置いてたら次の日に書き置きすら残さずに消えてたとか。乳離れしてたのが幸いだと言っているが置いて行かれなかったら一番の幸いだと思うんだがどーよ。

「いやお前、まともに生活費すら捻出出来てないのに子供なんて」

「いーじゃないの、可愛いんだから」

これだ。大抵の人は妙にほのぼのしてのんびりいるのが霊緋の第一印象になる。俺の知ってる博麗の巫女でもこんなに平和的な奴はいない。

それもその筈。霊緋の能力は『平和を司る程度の能力』。内容は読んで字の如く、こいつがいるだけで平和に……いや、ボケると言うか。ともかく、歩く平和ボケ散布機と人は言う。

……余談だが、霊緋は麻雀も滅法強い。理由？能力を読み変えたら分かる。分からなくていいが。

「鉄生だって、咲夜ちゃんを引き取ったんじゃないの」

「いや、この神社の家計とウチの家計を比べるな」

働かなくとも食っていける位には貯金はあるし、やろうと思えば八百屋だって米屋だって開ける。やらないけど。

「じゃあ何か、そのまま育ててまさかそのガキに巫女を継がせる気なのか」

「あー、それもいいかもねぇ」

再び茶を噴いた俺に非は（ｒｙ

「ちょ……おまッ、本気かッ！？」

「割と」

いやいやいやいやそんなのへーっとした面で言うことと違うぞオイ！オイィ！？

俺が頭を抱えていると、霊緋が赤ん坊を突き出してきた。

「鉄生、これ位近ければこの子の力分かるでしょ？」

何のこっちゃ、と思いつつ促されるままに赤子を抱える。すると――

「……！こいつぁ……」

赤子の中に巡る霊力が分かる……普通の赤ん坊なら霊力なんざ持つ訳無いし、生まれつき霊能者と言ってもこれは……度を超えている。

「私の力は弱いから、能力に頼って幻想郷を今の状態に保つ事が精一杯。だけど……」

今の状態……霊緋が博麗の巫女になってからの事だ。この所、全く異変が起きていないのは霊緋の能力のお陰とか。

霊緋の手が赤ん坊の頭に触れると、赤ん坊の目が若干開いた。

「……この子なら、能力で無理矢理止めている幻想郷なんかより、より良い幻想郷を作れる。この子なら、異変が起きる平和じゃない幻想郷を平和に出来る。……だから、私はこの子を『博麗』として育てる」

決意表明のように言い切った霊緋の瞳は全く揺らぐ事無く、赤子に向けられていた。

……これ、なんだよなぁ。霊緋は歴代の博麗よりもかなりすっとぼけてるいるが、歴代の誰よりも、平和についてうるさい。活きている平和と死んでいる平和については何度言われたか。

今の幻想郷は、平和だ。だがそれは、霊緋からすると死んでいるらしい。変化が全くないから。

今までの幻想郷は、平和とは程遠かった。異変を起こした奴が言うんだから間違いない。だが霊緋からすると、それは活きている平和だそうだ。異変の度に、みな強くなるから。

……俺にゃあ分からん。しりたい人は博麗神社に行ってくれ。

「……名前は」

「え？」

赤ん坊を突っ返して質問すると、さっきの真剣な声はどこへやら、間抜けな声で返された。

「その子の、名前は」

「あ……それは……」

視線を俺から外の木々に移そうとしたので霊緋の短い黒髪を掴み、現実に引き戻す。

「……分かんないの」

「……ハァァ……」

シュンとしたいのはこっちだ。やっぱなんか抜けてやがった。

「なら、お前が付けてやれよ」

「わ、私が！？」

「簡単だろ。博麗の者だったらまず一文字目は霊、次を考えるだけだ」

今までもそうだった。……まぁ、博麗の巫女の名前なんざ霊奈以外殆ど覚えてないが。

「え～～～～～～っと……」

「ま、考えるこったな。さて俺は「決めた！」早っ」

犬猫じゃないんだから、もっと考えろよ。

「霊夢！この子の名前は博麗霊夢！」

「……そう、か」

……ああ、そうか。そういや前森近が霧雨ん所で赤ん坊を見たっつってたっけ。

そうか……主人公組かぁ……そろそろ死ぬってのに、主人公かよ……

「……鉄生、ちょっと平和ボケになりすぎよ？」

「誰のせいだ、誰の」

霊緋のデコを指で制裁した後、背後に出来た空間の歪みを難なくこじ開け、覗き魔を取り出す。

「あら紫、最近見なかったから心配してたのよ？とうとう永眠したかって」

「しないわよ永眠なんか！さらりと酷い事言わないで！」

覗かれてた事には最早ツッコむ事は愚かであると言うことは幻想郷の常識である。

「で、その子が新しい博麗？」

「そうよー。可愛いでしょ」

まず言うことはそれか。似てない親子のクセに。

博麗の巫女だとは言え、霊緋と霊夢は顔も髪型も体型も違う。無論俺の記憶の中での霊夢と霊奈とでは、だが。

……そういや、霊奈が似すぎだったのかねぇ。やっぱり。腋は出てなかったが。

「……ねぇ霊緋、それなら分かってるわね？」

「え？何を？」

「何を？じゃなぁぁぁぁぁい！修行よしゅ・ぎょ・う！まずはあなたの修行をするわよ！！でなきゃ娘に教えられる事すら出来ないわよ！」

「え～、なら紫が直接やればいーのにー」

「黙らっしゃい！！」

……紫が真面目に話してるようなご時世だ、他人の空似位はなんでもないな。そう思いつつ、ちゃぶ台の茶菓子に手をつけた。

八十五、博麗の巫女（後書き）

博麗の巫女その2、霊緋
名前の由来は前に出た霊奈と霊夢に関係があります。ヒントは五十音です
分かった方は感想にでも～……

八十六、イタい痛い（前書き）

戦闘描写の練習
後伏線

八十六、イタい痛い

妖怪の山、閉鎖空間（笑）内

「……」

何時になく真剣な面持ちの俺。端から見たら確実に「ああ、アイツもついに脳がバーストしちまったか」とか言われるかもしれないが真面目ったら真面目。

そしてまっさらな紙を取り出し厨二な術名を宣誓する。

「……岩漿『熔彼岩』」

瞬間、目の前が白に染まり熱気が押し寄せる。障壁の他にも珍しく結界なんぞ掛けているがそれでも煮えたぎるマグマの熱気は抑えられん。

「対象、スペルカード、動作、記憶、期間……三秒後！」

スペルカードに記憶させる術を三秒の内に纏め上げ、展開し、発動と同時に記録が成される。

俺を中心に時計回りに動く熔岩の弾。単純な弾幕だが、最近漸くこの手の弾幕ごっこが出来るようになったので嬉しい。

「……このままやってみるか……」

少し調子に乗って、以前作り上げたスペルカードを手に取る。残念ながら弾幕ごっこでは使えない『ネタスペカ』の一つで欠点もあるが一番気に入っているものだ。

舞い散った熔岩を再び集め、結界を外し障壁のみにする。身の丈の二回り程デカい熔岩の塊を用意して準備完了。さぁー上手く行くか……

「……焔生、熔かうあっちぃいいいいいいいいいい！！！」

……コレの欠点は、制御がエラく難しいのでよく火傷する事。熔岩って熱いよ、かなり。

永遠亭、永淋の部屋

「はい、これでよし」

お決まりの様に永淋が巻かれた包帯をひっぱたき悶え苦しむ。

「……やっぱ妹紅ってすげーなぁ。あんだけ燃えてんのに怪我すらないのは」

「妹紅は蓬莱の薬を飲んでるからあんな芸当が出来るの。あなたとは違うのよ」

某チンパンジー元首相を彷彿させるセリフを聞くのは何回目だろーか。毎回毎回火傷の度に言われているのでなぁ。

「ま、完全に制御出来るまでやるだけだ。ありがとさん」

「あ、待って」

ワイシャツを適当に着て部屋から出ようとすると、永淋に髪の毛をつかまれた。

「いきなり何しやがる！」

「あなた、目の調子はどうなの？」

俺の怒りは無視ですかそうですか。取り敢えず目が大丈夫である事を伝える為に目の下を引っ張り、ついでに舌の上下性能を知らしめるとバリカンを持ち出してきたので素直に土下座した。

「特に異常は無い。片目だけ別の景色が見えたり妖しいものが見えたりとかも一切」

「なんの話してるのよ」

願いを叶えてくれる店の二代目店主、っても永淋に分かる訳が無いのでスルー。

「不調たってな……確かこの眼球は、直接根元から生やしたんだっけか」

「そう。昔の目はもう完全に壊されてたから治しようが無かったから……無論、試行錯誤してみた結果よ？」

何を試行したのか気になるが気にしない、つか気にしたくない。月の技術なんて分かりませんし。

「……そう言えば、その昔の眼球はどうしたのかしら？やっぱり捨てた？」

「……んー……」

はて、捨てた覚えは無いが……どっかにしまい込んで忘れてるかね。

「多分、どっかにある」

「そう……ま、あれだけじゃ何もないからいいか。じゃあお大事に」

「？あ、ああ……」

何か呟いてたが気のせいかね。とにかく、さっさと寺子屋に行かねばならぬ。

「へーい、こんち「遅いっ！」へぷぁ！？」

教師がお日様が落っこちそうな時間帯に登校するとけーねせんせーから百烈頭突きの刑が処されるのは寺子屋のローカルルール。受刑

者は一人に限定されているが。

「ひでぇ、今日はチャンと来たのに……」

「午前中丸々サボった奴が何を言ってる」

そこ、今日はサボらなかった＝何時もはサボるの認識は間違ってないぜ。

「仕方ないだろ、マトモなスペルカードの枚数を増やせったのは慧音だ」

「だからと言って、仕事を休んでいい理由になるか」

さて、俺が言うマトモなスペカとは。要は肉体強化やらザ・ワールドではなく、弾幕を放つスペカという事。よく考えるとね、俺がいくら霊波紋スペカを作ろうと、弾幕ごっこでは使えないって訳で。

こんな事を気にする要因は慧音の手伝いにある。話の通じない低級な妖怪はともかく、ルーミアやチルノを追っ払う時に慧音がツッコミを入れたのだ。そんな装備で（スペルカード）（ルール的に）大丈夫か、と。

とやかく言われて実戦でネタスペカの大半が使用不能になり、最初の内は咲夜さんからパクった技を使って凌いでいたが、見様見真似だから質が悪い上に三次元的に弾幕を放てなかった為にあまり役に立たなかった。咲夜に教える分には問題無いんだがなぁ。

で、それなら自作のでいいじゃないか、とまさに天啓と言いますか発想の転換と言いますかただ単に面倒だった事に目を向けたと言いますか、まぁそんな感じで。頑張ってるんだよ俺も。

因みに、俺がまともな弾幕ごっこをするようになったのには里の人間達はあまり良く思っていないようで。殺さずに妖怪を野に放置しているのが気に入らないご様子。俺らは妖怪専門の殺し屋かよ。退魔師でもあるまいに。

「さっさと作れ作れうるさかったクセに……っと、俺の受け持ちは？」

「いや、午後は特別授業を用意しているから、生徒には帰させた。尤も、鉄生にのみの研究授業、だが」

「そんなぁ行き急いでるからって既婚者に逢い引きを持ち掛けすみません調子乗りました頭を離して下さいお願いしますすみませんでしたから！！」

最近俺が慣れてきたんだと勘違いしているのか、頭突きの威力がかなり上がってきている。当たりどころが悪ければ俺でも死ぬぞ、あれは。

「全く……私だってそーゆー相手がいない訳では無いんだぞ！この前だってお、男と、酒屋になぁ……」

「あ、教員と飲みに行ったのは俺のシマじゃノーカンだから」

顔を火照らせた慧音が固まったのを見計らって窓から脱出。風の噂では慧音は男と手を繋いだ事すら無いんだとかどうでもいい。

俺の領域には弱点がある。

一つ、無数に分けられない事。だから、障壁を張りながら転移は無理だ。ついでに時間停止も防いだり行ったりしていると領域は使えない。

そしてもう一つ、人化時には次元に干渉出来ない事。まぁこれは元に戻れば済む事だが、あまり妖気を垂れ流しにしたく無いので難しい。知ってるか?俺の妖気って自分では操れないだぜ?だから言霊を使わなきゃいけない訳で。

なんでこんな事を言い出したかと言うと……

「マスパを弾きながら攻撃なんざ出来るかぁぁぁぁぁ!!つか能力制限あんだから無理だ!!」

やる事ないから家に帰ってみたら幽香に（組み手的な意味で）襲われました。

「あら、口ではそうでも身体は動いてるわよ？」

幽香のマスパでは空間障壁とそれで固めた霊気を組み合わせた拳でも軌道を変えるので精一杯だ。つか無理です。一発一発で障壁が剥げます。

「ほらほらっ、キチンと避けるなりなんなりするっ！」

「んな、むちゃ、なぁ！」

弾幕よりも格闘の密度がヤバい。誰か美鈴呼んできて。

後ろに下がるとマスパの連打、近くだと幽香ラッシュ。ならば……

「突破する！一閃『方天戟』！」

「ッ！？」

霊気と僅かな神気を混ぜた球を領域で圧縮、それを鬼の酒場で見せた空間の弾丸と共に発射させる。領域や障壁は空間系能力持ちじゃないと感知出来ないから、いける！

「……やっ、たか？」

「残念♪」

立ち込める土煙の中、俺が吐いたセリフは死亡フラグだと気が付い

たのは幽香にノックアウトされてからでした。手加減無しに振り下ろされる傘って痛いんだね、うん。で、なんで抱きついてるのかな幽香。火傷がかなり痛いんだけど。嬉しいよ?嬉しいけど今やる事は取り敢えず家に運んでくれませんか?すいません幽香さん、意識が遠退いて来たんですけど?なんか寒いし、頭ん所からなんか暖かい液体が出てるんですが?好き?ああそうですか俺も大好きだけど分かったから早く手遅れになる前に運んで下さい。

生傷が絶えない今日この頃。俺の明日はどっちだ。つか明日あるのかこの状況。

八十六、イタい痛い（後書き）

咲夜書きたいよ咲夜
幽香可愛いよ幽香
揺れ動いております

八十七、親の心親知らず<前>（前書き）

気が付いたら１００話越えてました
まぁいらないのを除いたら１０話位減りそうですが

そして前後編ですが……何時も通り真面目に読まないで下さい

八十七、親の心親知らず<前>

モニターの前の諸君、突然だが弱点はあるかな？因みに俺の弱点は女性の涙さ（キリッ

……あ、止めて！ブラウザバックしないで！生意気な口きいてスイマセン！

下らん事はともかく、人間乃至妖怪、誰しも弱点はあるようで。例えば幽香は耳を弄ると可愛い声で鳴いてくれますってんな事はいいからどうでもいいから。

で、中には食べ物に弱点がある人もいる訳で……

「……ぅぅぅ……」

……我が家の昼飯時に咲夜がその一人だったと露呈したりする。要は好き嫌いだが、何故食えないのか分からない。

「こーら咲夜、残さず食べなさい」

板が付いてきたエプロン姿の幽香が、珍しく咲夜に注意する。まぁ何時も咲夜が優秀だから注意する事も無いんだが。

「……だって」

「だってじゃないの。美味しいわよ？」

咲夜の目の前にある皿には、数種類のナッツが炒められたおかずが

こんもり盛られている。酒の肴にもなるし作るのも楽な料理で、俺はそれなりに気に入ってるんだが。

「咲夜、もしかして豆とかダメなのか？」

「……うん」

うんって言ってくれるのはあれだよね、他人行儀じゃ無くなったって事だよね。可愛い顔を赤らめてる咲夜可愛い。

「苦手だからって残すのは許しません。早く食べなさい。あ、鉄生は食べちゃダメだからね！」

「チッ……」

くそぅ、釘刺された。では肴は如何しろと言うのか。取り敢えず幽香が鼻歌を歌ってる姿を見ながら飲むことにしたら包丁投げられた。照れ隠しにしてはやけに的確に投げましたね、ヘッドショットて冗談にならんわ。

「……御馳走様でした」

「あ、待ちなさい！」

幽香が振り返る前に椅子から降り、居間の扉を開けようとするが、甘いぞ咲夜。

「……！」

「ま、食べる云々はいいとして、逃げるのは良くないぞ」

扉に手を掛けた格好で固まる咲夜。その身体には無論掌握領域が広げられている。やはり便利な空間固定。

「どうして逃げようとするの咲夜！」

「……」

迫る幽香にぷいと顔を背けて見るからに不満そうな咲夜。どーすっかな、どちらに加勢すべきか……下手打ったら弾幕ごっこに……はならんか。ナイフは預かってるし。

「幽香、好き嫌いで怒鳴り散らさんでも「鉄生は黙ってて！」ハイ、サーセン」

仕方無いのでお父さんは酒を消費する作業に戻るよ咲夜。ああ怖い、やはり幽香には適わん。

「咲夜！答えなさい！」

「……」

頑なだなぁ、そんな所は母親譲りで無くても良かろうに……。

「咲夜ッ！！」

苛立った幽香が咲夜の腕を掴もうとするが、固定空間に阻まれてしまう。いや、睨みつけられても。捕まえるにはしゃーないし。取り敢えず外すんで睨むのは止めて下さい。

「……？」

領域を取っ払うと、すぐさま咲夜がドアを開けて廊下に駆け出してしまった。あり、何故に幽香は捕まえない？

「……ハッ！ちょ、咲夜待てゐ！」

慌てて廊下に顔を出して咲夜の姿を探すと、玄関の方向に走っていく咲夜が見えた。

「待てっての！……って、あら？」

領域を伸ばして捕獲しようとするが発動しないぞオイオイオイオイ？そうこうしてる間に咲夜は角を曲がってまうし、領域は身体を覆っているだけで動こうと――

「――まさか……咲夜！勝手に能力使ったな！」

「……」

ぴょこんと陰から横向きに頭を出した咲夜。俺が呆然としてるのをよそに、悪戯に成功したガキんちょみたいな表情を浮かべている。

「お前なぁ、逃げなきゃ俺だって叱ったりなんかしないから言ってるそばから逃げんなっての！」

咲夜は俺の話をろくすっぽ聞かず、紅い瞳のままアカンベをして去っていった。

外まで追おうとしたが、庭には背の高い向日葵が咲き乱れている。

無理に連れ戻そうとして花を傷付けでもしたら時が止まってても幽香が飛んできそう。

「……能力はまだ使うなってんのに……」

俺でさえ人化を解かないと安定して止められないのに、人間のお前が長く持つわけ無いだろ、と言いたい言葉は飲み込んで、先ずは……幽香に説明しよう。

居間に戻るとさっきと同じポーズの幽香が出迎えた。……怒ってても可愛い顔だとは思ってても言わない。言わないったら言わない。

咳払いもほどほどに、固まった幽香に触れながら掌握領域で覆ってやると、止まっていた幽香の時が動き出す。

「……くやッ！！……あれ？」

咲夜を叱りつける勢いがそのまま動き出してしまうので、後ろから肩を掴んで引いてやる。

「『止まった時の世界』へよーこそ、幽香。見えてるよな？」

「……？」

おどけた調子の俺を見てポカンとしてるって事は、どうにも状況が飲み込めて無いみたいだ。

「簡単に言うと、咲夜は能力を使って逃げた」

「えッ！？」

ま、驚くわな。今まで良い子だったのにいきなり脱走なんだから。
今まで猫被って……猫……猫耳……ねこしっぽ……もふもふ……

「……鉄生、今限りなく余計な事考えて無い？」

「キノセイ」

年を取ると余計な事ばかり思い出すんだと言ったら蹴飛ばされた。
そう言えば幽香は俺より年上だったね、忘れてた。

八十七、親の心親知らず<前>（後書き）

中途半端な所ですみません
次話から頑張る

八十八、親の心親知らず<後>（前書き）

難しかったんだぜ
鉄生の無双注意

八十八、親の心親知らず<後>

side咲夜

家を飛び出し花畑を抜け、森の中に来て漸く立ち止まれた。だが、止まって周りを見回した瞬間に後悔の念が押し寄せて来てしまう。

日が暮れるまでにせめて家に帰らないと危ない。いや、日が暮れていなくとも一人でいるのは危険なのに……下らない事で言い争って、おめおめと家に戻るのは無理だ。

「どうしよ……」

呟いた所でどうしようも無いのは分かっているが、どうしても口からついて出る。空を飛ぶ方法は教わってない、ナイフは全部置いたままだし、がむしゃらに走ってしまったから道も分からない。妖怪にでも襲われたら……

頭を振るって最悪な想像を散らす。きっとそうなる前にお父さんが助けてくれる……

「……と、とにかく、歩こう！」

止まっていたら何も始まらないし、もしかしたらココを出られる……かもしれない。

「さっきの所で待ってれば良かった……」

初めて来た時には真っ直ぐ走っていれば花畑に着いたのに、なんでこうも森の奥に進んでしまうのか。私、本当は方向音痴だったの……？

「本当にどうしよ……帰れない……」

そう思ってしまうと不意に視界が歪み初め、脚の力が抜けてしまう。どうして、本当に下らない事でこんな事に……。言い争った気まずさなんかもう気にならない。早く帰りたい。帰って、謝りたい。自分の我が侭のせいなら、謝りたい。

「お父さぁん……」

ポロポロと溢れ出す涙が地面を濡らす。

「お母さぁん……」

口から出る言葉が、自分の軽率さを戒めている。

「……ごめん、なさい……怖いよぅ、お父さん……ごめんなさい……」

何故、自分が謝ってるのか。何故、自分が泣いてるのか。何故、自分がへたり込んでいるのか。分からない、分からない、分からない。

でも、謝らずにはいられなかった。泣かずにはいられなかった。へたり込まずにはいられなかった。

自分の犯した罪が膨れ上がって、押し潰されそう。怖い、イヤだ、恐ろしい。

その時

「――――――」

「……え？」

有り得ない事が、起きた。

目の前には何時の間にか巨大な赤黒い姿がいる。よくよく見ると、細長く、両側から枝のような脚のようなものが生えている。

その生物――一般的には大百足と言われる妖怪――が、動いた。

「う……嘘、だって、私は……ヒッ！」

時を止めてる筈、と言おうとしたが、大百足がその巨体を揺する姿に言葉が詰まる。

「――――」

ザワザワと脚が蠢く音。昆虫特有の口が開閉する怪音。その音に獣が逃げるざわめき。

その中で、私は只、座り込んでいた。

「あ……ああ……」

足は震え、口は開いたまま、目を見開く。

逃げまどい、悲鳴を上げ、目蓋を閉じる。たったそれだけの事が出来ない、私の身体。目の前の現実を否定する行動が、何一つ出来なかった。

「――――」

不気味な虫の頭部が近寄り、その牙を閉じようとしている。逃げなきゃいけない。でも身体は動かない。何でなの？何で？なんで？ナンデ？

誰か、助けて、って、言わなきゃ。このままじゃ死んじゃう。

「……て」

助けて

「…けて…」

助けて

「たす、けて……誰かぁぁ！！」

声を紡ぎ出しなんとか文言にするが、森の中でそれに応える者はいなかった。

「絶界『次元断裂』」

――森の中では、だが。

ｓｉｄｅ鉄生

咲夜の時間停止が無くなったので、急いだのはやはり正解だった。
キモい虫野郎と咲夜がご対面とか俺が全力で否定する。

「咲夜、大丈夫か？」

人化状態での限界、掌握領域内の空間を次元から切り出すと言う荒技のした後に咲夜に話し掛ける。見たところ外傷は無いが、ちょっとアレはキツいかもな。虫だし。

「……」

「咲夜？……ダメか」

座ったまま気絶してら。まぁそっちのが都合はいいか、これから起こる事を鑑みて。

隔絶された次元でのたうち回る百足を見て、先程まで抑えていた怒りが込み上げてくる。

「……妖怪に、人間を襲うな言うのが酷な話だとは思うがなぁ……」

妖力を霊力に変える作業を止め、人化を解除する。あー、如何。なんかこう、凄く『殺し』がしたくなってきた。

「俺の娘に手を出すってぇのは、神に喧嘩売るのと同じだぞ？……その覚悟、見させてもらう」

咲夜の髪よりも明るい、白銀。髪色が完全に戻ったのを確認して、詠唱を開始する。難しい筈は無い。不可能な事でも無い。元よりこの身体は、唯それだけに特化した能力――――って訳では無いが、それなりに自信のある技なのは確か。

Ｉ ａｍ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.

体は剣で出来ている。

Ｓｔｅｅｌｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｆｉｒｅｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.

血潮は鉄で、心は硝子。

Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａ ｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Ｕｎａｗａｒｅ ｏｆ ｌｏｓｓ.

ただ一度の敗走もなく、

Ｎｏｒ ａｗａｒｅ ｏｆ ｇａｉｎ.
ただ一度の勝利もなし。

Ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｗｅａｐｏｎｓｗａｉｔｉｎｇ ｆｏｒ ｏｎｅ'ｓ ａｒｒｉｖａｌ.
担い手は此処に独り剣の丘で鉄を鍛つ。

Ｉ ｈａｖｅ ｎｏ ｒｅｇｒｅｔｓ. Ｔｈｉｓ ｉｓ ｔｈｅ ｏｎｌｙ ｐａｔｈ.
ならば、我が生涯に意味は要ず。

Ｍｙｗｈｏｌｅｌｉｆｅｗａｓ”ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ.”
この体は、”無限の剣で出来ていた”。

「完全掌握『無限の剣製（アンリミテッド・ブレードワークス）』」

瞬間、百足の脚が数本飛び散る。おー気色悪い、お食事中の方は申し訳無いぜ。

なにやら液を吹き出す百足を余所に、地面から生え出る剣はワザと酷たらしく脚を切り刻んでいく。本当は俺が直々にやるべきなんだろうが、生憎と俺はあーゆー脚がわしゃわしゃしてるのは嫌いでねぇ。その代わり、遠隔操作で徹底的にやるが。

ミミズの様になった百足を、今度は尻尾から輪切りに刻む。剣の切

れ味がいいのか、それとも切れやすい質なのかは知らないがスパスパ切れて中々楽しかったり。

頭だけになってもしぶとく生きていたが、黒ひげ危機一髪風にしてやればあら不思議、あっと言う間に百足の仏さんの出来上がり。

「……呆気なさすぎだろ。もちっと保つかと思ったのに」

数分もしない内にその次元は、剣と百足の残骸しか残らなくなっちまった。こんなのは即デジョン決定だな。いや、このまま消した方がこの世の為か。

「さて、咲夜を運びますかね」

未だに気絶している咲夜をお姫さまだっこして空に舞い上がる。かっるいなぁしかし。

「……んぅ……」

「お、起きたか」

もぞもぞと首を揺すり、寝ぼけ眼でこちらを見つめる咲夜。お持ち帰りしたいってしてるんだっけ。

「……おとう、さん？」

「おうともさ、こんな凛々しい男はそうはいないぞ」

何時も通りの虚言を吐き、笑いを取ろうとするも無反応。芸人気質の俺にはこの反応は辛い。

「あー……咲夜、まだお笑いについて教えとらんかったがここは笑うとこ「お父さんッ！」おぉ！？」

縮こまっていた咲夜の腕が、急に首に掛かってくる。本当にお姫さまだっこじゃねぇか、この格好は。

「お父さんッ、お父さんッ……」

「……まぁ、なんだ？取り敢えず、落ち着け咲夜」

このまま幽香みたく首でも絞められたらイヤなので近くの木に降り

る。なんかミシミシ言ってっけど大丈夫だろ。

「怖、くてッ……ひくっ、怖くてぇ！！」

「わーった、わーったから。おーよしよし」

あっという間に夜の静寂は咲夜の泣き声に塗り替えられた。咲夜ってこんなに泣き虫だったのか？認識を改めねばな。

そのまま咲夜は俺の胸で思う存分泣き散らし、漸く落ち着いたのは東の空が明るくなる頃だった。そんなに怖かったんかな。

八十八、親の心親知らず<後>（後書き）

衛宮君の真似事がずっとさせたかった自分がいた。大地を操る程度の能力ってその為につけたと言っても過言では……過言か

次回にちょっとだけ続いたりする

八十九、べんきょうのじかん（前書き）

タイトルと内容が噛み合ってないっすよ

あ、今更な告知ですが、最近最初のあたりの話を書き直しています。
今までのが酷すぎたってのもありますがね

八十九、べんきょうのじかん

「あれ……お父さん、お家の方向と違うよ？」

泣き止んだ咲夜をおぶって飛んでいると、咲夜がそんな事を言ってきた。おぶると言ってもほぼ水平に飛んでいるので、咲夜が乗っかってる様な形だ。

「んー、ちょいと用事がな」

「……お母さんにも心配かけちゃったから、早く帰って謝りたいよ」

しまったなんでおぶってるんだ俺。今ならｂｅｓｔｓｈｏｔが大盤振る舞いだったろうにこんちくしょう。だってそんな寂しそうな声出してお父さんは胸が一杯ですよ？

……最近思考がおかしくなって気がする。こらそこ、元からおかしいとか言うなよ？絶対言うなよ！？

「幽香にはキチンと伝えてあるから大丈夫だ。それより……」

「それより？」

咲夜が俺の言葉に反応して聞き返すが……答えてもなぁ。どうせどうしようも無いし。

「……腹、括っとけ」

「？」

俺もタダでは済むまい。まぁ咲夜の代わりになる位なら出来なくも無いが……いや、身代わりになる前に俺が死んでたらどうしようも無いよな。そうなったら俺ぁ知らん。

「それより、今の内に寝とけ。結局寝る時間無かっただろ？」

悶々と考えるより、咲夜を寝かしつける方が俺の精神衛生的によろしい。

「ゆっくり飛んでるから、十分に時間は……？」

「……」

「……咲夜？お～い……」

幾ら呼び掛けても応答が無い。……まさか

「すー……」

「……はっやいな、おい」

一旦止まって咲夜を背負い直して肩越しで覗くと、俺の髪を握ったまま眠りこけていた。……髪握んな、サービスショットはともかく髪を握るな。

「むぅ……ま、いいや」

このペースなら、三時間位で寺子屋には着くかな。それまでの辛抱。色んな意味で辛抱。

大体どれ位経ったか、寺子屋に着いた頃には東から覗いていた日がもう頭上から里を照らす様になっていた。

「よっと。咲夜、着いたぞ」

「……む～」

「むーじゃねぇ、オカルト雑誌じゃあるまいに」

宙ぶらりんの格好になっても背広や髪を放そうとしない。痛いし皺になるのはイヤなのでそのまま落とす事はしないでも首根っこを掴

んで無理矢理立たせる。

「ふぁあぁぁ……」

「ほれ、しゃんとしろ。みんなと対面だぞ」

「みんな……？」

まだ寝ぼけた声を出している咲夜の手を引き、寺子屋の門をくぐる。もう生徒の休み時間になっているから、校庭ではボールを蹴って遊ぶ子や竹馬に乗る子等々がいる。

「ふわぁぁ……」

「どうだ？ここが寺子屋だ……っと？」

数秒間呆けた顔をしていた咲夜だが、他の子からの視線が集まると共に俺の影に隠れてしまった。

「先生。その子、新しい生徒ですか？」

物珍しい様に遠巻きから見つめていた子供の中から、高学年の子から質問が出た。

「まーな。仲良くしてやってくれ」

益々強まる好奇の目から逃れるかの様に俺の足にへばりつき、髪を握ってくる。ちょっと人見知りなのか？まぁ育ての親がアレだからな、俺は悪くない。

「銀色の髪だぁ……水元先生とお揃いなんですね！」

「まぁ、俺の娘だしな。一応」

俺の言葉で生徒達にどよめきが走る。なんだよ、俺に娘がいて悪いってか。

「っと、挨拶がまだだがこれ以上慧音を待たす訳にも如何からな。後で遊んでやってくれ」

髪を掴んだままの咲夜を引き摺って、人だかりを切り開く。生徒達と仲良く出来ればいいがなぁ。昔程じゃねぇけど、見るからに人と一線を画している奴は疎まれる風潮があるから不安だ。俺も人化してないとジロジロ見られてまうし。

「……妖怪じゃないなら、大丈夫だろ」

あくまで咲夜は人間だ。それをキチンと分からせれば、友達だっていくらでも出来るだろ。

そう結論づけ、足早に職員室へと向かった。

八十九、べんきょうのじかん（後書き）

更新速度落ちたなぁ……だからって放置はせんよ？
片編変は止まってますが……お恥ずかしい限り

九十、授業の予鈴前（前書き）

なんか筆が進まんかったです……何故だろう

九十、授業の予鈴前

「おや、珍しく誰もいないとは」

ガランとした職員室のドアを開けてまず目に入るのは、入り口右手の壁にある馬鹿デカい本棚。ここには、主に通常業務で使う教科書や問題集、出席簿等がしまわれている。

まぁ、俺や慧音その他古株の先生方はここにある問題集は使わないようにしている。実はコレ、開校以来から内容が変わってないんだよね。兄弟がいる所だと答案を写して宿題を済ませる可能性があるのさ。

……俺にそーゆー経験があるからこんな事に気付いた訳じゃないぞ？

そして室内には真ん中に１４個、窓際に３個、そして校長である慧音の机が１個、部屋全体を見渡せる場所にある。まぁ何時もこの机の数に併せて教員がいる訳では無いが。以前、一斉に教員が辞めた事もあったし。

因みに、慧音が校長の席に着く事は滅多に無い。慧音自身が授業をしているからと言うのもあるが、彼女曰く目立つ所での仕事は苦手らしい。作業は専ら校長机の後ろの資料室で行っている。

閑話休題

「ねぇねぇ、お父さん」

くいくいっと咲夜が髪を引っ張りながら聞いてくる。注意するのも気が引けるし、いいや面倒くさい。

「どした咲夜？」

「ここに、お父さんの机もあるの？」

「勿論。仮にも教師だしな」

娘に言うような台詞じゃない気がするがまぁいいや。咲夜の眼差しにやや羨望が加わった所で重ねて質問される。

「じゃあ、お父さんの机はどこの？」

「ああ、俺のは……」

そこの散らかってるの、と言いそうになり急いで口を閉じた。やっべ、俺の机片付けてねぇ。流石に書類まみれな机を咲夜に見せる訳にはいくまい。ごまかすか、ごまかすしかないか。

「それより慧音に話があるからなー。後で余裕があったら案内するし」

「絶対？」

「絶対」

多分、が接頭語になりそうになったのはデフォ。まぁ余裕云々は咲夜次第だが。

「さて、その慧音はどこに「お、鉄生。今日はちゃんと時間を守ったか」

部屋に入ろうとする所に慧音からも後ろ髪を引かれる事になった。なんすか、普段温厚な俺でもキレるっすよ？キレたナイフとかリアクション芸人も真っ青っすよ？

「我が子の事をすっぽかす親がどこにいるか。髪を放せ」

「ふーむ、この子がか。お前の子とは思えない位利口そうじゃないか」

「妖怪らしい部分が似なくて良かったとは思う。ついで髪を放せ」

「いやいや、鉄生のちゃらんぽらんな所が全くなさそうで助かるよ」

「激しく同意しておく。だから髪を放せ」

「おっと、自己紹介がまだだった。私は上白沢慧音、ここの寺子屋の教師だ」

「い、十六夜咲夜です。宜しく、お願いしま……す」

俺のプライド（笑）を投げ打った台詞にも無反応ですか。仕舞いにゃ泣くぞ。二人で仲良く挨拶を済ましてる横で髪の毛を弄られたまま男がしゃがんで「の」の字を書くのは気色悪いだろうなあと思ったけど思っただけだった。現実って厳しい

「ん……？おい鉄生、これはどうしたんだ？」

慧音が目を付けたのは、咲夜のスカートに付いた小さなシミだ。…百足の汁かなんかか、流石に誤魔化しきれんかなぁ。足にも結構土が着いてるし。

「僅かだが妖気を感じる。一体これはどこで付けたんだ？」

「……いやぁ、実は「幽香やお前のものじゃないだろう？幽香がこんな形で痕跡を残すとは思えないし、お前の妖気とは確実に違う。他の妖怪に会ったのか」……」

ＴＲＩＣＫじゃないんだからさ、俺達のやった事はａｌｌｃｌｅａｒお見通しとかやめてくれよ。ネタが古いか。

事情説明に数分、その後寺子屋中に鈍い音が二発響いたのは言うまでも無い。咲夜は幾分かマシだが、俺はもうギャグ補正が入る位の出血サービス中。

「自衛の術（すべ）も無いのに夜の森を出歩かせるなんて言語道断だ！鉄生、お前がちゃんと引き留めておけば百足だって殺さなくて済んだと言うのにお前は云々……」

咲夜！お前も好き嫌い程度でそんな危険な事をして、鉄生が助けられなかったらどうなってたと思ってるんだ！自分の行動に責任が取れるようにして云々……」

「分かった、分かったからそろそろ勘弁してやってくれ。咲夜がまた泣く」

涙目の咲夜は目の保養にはいいが、また泣かれるのは心苦しいものがあるよ、流石に。

慧音もやり過ぎたと思ったのか、取り繕う様に咳払いをして説教をぶつ切りにした。

「ま、まぁこの話はもういいとして……咲夜には寺子屋の授業を受ける前に、一つ特別授業を用意しておいた」

「へ？私に？」

「そうだ……鉄生、お前が教える範囲は分かってるな？」

「当たり前だろ。アリスはもう来てるのか」

「昼前には来ていたよ。今は教室で用意をしてる筈だ」

「あ、あ、あの。特別授業って……？」

頭上でポンポン会話が弾んでいて状況が把握出来ていない咲夜があっぷあっぷしながら尋ねてきた。そんな咲夜の若干コブになった額を撫でつつ、今日の本題を教えてやる。

「んー……簡単に言うと、お前の特訓だよ」

九十、授業の予鈴前（後書き）

はい、という事でやはりけーねせんせーの制裁が待ってました。寺子屋と言ったらこれしかない……訳じゃないですがねで、次は咲夜を強化していきます。どんな具合に成長していくのやら……

九十一、何故と書いてなにゆえと読む（前書き）

近年稀に見る駄作かと思われる
最近スランプと言っても文才って0からマイナスになる事ってあるんかな

九十一、何故と書いてなにゆえと読む

空き教室に集まったのは俺、咲夜、慧音のさっきのメンバー。そしてお呼ばれされていたアリスがいる。

「……なんで私が呼ばれたの？」

「消去法で」

慧音はいるにしてもう一人となると……八雲家は霊緋に付きっきり。幽香と映姫は参考にならん。紅魔組に教えられそうな奴はいないし、妖夢は剣術しか当てにならない。地底組も頼りには出来ない。そんなこんなでアリスしかいないんだなこれが。

……妖精？標的に教わるとはこいつぁ吃驚だね。

そんな事はどーでもよく、今日のその本題は寺子屋への入学では無く、咲夜に弾幕について何たるかを叩き込む授業だ。つーか、まだ咲夜ってばスペルカードすら作ってないんだよね。

「ではまず私から……さっき言っていたスペルカードとは、幻想郷で行われている『弾幕ごっこ』と呼ばれる決闘法で使用される呪文符の事だ。この符に自身の強力な技、呪文、能力を刻みこんで使用するのが弾幕ごっこのルールとなってある。そして正式なスペルカードルールだと、一回の弾幕ごっこで使うスペルカードの枚数は指定するのだが……ま、あまり気にしなくていいか。ここまでで何か質問は？」

矢継ぎ早な慧音の解説をなんとか飲み込んではいるが、それ以前に

スペルカードルールってなんぞやか教えたか微妙だった気がする。

「ちょい付け足し。スペルカードルールっていう決闘法があるのは、人間と妖怪が互いに襲いやすく、退治しやすくする様に作ったルールの事な」

「え？襲いやすく？」

「そう、襲いやすく。妖怪の大本が発生するには人間の想いが必要だから、新たな妖怪が増える為には人間が妖怪……妖怪でなくとも、何かに対して想いを抱くと妖怪が発生しやすくなる。ある意味では進化って言うのかな。その進化を促進させる為に、想いの中でわりかし簡単に持たす事が出来る『畏れ』を抱かせやすくさせる為に、スペルカードルールが出来た、と。そんな感じ」

まぁ憶測だが。他には、紫が妖怪と人間の共存を望むなら、妖怪にフラストレーションを溜めさせるなんてさせない筈、不満が爆発して暴れられるより、人間との決闘で細々と暴れる方がまだいい、と言う見解だって出来る。我慢出来ない奴らは俺や慧音、博麗の巫女に退治させられるだけだが。

「後は人と妖が戦う上で、人間にも勝ち目がある様にするとか……まぁ理由がどうであれ、そういうルールがあるって事よ」

ややっこしいのを省いてアリスがまとめる。いやこれはまとまってるのか？説明タルいからほじくり返したくないが。

「じゃ次……咲夜ちゃん、あなたは何か技とかある？」

「わ、技、ですか？」

「そう、例えば……魔符『アーティフルサクリファイス』」

きっと慧音を身代わりにしてなかったら俺が黒こげになっただろうなぁと思いつつ慧音だったものを部屋の隅にほっぽっておく。

「……チッ」

「お前だろ、上海が黒くなった理由って確実にお前だろ」

で、教師を一人犠牲にした結果分かった事は、咲夜にはその手の技は無いという事だけだ。

「普通ある訳無いわな……そこらへんは追々自分で作らないといかんし」

「けど確かこの子、時間を弄れるんでしょう?それを使ってなにか出来ないの?」

そー簡単に言われても。今の咲夜だと止めた状態を保つのが精一杯だろうし、ちょっとでも攻撃を受けたらすぐ解けちまうだろうな。ザ・ワールド出来ない相手ならいいが、呼吸を乱されて止められないなんて本当にありそうだから困る。

「やっぱ最初は通常弾幕から教えるのか……」

面倒、ヤダって言いたい。時間を操るんだからなぁ、もっと応用出来ると思うんだが。ジョジョだとボスクラスの力だし……ん?ジョジョ?

「そーだその手があったか！」

「え？」

なんですぐ出てこなかったんだか、これならなんとかなりそうだな。後は咲夜の努力が問題だがそれは今日からやってやれば済む事だし。

「アリス、咲夜と模擬戦やってくれんか？」

「「えぇ！？」」

突然の指名に驚く二人。それともアリスのは呆れと言うのか。

「いや、すぐにじゃない。そうだな……一ヶ月！一ヶ月でｎｏｒｍａｌのアリスを倒せる様にしようじゃねえか！」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ！私がやるのは弾幕の張り方を教える事で、戦うなんてそんな「報酬に（紅魔館の）魔術書十冊プラス、咲夜に勝ったら倍にしてやる」やってやろうじゃないの」

ヴィンセントと一緒に紅魔館を荒らしまくった経験は盗み位しか役に立たなかったぜ。

ともかく、今日から咲夜には血反吐吐かせるまでやったら俺が血を吐く羽目になるので幽香が許す範囲での特訓だな。勉強の筈が何時の間にか強化フラグが立った咲夜はポカンとしたままだったので放置。説明なんざやりとうないし。

寺子屋からの帰り道、何故こうなった?と頭を抱えてしまったのは言うまでもあるまい。本当になんでこうなった。

九十一、何故と書いてなにゆえと読む（後書き）

自己解釈に突っ込みはあかんですよ
取り敢えず次回もぐだぐだ

九十二、修行だいじぇすと（前書き）

長らくお待たせしてしまいました……誠に申し訳ありません
これからはもっと更新速度と文章量のレヴェルを上げられる様に頑張りたいであります

九十二、修行だいじぇすと

アリスに啖呵を切った次の日から、咲夜の修行は始まった。と言っても俺が出来る事なんざ限られてるんだがね。色んな強い奴らに手解きを受けさせる為に連れ回したりとか……とか……えーと……いや、それ以外もやってるよ？例えば

「咲夜ッ！お前は必ず時を支配出来るッ！もっと！もっと！静止した時の中を動けると思うんだッ！空気を吸って吐く事の様に！ＨＢの鉛筆をベキッ！とへし折る事と同じ様にッ！出来て当然と思う事だ！大切なのは『認識』する事！スタンド……もとい、時を操るという事は出来て当然と思う精神力だぞッ！お前はこの俺の娘ッ！！時を支配して当然だぁあああああーーーッ！！ケケケケケケケケケケケケケケッ！！！」

「お父さんうるさい」

「（、・ω・、）」

時止めの練習中に咲夜を激励（？）したりだとか、

「『能力』持ちに共通する見分け方を発見した。それは……能力はタバコの煙を少しでも吸うとだな……鼻の頭に血管が浮き出る」

「えっ、嘘！？」

「ああ嘘だぜ！だが……マヌケは見つかった様だな」

「あ」

「途中で停止を解いた罰として腹筋三セット追加な」

能力発動してる横でワザと集中を掻き乱したり、

「咲夜ァァアーーッ！お前がッ！泣くまで！殴るのを止めないッ！」

「止めなさい」

模擬戦で全力で当たろうとしたりして幽香にしこたま殴られたりとか色々ｅｔｃ沢山やってたのさ。役立たず？ノー、そんな事は無い。役には多分立ってる。恐らく。メイビー。

俺の働き（と言う事にしないと俺の立つ瀬が無いの）で一応だが咲夜の近接戦もマシにはなってきたが、まだ反射的に拳が出せるとかそんな域じゃない。そういう域を基準にしないと幻想郷だと格闘なんざそれこそ役立たずだ。幽香やら美鈴だと弾幕撒き散らしながら殴りかかってくるから恐ろしい。

「ふーむ……後何が必要かな」

アリスとの戦いが一週間後に迫った頃には、咲夜の戦闘力は死にかけた野菜人位に上がっていた。まだ追い抜かれては無い、筈。元々素質があったのが幸いしたのか、霊力のコントロールやナイフの扱いをスポンジが水を吸い込むが如く学び取っている。下手するとやられそうになったがそこはほら、父親の威厳として、ね？簡単にはやられねぇと思ってても時止めで掌握領域を潰されると中々苦戦したり。殺さない戦いって難しい。

「ザ・ワールドも体術もナイフ弾幕も大体オーケー、少々の空間操作に霊力のコントロールもなんとかこなせてる……やっぱこれ位か」

で、俺の混沌とした（汚らしいとも言う）机上には空論ではなく咲夜に覚えさせたいアビリティ一覧がある。二週間ちょいでここまで覚えられたのはひとえに咲夜の才能としか言いようが無い。決して以前の教師が良かったなんて言わせないし認めない。

「……うっし、明日で訓練は終わりにして、明後日からはもう休ませるか」

そんな救いに思われるようなセリフを夜中に呟いた俺の瞳は怪しく輝いていたと盗撮していた烏天狗が紙面上で語っていた。あいつはちょっと三枚におろしすべきか。

「咲夜ー、そろそろ起きろー」

「……ん～」

翌朝、夜遅くまで行う修行（朝だと俺が起きられないから）のせいかすっかり寝起きがよろしく無くなった咲夜を起こす。以前はおさげにしている両サイドの髪のみ長くしていたが、今では霊力の影響か後ろ髪もガンガン伸びてしまっている。普段は纏めているが寝起きだとおろしてしかも寝起きのボーッとした顔なので結構いいもんだなとか思ってるのは秘密。

これ以上やってるとロリコンかなんかかと思われるので打ち止めにしておいて、未だ咲夜に安眠を約束させている快眠器具を徐々に持ち上げてみる。

「ほーれ、さっさと起きないと落ちるぞー」

「むぅ～～……」

「……簡単に落ちる奴がいるか」

ちょいとベッドを傾けると、そのまま咲夜は石鹸かゴムボールかの様にゴロゴロと転がって壁の隙間に落ちてしまった。そんなに疲れてるのか。

「如何、潰れでもしたら事だな。咲……」

ベッドを部屋の隅に除けて咲夜を救出しようとしたら、再び寝息を立てていた為結局は引き摺りながら起こす事になった。いや、寝る子は育つと言うが寝過ぎるのは起こすよ。育って欲しい部分はあるが。口には出さんが。

「朝飯の用意は出来てるから、先に食べちゃっててくれ」

「は～い……あいたたた」

廊下の途中で正気になった咲夜を居間へと見送ると、少し溜め息が出てしまった。何故か？何時の間にか幽香が朝飯を作る事から再び俺の寝床に潜り込むようになってきたから。日が昇る前に幽香の拘束を逃れて自分の鍛錬をしてから朝飯作って咲夜を起こしてこれから二度寝した幽香を起こさなきゃならねえ。俺は主夫ではないのだが、と俺が言っても説得力が無かった。

結局、幽香に何度かセクハラ紛いな事をされつつも朝食の時間帯に家族が居間に揃う事が出来た。けど幽香がくっついて離れてくれないのは色々とイタい。端から見てもイタいし咲夜の時折投げかけられる視線も痛い。

「お父さん、今日はなにするの？」

やや冷ややかな口調で問い掛ける咲夜の手には銀色のナイフが光っている。何故だろう、なんか投げられそうな気がして怖い。

「んー、今日はテスト、ってところか」

「「テスト？」」

二人が不思議そうな顔をして今日のカリキュラムを聞き直す。

「そ、テスト。俺との模擬戦だ。勝てれば訓練終了、負けたら再特訓」

「うわぁ……」

「……その声はどういう意味だ」

心からの落胆なのか、疲弊した身体の悲鳴なのか。やはり咲夜も俺に似てきたのか。

「だって、お父さん強いんだもん……勝てないよ」

「大丈夫、能力制限すっから。人化は面倒だから掛けないが」

頭を撫でてぐずぐずしている外に咲夜を出す。と同時に幽香が心配感１００％な雰囲気を出しながら訊いてくる。

「鉄生、大丈夫なの？」

「なにがさ」

どうやら幽香は真面目な場面で惚けた答えはお好きじゃなかった様だ。頬を膨らませても可愛いなぁやっぱ。

「咲夜と戦うなんて大丈夫なの、って事！途中途中のでも危なっかしかったのに……」

「なぁに、今回のは大丈夫な自信があるさ」

「……その無責任な自信は何処から湧いてるのかしら」

「わっかんねぇかなぁ？……わっかんねぇだろうなぁ」

往年のギャグに答える人がいないと言う事は中々辛いものがあると幾たびも痛感している水元鉄生（約５５０歳、教師）。懲りない奴と言われ続けて５００年。いやもっとかな？などと、咲夜に催促されるまで立ち尽くして考えてたりしてた。

九十二、修行だいじぇすと（後書き）

さて、次回は作者も忘れたいあのキャラが出る……筈です。つかなぁ、オリキャラが結構重要ってあかんのかなぁ

九十三、「教育でしょでしょ？」又は「紅、無駄足、地底にて。」（前書き）

段々文字数を増やせたらいいなぁ
今回は二本立て、しかも主人公がいない所で話が進むよい

九十三、「教育でしょでしょ？」又は「紅、無駄足、地底にて。」

ｓｉｄｅ鉄生

幽香が立ち会いの下、咲夜と俺の一騎打ちが始まった。場所は太陽の畑から少し離れた、前に百足を片付けた森の中。スペカの枚数は咲夜に合わせて互いに3枚、戦闘形式は格闘もありな弾幕戦、言うなれば緋想天ルールでやる事に。まぁ咲夜相手に格闘なんざやった日には幽香から横傘を入れられる事だろうが。どてっ腹に。

……ありそうだから困るなぁ。

「飛ぶのがちょいと遅めだがまぁいいや、それより弾幕の密度が課題か……」

そんなありそうであってはならない未来予想図を頭に抱きつつも、咲夜の攻撃を一撃一撃を観察する。戦いだなんて言っても咲夜がどの程度まで実戦運用が出来るかを試すものだから、俺が積極的に攻撃を仕掛けなくてもいいのだ。咲夜もそれを理解しているのかどうかは知らないが、慣れたての弾幕を放ちながら接近戦に持ち込もうとするなど、中々積極的だ。弾幕よりも格闘が好みなのは親譲りか。

「まだまだ急所への偏りが抜けきってない。目線で攻撃地点が分かる。ナイフに込める霊力もバラつきがある。まだまだ直す所はありそうだ」

「ッ……！」

流石に俺見たく戦闘中にふざける余裕までは出来てないらしく、俺の評価に咲夜は「無茶言わないでよ！」と目で抗議してくる。睨まれてもまぁあんまり怖くない、むしろ愛くるしいと言ったらペースが崩れるか、見てみたい気もする。しないが。

「傷魂……『ソウルスカルプチュア』ッ！」

早速、咲夜の一枚目のスペカが発動。やたらめったらにナイフを乱舞してくるだけの技だが、その分攻撃量が多くなり、コンポが掛かりやすい……のだが。

「一気に避けられたら意味ないわな」

「あ！？」

攻撃の射線上から一気に咲夜の脇まで空間短縮、そのまま回し蹴りでＳｐｅｌｌＢｒｅａｋ。技の脆さも課題点に追加か。

「くのっ……幻葬『夜霧の幻影殺人貴』！」

「あーあーあー、そうやってスペカを連発すんなって……っとぉ！？」

俺が知っていた『夜霧の幻影殺人鬼』は咲夜さんからレーザーの如くナイフが相手に襲い掛かるものだったが、なんと咲夜は場にまき散らされたナイフすらも操って串刺しにしようとしてきた。不意打ちだったため避けきれないナイフ数本が髪と頬を掠めていったのを感じつつ、咲夜の評価を心の中で上げておく。俺が言ったようにやるだけでなく、自分自身でスペカを編み出すたぁ大したもんだ。

「そうこなくっちゃな……俺も行くぞ！」

懐から取り出したスペカは咲夜さんの模倣であった『マーダードール』を再構成したもの。あー、咲夜にこれが伝授出来たらいいなぁ。

「元影『殺戮ドール』……避け切れよ咲夜！」

ナイフを地中から作り出し、それを俺が球の中心になるように配置する。等間隔に配置する術式やらは全てスペカに刻み込んであるから楽チンだぜヒャッハー。

完全に配置し終えたら今度は空間操作で周りの空間を歪め、アトランダムな動きをさせるようにする。狙いを定めるのが面倒だとかそんな理由は無きにしもあらず。狙いを正確にし過ぎたら咲夜に当たり過ぎる事もあるだろうからという配慮もあるが。

やがて球状のナイフ玉がバラケだし、歪んだ空間を抜けて一直線に飛んでいく。さて、咲夜はどうやって避けるかな？

挑む様な目線を送る咲夜の手には、三度スペルカードが握られていた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――そんな風に、鉄生が咲夜と戦ってるその頃、地底では――

no side

『……おおっとぉ星熊勇義、たった一撃で挑戦者五人を一度に薙ぎ倒したぁぁぁぁぁ!!そして一人の足首を引っ付かんで……決まったッ!この当たりは思わず挑戦者の腰骨を心配したくなりますね解説の鬼神さん』

『なにやっとるか勇義は、まだまだ叩き潰す要素があるだろうになんとも手緩い……もっとこう、血腥い戦いを見せてくれんかのぅ』

『この鬼(ひと)に解説を頼んだ私が間違ってました!引き続き、第六十二万三千九百七回、チキチキ鬼之四天王杯争奪無差別格闘大会の実況をしていきます!!』

鉄生が星熊勇義と腕相撲をした所で、今度は無差別格闘大会(ケンカ)が行われていた。どうやら勇義が鉄生に負けたのが悔しかったらしく、その修行も兼ねての大会だとか。周りの鬼達は暴れられるだけで十分楽しんでるようだが。虐殺と言われないのは相手の頑丈さと周りの度量の様に感じる。それだけ荒っぽい。

そして、その居酒屋の隅っこでひっそりと佇んでいる人影がいたりする。黒いローブを目深に被り、腰ほどの長さの杖に寄りかかる姿はまるで彫像の様に微動だにしない。

「……ふむ」

鉄生曰く最悪の転生者、元紅魔館の執事、吸血鬼ルーファス。通常でも目立つが上半身裸だったりする鬼の中にいると一際異彩を放つその風体だが、隠密の術を使っていた彼に目を向けているものはいない。

彼がこの酒場にいる理由。別に彼は戦いを見るのが好きという訳では無いし、幾ら転生しようがついて回る下戸な体質で鬼の酒を飲む事は有り得ない。では何故彼はここにいるのか。

「……見当たらない」

簡単に言えば人捜し、であった。と言っても、その女性とルーファスは今まであった事は無い。無論、文通をしていたのでも無い。しかし、女性がルーファスの事を知らなくとも、ルーファスは女性の事を知っている。脳の記録では無く魂に刻み込まれた記憶なのだ。

「……今まで幾多の生を受けても、彼女以外は妻として迎えられなかったからな。何故か」

そう、その女性とはルーファスが生まれる前、『赤瀬　漣』だった頃に結ばれてたのだった。そして彼女は妖怪、しかも鬼。普通であれば５００年近くも経てばとっくのとうにお迎えがくる筈だが妖怪なら話は別。幾ら色恋沙汰に無知な彼でも、愛する人にまた逢える可能性があるならば迷わず行くだろう。

しかし噂は聞けど姿は無く。無事ならまた逢いたいと言う心は膨れ上がる一方で、これだけ探しても見つからないのなら徒労に終わる

のではと言う想いも成長していた。事実、咲夜を幻想入りさせて一年間、地底に潜り込むのに時間が掛かったとは言え地底中を探し回って、手掛かりを見つけても空振りが殆どであった。今回のこのイベントも、かなりの数の妖怪が来ているのでもしやと言うのがさっきまでのルーファスの思考。

「ふぅ、結局無駄足か。情け無いな、これだけ時間を掛けても愛する人を探し出せないとは……」

どうやら、思いの外一途な性格でいらっしゃるルーファス。鉄生が訊いたら卒倒するであろうそんな情報が丸分かりなセリフを呟いた後、店から出る。

様々な魑魅魍魎とすれ違いながら、ルーファスは考える。彼女と縁が無いのは執念でなんとかするにして、その先の大切な用事をどうするか。一体冥界にはどの様に行けばいいのかが分からない。手っ取り早く鉄生に聞いてみるのが一番いいが、あいつが素直に話すかどうか……そんな具合に考え込んでいると。

「すみません、少し宜しいですか？」

鬼にしては――鬼に失礼な言い方だが――やけに丁寧な口調で話しかけられた。声の主は左目に眼帯をした比較的小柄な鬼である。

「……なにか用かね」

ローブに隠れている手には既にナイフが隠されている。頭の中も言霊の構築式が縦横無尽に駆け巡る。

警戒。今すぐ戦闘する事は無いが、敏感に危険を感じ取っていたル

ーファス。理由は二つ。一つは何故、隠密の術が掛かったルーファスを見つけられたか。自惚れでは無いが、自身の術はかなり高度なものだと思っている。身体だけでなく僅かな音も、妖力も、気配も、自分に由来する痕跡等を全て隠せる術。それをあっさり見破った事。

そして二つ目は……

「どうせ、貴方も分かってるでしょう？こんなに分かり易く妖気を洩らしているのだから」

何故、コイツが水元鉄生と同じ妖気を纏っているのか。違う点は、どうやら水元鉄生の様に通常制御が出来ないと言う訳ではなく、自在に操れている様子だ。一度感じたら忘れない、クセのある妖気。ともすると禍々しいと言える邪気。

「……お前は一体なんだ。あの馬鹿弟子の関係者か」

小柄でありながらも厳めしい顔を不気味に歪めて、鬼は――否、ソレは自らを名乗った。

「お初にお目にかかります、竜神と申す者です。以後お見知り置きを」

九十三、「教育でしょでしょ？」又は「紅、無駄足、地底にて。」（後書き）

遂にッ……遂に登場！竜神！みんな忘れてないよね！？

九十四、暴走と言えなくもない授業終了（前書き）

作者は説明も戦闘描写も苦手なのを忘れていた。分かり難い事があればビシバシ言って下さい

九十四、暴走と言えなくもない授業終了

ｓｉｄｅ鉄生

動き始めるナイフの雨霰を目前にしても、咲夜は中々宣誓しようとしない。俺も咲夜のスペカを把握している訳では無いから、最後の一枚がどんな効果かは知らないのだが、大方ザ・ワールドかルナ・クロックもどきだろうとタカをくくっている。そのせいで弾幕を放ちきる前に空間湾曲を解いて時止め防御に撤しようしたのだが、どうやら咲夜はその瞬間を待っていたようだ。

俺が夢にも思わぬスペカを使用する為に。

「幻速『メイド・イン・ヘブン』」

「なッ！？」

宣誓が終わると同時に咲夜の姿はかき消えた、が

「っ、てぇ……やりやがったな、咲夜」

ナイフが後ろから左肩に三本掠り、右腕から肩甲骨にかけて結構な本数がクリーンヒット。おまけにわざと角の部分にも刺しやがったな。

符名がメイド・イン・ヘブンって事は……チッ、訓練の時は習得して無かったクセに、こんな時まで隠し玉にしてたって事か。兵は詭

道なりとは言うが、親まで欺くとはな。

咲夜がやらかしたのはスペカ名通り、時間加速である。ナイフは対象までに到達する時間がほぼゼロになり、身体挙動は時間をほぼ無視しての動きになっている。時間停止でもまぁ似たことは出来なくもないが、加速した時では止まった時と違い過程がある。その過程時間を縮めているかどうかが普通の加速と違う……嗚呼、自分で解説しておいて分かりにくい。

要するに、過程が消えて結果だけになる……って、これってキング・クリムゾン？いやいや違うだろ、でも、あれ？

自己満な解説を挟んでいるその時にも咲夜のナイフは襲い掛かってくる。障壁で防げてはいるが何時までも攻めに転ずる事が無いのは結構どころかかなりキツい。障壁が少しでもブレようものなら正確にそこから大量のナイフをぶち込んで来るんだからもお。誰だ敵に情けを掛けるなって教えたのは。言うまでも無かった。

「こなくそッ、何時までもやられてられるか！」

地面から幽波紋人形を作り出し、ナイフラッシュの早さ比べか……無駄無駄無駄無駄ってぇ？

呆然とする間も無く幽波紋人形は土塊に戻り、後に残ったのは数本のナイフのみ。……ああそうか。以前まで幽波紋人形と戦わせてたんだ、止まった人形を壊すのなんて訳ないわな。

「だったら……こうする！」

障壁を一旦解除、十分な位まで領域を広げる。その間はナイフにな

ぶられる事になるが極力無視。

「――――――」

一瞬弾幕が薄くなった気がしなくもないが変わらず銀刃の嵐。斬られた所を蹴られると堪えるが我慢だ我慢いててててて。

「ぐ……ッ、そろそろだな……行くぞ咲夜」

領域内の空間を完全に掌握し、周りの地面も制御下に置く。そして用法がどうだかなんて関係無い、ただただ思うがままに叫ぶのみ！あの台詞を！

「ナイフの貯蔵は十分かぁぁぁぁ！絶界『次元断裂』ッッッ！！」

あっと言う間に掌握空間内を次元から切り離す。次元単位で掌握したままだから空間技は使えないが、やろうと思えばこの次元ごとまた別次元に定着させる事も出来る。イメージ的には漂流教室でお願いします。

「そのまま、連続……」

流石にダメージが多すぎた、腕がボロボロで向こう側が見えそうだぜ。しかし怪我をおして咲夜が能力使用を忘れている隙に最後のスペカを手に取る。

本当に1ヶ月でここまで成長したのか……俺ぁ誇らしいぞ、咲夜。その努力に称えてこいつを使ってやるよ！

体は拳で出来ている。

血潮は波紋で、心は黄金。

幾たびの戦場を越えて不敗。

唯一度の敗走も無く、

唯一度の淘汰もされない。

彼の者は常に寄り添い、主の隣で勝利に酔う。

故に、生涯に意味は無く。

その体は、きっと拳で出来ていた。

「完全、掌握……『無限の拳製（アンリミテッド・オラオラワークス）』……やれやれ……だ…ぜ……」

血だらけの頭では英語の改変までは追い付かず、なんだか微妙な出来に終わってしまった。バランスを崩し膝をついてしまうが、スペルは問題無く発動された。

「――――――!?」

地面から大量のスタープラチナ。何時ものは違いしっかり地脈が流れるように組んだんだ、ナイフ程度では簡単に壊れない、なにより

……

「……この次元は……俺の統治下、幾らでも、作り出してやる……！」

かたや壊される度に次々と瓦礫から湧き出るスタンドと時間操作とで疲弊している咲夜。かたやズタズタのボロボロのケチョンケチョンにされた上にスタンドを操る為に地脈操作に神経を使わなきゃいけない俺。どちらに軍配が上がるのやら、物理的に脳へ血が巡らなくなってきたのが原因か、まともにものを考えられなくなってきた。ただ単に疲れただけだと信じたいが。

どれほど経っただろうか、確かスペカ発動時間を一分程に調整してた筈なので精々それ位なんだろう。もしかしたら間違えてた可能性があるがまぁ気にしない。

突如、次元の壁が光のビィーム（発音良く）に撃ち破られた。そしてそのビィームは一直線上にあるものを消し飛ばして、そのまま俺に向かって……？

最後の事の真相はと言うと、二人の姿が消えて動揺していた幽香の所に偶々（おそらくは分かりきって）現れた紫が次元の境界を操って、まだ実体化してない次元断層を待ちきれない幽香がマスタースパークでぶち壊し抜け、射線上にいた俺が焼かれた、とかなんとか。幽香に気休め程度の包帯を巻かれながら告白されたが、「あのままだったら咲夜が危なかった。鉄生を止めるには丁度良かった」とまぁ、謝らないようで。俺も咲夜をやり過ぎかけたんだから止めてく

れたと思えば文句はないがね。幽香も幽香なりに反省してるみたいだし。

さて、これで俺も咲夜もアリスとの戦いまではゆっくり休めるんだ。さーて、咲夜と一緒に昼寝でもするかな。おいそこ親バカとかロリコンとか呟いた奴一歩前に出ろや。いーだろーが、幻想郷において稀な平和な時くらい親子でまったりしててもノー問題だろ！ガタガタうるせえと口から手ぇ突っ込んで奥歯ガタガタ言わせっぞ！

この時、俺にもし予知能力やらなんやらがあったならば、のんびりと家族の団らんを楽しんでいる余裕は無かったかも知れない。

九十四、暴走と言えなくもない授業終了（後書き）

アンリミテッド・オラオラワークス
うん、いつぞやかの無限の剣製はこれがやりたいが為の伏線だったんだ、すまない

ついで、咲夜はまだ子供だったね。幾ら時間加速出来てもナイフ数本の到達時間を弄るが限度だったんだよ、とそんな事を書くの忘れてた

そして次話から、最終章が始まる……筈。乞うご期待ッ！

九十五、アカの終わり（前書き）

難産でしたー。おかしな点があればズビズバ突っ込んで下さい
前半のこーゆー文は止めといた方がいいんかなぁ

九十五、アカの終わり

薄暗い路地に二鬼が向き合っている。片方は吸血鬼、片方は竜神を名乗る鬼。

フードと明度のせいで竜神からは伺い知れぬルーファスの顔は苦虫を口一杯に頬張って咀嚼したような表情が貼り付いていた。原因は先ほどの台詞、自分が竜神だと言う言葉だ。

転生する前に鉄生へ言霊等を教えていた頃、そして今の生で紅魔館に勤めていた頃に知った竜神は『水元鉄生』の体内にいて、そこから出れないと言う事。実際に竜神が表出して話したのは無かったが、鉄生みたいな奴が複数の気や能力を持つのは有り得ない、なにかからくりがあってまずおかしくは無いだろう、と。全面的に鉄生の実力を疑っていた彼からしてみれば、今竜神が現れた事によって漸く納得が出来たようなものだ。

しかし、目の前にいるのは間違いなく鬼。水元鉄生とは似ても似つかない姿である。種族が丸ごと違うのだから当たり前なのだろうが。

ではコレが言っているのはどういう事だろうか？考えられる選択肢は数える程残っていないだろう。

？この鬼がなにかの能力で記憶を読みからかっている
？色々あってマジで水元鉄生が鬼化しちゃった☆
？実は夢で立ったまま寝てる俺ガイル

ルーファスとしては選択肢は一つしか無かったようだが。ふざけてる？ふざけて無い、いたって大真面目である。

だが本当に記憶を読んでいるとしても、また問題点にぶつかる。何故、竜神なのか。それこそルーファスの想い人にでもなりすましてやればからかいがいがあるだろうに、どうして記憶を深く掘り返さないと出てこないような竜神なのか。

いや、コレがマイナーなものが好きな奴でも再現出来ないものがある。妖気だ。コレから出ている妖気は水元鉄生から垂れ流されている妖気とよく似ている、もとい、そのものだ。余程妖気に疎いものでなければ違いには気付く、だがさして問題と言えない程の違いではあるが間違いなく違う気。

疑問は尽きないが、それを解決する手っ取り早い手段は――

「……竜神だと言ったな」

「ええ」

――直線訊くのが一番早い。ルーファスの問い掛けに素早く応える竜神（仮）

「それは私が知っている竜神と言う事か」

「その筈です」

益々怪しい。何故自分の事を知っているのが前提になっているのだか。しかし、私が知っている竜神と関係性が無い訳では無さそうな

のは確かだ。

「……私が知っている竜神は水元鉄生に寄生している奴なんだが」

「寄生って……まぁ、それは過去形ですが、ね。今はこの通り、自分の身体を持ってます」

挑むような目線を投げかける竜神（仮）。しかし、とまたもやルーファスは思考の海に身を投げる。

「竜神」と言う名……いや、本名かも怪しいがその呼び名から想像するに、恐らく本来の姿は蛇妖、龍等の水神の眷族又はそのものだろう。ミズチや応龍、青龍、黒龍、ナーガ、リヴァイアサンと水竜にも様々な種類はあるがそれは考えないとして。

だとすれば、元通りの身体が鬼と言う事は無いだろう。変化してたとしても幾ら何でも鬼の角が生えるなど有り得ない。

「……その身体が、お前の本来の身体なのか？」

確認の為に一応尋ねると、竜神（仮）は口元を嘲る様に歪めて冷たく言い放った。

「この外見でそう思えるなら、一度月の医者にでも往診して貰ってはどうですか？余程の眼病を患っている様でしたら外に出るのは危険ですよ」

わざとらしい口調に苛つきを覚えながら、他の可能性を考察する。竜神（仮）はもう水元鉄生に寄生していないと言っていた。なら水元鉄生の身体が変化して鬼になったとかそういうのは除外出来る。

が、しかし。それだと水元鉄生の身体から竜神が出られないと言う大前提が無くなってしまう。もし自由に出入り出来るならなにが悲しゅうて鉄生なんぞに籠もっていたかも分からない、しかも竜神の影響が身体に出るほど深く入り込んでいたと言うんだからおかしい。竜神が水元鉄生の身体から出ようとしても出れないというのならば、何故目の前の鬼は竜神を名乗るのか。堂々巡りを繰り返しそろそろこんがらがってきたルーファス。どこぞの吸血鬼の様に分割思考を増設しようかと思うまでに脳が疲弊してしまったようだ

「……質問いいかな？」

「どうぞ」

絶対的に必要最低限な応対しかしない訳ではあるまいに短い切り返しをする竜神。今のルーファスからしてみればそれは助かる行為だったが。

「なんでお前がここに、しかも水元の身体ではない鬼の身体でいるんだ？」

疑問の殆どをぶつける質問に、竜神は目をパチクリ、キョトンとした顔をする。意表を突いたと言う訳では無さそうだがはて、とルーファスが再び蟲毒を口に充填しようとした時、竜神が疑問への回答を述べた。

「簡単な事です。水元鉄生の肉体の破片に宿り、今この肉体に取り憑いているんです」

ルーファスがギョッとしているのをよそに、竜神は顔に付けられていた眼帯を外し、見せつける。

「……！」

そこには、右目と同じ色になっている筈の左目が青く、しかも若干飛び出た形になっていた。溶けかけの二段重ねアイスクリームを思い描いていただけたら少しは伝わるだろうか。

「コレが、私が宿っていた水元鉄生の元々左目です。尤も、彼はコレがあった事なんて忘れているでしょうが。無駄に収集癖はあっても記憶力が無いと……」

やれやれと言ったように肩をくすめる。そこまで水元鉄生の体内にいたのがうんざりだったのか、それとも持ち物は暗唱出来る位マニア度を高くしろという事なのかは分からない。

「……分かった、ではなんで目がココにあるんだ？あやつが落としていったとでも言うのか？」

「Ｅｘａｃｔｌｙ、まさしくその通りですよ」

ゴソゴソと取り出したのはどこぞで見覚えがあるくたびれた革袋。話の流れ上、あれが水元鉄生が落とした袋なんだろうと推察する。

「一年程前に落としていった様です……まぁ、私は水元鉄生の身体がヤケに離れたと思い起きてみたんですが、まさか落とされるとは思いもよりませんでした」

その後、何も出来ずに道端に放られたままで暫く待っていると、一匹の鬼がこの袋を覗き込んできた。チャンスと思い目だまの親父かベアードか土下座ェ門かの如く眼球のみで飛び上がりそのままフュ

ージョン、ハッ！と言うのが鬼の身体だった訳らしい。

どこまでが本当なのか疑わしいものだが、そんな荒唐無稽な話を納得出来るような頭じゃないととてもじゃないが幻想郷世界を生き延びれなかったらしく、ルーファスもその一人の様だ。

「あー……では、お前の話を丸呑みするとして。どうして私を呼び止められた？術は掛けてある筈だが」

「ああ、それは簡単です。私の眼があるからですよ」

指指すのは勿論左目。一体どんな仕掛けがあるのやら、マッドーアイと言っても遜色ない動き方である。

「この眼……正確に言うと私の水神としての権能に、浄眼と言うのがあります」

やはり水神であったか、と予想通りで独り頷く。竜神は気にせず話を続ける。

「私の浄眼は簡単に言うと『ありとあらゆるものを見破る』力があるんです。あらゆるものと言っても、自分が分かるものにしか通用しませんが。出来る事をあげれば、例えば嘘を見破り、例えば隠蔽されたものを見つけ出し、例えばまやかしを打ち破る」

「それで隠密の術も、か……」

納得は出来る事には出来た。だが疑問は尽きないのは常。

「最後だ。何故、私に声を掛けたのか。教えてくれるな？」

見えないとは分かりつつも、愛想笑いを浮かべて本題について問う。

「勿論、お答え致しますよ」

竜神も雰囲気を読み取ったか、はたまた暗闇を見破って顔を見たのかは定かでは無いが、薄ら笑いで返す。

「貴方を呼び止めた理由は――」

言葉を紡ごうとした刹那、二鬼の目に火花が散り、激しい攻防が繰り広げられた。

殴りかかろうとする竜神に杖を身代わりにし回避、そのまま空いた両手にルーファスお得意のナイフを取り出すが杖の残骸により打ち払われる。後ろに退いて言霊を放とうとするルーファスだが、竜神の空間障壁によりリング際へぶつかる形に。ルーファスは領域に絡め取られ鬼の拳をまともに食らってしまう。そのまま息つく間もなくアッパーカットを決めようとする竜神だが、紙一重の差でルーファスの蹴りが先に入る。空中で体勢を立て直すが既にルーファスが言霊を放っていた。

「言霊解放、『お前はなにも見えなくなり吹っ飛ぶ』」

宣言通り、吹き飛ばされ壁に叩きつけられる竜神。水元鉄生の様に正確な文言を使わなくとも発動出来るのが熟練の証だろう。

腕の拘束を破り、今度こそとばかりに銀の短剣を取り出し投げつける。幾ら吹き飛ばされたと言ってもそれだけ、すぐに身を翻して間合いを詰め飛びかかる。

「捕まえた……！」

「な、にを……」

四肢を絡ませてルーファスにへばりつく竜神。逃れようともがくが流石に鬼、中々思うようにはいかない。

「あまり無粋な真似はしたく無いのですが……仕方ありません、ねッ！」

頭突き、ではなく角差しとも言うべきだろうか。ともかく、先端が鋭く尖った鬼の角がルーファスの眼球めがけて振り下ろされた。

「」

何もなくなるのは最初の一瞬のみ、痛みは次から襲いかかる。その瞬間ではただ息を吐くしか出来なかった。

無意識の内に上がる汚い叫び声の前に、耳元で竜神の囁きが聞こえた。

――貴方の身体が欲しかったんですよ――

鬼の顔から眼球が離れた様に見えた瞬間、妙に納得がいった。いや、予想通りだった、と言うべきだろうか。

次起きた時には新しい生が始まっている事を願いつつ、ルーファスは意識を手放した。

side鉄生

「へっくしょん、へくしょん！」

突然のくしゃみ、しかも二回連続とは……なんだ、誰か俺の悪口でもやってやがるのか？

「お父さん、どうかした？」

「いんや、なんでもね。ほれ、泡流すから目ぇ閉じろー」

咲夜の髪をわしゃわしゃやってた手を止め、桶にお湯を掬って掛けてやる。シャンプーハットなんざ作ってないから目に染みたらご愁傷様としか言いようがない。

「わぷ」

お湯が泡を攫って髪を伝い落ちてくるのを見ながら、もう一回お湯を掬い上げて今度は背中に引っ掛ける。

「身体は自分で洗えよ。俺は風呂桶に入ってるから」

「え～」

「え～じゃない」

するとなにか、お前は俺に性犯罪者予備軍になれと申すか咲夜。疚しい心があるからこーゆー発想になるんだろうが。

あ？今なにやってるか？咲夜と風呂入ってるよ。もう疲れたがら上がったらそのまま布団に直行だろうな。幽香もそれを見越してデカい布団出してたし。

「む～……身体洗うの苦手だもん」

「だからって俺が何時までも洗ってやる訳にも如何だろ。自分でやりなさい」

誘い受けだったら喜んで乗りたいが相手は子供、無邪気なだけだ落

ち着け俺ビークールだビィィィィィィィクゥウゥウゥウゥウゥル

「お父さんやお母さんだったらいいでしょ？」

「駄目なもんはダーメー」

頬を膨らまして抗議の視線を送ってくるがスルー。マジで近親相姦やらせるつもりか。咲夜も無駄だと分かったのか嫌々ながら身体を擦り始め「終わったよ！」早ッ

「て、ちょっと待」

俺の制止を見越して飛び込む形を取ったのならイイ考えだったぜ咲夜。しかし風呂場ではしゃいだりすると危ないから止めようだからジャンプするなこっちに抱きついてくるなあぶねえバランス崩れるウボァー

鈍い音を立てて風呂桶に沈む俺とそれに乗っかってる咲夜。見てる分には至福だろうがやってるこっちはちょっと浴槽の形と俺の頭の凹みが気になる。

九十五、アカの終わり（後書き）

ルーファスの出番少なかったなー。片編変で補充する他あるまい。
それ以外にも書かねばならんが

九十六、夢幻覚醒（前書き）

最初に……その……批判はお手柔らかに
第三者視点のもウザかったとは思うけど、こっちは別の意味で、あの、すみませんでした
技量不足と心が折れるのが怖い作者でした

九十六、夢幻覚醒

side鉄生

……

……ここは……暗い……

寒い……何も、無い

……ここは……いや、これは……

……夢……なのか……？……

周りは……河原か。ヤケに、陰気だな……

子供が石を……積んでる……賽の河原？

夢を見るならもっと……ましな…所がいいんだが……

ん、景色が……変わる。次は……映姫の部屋の、ドア？冥界繋がりかな……

随分、久しぶりだ……。この前行ったの、何時だっけ？……

ドア、開けて……中には……ベッドで寝てる、映姫。可愛い寝顔だな……

身体が、近付いてく。ふむぅ、夢で夜這い……ってか、バレたら確

実に殺されるな……？

違う……なんだ？近付いたら、映姫が起きたけど……その顔はなんだ……一体？

おい……抵抗するにも、弾幕はあかんやろ……あ、顔に当たった。けど……痛くは、無いな

弾幕で、身体がボロボロになってんのに、動くなぁ。どんな夢だか。マゾちゃうのに

あ、映姫が、捕まった……手と首掴まれて、壁に迫られてる。

顔が近くなって、なんだ？映姫の口が動いてるのに聞こえない。いや、苦しそうな顔、だ

○○○

［――本当に、夢だと思ってるんですか？――］

季節は向日葵が咲き誇る夏真っ盛り……から少し過ぎた、所謂残暑。
それでも幽香の日傘が通常業務を果たしてしまい、俺もぴっちりした燕尾服をやめて久しぶりに着物を引っ張り出す様な日差しが降り注ぐ昼時に、俺ら家族は博麗神社にお邪魔していた。理由？こうやって暑い日は日本建築の素晴らしさを眺めつつそれの恩恵を得るのが一番いいって誰かがほざいてた。

「いやー上げ膳据え膳なんて1ヶ月振りだ、やっぱ自分が作らないって楽」

「そんな主婦みたいな事言ってないで手伝ってよ」

「うむ、断る」

幻想郷において、正直なのは時たま自分の命をドブにスカイラブ投法するのと同じだと何度も学習した筈なのに身体、主に口に身についていないとは教師失格である。俺が自身に手を下す前に霊緋の針が飛んで来たけど。

要するに、家族揃ってタダ飯もといタダそうめんを食いに来た訳で。因みに俺らの他に八雲家や慧音＋妹紅も来てる所アレか、お前ら暇人だろ。（一応時期的には）夏休みなのにこんな所にしか来る予定が無いなんてプププとか言ったら自滅するので言わない。

「藍だって手伝ってるんだから、鉄生もやりなさいよ」

「手伝ってるじゃなくて手伝わせてるだろ。そんな事はいいからその鶏肉は俺んだ貴様にはやらん」

大皿の真上にスキマを開いて真っ先に唐揚げ取ろうとする紫とスキマを閉じて紫の箸を粉砕☆玉砕☆大喝采してる俺の壮絶な食卓上空中戦をしたりと、比較的和やかなムードである。

「咲夜ー、橙ー、お前らは食わなくていいのかー？無くなるぞー」

そんな調子の俺達を見て、まだ隣の部屋で猫と霊夢とでじゃれ合ってる子供（片方は齢４００は越えてる筈……）に妹紅が声を掛ける。

「「後で食べる～！」」

「……やれやれ、二人共やっぱり子供だなぁ」

分かり易く子供らしい返答に苦笑いの妹紅、それにつられて幽香も微笑む。

「この間まで遊ぶ暇が無かったから、それだけ嬉しいんでしょ？猫に囲まれてて幸せそうだし、無理に引き離さなくてもいいわ」

すっかり母親が板についた幽香。子供が二人いるのは大変だなとか思った奴は表に出ろ幻想入りさせてやる俺はガキじゃねぇ。

そんな騒々しさの中で慧音は黙々と食ってたり。珍しい、何時もなら喧しい→頭突き→ＬａｓｔＡｒｋＦｉｎｉｓｈ，Ｐｅｒｆｅｃｔ又は食べ物で遊ぶな→頭突き→完全決着、とかなのに。などと考えながら１５膳目の箸をへし折った所で慧音に変な顔をされた。

「なにさその顔は」

「いや、お前が頭突きして欲しそうな顔をしていたのでな」

「誰が何時マゾに転向した。幾ら幽香の夫だからって自分の性癖変える事ぁねえよ」

今度こそ頭突かれるかと思ったらフェイントでイモの天ぷらを奪われた。色気より食い気と言ったら角で掘られそうだ。その、ナニを。

何時も以上にほのぼのとした空気の中、俺の心には懸案事項がぶら下がっていた。言わずもがな今朝の悪夢である。俺が作り出した只の夢なら良いのだが、最後の声が気がかりでならん。どーもあの声はどっかで聞いた事あるようなないような聞きたくない声でもあったようなはてさていやはや？

「鉄生、難しい顔をしてどうした？」

文字通り頭を抱えていると、油揚げを片手に藍が寄ってきた。お前

か、そうめんに揚げ物を付けようって言った奴は。揚げ物には普通蕎麦だろ。

「いや、考え事」

みるみる視線が冷たいものになって俺の心がＰＥＲＦＥＣＴ　ＦＲＥＥＺＥ。

「……お前が頭を酷使する程ものを考えるだなんて……ハァ……」

「溜め息の理由は訊かんでやるからさっさと揚げ納豆と骨煎餅持ってこいや」

どこの関白亭主だとか言われそうだがくれぐれも念を押す、幻想郷社会の基礎は女尊男卑である。こうやって強気に言うだけで一々俺の頭にギャグ補正が入って血だらけになるんだから間違い無い。最近立ち眩みが酷いのはこーゆー事で血を流して低血圧になってるんじゃあるまいな。

そんな事はさておき……ふむぅ、やっぱあの声が気になる。けど寝ぼけた頭だったからなぁ、幽香か咲夜の寝言でも聞き間違えたか、はたまた俺のリビドーが溜まりに溜まっていたのか。どちらにせよ夢だし関係無いか。

「にゃ～」

「ん？」

肉体労働と頭脳労働は同時に出来ず、ちょいと考えてる間に衣のカスしか残こって無かった食卓の前で揃いも揃ってだらけていると、

脇から三毛猫が寄ってきた。橙に呼ばれたけどあぶれて来たかな。

「どした、遊ぶんなら向こういけー」

「にゃっ」

頭を撫で回してやると気持ちよさそうに目を閉じる。こっちもふわふわしてんの触るんわえぇ気持ちやー。猫って太陽の畑は当たり前だが人里にもあんまりいないからこういう機会でも無いと触れ合えん。橙でやってると藍に殺されかねないし。

「ゴロゴロゴロ……」

「よーっしゃよっしゃよっしゃよっしゃ……暇だｎ「号外号外号外号外号外ィィィィィィィィィイイイイイイイ!!!」……」

ブン屋は年がら年中営業中かね。一々腹を立てる事が無くなったのは慣れが五割諦め四割失望一割ってところか。

食卓に直撃した射命丸の新聞弾幕の衝撃で逃げちまった猫を見送りつつ、ロボコップ張りのノールックショットで大元に文字通りのボムを当てて黙らせる。河童ってすげぇな、水辺に住んでるクセに爆弾まで作るなんて。

「おや、鳥が焼ける匂いがする」

「ありゃ駄目だ、火薬で焼けてるしなにより天狗って食う所が無いだろ」

呑気と言えば呑気な藍と妹紅。てか待て、妹紅お前は天狗食った事

あるのか（食欲的な意味で）

本当の事を偶には書いているらしいと言われる文文。新聞だ、一応は目を通してやるか。散っていった英霊への哀悼の意も込めて。

「まだ死んで無いですってぇ！こんがり焼けたからって私は食用じゃないですよ！」

……チッ、意外としぶとかったか。じゃなくて、まだ無事に読める号外を開いてみる。

「号外って言ってたわね、何が書いてあるの？」

「私、片付けがあるから。鉄生、ちょっと読み上げてよ」

「幽香も霊緋も、文文。新聞に何期待してるのよ。大した事なんて書いてないでしょ？」

「三者三様な対応どーも。取り敢えず、幽香と紫はもうちょい離れてくれ」

覗き込もうとしているのは分かるが重いし読み辛い。紫はツンデレか何かのつもりか、似合わんぞ。

「えーっと……おい射命丸、これ、マジか」

「「「「「？」」」」」

先程の強襲者を焼き鳥と渾名しからかっていた子供＋まともな方の

教育者と後ろの御仁らが怪訝な顔をするがちょっと気にしてる暇はねぇんだわ。

正面から見ると服がエラい事になっていた射命丸がこれまたエラく真面目な顔で「大マジです」と頷いた瞬間、号外を投げ捨てて一目散に連続空間転移してある場所に向かうしか無かった。

俺が知らぬ間に力を込めていてぐしゃぐしゃになった紙面には、『楽園の闇魔、襲われる』の文字が一面記事を飾っていた。

九十六、夢幻覚醒（後書き）

やーっとシリアルっぽくなってきたような気がしなくも無いです
書いたら書いたで後悔してるけど。書いててなんかヤになったり。
でも書きたい。矛盾してんなぁ

九十七、殴り込み（前書き）

更新力も文の質も落ちていく。嗚呼無能
書き急いでる感が立ち込めるなぁ

九十七、殴り込み

文文。新聞号外　以下、本文から抜粋

今日未明、「幻想郷の最高裁判長」こと四季映姫・ヤマザナドゥ氏が、自室にて意識不明の重態で発見された。（中略）部屋には弾幕ごっこによる被害の跡があったが、貴重品の類には手を着けられておらず、物取りの犯行では無いと見られている。（中略）目撃証言で共通する「黒袴の男」、これは「文文。新聞の歩く三面記事」の愛称でお馴染み水元鉄生氏の以前の服装と共通点が見られる。だが水元氏は前々回の取材にて「袴？そーいや大半のを無くしちまってたぜイェーアー！」とコメントしている事と、２００年程前に勃発した四季氏と風見氏の騒動（異変に非ず）から察するに、水元氏が今回の事件の犯人とは考え難い。

筆者の考察であるが、恐らく犯人は水元氏を装った者、しかも四季氏の部屋の位置と退路まで把握している事から推察するに内部の犯行ではないだろうか。だとすれば何故、その者は水元氏になりすます必要があったのだろうか。謎は深まるばかりである。

四季映姫が襲われた知らせは早朝から冥界内に響き渡り、その衝撃で蜂の巣に爆竹をぶち込んで出てきた蟲を機関銃で叩き落としているかの様だ。それもその筈、烏天狗の新聞には「水元鉄生になりすました第三者」だが、冥界ではそうは問屋は卸さなかった。

「犯人は水元鉄生、それで決まりだろう！」

「そうだ、何を躊躇う必要がある！」

幾ら幻想郷と言う僻地に飛ばされた映姫と言っても彼女を慕う部下は多い。その為、同志である部下達は文文。新聞にある様な内部犯の可能性を全否定し――彼らからすればとてもじゃないが考えられないだろう。何せ自分達の上司を襲おうものなら皆に袋叩きに合う故――内部に詳しく、かつ目撃証言に合致する水元鉄生を一番に疑っている。鉄生は彼らの恋敵であるのだからその分の私怨はあるだろうが。

「あんな根の軽くていい加減な奴に四季様は騙されていたんだ！だから私はあれほど部外者の立ち入りを反対していたのに……」

「そんな事は関係無い。問題は犯人をどう処するかでは無いのか」

……あくまで、犯人の処遇であって鉄生の末路についてではない。本当は鉄生がやってたと言うのなら話は別だが、賢明な読者諸君になら分かるだろう。水元鉄生にそんな度胸は無い、と。

「……」

そんな多種多様な神々が討議している部屋の中で死神、小野塚小町は出来るだけ目立たない様にしていた。彼女は映姫の部下の中では珍しく鉄生と関わりが深い部類の者であるが、その心情は揺れに揺れていた。

酒の席でのからかうだけのネタであったが、小町は鉄生にさっさと映姫とくっつけとしきりに言っていた。鉄生はそれを本気にした事は無かったが、だからと言って映姫を蔑ろにする様な事は絶対に言わなかった。

それが表面上のものか、それともせめてもの礼儀なのか、鉄生が映姫をどう思っているかは分からない。だけど、今回の様に人様、ましては相思相愛と言ってもおそらく互いに否定しない仲の者を傷つける行為に走る馬鹿だとは思えない。

それならばあの目撃証言は何だろうか。なりすましと言えば簡単だが、どうも事はそう単純とは言い難いらしい。……この場の空気からして。

「全員総出で水元鉄生を拘束、その後にレテ河にでも叩き込んでしまえばいい」

「そんな事をして罪を忘れさせては意味が無い。四肢を灰燼に帰し魂を畜生道へ落としてやるのだ」

見るからに荒っぽい二柱が言い争う内容は罪に対する刑罰の筈だが、どうにも公私を分けられない質なのでは無いだろうか。それ程映姫に手が出されたのに憤慨してるのであろう。

「落ち着け、まだ犯人の特定も出来ていないと言うのにそんな事を討議しても意味はあるまい」

その場の平定を望んでの言葉だったが、かえって煮えたぎる油に水風船を投げ込んだかの反応を起こした。この雰囲気に冷静な一言は野暮としか言いようがない。

「では早く人海戦術で見つけ出せばいいだろう！何時まで意味の無い会議をすれば気が済むんだ！」

「人員が集まらないのであれば我々が直に探しに行く！四季様を手に掛ける様な奴だぞ、神々が罰を下すのであればまだ温情があると言えよう！」

さぁて、あたいはどうしよう、と小町は上司への忠誠心と自分の身の安全を天秤に掛ける。四季様に手が出されたのは確かに万死に値するけれど、仮にも閻魔を負かせる様な奴に刃向かうのは……遠慮したい、と言うのが本音だ。

仕方ない、お暇しようと会議室のドアに近付こうとした瞬間――

「……ォォォォオオオオラアアアアアア！！！」

――目前を、扉が横切っていった。一直線上にいた者達を薙ぎ倒しながら。

「なッ、何者だ!?」

一柱がわたわたと鎌を取り、豪快な侵入者へお決まりのセリフを投げ掛ける。立ち込める埃の中から出てきたのは、彼らの噂の的である奴だった。

「……俺か？俺はお前らがよーく知ってる奴よ！」

懐かしの衣服に身を包み、怒気を霊気と共に撒き散らしながら、水元鉄生その人がふてぶてしくも仁王立ちしていた。

九十七、殴り込み（後書き）

明日から頑張るが座右の銘になりそうです

九十八、冥土行きと黄泉帰り（前書き）

今回は友人の各舞し氏に挿絵を描いていただきました！しかも二枚も！

お待たせしてしまった分、お楽しみいただければ幸いです

九十八、冥土行きと黄泉帰り

「……何故、貴様がここにいる」

あくまで冷静に、内心は動揺どころでは無く、声の代わりに心拍音が出てしまいそうになりつつも、青い顔の一柱が質問した。

常軌を逸している。水元鉄生が行った事はその一言に限るだろう。恐れ多くも冥府の神仏が揃っている場所にタダの妖怪紛いが踏み入れているのだから……頭のネジを一切合切抜き取ったとしても誰一人こんな真似はしない筈だ。

だが、あの登場の仕方の性か、はたまた特異な妖気の性か……ともかく、その場にいた全員の気勢が削がれたのは明らかだ。

「てめぇらだって諺は知ってんだろ？噂をすればなんとやらってなぁ」

――実際は、映姫がどこで休養しているのかを盗み聞きしようとスニーキングミッションインポッシブっていたら偶々会議室で水元鉄生が槍玉に上がっていると聞きつけただけである。断じて鉄生には博麗の巫女程の勘も運も無い。無いったら無い。

「で、おい……お前ら……俺が映姫をどうするっつった！あぁん！？」

さながらヤンキーの啖呵の切り方だ。近くにあった椅子を粉々にしながら、周りの死神達に迫る。

「まさかよォー、映姫んとこに侵入したのが俺とか思ってんじゃねーだろーな？」

「そッ、それは……ヒィィ！」

視線を逸らそうとする奴の首根っこを掴み、その面の前で先程の破片を粉々にする。たったそれだけの行為だが、一度優位に立てた相手を畳み掛けるには十分だった。

捕まってしまい哀れにも縮み上がっている奴を突き飛ばすと、丁度包囲網が出来上がっていた。鉄生はそんな奴らをぐるりとガンをつけ、唐突に叫び始めた。

「よぉーく聞けてめぇら！この水元鉄生、例え性根が腐ってても、例え天邪鬼だったとしても、例え九分九厘パクりだとしてま！俺を好いてくれて、俺が好いた女を虐げる程駄目になった覚えはねぇ！！」

ここが舞台だったとしたら今のセリフは間違いなく目玉であっただろう。多少のメタは目を瞑るとして。

そうで無くても、今の鉄生は本来あってはならないオーラを纏っていた。この幻想郷次元においてでは今の所、幽々子か慧音位しか持ってるのが確認されていない――

「お前らだって分かるだろ！？小さい子が好きだからそんな騒ぎ立ててんやろが！正直に思いの丈を言っちまえばいいんだよ！『なん

であいつみたいな大きなお友達にだけロリが集まってるんだ！不公平だ！』ッてなぁ！」

＞ｉ２６０９５―２８０９＜

――前言大撤回。カリスマと言おうとした私が間違っていた。と言うより何時も通りで安心した感もあるが。

そんな鉄生の妄想的変態的紳士的発言に共感している者達は少なく無かったがなんとか踏みとどまった様だ。同調などしていたらその永い永い一生の中でも決して失われない汚点、もとい恥部、はたまた黒歴史になるであろう。

「そ、そんな事はいい！私達が貴様を疑っている原因がそんな事だけかと思ったのか！？」

「うん」

コンマ一秒掛からない程の、しかし切れ味抜群の返しには脱力すら覚える。自分が憎まれていると知っていて逢い引きを続けていたんだから図太いと言うか、なんと言うか。気を取り直して、神妙な面持ちで語りかける一柱。

「いいか、貴様が参考人に挙がっているのは何も私怨からでは無い。――貴様の内にいる『罪人』が、私達の標的だ」

『……』

所変わってこちらは鉄生が飛び出した後の博麗神社。各々が思う事も、その表情に浮かぶ心理も、待ち焦がれる報も同一であった。

射命丸が運んできた号外を見た彼女達は、確かに鉄生が飛び出て行きそうな内容だと納得はしている。只――不安なだけだ。

鉄生がどこになにしに行ったのか

鉄生がまたなにか騒ぎを起こすのか

そして、犯人が早く捕まる報はまだか

賢者の右腕の藍も、守護者と名高い慧音も、不死人の妹紅も、一応博麗の巫女の霊緋も、大妖怪である幽香、紫ですら、単純に恐ろしかった。闘いが恐ろしいのもそうだが、降りかかる火の粉が自分だけでなく、守りたい者達にまで及ぶのが恐ろしいのだ。藍と幽香は家族が、慧音と妹紅は里が、霊緋と紫は幻想郷全体が。

特に幽香は……やはり、鉄生の身を案じていた。鉄生の全力は本人も知らないだろうが、幾らなんでも閻魔を打ち倒した者と対等と言う事は無いだろう。こうやって出先にでも犯人が現れ、鉄生が戦いを臨んだりでもしたら……自分の想像力がイヤになってしまう。

自らの緑髪をわしゃわしゃとかき乱して自分の考えを真っ白にし、ゴロンと畳に横たわる。丁度石段がある方向に寝転んだから里の様子がよく見える。ふと、犯人探しの為にわざわざ博麗神社に来る人はいるかしら。そんな事を考えていたら――

＞ｉ２６０９４―２８０９＜

――瓢箪から駒が出てしまった。幽香の視線の先には、鳥居の側に佇む人影が見える。幾ら昼間は「平和」とはいえ、こんな事件があった頃に妖怪が跋扈する博麗神社への道中を抜けて参拝にくる珍客はいないだろう。

だとすれば……やはり、素敵なお賽銭箱に小銭を詰めに来たのだろう。異変でなければ起動に手間取る旅館のテレビ並の金食い虫でも役に立つ事があるのか。

「どうかしたの、風見さん？」

失礼な事を考えながらぼうっと眺めている幽香に霊緋がつられて鳥居を見ると、若干目の色が変わった。なにせ今回は規模が大きいからギャランティを上げるのは容易い、苦しい家計の助けになるのなら危険だろうとがめつくなんだってやってしまうだろう。

「お客さんが来たなら、私達はそろそろ退散するよ。里の皆も心配だし」

ちゃっかり茶菓子を摘みつつ、慧音と妹紅が立ち上がった。彼女達も厳重ではないが、普段以上の警戒は必要だろうと判断したのだろう。

昼飯の礼を言う二人を見送りながら、幽香は遠目ながらに人影を観察する。袖が長めな着物の類、暑いと言うのに上着を着ているようだ。そして風になびく長く細い髪、それはまるで銀糸を束ねたかの様な美しい輝き……

「……鉄生……な訳無い、か」

心配で仕方ないのだろう、ちょっと似ていたらすぐに鉄生に当てはめてしまった。自分の願望に赤面しつつ起き上がろうとした刹那、

酷く、生々しい音が境内に響いた。

九十八、冥土行きと黄泉帰り（後書き）

異変は加速していく……主人公がいない所でなッ！

九十九、元凶（前書き）

何気に過去最高文字数だったり
説明ばっかだからって読み飛ばさんでね！

九十九、元凶

ｓｉｄｅ鉄生

行きよりも帰りに時間が掛かるのはどーゆー事だろうか。多少は消耗したにしても、速度に劣りが出る程とは思えない。誰かに追われている訳でも、道に迷ってる訳でも無い。それでもなーんとなく遅れるのは何故だろう。何故だろう。

……いや、実を言うと迷ってるってのはあるがな。と言っても道じゃないが。

先程まで冥界にて聞いていたのは、今回の事の犯人とその目的について。尤も、どちらも推測でしか無いのだが。

さて、気になる容疑者は……みんなお忘れでは無かろーか。なんとまぁ俺の中にいた筈の竜神が今回の重要参考人であった。はいここ驚く所よ

そしてまぁ分かるだろうが、竜神は今現在俺の中にいない。当たり前だ、映姫をヤってた身体が俺のままだったら夢遊病の如く夜中に出歩かにゃあならんが、生憎と自分は愛妻家兼愛娘家である。同衾が日常的になっている床から抜け出すのは容易では無いだろう。

……なに？　家族で？　お盛ん？　ふむ、夜道に気をつけろよ。

んなこたぁ良くて、問題はこれからにある。竜神が俺の身体にいな

いのであれば、別の身体、言うなれば『器』を用意していたとなる。なんとも手際がいいものだなぁオイと突っ込んでやりたいものだ。

しかししかーし、賢明で暇な読者ならば竜神と俺の契約を覚えているだろう。端的に言うと、俺の身体から出られないと言うものだ。出た瞬間に魂が霧散してしまうんだとか。

ならばどうやったのか。これは冥界陣の推察であったが、竜神が契約の裏を掻き、水元鉄生の肉体だった肉片に乗り移ったのではないか、と言うのだ。確かに俺の肉体から出てないのであればいいのかも知れないがなんか頓知をやられた様であまり良い気では無い。

そんでもって……それに思い当たる所があってしまうから困る。ちょい前に永琳女医から言われたのが脳裏に過ぎったのだ。はい、眼球です。俺の元左目をどっかに忘れてましたマジサーセン。だってこんな事になるたぁ思って無かったんだよ！　しゃーないだろ！変に収集癖がある主人公で悪うござんしたねぇ！

……逆ギレはこれ位にして。

その左目に移動したあいつが今更になって移動したのかは簡単。今まで左目をしまっていたのが俺が愛用していた袋だったのだ。紫から教えて貰った妖術に永続空間拡張や河童特製ステルス迷彩等々、実験と称してやらかし続けた結果、付加機能が数え切れなくなってもうて。

で、そんな袋の内側から抜け出すのは冬眠中の紫のそばでムラサキババアと呟くのと同義な程の綱渡りが必要だ。少し通る所を間違えたらどこか分からない空間や次元に行き着く羽目になるし。スキマ婆の方は多分春になるまでスキマ空間で漂う事になるんだろーな。

忘れられてなければの話だが。

そこまで厳重だとしても……やっぱり口を開けちゃえば簡単に出入り出来るんで。その点は術を掛ける訳にも如何だろうし。それに、外側からの術には強いが内側から――例えば掌握領域なんかを伸ばすのは可能だ。俺だって昔にやったし。いやあん中って意外と暗いしドラえもんの四次元ポケットみたく物が散乱してたし。

とどのつまりは、俺の左目に乗り移り領域で袋の紐でも切って逃げ出した竜神が犯人な訳だ。

しかし、そんな事をしたら何時俺や映姫に気付かれるか分かったものではない。俺が袋の存在をちょいちょい忘れ欠けてたのは華麗にスルーするにしても、しょっちゅう映姫と会ってたら気付かれても不思議じゃないんじゃないかなと。ここ最近は馬鹿吸血鬼の言動のせいで控えていたが。

そこでアイツが悪知恵を働かせた訳で。要は自分が監視されているなら、監視している奴を片付ければ話が早いぞ、と。んでもって契約も解けば俺に従う必要も無くなるぞ、と。途中レノの口調が混じったのは気にしない。

簡単にすると

竜神が俺の眼球に宿る
←
地底にて袋ごと落とす
←
誰かが竜神の手駒になる
←

えーきっき襲われる

……俺ぁ悪くねぇよ。忍耐強い竜神がやらかしたんだ、俺は知らん。有名無実。なんか違うな。

これまでの顛末や予想は聞けたのは良かったが、竜神の襲撃予定が分からなきゃ意味が無い。けどまぁ人間撲滅宣言してたんだから人里ヤヴァイんじゃ位には教えといた方がいいんでねーかなとね、俺なりの親切心をだな。オイそこ失笑してんじゃねえ。慧音の事だから、あの記事だけで人里隠しててもおかしくは無いがな。

そんなこんなで、只今人里上空。日も傾いてきた頃だから、そろそろ慧音が自宅に帰って篝火を焚く指示でもしててもええんや無いかなと思ったのだが、全く警戒していないんだなこれが。何時も歩哨が一人いるかいないかなぞんざいな警備だが、里の守護者殿が一声掛ければ屈強な警備員の十人や二十人簡単に寝ずの番を張ってくれるんだがね。役に立つかどうかはともかくとして。

「……ふぅむ」

となると、慧音が射命丸の記事を俺のゴシップネタと同じ扱いにしたか、はたまたまだ慧音が帰って無いのか。流石に被害が出る様な記事を嘘っぱちと頭ごなしに決めつけるなんて事は無いだろうから、恐らく後者であろう。けど昼飯食う以外で博麗神社に留まる理由なんて……

「もう神社に来たんかなぁ」

竜神がまだ俺の身体を勝手気ままに入れ替わり立ち替わりをやってた頃の博麗の巫女、霊奈は結構な実力の持ち主だった。それこそ半

暴走の竜神を止められる位の。とすれば、竜神が荒事を企てる前に足元の掃除を仕掛けるのは自明の理。博麗の巫女、妖怪の賢者、里の守護者、ここ辺りが狙われるんじゃねぇかな。この内八雲家は残念ながら俺も位置を知らないので突撃！隣の晩御飯と強襲は出来ない。多分竜神も知らないであろう。残りは博麗神社と人里になるが……人里のが襲われる確率高えと思ったが、まさか博麗神社に行ったんでねぇの？冗談じゃねぇ、幽香や咲夜だって向こうにいるん――

「あ……あの夢、ワザとか」

昔聴いた覚えのある声だとは思ってたが、まさか獅子身中の虫が囁いていたとは思わなんだ。とするとなにか、アイツはどこぞの名前の言ってはいけないあの人みたく俺と繋がってるとか冗談じゃねぇぞ？額に傷がある訳で無しに、まさか左目が繋がるんじゃあるめぇな。

あの夢がワザととすれば、見せしめ？　警告？　暴行動画の生中継がやりたいイタい奴じゃないだろうが、とすれば教える為にやりやがったんだろが。待て、まだ繋がってる可能性もあるって事はアイツは博麗神社に標的が揃っているから先に行ったんか？つかそうとしか思えん。

「……あ～～～～～クッソ！　竜神！　聞いてるんだったら反応寄越せ！　手前はまだ俺に寄生してるんだな！？」

半ば自棄になって叫ぶが、返事をしたのはカラスの鳴き声のみ。侘びしいなオイと頭がツッコむより先に身体は博麗神社へと進路を取っていた。

こちらは上空からの博麗神社です。ご覧頂けますでしょうか、見事に本堂が倒壊しています。辺りが霧が掛かった様なのは恐らく周りに張られた結界のせいでしょう。神社のシンボルである鳥居も無残にも脚を残して上部は崩れ去っているのが僅かに見えます。これから内部に潜入して来ますが、新しい情報が入り次第お伝えします。それでは一旦ＣＭです。

……ゴメン、こうでもしないと取り乱すかもしれんのよ。報道記者ってムズいねしかし。

荒っぽく結界を破いて行かずに石段を登っているのは用心の為。地面があるなら地脈からのバックアップも貰えるし、こうしてた方がサマになると言う事にしといて。

ここに到達する前、上空から確認はした。うん、ヤベェわ。思いっ切り襲撃されてやんの。霞んで見えなくされてる部分もあるにはあったが、切れ切れに見えるので十分だった。

はて、なんで俺が動かそうとする足は重いのか。激情に任せて突っ走りたいとは思う、痛く思うんだが……いやはや、身体はやはり正直だ。

怖い。めっさ怖い。神社にいたのは人間サイドでも妖怪サイドでもかなりの実力者だったんだ。あいつらが勝ったなら良いが、どうしても発想はネガティブに進む。幽香達が五体満足なのかはてさてどうなのか。

自慢では無いが、俺は幽香に勝った事は無い。最初に会った時みたいな殺し合い（？）みたく手加減無しだと分からないが――殺傷力の高い技なんかは使わない組み手やらでは無理です。あれこそチートっつーんだよこんちくしょう。

で、幽香に勝てない俺に幽香に勝った奴を倒せるか。否、断じて否。マスク野郎では無いが断言してやる。勝てる訳が無い。コッチに来たばっかの時と違って場数を踏めば分かる。勇気と蛮勇の違いはいかほどかと。結論を言えば無理だ。

こう言うのを臆病風に吹かれたとでも言うのだろうか。けど本能は正しい。体軸を反転させて帰りたいと叫んで身体もそれに反応しようとしている。無謀だから止めろとな。だろうね。俺も帰りたい。初心者と中級者と熟練者の違いは初心者は慎重を期しすぎる、中級者は無鉄砲、熟練者は中級者の無計画さの中に初心者の慎重さを取り戻した奴の事を言うんだ。俺？　危険察知に感じてはＥＸよ。アーサー王も真っ青だよ。退き際をわきまえるのは不思議なダンジョ

ンでは必須スキルさね。まだ大丈夫はもう手遅れは名言。

そんな野鼠みたいな俺でも、今回ばかりは逃げる訳にはいかない。なにせあそこには家族がいる。安否確認も必要やし、後々に尻尾巻いて逃げ出したなどと言われた日には腑が煮凝りになった様な思いをするだろうしなにより……いーじゃんよ。父親として良い所見せたってよ。

とまぁ脳内で語るに語りながら石段を上がっていると、不意に妙な『壁』を感じた。どうやら単純な結界だと思っていたものは、もっと俺に身近なモノだった様だ。

「んー……空間障壁プラス結界……幻術も仕込まれてる？」

どっかの誰かみたく芸の細かい事で、と溜め息を吐きつつ、障壁を知覚しながら結界破りの方法を考える。おそらくはココから竜神のホームグラウンドなんだろう。準備を怠ったら確実にヤられるんかなーおぉこわいこわい。気を抜いてる訳じゃないがこうでもしないと現実を直視しちまいそうでな。

結界を抜けるとそこは死地でした、って洒落にならんわ。入った瞬間にとんでもない妖気の嵐に揉まれて俺の意識がバニッシュ寸前。

「まさか絶賛戦闘中と来たか？　冗談じゃねぇ」

巻き込まれたら意識どころか身体が消し飛ぶだろう。戦場は博麗神社だろうと当たりをつけて、ワザと石段から外れて森から上をダッシュ……と思ったが、面倒なので土蛇に乗ってゴー。乱戦中の今なら問題あるまい。

ニョロニョロと木々の間を進んでいくと、益々妖気のぶつかり合いの激しさが伝わってくる。怖っ、やっぱ今からでも帰ろうかな。と不穏当な思考が過ぎる頭は無視して漸く到着した。

「……あーらら」

知らなかった。幻想郷のエリア５１って太陽の畑以外にあったのか。草陰に隠れる俺の目線の先にはまさしく死闘が繰り広げられていた。

大気を震わせる程激しい白雷の雨霰。

空間から放出される境内を埋め尽くす光弾の渦。

赤い蜃気楼が円を描き、収束し、灼き尽くす。

それらを包み込み中心へ、標的へ誘う竜巻。

「こりゃーアイツもお陀仏かな」

死闘と言うには些か一方的過ぎやしないか。俺だったらマスパの連打だけでこんがり肉になる自信がある。焼けすぎて灰すら残らないかも知れないが。

だが、こんな面子でも楽勝では無かった様子。みんながみんな服はボロボロ土埃付きまくりに所々怪我までである。苦しそうな顔で自身の渾身を叩き込み続ける姿は雄々しく痛々しい。はてさて、俺がいない間に何があったのやら。

と、早めにアイツの墓標を作っておこうと行動しようとした途端――

「……淑女の皆様方、永らくお待たせ致しました。漸く主役の到着で御座います」

――正に、射殺すかの声と視線が俺に突き刺さった。馬鹿な、あんな殺す為にある暴風の中で生きてるなんてあり得るのかよ！

俺の願望が虚しく消え去るのを具現化したかの様に、弾幕の嵐が一瞬にして無くなり中心にいた人物が姿を現した。

「」

その姿を知覚する寸前に投げつけられた俺の首をハネようとする不可視の刃を防ぐ。空間の塊をノーモーションで飛ばすとか化け物かよ、お返しくれてやるぜ！

「降臨『八百万首岐土蛇』、食らいつくせ！！」

蛇の首が大群となって影へと襲い掛かるがすんでのところで飛び退かれ、空中で此方に向き直り……あ

「うぉわああぁ！？」

予感と言いますか、反射と言いますか、とにかく上方からの攻撃に備え分厚い鉄の壁を精製。これ以上に反撃をする余裕まで持ち合わせておらず、土蛇を身代わりに置いて先程の戦闘の爪痕が残る石畳へ前方回転。予想通り、５ｃｍ板金と土蛇は数瞬でスクラップと化した。

空間圧砕とかアイツ以外やり得ないか……件の奴は辛うじて倒壊を免れた鳥居の上に降り立って、此方を見下している。

「拍手でお出迎え下さい……私の半身、水元鉄生の登場です」

シルエットを見ると、細部にこだわらなければ俺と似て無くはない格好。黒袴か黒い着物に黒い上着かの違い位か。胸部の辺りが膨らんでるのは無論、俺との相違点に当たるが。

「駄目ですよ、水元鉄生。女の子を待たせるだなんて。貴方らしく無いじゃないですか」

無意味な事をほざくのも不意打ちに聞くと鳥肌が立つその久々の嘲

り声も以前とあまり変わっていない様だ。安心したがガッカリゲンナリウンザリでもある。

「そりゃーどーも。生憎とヒールを待たせちゃ悪いってマナーは知らなかったんでな。今度から気をつけるさ」

初めて見た最も近しいその同居人の面構えは

紅に染まった石畳に

赤く照らされる瓦礫に

朱い輝きを放つ夕日に

良く映える歪み具合だった。

＞ｉ２６５４９―２８０９＜

九十九、元凶（後書き）

次は漸く百話か……だからってなにかあるわけじゃあないですが

百、始闘（前書き）

いやーははは、百話やでー

……いや、だからなんだって話なんだけどね。クライマックス間近で番外編入れるのも興醒めやし

まぁ、何時も通りの駄文ですよい

百、始闘

この局面で俺っつう存在は場違いにも程がある。竜神の瞳を見てハッキリとそう悟った。みんなが呼ぶ声なんてまるっきり耳に届かず、届いた所で鼓膜がストライキを起こしていたので聞きゃあしなかっただろう。

まさか一瞬で呑まれるたぁ思わなんだ。竜神の視線は並の人間だったら簡単に殺せるだろうと思われる程、強烈な殺気を放っている。端麗な顔に浮かべる薄ら笑いに騙されて眼を合わせてみろ、手足痺れるぜ。キレイな華には毒針があるってか。お陰で影踏みよろしく動けやしない。

「……鉄生ったら！」

しかし俺みたいな色男（笑）がボーっと突っ立ってたら周りがほっとかないらしく、幽香からイイ感じのエルボーを頂いた。敵の前なんにそんな事すんなや、泣くで。

「どーなってるか、分かる？」

一転して真剣な口調になる幽香。流石俺の伴侶、ふざける所と真面目にやる所をわきまえておられる。

「アイツがなんでココにいるかについてか？　それともさっきの猛攻でもケロッとしてやがる怪現象についてか？」

「お生憎様、前者は大体本人が語ってくれたわよ。後者はもう考えない事にした」

こうやって話してる間に幽香は傘、俺は足元からあらゆる武器を生やしてさながらジオフロントでゼルエルを待ち構える弐号機の気分で迎撃体制を取る。そういや、幽香とは向かい合って武器を構える事は何度もあったが、こうやって共同戦線は初めてか。夫婦での初めての共同作業が血腥いとはいやはや、俺達らしいや。

蓬莱人と天狗も二人で固まって何やら話しているが、竜神はそれに何をする訳で無く、ただただこちらを見下ろしてきている。それだけでもなんか腹立つが。

「ふーむ……本人が理性的な内に俺も訊いてみるかねぇ」

「ちょっ、鉄生!?」

ひょうひょうと戦場を歩く俺の姿に素っ頓狂な声を上げる幽香。なぁに、竜神が今すぐにでも俺を殺すつもりならついさっきまでの会話だってあるかどうか怪しいもんだ。少し位近付いたって殺しはしないだろう。

しっかしまぁ、今から殺し合うと言うのにこうやって知識欲を満たそうとするのは俺らしいってか、人間らしいな。ここで竜神が「冥土の土産に～」とか抜かしてくれたら立派な死亡フラグなんだが。

「全く、失礼な言い方ですね。まるで何時も私が狂ってるとでも言いたいんですか？」

「……じゃないとでも申すか」

しっかり殺気は放ったまんま、ゆらゆらと長い髪を揺らしながら竜

神が近付いてくる。さっき殺そうとしてきた奴と正面で向き合ってまともに対話が出来た理由？正直に言うと、接近に全く反応出来なかったから。恐怖心って許容量をオーバーすると吹っ飛ぶからな。

「さて、と。お前さん、誰の身体をパクってきたんだ。少なくとも元々の身体じゃあねぇだろ」

にしてはどことなく竜神らしいと言えなくも無い。人化を解いた俺と同じ白銀長髪もそうだし、声も俺の頭で響いていたのと同じソレだ。

「外見は昔の私と同じ姿ですよ。服も貴方の袋に丁度良いのがありましたので」

「……冥界でやらかしたのはお前だよな。ならなんで黒袴の男なんて証言が出る？」

一番の疑問がそれだ。幾ら服が同じだったとしても男と女を見間違えるとは思えない。そりゃー背中に「漢」とか「天」とか書いてあったんなら間違えるのも分からないでも無いかも知れんが有り得ないわな。

そんな純真無垢な俺の素朴な疑問に、ともすると狡猾さが垣間見れる笑顔で竜神は返事をよこした。

「簡単ですよ。あの時はまだ身体は“元のまま”だったんです」

「……？」

元のまま、とはなんぞや。すると何か？　こいつが身体の主導権を

握った時は男だったけれど、途中で女の身体に変身したとでも？
そんなメタモンみたいな芸当が出来る奴がいたんか。

俺の訝しむ顔を見て、説明不足と気付いた竜神が顎に手を当てて少し考え込む。

「うーん……貴方ならすぐ分かると思ったのですが。わざわざ闇魔様に身体を壊される所まで見せたのに」

「見せた？　……ああ、あれ……」

昨晩の竜神の眼を通して見せつけられたその奇行。映姫がかなりの抵抗を見せていたのは確かに印象に残っている。それこそカタチが悪いんじゃないかと言わんばかりに腕が二つ、三つ潰されたんじゃないかと思うばかりな。

さて、そこで問題だ。そんな猛攻を受けて起きながら、なんで今現在元気いっぱいに殺しに掛かってくる事が出来るんだ？　ついで言うと、なんでコイツはさっきの殺意丸出しの嵐を食らった上で立っていられる？

俺はこの問いに対する答えを残念ながら持ち合わせてしまっている。俺が最も忌み嫌い、最大限忘れようとしていた、最高であり最低の師匠、の転生体。

「……そーか……あのバカ（ルーファス）……」

勝手に死ぬのは構わねぇが、死んでからも迷惑掛けるんじゃねぇよ。手前の身体の処理が下手なせいで俺まで被害を被るとか迷惑千万だぞこんちくしょう。

確かアイツは地底に行くと言っていた。ならば竜神とフュージョンする暇があってもおかしくは無いだろう。まぁアイツが想い人に逢えたんなら話は別だが今現在こうやって竜神がいてしまってるって事は、地底に置いていっちまった袋とルーファスが接触したんだろうなぁ。厄介な事この上ない。

「本っ当に運が良かった。上手い具合に貴方から離れられる『器』が手に入り、丁度良く本体から逃げられ、しかもこんな肉体まで。外の結界みたいに複雑な術の組み方や変質済みの再生力、こういうのを『天は我に味方せり』とでも言うんでしたっけ？　私も一応神様ですが」

俺が俯いている所に自身の悪運自慢をし始める竜神。確かに運が良く無きゃこれほどまでに俺の頭痛の種にはならなかっただろうな。

しかし……ルーファスが乗っ取られる？　嘘だろ、あの野郎がただやられるタマたぁ思えない。アイツがワザと死んで身体を明け渡したんならともかく……いや、そうしたのかもしれんか。自身の魂が身体以上に危険だと悟っていて、尚且つ死んでも死にきれてない存在だから出来る芸当だが。

俺の言葉が無くなった所で、元々の持ち主に断りも入れずに竜神が袋を漁り始めた。

「……質問は終わりですか？　尤も、これ以上時間を掛けていると命の保証を致しかねますが」

「保証ね……俺の命のか？」

静かに首を横に振った竜神が取り出したのは、太めの白い棒……枝？　もう片方の手には短めの糸の束の様なモノを持っている。

「社で治療している様ですが、はて。腕を落とされ大量出血した半獣は何時まで保つんでしょうね」

「……」

投げて寄越されたのは見覚えのある紐に括られた竜神や俺より若干暗い娘の銀髪と、これまた見覚えのある青い衣服の切れ端が生々しい切断面に付いた上司の白い腕――

ブツン、と頭の中でナニカが千切れ飛んだ音が駆け巡り、再び脳が聴覚を重視しなくなっていたと認識した頃には、俺はそのふざけた面にカイザーナックル入りの拳をぶち込んでいた。

百、始闘（後書き）

漸く次回から戦闘……の筈
頑張って行くんだぜ。けど期待は禁物だぜ

百一、試闘（前書き）

戦闘描写が来る度に悶えている気がする。お目汚し本当に申し訳無い……

百一、試闘

当たった、いや現在進行形で当たってる。その感触はあるのは確かだ。なにも殴り飛ばせるとまでは思っては無いが、それでも多少の顔の変形を期待して――そんな事を考えたのは後になってからだが。この時は完全にトサカに来てて考える余裕なんて無かった――手甲装備での拳骨をお見舞いしてやった。

「ッ……！？」

なのに……コイツはなんだ？　顔色一つ変えないで、身動ぎすらせずに顔面で拳を受け止めてやがる。竜神は避ける事も往なす事もしやしないで、ただただ自身に突き立てられる腕を気怠そうにに眺めている。

「全く、頭に来たからってすぐに殴りますか？　それに女性の顔をだなんて……」

すっ、と誰からも制止を受けない自然な動作でその手を上げると静かに領域を硬質化させ始め、必死に中和を試みるがみるみるうちに文字通りの手刀が出来上がった。オイ待てその刃は誰に向けるつもりだ危ないから早く下ろさないとパパ怒りますですよ？

ふざけた事を思いつつも腕を引っ込めたのは良い判断だった。なにせ斬撃の余波で手甲が剥がさせる程の威力だったんだからまともに食らってたらどうなったか想像したくない。

「クソッ、滅茶苦茶やるんじゃねぇ！」

今度は素手で掌低。丁度鳩尾に入るイイ具合になったが、それでもケロリとしてるからイヤになる。人化を解けば、と思う所もあるが、それより先に手が出ちまったんだから今のまま頑張るしかあるめぇ。

「ハァ……手癖は余り良くない様ですね。頭がどうなのかは……まぁ、言わなくても分かりますよね？」

「うるせぇっての！」

胴に置いていた手からアッパーに移行するが紙一重で避けられ、そこに出来た隙は見事に狙われる結果になった。

「貴方がまさか忠誠心の厚い部下だったとは。上司の後を追いたがるだなんて思いませんでしたよ」

自動車事故や落下事故の被害者が言うには、事故の瞬間の光景はさながらスローモーションの如くゆっくりに見えたそーな。アドレナリンが大量に出てる所為だとかなんとか聞いた覚えがあるが、今まさに俺の頭の中では脳内麻薬垂れ流しなんだろう。あれ、アドレナリンって脳内麻薬だったっけ？　まぁいいや。こうやってくだらない事をダラダラと語れているのは目の前の手刀が凄まじくノロノロとしているからだ。やるなら一思いにやって欲しいものだが本人はただ振るってるだから仕方ないか。斬られる時の痛みが長々と続くのだけは勘弁だがエンドルフィンやらが出まくってる今なら痛覚も鈍ってると信じたいが如何程の効果があるのか分かったものでは無い。やっぱ痛いんかなー、この角度なら脇の真ん中から肩甲骨のギリギリまで斬られるんだろうか。想像しただけで痛くなりそうだ。一応障壁張ってるんだけど既に掌握された空間だと守りには向かないのかな。こんな風に腕飛ばされたら幽香達の足手まといは確実だろうな。いきなり参戦して脱落とか迷惑極まりない――

「……脱落なんかッ」

薄皮に切れ目が入る刹那、現実逃避をかましていた頭が一気に生存に向けて稼働を始める様になり、

「誰がするかぁぁぁぁぁ！！」

記憶の中から引き出された、銀髪ロン毛が愛用していたので有名な長刀、正宗を手刀を迎撃する様に射出し、

「くっ……！？」

相殺を確認する前に柄を持ち、刀全体に領域を薄く、鋭く纏わせながら片手で振り下ろし、刃を上向きにさせると同時に柄に手を当て振り上げ、凶刃を付与した腕を切り落とす。

「オラァァァァァァ！！」

最後に胴体をトランスアキシャル面に切断する軌道で刀が一閃、同時に刃に纏わせた領域が切った空間内を瞬時に掌握し、あのスペルカードを発動させる。見せ技なんかじゃない、恐らく人化時では俺の中で最強のスペルカード。既に切り離された次元だったら俺の独壇場だ！

「完全掌握、『無限の剣製（アンリミテッドブレードワークス）』！　くたばれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

狭苦しい空間があっと言う間に剣の弾幕に包まれ、竜神の身体を貫いていく。こちら側から見えるのは次元が徐々に剣で埋もれていく姿だけだ。

「ハァッ、ハァッ、ハァァァ……」

一旦危機が去った事により、思わずその場で刀に寄りかかる……と言いたかったが、それより先に抱き止める人がいてくれた。

「幽香……ありがとな」

何時もは飛びつかれるサイドだが、今ばかりは俺が頼ってしまう。後ろから肋骨の下、胃袋の辺りを握って支えてくれる幽香に……ん？

「このッ……馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「このへそから持って行かれる感覚はまさしぐぇっ」

景色が高速で縦回転すると言う珍しい現象を楽しむ間も無く頭蓋にクる衝撃は多分さっき俺が放った打突よりもすんごいと思う。つかそれを味方にやられるってどうなの。

「なんで勝手な行動するのよッ！　ふらふら歩いて言ったと思えばいきなり殴りかかって！　危険だとか考えられなかったの！？　後少しで慧音みたくなる所だったのに！！　何とか言ってみたらどうなのよ！！」

「……喋る隙が無いのと、突発的な頭痛のせいで口を開けたら悲鳴が出そうだったから勘弁して下さい」

「ハイハイどーどー、コレが考え無しなのは何時もの事だから目くじら立てない立てない」

そんな紫の仲裁らしくない仲裁をお構い無しに叫び続ける幽香についで、今度はもんぺ娘に胸倉を掴まれた。

「私は幽香程キレる訳じゃあ無いけどなぁ……お前は考え無し過ぎんだよこのマヌケ！」

慧音程じゃあ無いが痛めた脳髄には衝撃が強過ぎてターベージみたく頭から割れるかと思う程の頭突きをお見舞いされた。入院（少年院に非ず）してる訳じゃ無いんだからそこまで強烈な手土産は必要しとらんのだがなぁ。

「まぁまぁお二人共、痴話喧嘩は事が済んでからにしましょうよ。ネタになるから止めませんが」

前門に不死人、後門にＵＳＣと言う万人誰もが諸手を上げて無条件降伏したい状況下を苦笑いしながら何処からともなく取り出したカメラのシャッターを切り続けている射命丸さんは後で体育館裏に来ようか。止めようぜ？　無抵抗の一般人が二人掛かりでサンドバックにされてるショッキングな場面なんざ記事にしてもおもろないぞ？

さながら生卵を一気飲みするボクサーが如く俺を殴打する妹紅は、射命丸の言葉で漸く正気を取り戻す。

「ああ、そうだった。この単細胞を制裁する前に慧音を永遠亭に連れてってやんないと」

「誰がゾウリムシやアメーバとお仲間か。……ついで、『事』はまだ済んでないぜ？」

妹紅を除くお三方はそれを理解してるらしく、自らの武器から手を

離そうとはしていない。幽香も流石にふざけるのを止めて関節技を止めたが……プロレス覚えたての中学生じゃないんだからそんな風に身体を痛めつけないで頂きたいぞ。

「……え？　だってさっき鉄生ので串刺しになってたじゃないか？　姿だって見えないし」

「妹紅、お前さんが俺の技を評価してくれるのはありがたいが……奴(やっこ)さん、まだまだやる気満々みたいらしい」

こうやって話してる間でも俺が掌握している次元が破壊されているのが分かる。そうでなくても先程の空間が歪んだままだから大妖怪の方々には見抜けた様だが。

「突破されるまで後……一、二分と言った所か。出来るだけの準備するしかあるまいなぁ」

既に歪んだ空間に向けて傘を構え、先端に妖気を溜めに溜めている幽香。

スキマを中空、地面、木々にとあらゆる所に展開させ、オールレンジ攻撃を狙う紫。

状況を把握しきれていないが、危機を察知したのか術の詠唱を始めた妹紅。

カメラを仕舞い、天狗らしく扇を振って風を増幅させる射命丸。

そして……自身の周囲にスター・プラチナとザ・ワールドを従え、服の裾にスペルカードを反則的に構えた俺。さっきとは違い俺が増

えたけど、役に立てればいいんだが。

遂に最後の剣が砕けたのを確認し、それと同時に断裂した次元の操作を手放す。

「……来たぞ」

次の瞬間、切り取られた空間と共に戻ってきたのは俺の領域と、生成し尽くされた大地と、無惨な剣の残骸と――相変わらずの冷笑を湛えた、竜神であった。

百一、試闘（後書き）

第一ラウンドは一応鉄生の勝ち？
第二ラウンドははてさてどうなるのか、せめてこれまで以上に描写を上手くしていきたいぜ

百二、思闘（前書き）

一話一話が短くていかんなぁ……
話が中々進まないのは実力不足です。短いクセに更新が遅いのは根気が無いからです

百二、思闘

博麗神社、本堂。開戦早々に腕をハネられた慧音とその治療に当たっている藍と霊緋、ついで逃げる際に髪を切られてしまった咲夜と橙が今現在立て籠もっている場所である。

「こんな大怪我の治療なんてやった事……藍、止血帯ってこれでいいの？」

「ああ、取り敢えずはコレで大丈夫。後は慧音が何時まで保ってくれるかが……」

二人でどうにか慧音の傷口を塞ぐ事が出来たが、それでも危険な状態なのは変わりは無い。キチンとした処置をしなければ腕どころか命の保証さえも出来ない。

一刻も早く、ここから脱出しないと……そう思っている者が殆どだが、外の様子を見れない今、迂闊に結界を消す訳にはいかない。それを理解して、外の者達を信じて、今か今かと待ちわびるしか無いのだ。

「……お母さん……」

しかし、ここに一人。今まで訓練しかやって来なかったひよっこが今にも外に飛び出そうとしていた。今までは身を守る事で手一杯、つい一ヶ月前に漸く戦闘を学んだ子供、十六夜咲夜。

初心者は石橋を叩いて渡らない、又は壊す、中級者は蛮勇無謀、そして熟練者は中級者のはっちゃけさを持ちながら、初心者の思慮深さを取り戻した者を言う。この中で最も危険な状態は中級者だが――咲夜は、今まさにそれに陥っていた。

今まで見てきた闘いが「ごっこ遊び」とは知らず、又それが全力を出していないものと露ほどにも思っていない咲夜の脳内では金ピカ馬鹿よろしく慢心が渦巻いていた。

――逃げている時には全力を出せなかった。だけど、今度は大丈夫――

自身の力に過信しきっている咲夜。その目には僅かながら興奮が混じっていた。

ｓｉｄｅ鉄生

流石に掌握下から離れた場所での攻撃だと身体の再生以外に集中出来ないらしく、髪留めが無い竜神の姿は白髪の貞子みたくなっている。着物に関しては上着が剥げ、傷だらけでありながらも体裁は整って見える不思議。

いや、そんな事はいい。重要なのは都合良く書かれる竜神の外見じゃあ無い。

「……俺の居場所が無いと来たか」

遠隔操作で人形を動かす位しかやる事が無い。尤も、その人形も仲間の攻撃で何体も蒸発しているが。

紫と妹紅と射命丸が後衛、幽香と俺が一応前衛……だが、残念ながら俺には幽香並の反射神経は持ち合わせていないもんだからともすると弾幕の巻き添えに遭うから困る。

駄菓子菓子、そんな中やっぱり竜神は生きている訳で。不気味な点は再生をし続ける身体か反撃をしない所かどっちだろう。

……そう、反撃をしていないんだ。さっきまでは手刀程度ならやってきたのだが、今度はそれすらもしてこない。不審、めっさ不審。

とは言え、そんな事に構う暇無く攻撃を繰り返す。灼き焦がし、穿ち、切り刻む。再生を物ともせずに行うコレは既に『作業』と化していた。

「……ッ……」

嫌になる。さっきまで俺を殺しかけた奴が今度は棒立ちでされるがままと来た。何も知らない奴が見たら只の私刑にしか取れないだろう。他の奴らも苦虫を塗りたくられた様な顔をしていやがる。

なんだよ竜神？　今更戦意喪失なんて無しだぞ？ふ抜けてるんだったら喝入れてくれる。

人化を解除して湧き出る妖気と神気、ついで地脈を正宗に通す。肉体にも刀身にもかなりの負荷が掛かるが、なに、一瞬で済ませればいい。

「行ッけえぇぇぇぇぇぇぇ！！」

飛び上がり空間短縮しながら脳天目掛けて獄門を仕掛ける。上手くやれば一気にツェペシュよろしく串刺しハヤニエの出来上がりになるんだ、こうなったらこのまま切り裂いてやるわッ！

「ッ！！」

残念ながら真芯は外れてしまったが、それでも左肩を貫く快挙。このままロースみたく切り落としてやろうかと思ったがそうしたらまた再生されちまうから意味が無い。

「なら……こうしてやる！」

刀身をフランベルジュみたく波打たせ、それと同時に切っ先と地面を同化させてえげつなく縫い止める。これなら動きを止められるし無理に引き抜こうとも出来ないって寸法よふははは。

「さって、どう料理してくれよ「危ないですって！」へ？」

一陣の風かと思えば首根っこを髪ごと掴み上げられた。足首掴まれて宙ぶらりんよかマシとは思うがだとしてもいきなり首吊り状態はびっくりするから止めていただきたい。

「しゃ、射命丸！　なんのつもりだよ！」

「周りが見えて無かったんですか！？　ほらアレ！」

引きずられる様にして着陸すると、先程まで俺がキープしていたポジションごと見事に雷光と炎弾が縦横無尽に駆け巡っていた。はて、火炎はともかくマススパークって直線射撃だと思ったが、サイコガンじゃあるまいになんで方向が変わって発射され続けているんだ？

「二人の弾幕を紫さんのスキマで射線の方向転換してるんだ……こんな使い方まで……」

ボソボソ呟きながらメモをする射命丸。カメラが無くとも一端の記者魂は見せてくれるんだなぁ。流石に観察眼が違う。

「……射命丸、竜神の再生具合に変化ってあった？」

「いきなり何で私に訊きますか」

「いんやさ、よく観察してるみたいだし。大抵は段々再生力が落ちてきたりするものじゃないかなーと。こーゆーのは」

「リジェネって最大ＨＰ分の回復量だから戦闘中に変わったりする事は無いと思いますが」

「ナチュラルにそんな事を言われると色んな意味で困――――Ｉａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ《体は剣で出来ている》・“熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）”！！」

下らない会話中に突如横槍を投げ込む白い影。いやまぁ竜神だって分かってたけど咄嗟にはやっぱり空間障壁しか出てこないもんだ。尤も、言霊で「詠唱してロー・アイアスを作った」と自分に思い込ませられれば実際にロー・アイアス並の防壁が作れる訳だけど……

「ちぃッ、やっぱ相性悪過ぎだ！」

相手は肉弾戦で来てるし、なにより空間操作のエキスパートだ。突破されない方がおかしい。七つの花弁全てを破られ、なにも対処出来ずに激突する勢いそのままに竜神と共に本堂に突っ込んで行くのにはそう時間は掛からなかった。

百二、思闘（後書き）

鉄生の言霊は「自分に思い込ませて」「自身の力を最大限発揮させる」物ですから、ネタ詠唱も実は役に立ってるんですな

次回からは受け攻めが逆になるよ！竜神攻めだよ（多分）

唐突に幽×咲の需要はあるのか気になった。俺ならご飯5杯は固いね（キリドヤッ

百三、刺闘（前書き）

なんだか前書きが後悔を連ねていく様になって来ている気が
ともあれ遅れて申し訳ありません。ついで視点がコロコロ変わって
すみません

百三、刺闘

「ん……？」

身体ごと鉄生にぶつけ、そのまま結界を破いて本堂へ吶喊した竜神が疑問符を上げる。

「あッ……ぶねぇなぁ、オイ。俺が作った刀で俺をピン刺しの標本にでもしようかと思ったのか？　ったく、趣味わりぃ」

先程まで竜神の肩を縫い止めていた波打つ刀。竜神はそれを鉄生の心臓目掛けて突き穿とうとしたのだが、不可視の盾に阻まれた瞬間、鉄生が素早く刀の軌道をズラしてしまい、左腕に刺さる程度で済んでいた。

しかし、急所は外れたとは言え二の腕が膾にされかけているのだ。妖怪の神経が無ければ普通は痛みに耐える事も出来ず、軽口なんか到底無理だった筈である。

「残念、外されましたか……もうそろそろ貴方にも退場願いたいのですが」

心底残念そうにポツリと呟く竜神。その手で刀を握りつつ、背後に迫る四人をちゃっかり領域で迎撃している。

「肩甲骨をブチ割って！　上半身を腰寛骨まで鯵の開きのように裂

いてやれッ！」

その隙に鉄生は足元から銀の鎧を纏った土人形、シルバーチャリオッツを作り出しけしかけた。出来うるバックアップにより、自身と遜色ない動きを見せる銀の戦車に満足げな鉄生だが

「無駄ですよ」

素早く腕から引き抜かれた刀型のフランベルジュにより、ものの見事に騎士は斬り裂かれてしまった。

ご存知の方もいるだろうが、フランベルジュと言うのは所謂刺突武器である。歪曲した刃を刺す事によりえげつない傷口を残すと言う、死より苦痛を与える事で有名な代物だ。

そして日本刀は言わずもがな、斬る事に関して言えば刀剣の中では世界一とも言われている。が、それは日本刀特有の鋭利な刃と振りの速さ諸々があってこそである。

つまり、斬る事を目的としている刀と掛け合わせる相手にフランベルジュと言うのは、ナメクジに塩どころか希塩酸を掛ける位に相性は最悪と言っていい。強いて使えるのは刺突であるが、地面や建物、肉体に幾度と無く刺し穿った切っ先が果たして甲冑に効果があるか甚だ疑問である。メインの斬りに関しては某超野菜人に某家電製品様が挑む事よりも無謀かつ無理な相談だ。

しかし、この水神はいとも容易くやってのけてしまったのだ。その大妖怪の腹に鎮座していたナマクラ刀よりも役に立たない刃で銀のレイピアを受け流しながら肘を切断し、切り返しで胴を横一閃。トドメとばかりに脳天をかち割る軌道で振るわれた刀は、シルバーチ

ヤリオッツを両断してしまった。

「なッ……！？」

これには思わず苦笑いなどと冗談を抜かしている場合ではない。確かに棒切れだろうがなんだろうが領域をそれに付与していればそれなりの武器にはなりうる。しかし、周囲に結界を張りながら後ろで大妖怪の攻撃を防ぎ、それでも攻撃に転用出来るとは考えがたい。と言うより考えたくない。

とすれば、やはり「刃で斬った」のだろうか。有り得ない、と即座に否定する頭脳を差し押さえ、鉄生はなけなしの頭脳を回転させる。

1．自身の人形に不備があった
ノー。不備があるのならば俺の身体強化もままならない筈。

2．実は竜神は刀が本当の獲物と言う外見のモデルと同じ体質
ノー。５００年前に入れ替わった時にはそんな所は露ほども見せていなかった。パクリダメ、絶対

3．土人形の弱点、斬れやすい所を知っていた
無きにしも非ずだがあの短時間でそんな事を見破られたのは認める訳には……

「アブねッ！？」

一つの頭脳で考え事と行動の両立は難しい。それに気付いてしゃがむのが後一瞬が遅ければ今頃本堂の柱の様に無残に切断されていただやべぇマジパネェ……そう思って鉄生が本堂の方を見ると

「ッ……」

そこには、柱の中程でポッキリ折れた刀の上半分が刺さっていた。本来なら柔らかい肉を刺す刃で硬い柱を斬ろうとしたのだ、刃が突っかかってあっさりと折れるのは物の道理。

「今ッ！」

その隙を突いて鉄生は触手ｐ……もとい、竜神の捕縛を敢行する。竜神を中心に円で囲う形で地面を掌握し、そこから中央へ向けて小型の土蛇を放つ。間髪入れずにしゃがんだ体勢から幽香達がいる方向へ走り出す。さっさと逃げたいと言うチキン的発想と既に傘をこちらに向けていて、そこから起こりうる被害に巻き込まれるんではないかと言う動物的直感が働いたのだ。どっちもどっちな気がしなくは無いのだが。

「お前ら、俺を巻き添えにするつもッ！？」

薄情な仲間に鉄生が悪態を吐こうとした瞬間、左肩に妙な感覚が伝わり、言葉が詰まる。串刺しになっていた部位が痛んだのかと思ったが違う。まるで肩がバターを裂くかの様に、まるで切り取り線をなぞられるかの様に――

「お父さんッ！！」

その言葉と共に鉄生に降り懸かるのは短剣の小雨。拘束する筈の土蛇を折れた刀で薙払い目前で構えていた竜神に危うく自身から突っ込む所だったのだが、その雨粒を避ける為に後ろに下がって難を逃れられたのだ。

「ッ！？　咲夜、なんで出てきてんだ！」

だからと言って感謝する事は無く、ショートヘヤーになってしまった我が子に怒鳴る鉄生。その叱られた咲夜はと言うと馬の耳に念仏を地で行き、その手にナイフとスペルカードを構え、ただ竜神のみを見つめていた。

「大丈夫……お父さんとだって戦えたんだから、大丈夫、大丈夫ッ！」

鉄生の言霊の様に自分に言い聞かせ、信じ込ませる咲夜。やはり本質は家系で受け継がれるのだろうか。鉄生と咲夜は血は繋がっていないがそこはご愛嬌誰も気にしない。

「咲夜、止めなさいッ！　中に入ってないと危ないわよ！！」

ナイフで気付いたのか、幽香が急いで声を掛ける。だがその声が届く頃に娘は既に高らかに呪文符の宣誓を行っていた。

百三、刺闘（後書き）

竜神の隠された能力が垣間見えた回でしたー。多分分かるでしょうが前々からやりたかったけど戦闘描写が書けない俺が上手く表現出来るか不安です

ってか、小説の描写をそのまま書くのはアカンかな。ネタとして割り切っていいと自己判断してるけれど

百四、視闘（前書き）

文句があっても呑み込んでくれたら幸いです
突っ込んだら負けの精神を忘れずに

百四、視闘

止まった時の世界。時間を認識出来ない者には到達する事の出来ない世界。

咲夜はその世界を誰に教わる事無く、物心付いた時から『分かって』いた。実際にはルーファスになにか細工されたのかもしれないが、元より能力は凄まじい性能を誇っている。

時止めを容易に行い、ナイフが対象に到達するまでの時間を無くし、時を加速させ超高速移動をも可能とする一方、時間遅延により延々と逃げ回れる。空間操作にも才を見いだし、まさしく水元鉄生の娘として相応しい立派な事たが……問題点はその分目に付いた

まず、圧倒的な経験不足。実戦経験がエラく少ないのだ。それをなんとかする為のアリスとの口約束だったが、未だ果たされてはいない。鉄生や幽香の模擬戦では遊ばれていたと同義だ。

次に実力過信。咲夜は分かり易く天狗になっている。その体裁きや能力に後押しされれば仕方のない事だが、慢心は危険しか呼ばないのは世の理。

そんな咲夜が殺し合いの真っ只中に割って入るのは自殺行為と言っても差し支えなかろう。

しかしその行為を止める隙無く発動したスペルは鉄生が咲夜へと譲

った、しかし元を辿れば十六夜咲夜オリジナルのスペルカード。

「幻世『ザ・ワールド』――――時は止まる」

宣誓と共に配置される無数の銀の刃。切っ先は全て竜神へと向き、一糸乱れぬ完璧な配列がなされている。

次、自分があの文言を言えば、あっと言う間に竜神はハリネズミになる。小さな達成感を胸に秘めつつその口を開き

「そして――」

紅い瞳が青に変わり

「時は――」

ナイフが音も無く動き始めた。

咲夜が次の場面を認識するには少しばかり時間が必要だった。

期待していたのは竜神の死体。そうでなくても、深手を負わせられる。そう信じていた。信じて疑わなかった。

「……なにを、しましたか？」

だから、こんな事が起こるのは有り得ない。

「さっき、逃げられた時もそうでした……一体どんな小細工をしてるんです？」

自分のナイフが自分の許し無く、止まった時の世界で動くだなんて。

それも、一全ての刃が寸断されて地に落ちると言うカタチで《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

「……まぁいいでしょう、幸い貴方は人間だ。躊躇う事が無くて助かった」

「……え？」

暫く固まった後、小さく疑問符を浮かべた咲夜は目の前にある見慣れた自身の武器に気付く。

それに気付いた瞬間、金属が肉を刺し通す音が聞こえた。

ｓｉｄｅ鉄生

肩が灼ける。溢れ出てくる熱い血は傷口の細胞が感じている。

「――――」

声も音も無い。自分から発せられるものは血液だけじゃないか。何故かこの傷の痛みを感じずに、身体から血液が抜け出ていく感覚しか頭に無い。

「――――」

おかしい。何時もならこんな傷が出来たなら七転八倒しながら治療出来るのに。まるで痛覚が役に立っていない。危険信号である筈の痛みが無い。

「――――」

ええい、俺の身体の心配してんじゃなくて。さっさと前に進まんと。目の前で竜神と咲夜が対峙してるってのに、早く庇うなりなんなりしてやんないと。

「――――」

だが、肉体は意志を反映してくれず。足は一寸たりとも前に動かず、視界は揺れに揺れ、今にもひっくり返ってしまいそうだ。

そして霞む視界に入ったのは、取り囲んだナイフを短刀で切り払い、呆然としている咲夜に腕を振りかぶる竜神――

「――……ッ！」

動かない。動かない。指一本、瞼の開閉と言う簡単な行為すら実行しない。領域や妖気を飛ばそうにも何も出来ないで立ち尽くしている俺の身体。なんでだ？　さっきまでフル稼働させてても全く問題無かった筈だろ？　シンクロ率高くなりすぎて液体人間になりたくないからあの台詞は言わないが動かないと咲夜が死んじまうんだよ！　どうにかしないと、死んじまってからじゃ遅いんだ！

今更我が身が可愛くなったのか？　危険は冒せないとかふざけた考えでもあるんじゃないのか？　どうせ死ぬ運命が見えた俺なんだ、それよか咲夜が生きた方がどれほどいいか！

抗い。何に対してでは無く、自身への抵抗だ。そんなに俺は生き残りたいと思ってたのか。だが俺が生きて何をするってんだ？　あやふやな未来しか無い俺よりも、前途有望な奴を生かせろっての！

執念が通じたか、漸く、小さく右足が動き始めた。のろのろと摺り足。こうしてる間にでも咲夜に何かあったら――いや、もう――

「咲夜……ッ！？」

ぼんやりとした目線の先には、既に腕を振り下ろしていた竜神がこちらに背を向けて立っている。嘘だろ？　こんなあっさり……待て待て早計はあかん。よく見てみろ。

「流石に……いったいなぁ。けど、私ならあんたにヤられる事が無

いから安心だ」

銀髪二人の間に挟まる形で立っているのは白髪の少女。背後にいる咲夜がまだ紅い目をしてるせいで姉妹の様に見えなくもない。なくもない。

「蓬莱人……貴方も殺してしまうのは心が痛みますよ。私は人間のみ死滅して欲しいのだから」

「ふん、慧音の腕を跳ね飛ばした奴が良く言うよ。なんならお前の腕をちょんぎってみようか」

妹紅の右手には竜神の得物が突き刺さって、いやわざと突き刺してるのか。そうする事で背後の咲夜を庇っている。

「――……」

ホッとしてる場合じゃない。今すぐにでも駆け出して無防備な竜神の背中に仕掛けてやりたいと言うのに……待て、無防備だと？　さっきまで背後からの弾幕を防いでいた奴の背中が無防備だとなんで感じた？

「……領域が、無い」

そう、今の今まで竜神や俺が纏っていた掌握領域が視えない。その事が口からついて出て竜神の耳にも聞こえた結果、今にも振り返って斬り掛かってきそうな女性の声が俺に投げかけられた。

「……どんな魔法をこの娘に施したんですか？　水元鉄生。こんな強い空間干渉を自分の娘に持たせるなんて、案外親馬鹿なんですね」

「お褒めに与り、恐悦至極。お生憎様だが、その力は俺が原因じゃねぇんだ」

そうか、咲夜の能力の所為か。時間停止に竜神の領域が対応して防いでるせいで竜神の障壁が剥げた……いや、竜神のってそんなにヤワな能力じゃない筈だが。

とすれば、竜神がこの場を掌握してるのが好転したか。博麗神社を閉じた空間にした上に咲夜の能力による負荷が掛かったんだ、有り得ない話じゃない。妹紅が動けたのも竜神の掌握下だったからこそか。皮肉だな。

「何にせよ、邪魔ですね」

「なぁに、お前程じゃない！」

ナイフを抜き取ろうとした竜神に、妹紅が竜神の身体に火を点けた。瞬く間に橙色の炎がナイフごと腕を灰に帰し、その隙に咲夜がこちらに向かって走り出した。

「逃がさない」

だが、その方向が良くなかった。燃えた右側では無く左側を抜けようとしたものだから、抜け目なく竜神が咲夜にその魔手を差し向けてきた。

「やらせっか！」

だが、こちらも黙って見てる訳にはいかない。半ば倒れ込む形で竜

神の腕を掴み、なんとか咲夜の退路を確保する。

と、その瞬間

「ぐ……ッ……！？」

今度は左目が熱い。別に泣きたいんじゃなくて、視神経が焼き切れそうな位熱い。霞んでいた視界に歪みと言う新機能が実装されたのが規則正しい筈の石畳の配列を見て分かる。

そんな視覚のトリックショーに付き合っていると、俺の左半分がブラックアウトした。加えて膝まで抜け落ちるかと思ったが、竜神の白い腕に爪を立てて踏ん張る。

「――――」

カチッ、と繋がる様な音がしたかと思えば、暗転した左半分に色が戻ってきた。立ち眩みにしては明らかに不自然過ぎる。なにか竜神に小細工でもされたか……

「……なん、だ、これ」

視点が、右と左で違う。目が付いてる場所が違うんだから当たり前と言うかもしれないが、幾ら何でも高さにズレが出るのは異常だろ。しかも、それが自分の頭上から見てるなんて。

しかも、その見え方も普通じゃない。見方、立場を変えて考えるのは確かに大切だ。あくまで一般論では。だが……景色がこんな視え方をする奴がいるのか？　いるとすれば俺は一生他人の芸術の観念が理解出来ないだろう。

地面に黒い線が縦横無尽に交錯している。俺の肩や身体のあちこちにもその線が、まるで俺の身体が継ぎ接ぎみたく見えた。出来損ないが自身に纏わりついていると考えると、何故か滑稽に思える。

「くろい、ラクガキ、だらけ」

そう表現するしかない視界。恐る恐る俺の頭を上げて見ると、左目に映る俺も動いた。ああ、やっぱり繋がっているんだ。

そして、自身の『目』と『目』が合うと言う、貴重で禁忌な体験の楽しむ事になった。

百四、視闘（後書き）

……やっちまったよ

いや、後悔はしてないよ?ただなんか、やってみると「うわー」って気持ちになるなぁ

解説は絶対やるからその時までどうか苦情は胸にしまい込んで下さい

百五、止闘（前書き）

段々読者のスルースキルに頼ってる気がする。
期待せずにどうぞ。

百五、止闘

まるで自分が半分に割れているかの様な錯覚に陥ってしまう。

右目は竜神の青い目を見つめ、左目はラクガキだらけの俺の顔を眺めている。自分の意志は無く、ただ左目が竜神の視点に変わっただけ。

ただそれだけ。ただそれだけでどうしようも無く身体が震える。下っ腹に寒気がする。右目を潰したくなる。左目を抉り出したくなる。

遠くで幽香達の声が聞こえた気がするが、血が滲む腕から手を放す事すらままならないでいるのが現状。紅い右目と青い左目の視界から逃れられない。

気が付けば両膝は折れ、まるで俺が竜神にすがりついている形になっている。視点が入れ替わっただけでここまで恐怖心が煽れるものなのか。何時もなら笑っちまうそんな疑問は頭に無く、ただただこのまま気を失いたいと思う程のプレッシャーが掛かっていた。

「……さて、と。お待たせしました、水元鉄生」

何時の間にか再生した右腕を、竜神は天高く揚げる。手に持っているものはなんだろう？　ポタポタと顔に垂れてくる温かい雫はなんだろう？

俺の両目は役に立たなかった。その光景を記憶しか出来ず、その場で認知させる程の強制力が無かったのが悪い。

そして『四肢の無い妹紅の身体』と言う画像を受け止められる度量の無い俺の脳味噌も役立たずだった。

「蓬莱人だと『線』が視え難かったので雑な切り方しか出来ませんでしたが、人間なら大丈夫ですよ。きちんと視えてますから」

竜神の手から落ちていく『四肢の無い妹紅の身体』。それの目に該当する部分からは涙が出ている気がした。けど、俺は、何も感じない。何も思えない。

赤く染まった竜神の腕。その手に握られた凶器から血を舐める姿は美しく、妖艶で、狂気的だった。

だが、コイツは狂っていない。それだけが頭にはくっきり浮かび上がっている。流れ込んで流れ出ていくその記録感情執念願望で解る。理性が狂っているのではない。狂ったのは狂おしい程の次元への愛情、感性のみの狂い。様々な次元を渡り歩き、薄っぺらい愛情が削れた結果がコレなんだ。

そもそも狂気とはなんだ。理性が無く感性のみの行動が狂気的に変わったのには決定的な理由があったんだ。周囲に計り知れない程の絶望に当たった瞬間、周囲に理解出来ない愛情しか示せなくなったんだろう。

そして、殺した。

最早必要の無い人間達を。

害悪に執着する妖怪達を。

行く末を解さぬ神々を。

自分の心も記憶も衝動をも。

殺して殺して何も残らない程に、まっさらにして執行しなければならなかった。

それを狂うと言うのは知らない人達だけだ。

だが――俺は、知ってしまった。

その、竜神が経験した事を全て。

「では……さようなら」

その赤く光る刃が迫ってくる間、俺は目を瞑りこんな事を考えていた。

竜神は、なんて真っ直ぐな殺人鬼なんだろう、と。

そうして、視界が無くなった。

曲がらずに生きてきた殺人鬼。

望みを叶える為に生き抜く殺人鬼。

その果ては、ただ次元を愛するのみ。

次元が生き延びる事を望む殺人鬼。

自を殺し、他を殺し、世を生かす殺人鬼。

彼女は何故、そこまでして殺すのか――

彼女は何故、そこまでして生かすのか――

知らなかった、死ぬ時って飛ぶ様な感じなのか。耳元で風を切る音が聞こえる辺り、魂は死後鳥になるってのはあながち嘘じゃ無いのかもな。出典忘れたが。

「――――――」

それより臨死の瞬間に詩みたいなのを詠むのはどうなんだろう。これで目を開いて小町がいなかったら俺はその羞恥心だけで死ねる自信がある。ハズい。俺はポエマー違う。

「――――――」

ポエマーと言えば、竜神の『目』で視えたあのラクガキはやっぱしアレなのか。なんで竜神の目で見えるのかが分からんが見えるんだから仕方無いのか。はて。

……しかし、死ぬにしては足がぶらぶらしてると言うか、背中があったかいと言うか、羽ばたく音がしてる様な……

「……射命丸が一緒って事は地獄でも間違いなさそうなんだが」

「幽香さんの頼みが無かったら今のセリフで確実に手が滑ってましたよ」

何時も通りふざけつつも、後ろから俺の腰に腕を回してがっちりと固定したままの射命丸。おお、背中に中々の感触。まぁこれで今いる場所が空高くじゃなければ文句無しだったんだがね。高ッ

「夜景が綺麗だから上がった訳じゃあるまい、何するつもりだ」

「こちらの質問に答えて貰えれば教えますよ」

質問に質問か……と混ぜ返さずに、その質問とやらを促す。

「では早速。死ぬ覚悟はありますか？」

「……」

これは……考えるまでも無いな。あの場に立ってた以上、この答え以外あり得ん。

「ある」

と言うより、一年前から覚悟はしていた。元より１００年足らずの人生が５５０年近く続いたんだ。生に執着心がそれ程無かったりす

る。死後の世界も分かっちゃってる訳だし。死んだら記憶が無くなるのが一番辛いが、まーどうせ俺の事だ。死んで生き返っても同じ調子だろ。

「……もう質問は終わりか？」

なら降ろしてくれ、と言葉が繋がる前に射命丸が猛スピードで飛び始めたので結果、舌が根元まで乾くかと思った。

「これ位の加速があれば、結界を突破出来ますかなー」

「あぁ！？　んな事しなくても普通に突破出来るわ！　ついで、勝手に人を戦線離脱させんな！」

良く口が回ったと自分でも思う。しかしその叫びが射命丸に届く前に加速により音が置いてけぼりになる気がした。端的に言うと聞こえてない。

「着地は……まぁ平気でしょ。一応、落ちても平気そうな方向にやりますから」

訂正、コイツ聞く気がねぇ。俺だけ耳が良い訳ではあるまい。反論しようにも風圧が顔面をエラい事にしているので無理。多分お見せ出来ない顔になってる。

「恨まないで下さいね。幽香さんに頼まれたんですから。死ぬ覚悟があるんだったら、なんとかしてここから出せって。無茶苦茶ですよ、ね！」

幽香が――と、聞き返そうと首を回そうとした瞬間、ミサイルよろ

しく勢い良く射出された。

とっさに頭を庇おうと右腕を出し、なんとか骨は折れずに壁を突破した。いや、この時はそんな事に気を取られてはいなかった。もっと重要な事に気付いてしまっていたから。

「（……なんでさ？）」

妖力も霊力も神力も空っぽになっている。領域も無し。空も飛べないし言霊も使えない。否、使える状況じゃない。

いやいやいや何でなんよ？　まだ一試合完全燃焼してないぞ？　大体俺の妖力なんて竜神由来のモノなんだから無くなるなんて――

「（――まさかぁ！？）」

肩を切り裂かれた時と腕を掴んだ時。他にも直接的な接触が無かった訳じゃない。

俺の身体から抜け出せた竜神が、なんで俺に力を残したまんまなんだ？　答えは５００年前に出されてる。二つに分けるには深く繋がり過ぎてたんだ。俺達の魂は。

だが、深く深く根付いていたとしても。その根付いていた土（たましい）ごと吸収してしまえばなんら問題無い。だがそれをやれば気付かれる。だから、こうやって面と向かってやらかして……小賢しい奴だなぁ。

それなら、さっきの記憶の奔流。アレは竜神の魂が抜け出ていく時に読み取ったものなのか。そうでもしないと記憶すら読めないってのは駄目だな。今更ながら未熟だと痛感する。

……待てよ。とどのつまり、今まで竜神は全力を出せて無かったのか？　俺が使ってた残り滓だけでも無限の剣製（限定次元創造）が出来る位に強力だったのに？

本気が出せなかったのか、本気を出して無かったのかによって変わるだろうが、危険としか言い様が無い。だから幽香は、俺に離れる様、射命丸に頼んだのか。

結界を突き抜けても一向に勢いが収まらない弾丸（オレ）は、湖が見えた所で漸く高度が下がってきた。……まさか落ちても大丈夫ってそう言う訳じゃあるまいな？

結局、俺の身体はミサイルから薄い石に成り下がった。水の上って掠ると痛いんだなー。肩もげるかと思った。

二転三転七転八倒の三乗。言ってる意味分かんないと思うけど気にしない。ともかく、岸に流れ着いた俺はボロ雑巾に相応しい姿になっていた。

「夜中に来たって無駄よ！　あたいの寝首を掻こうだなんて百光年早い！」

「チ、チルノちゃん。多分違うと思うよ？　怪我してるみたいだし……」

ハッキリ覚めた目が映したのは、青いガキと緑のガキ。そーか、今いるのはチルノと大文字がいる所か。これも天命、いや運命だな。

「……済まんが二人共、肩貸してくれんか？」

百五、止闘（後書き）

鉄生、退場ー！つーか来た意味があったのかどうか。邪魔しかしてない気がするけどそこは突っ込まないで
次回は……まぁ、予想通りの方に会いますです。

百六、土闘（前書き）

えーっと、うーんと、なんというか

うん、やっぱりスルースキルは偉大

百六、士闘

端から見たら随分滑稽だろう。ガキ二人に半ば引き摺られている絵図なんて、俺だったら確実に逆だろと突っ込んでる。捕らえられた地球人、ってか。

水元鉄生、齢５５０年を誇る俺様でも肩が斬れ掛かって全身打撲、オマケに出血多量だと堪える。支えになってる二人がいなかったら幾度と無くひっくり返っていただろう。ついで、今から確認する事実も含めればちょっと無謀としか言い様が無い。

「……チルノ、俺の髪、何色？」

「え？　いきなり何言ってんの？」

「いーから、言ってみ。色はなんだ？」

訝しげに俺の顔を覗き込むチルノの言葉は何でもない事実だったのだが、俺としては出来れば嘘であって欲しい事柄だった。

「黒だけど」

そう、黒。日本人の一般的な髪色。俺は人化時に黒髪になっているから親しみが無い訳じゃない。だが俺はついさっきまで死地にいたんだ、出し惜しみなんてしない。キチンと“妖怪”の白銀になっていた筈なんだ。

だが、今は“人間”の色。さてこれが示すモノはと言うと前回述べた通り、俺が人間になったと言う事だ。今までが竜神頼りだったと

言うのが顕著に感じるぜ。霊力も素寒貧と来たからまともに飛べやしない。

そんで、この二人に運んで貰ってる先は博麗神社。湖からならわりかし近いかなーと思ったのだが、よく考えたら神社から湖までって一ステージ分あるんだよな。歩きだと流石に長く感じるなぁ。

湖を迂回する形で草原を連れ立っていると、大妖精が心配そうな声で訊いてきた。

「あの……やっぱり、飛んで動いた方がいいんじゃ？」

こうやって歩きながらも血をボタボタ垂らしてるのを見て早くした方が良いと思っての言葉なんだろうが。

「そうしたいのは山々なんだがね。どうにも身体が徒歩以外の移動方法をしてくんないんだよ。お前ら二人に空輸して貰うのもイヤなんでな」

つか、この二人が運ぶってなるとぶら下がる形になるだろ。十中八九肩が裂ける。この状態でもちょっと左肩が開いてるのだがそこは何も言わない。

「けど、こんな怪我したのに休まなくていいんですか？」

「いいのいいの、休んだら多分目が開かなくなる」

そんなに顔を青ざめられると冗談すら言えないんだが。けど寝たら死ぬのは本当だな。

「わざわざ神社になんか行っても……あ！　宴会があるんだ！」

「んなもんの為に死ぬ気で行くと思ってんのかよ！」

バカに無言で頷かれた。悲しい。

グダグダ言いながら原っぱを引き摺られていると、紅くて緑なモノが目の前に突然現れた。瞬間移動ってこんな感じだと思うぜ。今まで節操なくやってた俺が言うのもなんだが。

「あれ？　めーりんだ。門のとこにいなくていいの？」

間の抜けたチルノの声は美鈴に聞こえている筈なのに、その顔から凛々しさが無くなる事は無い。なんか何時もと違って真面目になってる。

「……あー、二人共。ここまででいいや」

不穏な空気を感じたのか、すぐさま逃げ出す妖精達。怪我人を平気で置いていけるのはただ単にすぐ帰りたかっただけか。それとも薄情なのか。

「……鉄生さん、どこへ行くつもりですか」

日常的な会話、にしてはやや冷たい語気。これは事情は知れ渡ってると見た。

「なぁに、ちょっとそこらを散歩するだけだ。偶には歩きで回った方がいいだろ」

素知らぬ顔で脇を通ろうとするが、そうは問屋が卸さなかった。全く力が入っていない左腕を美鈴が掴んで引き止める。

「誤魔化せないのは分かっているでしょう。お嬢様がお呼びです、こちらに」

顔を合わせないで横向きでの会話。それでも真摯に話しているのが伝わってくる。俺を止めようとしている、と。だがそんなんで止まる俺では無い。

「この時間帯だと泊まれとか抜かすだろ？　外泊ばっかだと幽香が怒るんでな」

白々しい嘘を突き通そうとしていると掴まれている部分からボキンと小気味好い音が。あ、やっべ。

その様子を見て、美鈴が声の調子を変えずにつらつらと語りかけてくる。

「気も通っていない、痛みを感じていない……この腕は、もう死んでいるんでしょう。そんな状態で戦う必要があるんですか」

「だからって折らなくてもいいだろ。幾ら腕になんないからって……」

「話を逸らさないで下さい」

煙に巻こうにもコイツ、こんなに真面目だったのか。まぁ一本筋が通ってるのは前から知ってたがこれ程とは。

ボサボサになった髪を掻き上げて、美鈴の横顔を睨む。そんな事で美鈴が怯む訳も無く、何時になく冷たい視線は空に向けられたままだ。

「みんなを置いてってのうのうと生きろってか。悪いが俺はそれ程冷徹になれる位に人間は止めていない」

「じゃあ今の状態で彼女達を助けられると？　分かっている筈です、そんな身体だと、明日の朝日を拝めるかも分からないと」

「だったら尚更だ。どうせ死ぬなら華々しく散ってやる」

「いいえ、死なせません」

激情が混じりだした会話に一刀投げ込む鋭い声。断言とはこんな事を言うのか。

夏の夜にしては涼やかな風が吹く丘に、月を背にしたレミリア・スカーレットは降り立った。

「……人間、何時か死ぬもんだ。化けの皮が剥がれた俺だったら、こうやって立ってる事自体がおかしいんだよ」

嗚呼、俺の口先と舌だけは勇猛なままだ。種族を超えて減らず口が叩けるなんて。馬鹿は死んでも治らないってのは真実だと思う。

俺の諦めじみた言葉と視線に、レミリアは目を伏せて答える。

「以前、言ったでしょう？　お兄様は死ぬ運命にある、と。そしてそれを阻止する為に手を打っている、とも」

そう。そしてその布石が咲夜だとかなんとか。

「なら、その手とやらが完全になったのか」

幼い紅月は薄い笑みで応える。その微笑は俺が知る限り、何故かあまり良い印象をしない事に定評がある笑みだ。

「はい。――十六夜咲夜、風見幽香、射命丸文、八雲紫、八雲藍、博麗霊緋、藤原妹紅、上白沢慧音。ルーファスの肉体に竜神の魂。そして結界の張られた博麗神社。役者と舞台が私の書いた筋書き通りに集まってくれた……これなら、大丈夫です」

運命を操るとは人生の脚本家の気分に浸れるのか。今回のが処女作、しかも荒唐無稽な内容と面子ならば完成に伴う悦びも一塩だろう。

だが、やや陶酔したレミリアの口調に同調は出来ない。主に身体的な理由で。

「残念ながら、あの御方共でも手こずってるのが現状だ。幽々子さんか永琳でもいたら別だっただろうが」

あの二人なら多分なんとかなる。前者は能力、後者はマジカルケミカルサジタル。

「まさか。私の様に若い吸血鬼が十世紀以上生きた、しかも輪廻から外れている方々の運命を操れられる訳がありませんわ。それに、私のキャスティングは倒す為のモノではありません」

「じゃあなにか？　アイツへの生贄（スケープゴート）にでもするつもりか？」

捨て鉢気味にそう投げ掛けると、レミリアの冷笑の既視感と答えが頭に響いた。

「■■■■■■」

――なんてこった。その笑顔は、最大限の優しさで他人を破滅に追いやる奴がするモノだ。竜神と同じ、顧みる事をしない面構え。

「……なんつった」

気付かない内に、摺り足で動くのが精一杯だった足がレミリアに向かっていく。美鈴の拘束は羽交い締めにまでなりそれを振り払おうと肩を揺すり、傷口が広がっている様に感じたが気にならない。

「鉄生さんッ！」

「黙ってろ美鈴、あの馬鹿を修正出来るならお前だって万々歳だろが」

俺の身体にまだこんだけ力があったとは。止めようとする美鈴を強引に引っ張り、レミリアの前に立つ。その瞳にはまるで揺らめきは無く、真っ直ぐ俺を眺めている。

『何時も』は実年齢を全く感じさせない、可愛らしい吸血鬼。

『何時も』は周りの者らを引っ張り回す、準トラブルメーカー。

その『何時も』が崩れている。寧ろこちらが本性だったのか。

「……ああ、そうか」

お前は、お前らは、やっぱり人間とは違うんだ――そうでなきゃ、そんな事を考えられる筈が無い。

全てを犠牲にして俺を助けるだなんて戯れ事、行える訳が無い。

「お兄様。貴方にまで逝かれてしまわれたら、私達はどうなるのですか」

「あぁ？」

一瞬、俺の視線とレミリアの視線が交錯する。すると――

「――――」

膝かっくんを受けたかの様に、崩れ落ちる俺の脚。タイミング良く美鈴の拘束も解かれて、丁度レミリアに土下座する形になる。

「貴方がいてくれたからこそ、紅魔館は今も昔も変わらずにいられる。昔の……お母様とお父様が生きていらした頃の様に、賑やかで、楽しくて、夢みたいな時を」

そうだ、俺は努めてそうしてきた。レミリアがフランに憎しみの矛先を向けない様に、フランが自身の罪を気付かない様に。

「貴方は必要なんです。少なくとも、私達には」

だから、今は眠って――その声は耳に木霊し、強制力すら垣間見える。嗚呼、このまま眠れば俺は生き延びられるだろう。こいつらの

事だから、俺を同族にしてでも現世に引き止めそうだ。

このまま眠ったら、確実に幽香達が死んじまう。

だが、起きていてもその事実は変わらないだろう。

なら、俺は生きるべきなのか？

だが、俺は此処で何を成せばいい？

俺が今まで成した事はなんだ？

所詮は先を知っているが故の行動だろう。此処が『東方ｐｒｏｊｅｃｔの世界』と当てはめての行動だった。もし俺が先を知らなかったら、ヴィンセントも助けられたかもしれない、藍も式にならなかったかもしれない、紫が幻想郷を作らなかったかもしれない、幽香が幻想郷に来なかったかもしれない。

俺はただ、それを当たり前だと思っていた。俺が知っている事が正しいと。正史であると。

例え人型の妖怪が狩られても気にも留めず、知っている奴だけを守っていた。それが先と繋がるかどうかのみ考えていた。

だが今はこの通り、いなかった筈の竜神がみんなを殺そうとしている。なら俺がやった事はなんだ？　なんの意味があった？

いや、もしここが『東方ｐｒｏｊｅｃｔ』の世界なら、竜神がこのままいられる筈が無い。原作にいなかったものなのだから。それなら誰かに排除されるだろう。

だが、だが――ここが、創作の世界だと断定出来るモノが無い。逆も然り、独立した世界とも言い切れない。俺がいるからイレギュラーな状況になったのか？　それともこれは予定調和なのか？　俺が知る先が関係あるのか？　無いのか？

チッ、と心の中で舌打ちする。こうまでも詭弁らしさがぷんぷんする妄想を引き出すなんて、俺も弱くなったもんだ。

時間が経つに連れ、抗っていた右腕は折れ、額に衝撃と草と土の冷たさが伝わってくる。ヒヤリとする感覚で目が開き掛けるが、レミリアの声による衝動は収まらない。

このまま眠ってしまえば、起きた時に全てが終わっているだろう。俺は生き延び、紅魔の庇護の下、暮らす羽目になる。

立ち上がれば、死しか待っていない。それは確実だ。起きて戦えば、俺が生き残る事はまず有り得ない。休んでいたら、その間に竜神は全て済ませてしまうだろう。

レミリアの創った生存の運命をぶち壊して、正規のルートを辿り死ぬか。

生温い幻想の中、みんなを見捨てた悔恨を抱えつつ吸血鬼と供に運命を握られて生きるか。

俺は――――――

side out

鉄生が射命丸によって投射されているその頃、地上では

「……博麗の巫女は、何時になっても邪魔なんですね」

珍しく苛立った声を出し、自身を縛る結界を憎々しげに睨みつける竜神がいた。彼女が鉄生を取り逃がしたのは別に慈悲を掛けた訳じゃない。只の人間を排除しようとした時に、なんともタイミング良く拘束を受けたのだ。

「ごめんなさいね、それはお家芸みたいなものだか……らッ！」

今にも壊れそうな縛に二重結界を上乗せし、竜神を押さえ込む。竜神の『浄眼』は結界を見破る事は出来ても、それをどうにかする手立ては無かった。『線』を見いだせてもそれをなぞる手段が無いのだ。虎の子の領域は鋭意結界修理中なのだが、そちらはそちらで八雲紫に阻まれている。

「藍！　今の内に！」

壊れた形を保つ事だけでも能力を限界まで使っている為に、スキマを作っての脱出が出来ない。それを見越していたのか、主の声と同時に式の二体が肩に怪我人を抱えながら本堂の扉から飛び出した。

「分かってますよ！　橙、しっかり付いてきて！」

「はい！」

脱兎の如く空を跳び、結界の割れ目を抜け出してゆく妖獣を見届け、

風見幽香は傘を持つ右手を強ばらせる。

「幽香……咲夜ちゃんも逃がさないと」

扇子を軋ませながら必死に退路を確保している紫でも、他人の心配は出来る様だった。幽香の影に隠れている最年少者に、最年長者は逃げる様指示を出そうとするが、ゆっくりと構えられる傘に遮られた。

「いいえ。私達は残るわ」

「――え？」

親子で手を繋ぎ、動けずにいる竜神を眺めながら訥々と語る。

「二人でならなんとかアイツを足止めしてられる筈よ。その間に貴方は逃げて、鉄生の保護をお願い」

「ゆ、幽香!?」

大妖怪が揃っていても仕留められなかった竜神をたった二人、しかも片方は人間の女の子で足止めなど無謀すぎる。言わずもがな、自殺行為に等しいだろう。

「馬鹿ですか幽香さん!?　お二人で竜神に適う筈が無い！」

射命丸も慌てても無茶だと思ったのかあわてたように言う。だが、咲夜は物怖じせず簡単に言う。

「そうした方が、いいです。お母さんの役に立てるなら嬉しいし、

お父さんだってなんとかなったんだから」

「それに、貴方達が先に逃げてくれれば何時でも私は逃げられるわ。その方が気が楽よ」

そうは言うが、幽香も分かっている。紫が外に出た途端、結界は先程より強固になって閉じるだろう。暫くの沈黙の後、紫は自分が代替案を浮かばないのを悔いているのか、目を伏せていた。

「そんな……事……」

「ところで紫、一つ確認していい？」

能力をフル稼働している身の紫がまだ食い下がろうとした瞬間、幽香はそれを止めた。

「なにかしら？」

幽香が辞世の句でも認めるのかと思ったが、幽香の言葉はそれ以上に予想外だった。

「ええ、時間を稼ぐのはいいけど――――別に、アレを倒してしまっても構わないんでしょ？」

百六、士闘（後書き）

最後の流れはやってみたかっただけです。思いつきです。深夜のノリです。幽香に死亡フラグとかまじぶっころしょ？

そんな事はともかく、次回の東方魂合変は

・霊緋、久々の登場
・幽香、頑張る
・咲夜、もっと頑張る

の三本でお送りします。多分。それではー

百七、子闘（前書き）

最近になって思ったけど、竜神にやらせてる事って原作蹂躙とかその類なのかな

うーむ……主人公ではやんない様にしてたのに、大ボスでこういうのはいいのかな

主人公を活躍させる為と言えばそうなんだけど、そうでなきゃオリ主小説なんて書けないんだよなぁ。主人公がいる意味を持たせなきゃいけないし

百七、子闘

「霊夢を頼んだわよ、射命丸」

ひび割れた夜空を飛ぶ烏天狗を眺め呟く、赤とも黒とも取れる髪をツインテールに纏め、何代か前から改造された腋をひけらかす巫女服を加齢……もとい、華麗に着こなす女性、博麗霊緋。

博麗の巫女と言う立場や、今現在竜神を縛れる唯一人となってる状態ではこの場を去る事が出来ない。その為、本堂の前から動く事は出来ないのだが、子である霊夢や実力を考えるのであれば、真っ先に逃げるべきであった。

はっきり言って、彼女には才能が無い。一般人からしてみれば凄いだろうが、歴代の博麗や人外連中と比べるとどうにも劣っている。

そんな彼女でも、結界に関しては平均的に張る事が出来る。縛と二重結界を同時に展開出来るのは、基礎からの鍛錬があり（させられて）、その月日があって（年がいってる）こそ可能なのだろう。

なにせ、彼女の本質は『平和』。札や弾を撒き散らすのは元来得意にはなれない質なのだ。守りに徹し、封印や説得が主な戦法……なのだが。

「流石に無理かなぁ……」

目の前にいるモノは、人の皮を被った悪魔とでも形容すればいいのか。正確な事を言えば吸血鬼であるのでその言い方も順当では無いのだが、目の前で異変とも言える暴力を振るっている姿は悪魔をも連想させてしまう。

その様な代物が大人しく人の言う事に耳を貸すだろうか。否、話そうとした途端に舌を抜いてもおかしくない。その様な怪物を封印する程の腕が霊緋にあるだろうか。否、今の縛でさえギリギリの所なのだ、他の動作をしようものなら即座に破られるであろう。

しかし、こうやっていられるのは八雲紫による僅かながらの抵抗があるからだ。もし外部からの干渉を絶たれ、神社周辺を囲む結界が完全に再起したならば、その再生に当てられていた力であっと言う間に縛は破られる。そして竜神なら、その場にいる人間、取り分け博麗の巫女ならば攻撃しない方がおかしい。

ならばどうすればいいか。簡単である。ヒントは炎が無くてもなんとやら。

「幽香ッ、任せた！」

「任されたわよ！」

縛を解き、横っ飛び。巨大な光線が竜神を焦がすのと縛が解かれる間には、刹那の間もあったかどうか怪しい。

霊緋を巻き込むのを覚悟して放った幽香の渾身は、竜神の反応速度を遥かに上回る速さでその身体を焼き尽くす。再生するとはいえ、その痛みによって動きが止まってしまう。

「今！」

構えた傘を引っ込めるその動作の間に、竜神の全身に銀のナイフが突き立つ。治りかけの筋肉に刺さるそれは、吸血鬼の身体を更に痛めつける。

「――――」

声は無くとも、その苦悶は空気を伝ってくる。肉が焼ける臭いが周囲に立ち込めるなか、風前の灯火と言うのがまさに当てはまる状態でなんとか竜神は立ち上がる。

再生途中の腕でナイフを引き抜く竜神の視線の先には、三体の障害がいる。

祝詞でも唱えているのだろうか、絶え間なく口を動かす巫女。

ナイフを両手に構え、場違いなメイド服に身を包んだ少女。

竜神を怪物と言うなれば、おそらく恐竜の部類に入る最凶の大妖怪。

三対一。状況は明らかに劣勢である。両手を上げて投降するのが正しい場面なのだろうが、この者達にはその常識は通用しない。互いに、その銃口を下ろす事は無かった。

「そろそろ疲れてきたんじゃない？　最初よりあきらかに動きが良くないわよ」

嘲り口調の幽香だが、余り人の事は言えない。今までの砲撃が強力

だったのは、一撃必殺を念頭に置いているからだ。そう何発も撃てる程、幽香のタンクは大きくない。後一発撃ったら立っていられるかどうか、それ程に消耗している。

「……」

対する竜神はと言えば、幽香の声など耳にすら入れていない。視覚と思考のみを最大限に使用していた。

見つめているのはこの場で最も得体の知れない存在、十六夜咲夜。

間違い無く人間である少女に、何故能力を妨害出来るのか。空間操作系ならばその能力の発動には気付ける筈だがその節は無い。水元鉄生による護りでも無い。

あの瞬間移動やノーモーションでナイフを身体に突き通す技術、又は能力。戦う事の迷いのなさ。どれを取ってもダイヤの原石だろう。

しかし、ただ一点だけ甘い。能力よりも、それが気に入らない竜神がいた。

「……何故、その符を使うのです」

「え？」

ポツリと呟く竜神。その声色には失望も疑問も無く、ただ単に口から零れただけだった。

「その少女。どうして、殺すつもりが無いんですか」

「ッ？」

反射的に身構える咲夜には、竜神の言ってる意味が分からなかった。少女にとっての戦い方とはスペルカードを使う事。以前までのやり方はただ外敵を排除する為だけのものであり、それは戦いでは無い。弾幕としての戦い方は未熟にしろ、出来ていない訳では無い。少女はバラまいて戦う事が正しい戦い方と思っていた。

「その符を使っている限り、私を殺せない。お手玉を幾らぶつけられても痛いだけで死にはしません」

スペルカードルールがあるのは、妖怪と人間を対等にする為。つまりそれは殺傷能力の上限を決めているとも取れる。

咲夜のスペルカードにより人や妖怪を傷つかせ、戦闘不能には出来る。だが、スペルカードによって放たれたナイフにより殺す事は出来ない。死ぬとすれば失血死やショック死、怪我を治療しないが為の死因の筈だ。

「水元鉄生もそうだった……殺されずに痛みつけられる気持ちと言うのは、あまり良い物ではありませんよ」

――やるなら、こうしなさい。

竜神の声が止むと同時に、咲夜の顔をボロ切れの様なものが撫でる。驚いて後ろに数歩下がると、竜神の言う「やり方」が分かった。

ボロ切れと思っていたのは竜神の着物だったのか。そう最初に思ったのは、いきなり突きつけられた現実を直視しない為だったのかも

しれない。

先程丸焦げにされたとは信じられない程の速さで接近した竜神は、その両腕を一瞬の内に凶器と変えた。

右腕は手にしたナイフで幽香の頭部を狙う。これが長剣であったなら、間違い無く幽香は仕留められていただろう。すんでのところで傘が身代わりとなり、その頑丈さにナイフの刃が悲鳴を上げている。

だが、殺人鬼が標的を逃す筈もない。左腕は簡単に結界を突き抜けて、霊緋の胸部を貫いていた。

「ほら。こうすれば、お終いです」

そこから暫く、咲夜の記憶は飛んでいる。赤い腕を見た瞬間に脳内は録画を止めて、再び撮ってみれば咲夜は何故か地面に転がっていた。

「――――ますか、これが」

竜神の発する音が声と認識出来る様になった途端、焼き鏝を当てられたかの痛みが全身を蹂躙する。

息が詰まる。指が痺れる。肩が裂ける。腕が、足が、目が、喉が、地面が付く背中も空気が当たるお腹も熱い。撫でる様な痛みは熱さに変わり、痛みへ至る。絶え間なく伝わる痛覚は傷ついた喉と涙腺

へ命令を下す。

「いた……い……ヒュッ」

たった三文字を紡ぐだけで、小さな身体は酸素を求める。ひんやりとした空気は血だらけの唇に刺さり、吐き出される息はボロボロな喉を逆撫でする。それだけの事で視界は滲んでくる。

分かり易く咲夜を見下していた竜神はその声を聞くと、しゃがんで咲夜の顔を覗き込む。

「ああ、漸く正気を取り戻しましたか。どうですか？　無抵抗に痛めつけられ、傷を傷で重ねられ、全身を覆う気持ちは」

短い髪を掴まれ、無理矢理立たされる少女の身体。最早その身体に魂が宿っている事が不思議に思える。

「咲夜を、離しなさい！」

丁度良く発せられた声は、小さいながらも力強い。だがその声の主は、石畳から立ち上がるので精一杯の様だ。手には傘がある事にはあるのだが、その身は中程で途切れている。

「寝ていて構いませんよ、と言ったでしょう。全く、手間の掛かる」

竜神が左手を少し動かすと、再び幽香が地に伏す。脚部を部分的に空間圧縮を掛けられていれば、とてもでは無いが立ってはいられない。

無理にでも起き上がろうとするが、やがて重力に抗えるのは両腕だ

けになってしまう。

「ッ……かッ……ァ……」

その痛みに耐える顔と下半身から響く珍しい音からは、両脚が砕けた事が推察出来る。肉が裂け、血が石畳を彩ったのもその推理を正解へと導く。

それを見届けた竜神は、ポツリと独り言を曰う。

「人間と言うのは、こうでもしなければ自らの罪を理解出来ませんからね。今も昔も、なんにも変わっていない」

痛みで鈍る身体が、風の流れを感じる。けれどそれは、自分自身が宙に舞っているから感じているに過ぎなかった。

ふわりと浮かぶ感覚。どう見ても投げ捨てられているその場面だったが、咲夜には心地良い一時となっていた。視界は脳内麻薬が垂れ流しになっているのか、ゆっくりと移り変わっていく。

やがて、石畳の端に訪れる。その先はこの神社に参拝客を来させない為に作り出されたのかと思う程に長い石段。その急な傾斜に沿って、咲夜の身体は落ちる。

くるりと身体が回転し、視界は藍色に染まる。真っ暗では無く、仄かに明るいその風景は、まるで布団の中みたいだと咲夜は思った。まるで、今までの出来事が夢である事を無意識の内に望んだかの様に。

どれ程滞空していたのか、実際の時間では一分も満たなかったであ

ろう。遂に、咲夜の背中に何かが当たった。その感覚で、スローになっていた意識は一気に引き戻される。

咲夜に身構えられる力は無く、目をギュッと瞑る事で精一杯だった。やがて伝わる痛みに耐えるには、少々心細い構えであった。

しかし――幾ら待っても、身体が弾む感覚が無い。何かが当たった衝撃のみ、身体には残っている。

目が瞑った所為か、咲夜の意識が掠れていく。滲む様に消えていくのは瞼の裏で、自身の状態を見る事は出来ない。

最後に咲夜が感じていたのは、背中の暖かみと、頬を撫でる冷たさだった。

百七、子闘（後書き）

どうしてこうなった？
予定通りとは言え、いざ書いてみると違和感が凄い

さぁラストは近い！スパート！スパート掛ける！
ついでに夏休みの宿題も頑張んなきゃ

百八、支闥（前書き）

野暮な文句は呑み込むもの
設定は作って補完するもの
そのスタンスを忘れずにお願いします

百八、支闘

境内と言うのが憚られる程の荒れ様。生温かい空気が立ち込めたそこは、まるで淀みきった沼地の様な雰囲気を醸し出している。月明かりに照らされる赤と白と黒の色彩からは到底想像出来ないが、閉じられた空間に留まっていた空気は、思う以上に淀んでいた。

その腐敗の中で、竜神はまだ見ぬ抵抗者の存在を感じ取っている。先程閉じ直した筈の結界が、またもや破られたのだ。しかも今度は、強い衝撃を加えられてでは無く、鉄生が行った通り抜け方でも無く、まるで自壊するかの様に、隔てる壁はその一部を崩壊させた。

またしても八雲の妨害を受けながらの修復作業。いっそ抵抗者を無視して、完璧に囲める檻を作り上げようか、そう思っていると

「おい、無視してくれんな」

木陰から、男の声が響く。ぶっきらぼうな声色は、思わず警戒を解いてしまいそうになる。

「……冥土への道に迷ってしまいましたか。私がきちんとエスコートすべきでしたね」

殺せなかった相手への最大限の慈悲。あのまま死んでいれば、殺される恐怖を知らずに逝けたと言うのに。一撃で仕留めてあげられなかった事に、竜神は心中で後悔する。

だが、その想いに気付く事無く、もしくは気付こうとせずに、竜神の背中に声は投げかけられ続ける。

「別に迷ってなんて。俺の目的はみんなの回収で、お前さんと相手をするつもりはねーよ」

「私が貴方を逃がすとでも？　それとも、ただの人間の貴方が逃げる手段がおありで？」

ナイフを握る手に力が籠もる。声の響き方からして、竜神の約六メートル程後ろに奴はいる。振り返りながら投げつけるなりこのまま後ろ飛びで距離を詰めるなり、やり方なら幾らでもある。

「だからねぇ、過保護な奴のお陰で十分過ぎるボディガードを連れる羽目になったんよ。と言う訳で、二名様ごあんなーい」

間の抜けた掛け声が響いた途端、竜神の身体が二つに分かれ、宙を舞う。いや、宙を舞った所を両断されたのか。ともあれ、上半身と下半身に再び別れを告げる羽目となった。

「ッ……！？」

突如起こった事に動転しかけるも、なんとか空中で体勢を立て直そうとする。だが身体に再び炎の剣が突き刺さり、もがく胴体は地に磔、下半身は灰に帰した。

「妹様。あまり飛ばし過ぎますと、後で大変ですよ」

「へーきへーき！　てっしょーが能力も使っていいって言うんだか

ら、簡単に終わるよ」

戦場に似つかわしくない、だが幻想郷らしい軽い会話は、竜神の思いのよらぬ助っ人達によるものだった。

「紅魔のッ……！　何故貴方達がここにッ！」

痛みによる叫びより、いてはならない存在への文句は先行させる。その答えは、帰ってきた主人公から発せられた。

「竜神から俺を守る……のが目的らしい。まッ、そんな事しても無駄だろうが」

くっくっ、とさも可笑しそうに笑う姿は、竜神とはまた別の異質さをも感じられるそれだった。死にかけている人間のやる事では無い。

「どうにせよ、手合わせ願いましょうか。お嬢様の命が下されていますが、私としても貴方を倒したい」

礼儀正しく礼をする美鈴だが、相手は半生半死と言うのがしっくりくる程のやられっぷり。戦えと言うのが酷だろう。

「……貴方には私が五体満足に見えるとでも仰るなら別ですが、そこの所は」

「話を聞いただけですが、すぐに元通りになれるんでしょ？　そうでなかったら、今頃喋ってなんていられませんよ」

怪我人を怪我人と思わない言葉に思わず返答に困った竜神は、縫い止めている剣を切り裂いて立ち上がる事で返した。

「あーッ！　フランのがぁ～！」

レーヴァティンの破片を手にしようとするが、効力を失ったスペルカードは元の符へと姿を戻していく。

「まずは紅美鈴、貴方からで良いですか？」

挑発的に尋ねる竜神に、美鈴は無言で頷く。

「……私には訊かないの？」

駄々っ子の様に手足をバタバタさせるフランを無視し静かにナイフを構えるその姿は、刀を持った鉄生よりも様になる。

「フラン、そんならみんなを運ぶの手伝ってくれ。お前さんは霊緋を、俺は二人を持つから」

言うが早いか鉄生はその肩には妻子を乗せて石段を下っていく。ぶうたれていたフランもそれに倣って、霊緋を軽く持ち上げて一緒に降りる。

「言っておくが、食べようとするなよ」

「大丈夫だよ。霊緋はちょっと行き過ぎちゃってるから」

「……そうかい」

のんびり歩く二人の姿は、親子での買い物の帰り道に見えなくもない。だが、その場にいる者達でそれを見る暇がある者はいなかった。

回収部隊が立ち去った瞬間、その場に閃光が走る。

「貴方と言いッ、風見幽香と言いッ、どうしてこう、格闘が得意なんでしょうねッ」

幾ら動きが見破れる眼を持っていても、それやれば『線』は見えなくなってしまう。最大限避けて首や心臓など急所への突きを繰り出そうとするが、そんなやり方は狙う所がまる分かりで簡単に阻まれる。

「私もあまり弾幕ごっこは好きでは無いので、こちらの鍛錬ばかり積んでいましたからね」

一方美鈴は、余裕を持ちながらも全身是凶器と言うのを現したかの戦いっぷりだ。足の爪から髪の毛先まで殺気の籠もった風体から繰り出される一撃は、当たれば肉体ごと魂が吹き飛びそうな勢いに見える。

見切れるだけの竜神には分が悪いが、領域を戦いには回せなかった。これ以上厄介な者が来る前に、ここの結界を完成させる――そう考えていたが、ある疑問が浮かんだ。

先程、この者達はどうやって結界を破ってきたのだろう？　炎の剣や拳で破られる程、ヤワな結界ではない。あの崩れていく様な壊し方は一体……？

「考え事は、禁物ですよ」

直線的に突いてきたナイフを受け流し、そのまま身体を回転させて

鳩尾へ肘打ち。

「がッ……！」

竜神の身体が浮かび上がり、動きが止まった凶刃に美鈴の手刀が疾る。握り締められていたナイフは、その手首ごと宙に舞った。

「……どうしますか？」

竜神の得物だったナイフを砕きながら、美鈴は訪ねる。勿論、これで投降しない事は分かってはいる。だが、それでもまだ抗戦する意志はあるのか訊きたかった。

「愚問、です」

止血していた手首から手を離すと、あっと言う間に新しい手首が出来上がっていた。慣らす様に手首を動かし、それを見つめる竜神の瞳は青く輝いている。

「けれど、無傷では無理ですね。分かり易いやり方を取らせてもらいます」

話しながら足に力を込め、まるで倒れ込む様に美鈴へと体当たりをする。

「捨て身なんてッ！」

カウンターに入った正拳は竜神の左肩を突き破るが、その顔から冷笑は取り払えなかった。

「捕らえた」

抉れた傷口が美鈴の腕ごと閉じる。その見た目は、まるで獣の口が獲物に食らいついたかの様だ。

「あッ！？」

白い腕に巻き付く血管、筋肉。腕を貫く骨。一瞬でも美鈴の動きを止めるには十分だった。

「ナイフなら、さっきの少女が馬鹿みたいに撒き散らしましたからね。幾らでも代わりはあります」

新たに取り出した血に飢える刃を、美鈴の脇腹に突き立てる。そしてそのまま『線』を沿って胴を一周する様に切開。捕らえた腕も、脚も、その腕が届く範囲で刃が走らない所は無かった。

「これで……」

終わり、と言い掛けた竜神は、おかしなものを見た。ナイフによって斬られた筈の腹から血が出ていない。それどころか、その緑の服に傷すら無い。

「めーりんになにやってるの」

後頭部に響く衝撃とどちらが早かったか。おそらくは口より先に手が出たのであろう。

「無条件で殴るってなぁ、幾らなんでも酷くは無いか？」

「そんな事言ったらコレはどうなの！　壊すのがもう少し遅れてたらめーりんが……」

その会話で心中に留まっていた疑問が解決する。あの妖女は記憶の片隅に残る、５００年前の壊す吸血鬼だったのだ。成る程、無意識的に領域を破壊出来た彼女ならば、結界の突破なんて容易いだろう。

「ま、いいや。美鈴、時間切れ（ゲームオーバー）だ。選手交代」

手でこちらに来る様急かす鉄生。その動作に美鈴は納得のいかない様子。

「けど私、まだ……」

「フランの癇癪を止められる自信あるのか？　巻き込まれるのはお勧めしないぞ」

数段下の所から頭を出している鉄生がチキンなのでは無い。おそらく彼は『フランだったらやりかねない事』を幻想郷で最も多く経験してきているだろう。その警告を素直に聞いて石段へと足を運ぶ美鈴。逃がすまいと立ち上がった竜神だが、その行く手は魔法陣から放たれる弾によって阻まれた。

「今度は私の番だよ？」

――今度は、しっかり壊してあげる。

そんな台詞が聞こえて来そうな顔面へ、竜神は柄だけになったナイフを投げつける。目眩ましにもならないそれだが、そうでもしないと標的に取られると思ったのだ。

竜神の左眼は、フランの手にある“目”がなんたるか捉えていた。
アレは自身が視ている『線』と同種の、壊しやすい標。かつて次元跳躍を繰り返していた頃に知った、似たようなモノを視る吸血鬼がいたのを思い出しながら、目の前の異端に戦慄する。
腰掛けた鉄生が、のんびりと美鈴に話し掛ける。
「正直な所、竜神はフランでしか殺せないと思うんだがね。レミリアもまどろっこしい事をする」
「……私をけしかけた理由が分かりませんが」
傷口に包帯を巻かれながら、美鈴は恨めしそうな顔をする。さらりと受け流せるのはその目を見ていないからだ。
「そうでもしないと、お前さんは納得しないだろ。運ぶだけでいいと言ったのに」
「納得では無く、お嬢様の命令でした。そりゃあ私個人としても……まぁ、勝ちたいとは思ってましたよ」
「んで、結局勝てなかっただろ。無理だって。普通の奴がアイツに勝つなんてのは」
竜神を評価しているとも取れる鉄生の発言は、両者の間に蠢く死を象徴する不可視の黒へと消えていった。
フランの能力、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』はモノの壊れやすい“目”を潰す事が出来る能力だ。その『壊す』事を

突き詰めれば、『殺す』事とも繋がる。つまり、“目”は『線』と同義。今この瞬間にも竜神の『線』はフランの掌で“目”へと変貌している。

幾ら再生の力とは言え、それを潰されればタダでは済まない。しかし阻止する手立てなら思いつく。

「その“目”へ通じる線を断てばいい」

どこからともなく取り出されたナイフで大地を切り裂く。その軌跡は自身から伸び、フランへと向かっていく『線』を断つ事に役立った。

「あッ……」

初めて能力を防がれる。その感覚は、フランの掌から霧散した“目”よりも薄いものだった。

「……面白いね。どんな手品を使ったの？」

小悪魔的に笑うフランに微笑で返す竜神。空気読解不能者が見たら微笑ましい、ある程度の読解レベルを有する者なら殺気漂う、二人を理解している者が見たら純粋な。様々な枕詞が付く風景であった。

「種も仕掛けもありませんよ。私は貴方と同じモノを視える。貴方が握ろうとした流れを断ち切った。ただそれだけです」

まかり間違えば自死にもなり得る行為をいとも簡単に行う。その冷静さはどっかの主人公に分けて欲しい位だ。

「そっか……けど、自分の身体は視れないの？」

首を傾げる可愛らしい仕草。その見た目は幼いフランドール・スカーレットだが、中身は５００年近く生きた吸血鬼だ。

「その身体、今にも壊れそう……ううん。もう何回も壊れてるよね？」

黒く滲む竜神の身体を視ていてもまるで動じないのは貫禄溢るる証拠だろうか。彼女の目に映る竜神は、生ける屍（リビングデッド）ではなく動く死体（ウォーキングデッド）だろう。あれだけ殺されておいてまだ健康体だったらそれはそれで恐ろしい。

「――ええ。多分、三桁はやられましたね」

例え大きな怪我を負い、身体が黒く染まったとしても、死んでいなければ物の死は薄れ、元通りになる。しかし、竜神の場合は違う。短時間で存在をも消し去られる勢いの猛攻により、その体躯は黒いシルエットと化していた。

溜め息を吐いたのはフラン。

「これじゃあ、私が壊すまでも無いよ。ここまで酷いのは潰すのにも時間掛かるし」

くるりと身体を回すと、それに合わせて揺れる七色の翼。玩具は壊れるまで遊ぶ性質のフランだが、修繕され尽くされた継ぎ接ぎには興味は無かった。

「妹様……ええと、その。いいんですか？」

心配しているのは美鈴のみ。この場で『線』や“目”について何も知らない彼女にとっては、さっきまで何をやっていたのかまるで分からない。

「いいも何も、私じゃどうしようもないもん。めーりんじゃアレは視れないし、てっしょーも無理だし」

死力を尽くして戦えば或いは勝機がある、とフランは思う。だが遊びでやるにはハイリスクローリターンだ。何もしなくても勝てるなら、無駄に危険な事はしたくない。遊びは自分が安全（勝てる）だからやるものだ。

しかし、このまま放って置けば死ぬと言うのはフランの見解であり、それが事実とも虚実とも取れない。その証拠に、鉄生は珍しくネガティブに考えていた。

もしフランが“目”を潰せたならば、鉄生も枕を高くして眠れるだろう。だが、目の前にいるのは死んでも死にきれない殺人鬼。おそらく決定的な一打が無ければ髪の毛一本にでも分離して再生するだろう。それが、鉄生の考えだった。

「無理、だろうなぁ」

だから、水元鉄生は前に進む。

殺せないなら殺せないなりの。自分でしか出来ない、自分にしかやらせない方法を実践する為に。

「竜神、お前はスペルカードを嬲るだけのモノだと思ってるのか？」

藪から棒に話し掛ける鉄生の手には、件のスペルカードがある。眉をしかめて何も言わない竜神に構わず、鉄生は喋り続ける。

「コイツはさ、結構便利なんだぜ。力をちょっと流し込むだけで発動出来るし、何より格好いい名前も付けられる」

まんまイタズラ小僧の顔である。そこらから拾った棒を振り回して、かっぱらった布切れをマントみたくつけて、ヒーローごっこをする子供の顔。

「名前はいいとして。コイツの利点はさ、技を一度描き込んだら、簡単に使える様になるんだよ――こんな風に」

宣誓無しで放たれた符の効力は、割れた石畳の間から湧き出る熔岩へと注がれていた。

まるで炎の蛇の様。そのしなる首に巻き付かれれば身動き以前に燃え尽きるだろう。

目にはたぎるマグマが映り、その躯は赤く染まる。そうして彼は標的を見つめ、その何物をも灰と帰す鞭を向かわせた。

百八、支闘（後書き）

超自己解釈、フランの“目”は型月の「死の線」「死の点」の塊
文句を付けられたら困るので付けないで下さい。付けられても「仕
様なので」としか言い様がありません
けどここまで付いてきて下さった方々がこんなちっさい事を気にし
ないよね！

後、お気付きとは思いますがかなり場面を吹っ飛ばしてます。具体
的にはレミリアとの対話から再び竜神とまみえる部分とか。
面倒だった訳じゃないよ！　ちゃんと書くよ！　後で

では次話でお会いしませう

百九、死闘（前書き）

長らくお待たせ致しました。東方魂合変、最大の山場で御座います

なのにッ！なんでこんな出来なんだッ！

折を見て修正する予定ではありますが残念過ぎて泣きたくなる

と、そんなどうでもいい作者の雄叫びはいいとして、どうぞお楽しみ下さい

百九、死闘

片や、ありとあらゆるモノを灼き溶かす蛇。

片や、ありとあらゆるモノを切り刻む水神。

「――――！」

先に動いたのは、熔岩の大蛇だった。大木を思わせるその太い身体をしならせ、上と横から竜神を絡め取ろうとする。

しかし、そうやって襲いかかってくる化生に無言の嘲笑、そして加速。蛇頭をくぐり抜け竜神が駆け出した先は、熔岩の中心にいる水元鉄生の元だ。

「……」

鉄生は落ち着いて蛇を手繰り寄せ、自らを護らせようとする。盲目の二匹はその粘度の低さ故か、身体を混じり合わせながら竜神を追う。

だが、その速度は竜神の切っ先を止めるには不十分だった。

「遅い」

黒い袴の上から深く突き立てられる銀刃。場所は肋骨の中央。間違

い無く身体に重大な損傷を与えるだろう部分に、無慈悲な力が宿る。

「ちッ、やっぱ反則だろ。吸血鬼ってのは」

しかし、そのまま棒立ちしている鉄生では無い。脚を振り上げ間合いを取り、両の掌に集めた熔岩を竜神へと投げつける。

「貴方は貴方で、中々小賢しい事をする」

蹴りに対してナイフをそのままに後退し、着弾前の熔岩を新たに取り出したナイフで切り払う。切ると言ってもただ致命傷を避けるだけで、温度も質量も変わらない。当然ながら刃は溶け、腕も骨付近まで剥き出しになる。尤も、跡形もなく消え去らないだけでも御の字なのだが。

「動かない身体を霊力では無く地脈で無理矢理動かす。確かにそうすれば稼働時間は底無しになれますね」

けれど、意味が無い。そう呟いた竜神は、鉄生を護るモノの死にピントを合わせた。

「燃料があれば動き続けられると思いましたか？　残念ながら、そんな事を許しはしませんよ」

熔岩が取り巻く鉄生へ直接接触する事は難しい。ならばどうするか、守護を無くしてしまえばいい。

「剥離（わか）れろ――――！」

肉体と熔岩の境目、熔岩と大地の境目、大地と肉体の境目。

その全てに蠢く黒い線を断ち切る。

肉体から離れた熔岩は霧散し、熔岩が消えた大地はその焦土を現し、大地から断たれた肉体はその場に崩れ落ちた。

「しまッ……」

動力源を失った鉄生は、重力に抗う術を持たない。その崩れる姿は、まるで糸の切れた操り人形の様だった。

そしてそのガラクタの額に、全体重が乗せられた刃が襲い掛かる。

「」

その行為は、生物としての命を打ち切る事と同義だ。例外無く死へと誘う。

崩れ落ち、溶けていく人型を見て、仕留めた事を確信する竜神。事実、それに生気は無い。今まで稼働させていた燃料の源を断ったのだから。

「――――……」

司る者がいなくなった蛇は形を失い、熔岩は徐々に結界内へ満ちていく。不可視の壁に遮られ麓までは流れないが、石段は既に熔岩の海へと続く十三階段と化している。

そう、結界が熔岩を遮る程に機能している。

「……嗚呼、最後はそうするのですか」

僅かに溶け残った瓦礫に立つ、竜神の口元に浮かぶ笑み。それは、結界外にいた抵抗者に対してだった。

「哀れですね、水元鉄生。自分が救おうとした仲間に裏切られるなんて」

八雲紫が紅魔組の撤退までは空いていた穴は、今では塞がっている。

「いえ、裏切られたと言うより、見捨てられたと言うべきでしょうか」

竜神が支配する空間には、塵一つ出入り出来る隙間は無かった。つまり、八雲紫によって完成を阻まれていた結界が完全な壁と化している。

最早隠されず、外界との接触を断つが為に作られた結界。竜神の全能力を注いで作られた空間は、それに内包されるモノだけで構成された一つの次元と化していた。熔岩の海となった世界は煉獄ともなりうる。

「……とすれば、貴方の罪は『傲慢』でしょうか。只の人間が力量を弁えずにその刃を向けた事、消えながら悔やめばいい」

融解の海へ投げ込まれたナイフ。向けられた切っ先を返すと言う、竜神にしては洒落が利いている手向けだ。

徐々に無くなっていく足場からふわりと飛び、僅かに残った護りによってまだその形を留める、この次元で唯一残る建築物へと移る。

博麗神社本堂。幻想郷の核とも言える地に、彼女は立っている。

別段特異な霊地と言う訳では無く、只の神社である筈なのだが、一部の者にとっては数少ない外界と幻想郷を繋げる数少ない場所でもある。博麗大結界が緩い、または緩くてもある程度は構わない場所なのだから。

八雲紫であれば、どこからでも無節操にスキマ経由での移動が出来る。だがそれは、現実と幻想の境界を弄れる八雲だから出来る行為だ。博麗の巫女の力では、薄れた結界に僅かな出口を作る事で精一杯である。

そして、それは竜神にも当てはまる。

「ああ……やはりここなら、外へと繋がる」

彼女の能力を以てしても、博麗大結界を破る事は難しい。ある程度緩んだこの場所ならば、外と関わる事が出来る。

今竜神が結界を解けば、流れる熔岩によって外敵を牽制しながら博麗大結界に干渉が出来る。おそらくは十秒も掛からずに本堂にまで到達するだろうが、それだけ時間があるなら竜神には十分だ。

異界を隔てる壁となっている自らの結界。能力ごとそれを除こうと腕を上げようとしたその時

「ムウン！　赤い荒縄（レッドバインド）！」

その腕に、火炎と言うには高すぎる温度を秘めた縛が絡みつく。拘

束する為なのか、肉が溶け落ちる程の温度は出ていない。

思わず劇画調になった竜神の視線の先には、先程投げ込んだ筈のナイフを手で弄ぶ男が立っていた。ただその頭は鳥のもの、身体は鋼の様な筋肉を纏っている。

熔岩の上に立つ者（スタンド）、赤い魔術師。その身体は沸き立つ熔岩と同じ色をしていた。

「――なんて、人。この期に及んでふざけ通しますか」

その顔から嘲笑は消え、ただ呆れのみが残っている。しかしその呆れた顔に冷静さが戻るのは早かった。

「貴方にまだ闘う意志があるのなら、それに応じて差し上げましょう」

拘束ごと腕を切り落とし、標準を鳥頭へ付ける。先程までとは違い結界は完全している今、空間制御能力は復活していた。

「ッ！」

掛け声にしては小さな声。呼吸を整えるかの様な音が発せられた瞬間、鳥人の上半身が握り潰されたかの様に吹き飛んだ。

飛び散るのは肉片では無く土塊。またもや消えていく対抗者から目を離すものの、左目は絶えず隠者を見破ろうとしている。

「そうですか、さっきのモノは人形……いえ、繰り主の貴方も人形ですか？　私とした事が、キチンと視ずにいたとは」

「んだよ、種明かしが早ぇよお前さん。もっとこうさぁ、『お前は――――人形か？』とか訊いてみるとか」

わざわざ紅い服装で現れる水元鉄生の人形。熔岩の椅子に座って楽な姿勢を取りながら、残念そうな顔で鉄生は答え合わせをする。

「まー大体はお前さんの見立て通りだよ。俺も、お前さんがさっき使い物にならなくしてくれたのも」

まるで本物の様に語る人形は、確かに見た目は精巧だ。だが、砕かれた内面は土そのもの。その手抜き加減は確かに水元鉄生のものだ。

「外見以外は土ですか。面倒くさがりの貴方らしい」

「喧しい、これでも十分役目は果たせるからいいんだよ。そらッ、まだまだ客はいるぜー」

鉄生の両脇から湧き出てくるのは小型の人形。特に何かを真似た訳でも無いデッサン人形の様なそれらは、ただ一つの標的を目指して走り始めた。無論、竜神である。

「今度は物量でですか……！」

左手はナイフによる斬撃、右手は掌握領域のコントロールと孤軍奮闘する竜神。右側から飛び掛かる人形はまとめて潰してはいるものの、左から来るモノは盗賊刀であるまいにナイフでは一体一体しか殺せない。当然、吸血鬼の身体であっても避けるのにも限界がある。

「みーんな乱暴にやり過ぎたんだよ。いやはや、俺もさっさと気付

くべきだった。お前さんが拘束から逃げられるのには三つ理由があったんだ」

得物が雀られ右腕に纏わりついた人形を腕ごと吹き飛ばす竜神に、ゆったりと語る鉄生型のそれ。表情は本体をトレースしているのか、とてもにやけた面構えとなっている。

「一つ目、拘束を引きちぎれる力があった。これは吸血鬼としての身体能力だな」

再生が間に合わぬ内に身体全体にも引っ付く人形達。流石に身体の大部分を粉砕する訳にもいかず、表面を撫でる様に排除するしか無い。だが、手首足首が切られた程度で拘束を緩める程、人形の造りは甘くなかった。なにせ、壊れたら壊れたモノ同士結合していくのだから。

「二つ目、強固な拘束を問答無用に切り裂く方法があった。この場合はナイフと領域かな」

徐々に網の形になるその木偶達は、竜神の身体を緩み無く固めていった。しかしその拘束は最大限強力なモノでは無く、最小限に壊す拘束となっている。

「三つ目、いざとなったら身体を壊して逃げ出せる。その身体に染み付いたモノのお陰って訳だ。さぁて種は分かった、とすればどうするべきか分かるか？」

腐っても教師。教鞭を振るかの立ち振る舞いは確かに板についたものがある。偉そうに肘掛け椅子（熔岩製）に座って無ければもう少し立派には見えた筈だ。

「俺なりに模範解答を考えたが、要するに『吸血鬼の抵抗でも破れない強度』と『自己犠牲をしても脱出させない拘束度』が揃ってればいいんだな、と結論付けしたんだよ。で、出来上がったのがその捕縛人形。どうせならマイアみたいに作りたかったけどそんな余裕も無いし……と、話が逸れたな。まぁ吸血鬼のお守りは５００年前にも四苦八苦したが成功した事もあった。ナイフは奪って手首を拘束すればいいし、多分塗り壁みたいな状況なら首を切っても逃げられないと思うし。お得意の領域は結界に大部分を回してる上に、そんな熔岩風呂じゃ中でも護りを張ってないと文字通り溶けちまうぞ。まぁ融解と再生を繰り替えさせる責め苦も良いかもしれんがな」

鉄生が考案したのは人形による生き埋め。人形繰りが得手では無い鉄生でも、同じ動かし方なら多数とは言えは一となり、操作は容易となる。

「こんな、物……ッ！」

四肢の筋肉が奮い、渾身の力を以て人形塚から抜け出そうとする竜神。幾らいしのなかにいようが吸血鬼の能力に変わりは無い。だが、ピシピシと罅が入っていく冷えた岩漿を見て鉄生はよりにこやかな顔をする。

「お前さんをこうやってアクア・ネックレスの主人みたいな真似にするのが目的じゃあ無いんだ。ただ――」

――その身体（眼）が、止まってくれればいい。

人形の言葉を継いだ影。一瞬ではあるが、突然の強襲者を青い眼が捉えた。

その身体は、まるで死の塊の様だった。竜神が味わった死を具現化すればこうなるだろうか、濃厚な死を纏った影。

「――――――」

その影が、浄眼が捉える次の一瞬を刈り取った。頭蓋に響く衝撃は小さいが、局部をえぐり出すには十分な力加減だ。

「この眼さえ無ければお前さんは視えやしないし、再生も出来まい。なにせ、浄眼として機能していたのはその眼だけだしな。後は、封印するなり煮るなり焼くなり好きに出来る」

左の視覚のみ作用した浄眼。鉄生はその特異な混線の仕方に目を付けて事を起こしたのだ。眼球は水分が抜ければ萎みまた元に戻れると誰かは言った。だが、鉄生によって潰された眼からは血が迸り、二度と視覚を司る事は出来ないだろう。

「さぁ、さよならだ竜神。どうせならお前さんの真名を聞いておきたかったが、時間が無いんでな。お前さんが殺そうとした人間の符によって封印されるなんて屈辱だろうが、諦めて住み良い幻想郷の礎にでもなってろ」

鉄生が取り出した古ぼけた符は、歴代最強と謡われた博麗の巫女が手書きした特別製。５００年の月日を越え、再び竜神を封印しようとしている。しかし、今度は呼び起こされる事の無い、永久の眠りとなるだろう。

そうして、額に符を貼られた竜神を置いて冷えた岩漿の上に立つ。風の吹かない夜空を見上げ、ふと忘れ物をしたかとばかりに振り返

り、口を開く。

「……さらばだ、理想を抱いて――――――！？」

しかし、褐色の弓兵の台詞は飲み込まざるを得なかった。

そこには――

血の涙を流しながら不適な笑みを浮かべる竜神が、鉄生の身体を貫いたのだから。

「……クッ、ハハハハハッ。馬鹿ですか貴方は。私が浄眼として使えるのは魂が直結していたその身体。水元鉄生の身体がある限り……媒体がある限り、スペアを作る事は容易い！」

ずぼっ、と小気味よい音と共に引き出されるのは、鉄生を動かしていた真の原動機、心臓。どんな妖怪もこれを無くせば命の灯火は消え失せる。

深紅に染まる竜神の腕――と思いきや、その白い腕に付いた色は土気色。別に彼女の体調が悪いのでは無い、その穴から出てきたのは血飛沫では無く土埃だけだったのだ。

「なッ――――――！？　そんな、その身体にあった死が偽物……違う、あれは確かに死にかけた身体そのものだった。あんなに死に尽くした人形がある筈も無い！」

壌の心臓を手にし、柄にもなく動揺する竜神。驚くその顔に、鉄生は笑いかける。まるで悪戯が成功した事に喜ぶ、無邪気な顔で。

「さぁてね。俺が本物か偽物かなんて些細な事、もうお前には関係

無いだろう？　――ここで融けていくお前には、さ」

穴の空き、崩れていく身体が動く。その手には、彼が持つ中で最も誇るスペルカードがある。彼が最も尊敬し、最も愛する者を模したスペルカードが、そこにある。

「さぁ、最後にひと花咲かせてやるよ！」

――――花符『幻想郷の灰化』

固まった筈の溶岩が、再び熱で踊りだす。そのマグマ達はさながら花吹雪の様に美しい花弁を舞い散らせ、やがてその弾は集まり、大きな向日葵が出来上がる。そしてその大輪から花びらが飛び、小輪の向日葵へと形を変える。

まさしく、狂い咲き。真夏の夜の夢とて、この美しくも怖ろしい花畑を再現は出来まい。畏怖の感情を抱かせながら、前面に出てしまうのは感嘆の感情。

これこそ、唯一無二の水元鉄生の弾幕ごっこでのスペルカードだった。

その暴力の花嵐の中でさえも、竜神は立つ事を止めなかった。

縛を破る為に護りを犠牲にし、僅かに溶け残った四肢。焦土を超えるその地に立つ支える白い骨すらも残らない筈なのに、竜神は倒れない。

「な、ら……此処ごと、圧砕すればッ……」

空間が縮む。結界の核となっている領域が、内部の空間を潰そうとする。蜃気楼の様に歪んでいく境内は視覚的でなく、本当に折れ曲がっていき――――砕けた。

だが、異変はそこで終わった。

圧迫感と土人形は溶岩へ消え去り、残ったのは溶岩を纏った水元鉄生本人と、傍目から見ればそれに抱えられる様に――――実際には、先程の人形と同じく、胴体の風通しを良くされている最中の竜神のみだった。

「片腕犠牲にしただけはあったろ、さっきの人形は。お前さんに殺された腕を素に作って騙せるか不安だったけど、無事こうなれて幸いだ」

朗々と響く独白。竜神は声を出す事は無く、ただされるがままとなっている。

「左眼が本体だなんて最初から思っちゃいない。多分、時間を掛ければ両目共同じ様になるんだろう。急ぎすぎたのはお前さんの敗因か」

ずぶずぶと足から溶岩へ融けていく水元鉄生の身体。竜神の身体が落ちない様に頭に手を添えていると、本当に抱き合っているかの様だ。

「こうやって肉体が――つっても、金属製になっちまったが、俺としては腕に変わらない。直接魂と繋がっていれば、領域を抑える事も出来る。勿論それだけじゃ不十分だから、紫に手伝って貰ったんだ。お前さんが結界に絡めて領域を置いてたのには気付いてたから

な。だからそれを逆手に取って、結界と領域を引き剥がせない様、領域を強制的に発動させる様にしてたんだよ。結果、こうやって護りをゼロに出来た」

足から腰へ。痛みはある筈なのだが、何故か心地良い暖かさしか感じない。

「俺はさ、竜神。お前が此処にいたから俺も此処にいて良かったんだ。お前の付属品として付いて来た俺が一人残るって訳にもいかない。……ま、実際の所はさ。もう俺の身体を利用されない為にっていう予防線なんだがな」

抵抗すればまだ脱出出来る竜神だが、観念したのか指一本動かさない。傷口から新たに生まれる肉達は蒸発していく速度に負け、鉄生と同じく融けていく。

「人間として５００年も生きられたら上等だろ。道連れに美人がいるなら尚更だ。

――――やれやれだぜ。俺の口がこんなに回るとは。さぁ、お前も墜ちろ竜神。俺の命を重石にして、理想を抱えて溺死しろ」

人間と妖怪。異種族が熔岩の中で笑っている。笑いながら、消えていく。

人間は幸せだった。妖怪は悲しんでいた。けれど、二人は笑い続ける。同じ笑みを浮かべている。

やがて、彼らは混ざり合う。その笑みも、魂も。全てが一つになる。

彼の物語は、此処で終わる。

彼女の物語は、此処で終わる。

魂合した彼らは、此処で消える。

百九、死闘（後書き）

次話からは後日談等になります。鉄生が死んでみんなどうするかなー

……うん、間違いなく鉄生死んだよ。リザレクションもリレイズもフェニックスの羽もヒーリングγも無いよ。これが魂合変で俺の書きたい事Ｎｏ．１でした

いやぁ、どうせオリ主最強になり欠けるんだったらこうやって殺してみたいなぁ、と。鉄生ファンがおりましたら申し訳無い

……竜神？　あれはまぁ、敵だし

では、後二、三話で終わりとなります。ここまで読んで頂きありがとうございました

次話からは蛇足となるやもしれないですが、楽しんで頂ける様頑張ります。ではでは

百十、真夏の夜の幻<前>（前書き）

中々の文量になったなぁ……と言う事で後日談です
相変わらず長く上手く書くのが苦手なので、変な部分は多々あるかと思われます。申し訳ない

では、鉄生の死後の物語をお楽しみ下さい

百十、真夏の夜の幻<前>

戦塵の余韻が未だに晴れない博麗神社。命を散らせた晩から幾日経とうと、そこにある結界が解かれる事は無い。

と言っても竜神が張っている物では無く、今度は八雲家――八雲藍がその結界を任されている。何故か。危険だからである。

竜神と鉄生の妖気が消え去り、残ったのは焼け果てた博麗神社跡地。霊地はその姿を不様な物に変え、本堂も池も蔵も何一つ残っていない。

何も残っていないとは言え、そこは一度は隔絶された博麗大結界の一部。しかも握り潰され掛けた場所。大結界への影響を最小限に留める為に再び強力な結界が張られているのだ。

そしてその内部。外との境界が緩んだそこを修復しているのは八雲紫。とは言え一朝一夕で出来るものではなく、永遠亭に押し掛けた彼女達の傷が癒えてきた今でさえ、集中の為に一日２４時間睡眠を取っている。惰眠を貪っているとは言わせない。

「私が聞きたいのはそんな事じゃないの！」

今日で五度目になる机への打撃攻撃。総計ではもう六十近くになっ

ているだろうか、入院一週間の内に風見幽香が日課にしかけているストレス発散法は、永遠亭で診察台の次に分厚い食卓に悲鳴を上げさせる程の威力を誇っている。

所々に拳の跡が残る机を挟んで睨み合う妖怪二匹。身体中あちこちに包帯を巻いているものの、ほぼ完治しているフラワーマスターと、実は荒事とは無縁だった賢者の式がガン飛ばし合うその光景は、立派な足を持っている生物なら逃げる前に近付かない。

「そんな事を言われても、私だって紫様に教えられた事は分からな……分かりません、ハイ」

意外と上下関係がハッキリしている二人だが、無い情報は伝えられる筈も無い。

風見幽香が欲している情報。自分が寝てる間にどうやって終わってしまったのか、竜神はどうなったのか、などでは無い。

「分からないなら探せばいいじゃない！　今まで何やってたの！」

「博麗大結界に変わりは無いか見ていました、曹長（サージェント）。決して油揚げの食べ歩きなんてしていません」

「泣いたり笑ったり出来なくされたく無かったらさっさと探してきなさい！」

名目上とは言え、怪我人としてはあるまじき態度である。と言うより、怪我人のクセにそうやって脅しが掛けられる事がおかしい。

「放っておけばいい。どうせその内、素知らぬ顔で現れるだろう」

「……こうやって騒いでるのを、面白がって覗いてるかもしれないしなぁ」

机に響く波紋疾走（オーバードライヴ）から飲食物を退避させ、座布団に座ってのほほんとお茶を楽しむ元重傷者二人。一般人なら即座にショック死しかねない怪我を負いながら七日足らずで飲み食いが出来ている現実は、死んだ人間を探す事より理不尽だ。

「せめて紫様が起きてくるのを待ってて下さいよ。紫様なら多分全部知ってますから」

口を付けられる前に机や畳に飛び散った茶飛沫を拭きながら、口答えするかの様に愚痴愚痴と呟く藍。そんな事は幽香だって分かっているのだが、夏場に関わらずに冬眠するかの様に眠り続ける紫を叩き起こすのは気が引ける。可哀相と思う訳無いが――いや、ある意味では可哀相とは思うがそうではなく、わざわざ地雷にナパーム弾をぶち込む真似はしたくない。

「……どこほっつき歩いてるのよ……鉄生のバカ……」

竜神の被害に遭った者達の内、消息不明となっている者は唯一人。水元鉄生のみが、誰にも姿を見せていない。何時もなら呼ばれてなくとも飛び出てくると言うのに。

最初は後片付けに駆り出されているのかと思った。藍も紫もいなかったから、それでも合点がいった。

けれど、紫が部屋に籠もる様になっても、藍がそのお守りをする様になっても、鉄生は姿を現さなかった。

逃げるしか無かった自分が恥ずかしいから？

合わせる顔が無いと思っているから？

けど、鉄生がそんな事を気にするとは思えない。精々、土下座しながら開き直る姿しか思い付かない。

もし、鉄生が戦場に戻っていたらどうするのだろうか。妖怪で無くなり、自暴自棄になって特攻したりしたら。

けど、特攻する以前に神社まで辿り着くだろうか。傷だらけの人間が歩いて戻れる程近くに落ちた訳でも無いだろうし、誰かが手伝わなければあそこの結界も破れないだろう。

そう、手伝ったら出来なくは無い。

兎によると、私や咲夜をここまで運んだのは紅魔館の吸血鬼と門番らしい。お人好しの美鈴なら、鉄生の我が儘も聞くかもしれない。ただあそこの主は鉄生に相当入れ込んでいた筈。わざわざ鉄生を死地に連れて行く程無慈悲では無いだろう。

……もう片方の、妹の方ならどうだろうか？　別に妹の方が単純と言う訳では無いが、あちらなら元凶を断とうとして戦いを挑んでもおかしくは無い。美鈴が鉄生を運び、それに妹がついて来た。そんな所か。

けれど、それなら紅魔館の連中が竜神を片付ける可能性もある。妹の物騒な能力があれば再生させずに殺す事も出来るだろう。それならなんで鉄生が帰ってこないのか……まさか、妹を連れ出したから

とこじつけで館に閉じ込められて……る訳無いか。紅魔館からの大脱出には出てまた自力で戻って来る位の自信があるとか無いとか言っていた覚えがある。

……けれど、今の鉄生は人間だ。鉄生が自分の意志で戻らないのはいいとして、無理矢理拘束されている可能性もある。はたまた紅魔館前で朽ち果て、それの仇討ちにでも二人が駆り出されたとも……

……

「……ッ！」

無言で本日六度目の打撃。自身の想像がまた変な方向に行く事が余程我慢ならないのか、打ち付けられた拳にはそのまま木材どころか鉄板を突き抜けかねない程の力が籠もっている。

どうしても脳裏に過ぎる、『鉄生が■んだ』と言うワード。有り得ない、信じられない、と必死に頭からその考えを除去しようとしても、中々どうして酷くこびり付いたままになってしまう。それどころか、忘れようと努めている傍から■んだ原因を考えてしまう始末。

「……おい、そろそろ誰か止めろよ。歯軋りの音がこっちまで聞こえてくるぞ」

妹紅がうんざりした顔で怪我人同盟のメンバー（慧音と藍）を見るが、生憎と誰もその提案を受け入れなかった。

「ああして待っていられるだけマシになったんじゃないか？　ちょっと前までは足の事を忘れて駆け出そうとしてたし」

「触れられざる者と思ってますか。近付くだけで生傷とトラウマが

増えるのは勘弁したい」

ぼそぼそごにょごにょと部屋の隅で呟き合うお三方の後ろで悲鳴を上げる机の脚とどす黒いを通り越して深き者が如くオーラを放つ幽香。このまま黒化でもしてしまいそうなダークっぷりだが、そこに終止符を打てる者が現れた。

「分かり易く沈んでるわね、幽香」

寝間着姿でも……いや、だからこそ胡散臭い幻想郷の賢者が、わざわざ導火線に火の付いた爆弾に近付いていった。

「……紫、キリキリ、吐け」

大切な部分が抜けている気がしなくも無い文章だったが、その場にいる全ての生物はその単語の羅列の意味を理解出来た。読書の皆さんにも理解出来ていると信じて話を進める。

「貴方だって分かってるんでしょう。鉄生なら■んだわよ」

鈍い音と共に、一週間の内でその耐久度をジリジリと減らされていった木の机はミス率ダウンの羽すら出さずに大切断された。今度からはチタンの机を用意する事を薦めたい。

不器用に動く幽香の首。赤い瞳が向けられた先にある紫は、誰が見ても無表情だと答えるだろう。

「紫……今、なんて……？」

「聞こえないフリをしないで頂戴。貴方が待ってる水元鉄生は肉片

一つ遺さずに彼岸に渡ったの、よッ！」

彼岸に渡った、の部分で殴り掛かろうとした幽香を、未だに自由の利かない幽香の足を蹴っ飛ばす事で回避した紫。苦しそうな表情を浮かべるものの、その瞳に怒りが消える訳が無い。

「下手な嘘、吐いてるんじゃないわよッ！　鉄生がッ……■ぬなんてッ、そんな事……！」

諦めずに膝立ちの状態で右手を振るおうとするがその速度は寝ぼけ眼でも捉えられるもので、あっさりと手首を掴まれる。

「そんな事ッ……ある訳無い……無い……ッ……」

それでも幽香は左手だけで紫の胴を叩くが、その様子はまるで駄々っ子。先程までの黒い覇気は霧散し、空気になり欠けていた三人も心配そうに近寄ろうとするが、反転した幽香の行動のせいでまたもや近寄れない。

やがて叩く手も止まり、頭から紫にもたれ掛かる幽香。震えながら嗚咽を洩らす大妖怪の肩に、静かに手が置かれる。

「……あいつは気付いてたのよ。自分が生きていたら、竜神は完全に殺せない。自分の肉体がある限り、竜神を殺す事は出来ないって。そして、自分なら竜神の能力を妨げられるのも」

「……あの、紫様。それはどういう……？」

言葉を発せられない幽香の代わりに、藍がその言葉の意味を質問する。

「竜神と鉄生は肉体的には繋がってなくとも、魂の面では深く繋がっていたの。そのラインがあったからこそ、只の人間である鉄生が竜神の能力を一部でも使えていた。妖力はともかく、神力なんて早々宿せるモノじゃないしね」

「だったら、竜神は鉄生から能力を剥奪する事は出来ていたのにしなかったんですか？」

「と言うより、使わせる他無かったでしょうね。鉄生であれば自分がいる事を欺けるけれど、そのままでは朽ちていく。だから、自己防衛させる為に能力を使わせた」

「……その言い方だと、鉄生は利用されてたみたいに聞こえるが」

「実際はそうでしょう。竜神である事を隠す為に、そして新たな肉体が完全に消えたとしても命綱になる様に。今まで鉄生がやってた行動は、私達に信用を買わせる為だったのかもしれない。幻想郷（ココ）の有力者との繋がりは結構あったみたいだし、そうすれば殺される可能性は低くなる」

「じゃあ、鉄生は中に虫を飼っていたんじゃなくて、飼われていたのか。本人の意志は分からないけど」

「飼い慣らせていたと思ったのだけどね。竜神の希少な能力を唯一使いこなせるからこそ、幻想郷に招いたのだけれど」

「……聞きたくない」

もたれ掛かりながら、頭の上を通っていく会話を遮る。

鉄生の行動が全て偽物？　ただ利を求めていただけ？

有り得ない。馬鹿げている。

「幽香、あくまで可能性の――」

「そんな可能性ッ、ある訳無いでしょ！！」

再び力が籠もる両腕。

――みんなが知っている鉄生は、そんな頭のいい事をやらない。なんにも考えずに自分が好きな様にやるのが鉄生。損得勘定なんて、鉄生はしてなかった。幾ら私が迷惑を掛けても、幾ら私に迷惑が掛かっても、笑ってごまかす人だった。

「あんな馬鹿みたいに明るくて優しい性格が、竜神のモノな訳無い。大体、鉄生が打算的な行動をしてたなんて思えない」

「けれど、彼の心中を完全に理解するのは不可能よ。竜神が見事に演じていたのか、鉄生が無意識の内にそうしていたのか、私達には分からない」

「……私は、鉄生の意志だと信じてる」

理由になってないとは分かるけれど、そうとしか言えない。紫の言う通り、どれだけ自分が鉄生を信じていても、それが竜神の思惑なのかもしれない。

けれど私は、彼が亡くなった後でも信じ続ける。愛し

「……ちょっと、咲夜の様子を見てくる」

なんとか自身の脚で立ち上がり、隣の部屋へと歩く。引き留めようとする者は無く、ゆっくりと襖へ手を掛ける。

あの場にいた者達で未だに昏々と眠り続ける咲夜。迅速な手当てが幸いしたか、怪我の具合は良いようだが、人間の子供が受け持つには酷すぎる損傷だった。

「……」

穏やかな寝顔を撫でながら、幽香の頬に涙が伝う。眠る我が子に、何時かは父親が■んだ事を伝えなければいけないその辛さ。頼っていた存在が贋者だったのかもしれない疑心感。それを否定するココロ。それを肯定するアタマ。塵どころでは無い粗大ゴミが山となっていく感情は、何時崩れてもおかしく無い。

たった一つ、理解した事。それは――

「――私も、人間（鉄生）みたいになったのかしら」

妖怪の時を生きながら、人間の様な生活をする。奇妙なその生き方は、まさしく鉄生のモノだった。

◆◇◆◇◆◇

鉄生の訃報が幻想郷にばらまかれたのは、永遠亭から机の廃品が出た一週間後の事。喪章を付けた天狗が一軒一軒を回っていたのだ。

そして、ここ香霖堂にも――

「これは……」

白髪の店主、森近霖之助は、寺子屋の名物教師の訃報に絶句した。後一世紀は確実に生きると思っていた妖怪――大妖怪に名を連ねても遜色無い彼が死ぬとは信じられなかったのだ。

「私も天狗が三ヶ月遅れのエイプリルフールを始めたのかと思ったけれど、違うみたいよ」

同じく新聞を見た人形繰りの魔法使いは、自身のお喋り（？）な人形に悟られないよう香霖堂に来ていた。別に喪服を仕立てに来た訳で無く、ただ単に世間話の延長線で訪れている。

「だろう、ね。こんな記事を書いてふざける程、天狗は落ちぶれて無い筈だ」

……過去に一度、自分が留守にしている時に射命丸が取材に来て、その時床に散らばっていた人体の骨格模型を見て『香霖堂の店主、遂に白骨化！？』と大々的に報じられたのは目を瞑る。

しかし、相手は舐めては掛かれない妖怪だ。こんな記事を書こうと思考を巡らせた途端にナイフが飛んでくる事は請け負える。だが暗い顔で何時になく丁寧に配り回れる程の余裕があったのだから、狙撃手はもういなくなったのだろう。

しかし、こんな記事が幻想郷に回っても――

「……どうしようも無いわね」

「……全くもって」

冠婚葬祭の内、最後の一つしか重視しない幻想郷。訃報なんて星の数ほどある中で、水元鉄生が取り上げられたのが奇跡とも言える。そも、妖怪の訃報など聞いた事が無い。

お世話にならなかった、と言えば嘘になる。だが、いなくなった人にどうする事も出来ない。強いて森近がやる事と言えば、香典袋の仕入れだろうか。

暗く、と言うより塞ぎ込む空気を変える為に、森近は棚から酒瓶を取った。つまらなそうに新聞を眺めるアリスの前に、琥珀色の液体が注がれたグラスを置く。

何も言わずにそれを口へと流し込む訳にもいかず、自然と死者を悼む言葉を出す。

「……逝ってしまった友に、乾杯」

「……乾杯」

ややラグがあったものの、グラス同士がカチン、と音を鳴らした。

◆◇◆◇◆◇

一方永遠亭では、再び家具に激震が走っていた。

「あの、風見さん。この机を壊したら今度こそ貴方を被験体にするって師匠が息巻いてたんですが」

なるだけ冷静に、心底動揺して、鈴仙・優曇華院・イナバは幽香を宥める。宥め方に問題はあるが事実なのだから仕方ない。

その言葉を喧しいと言わんばかりに睨みを効かせる幽香が怒る原因は、言わずもがな烏天狗が書いた記事である。自身が信じるどころか疑ってしかいない夫の訃報を余所様にばらまかれて気分を良くする奴がいる訳が無い。

「私を鎮めたいならあの馬鹿天狗を連れて来なさい。素材さえ用意すれば料理人は満足よ。膾に叩くのなんて簡単なんだから」

「（……料理人と言うより死刑執行人の方が正しいような）」

殺す気配と書いて殺気。それが籠もる室内には最早他の入院患者はおらず、お目付役としての鈴仙が隅で僅かに震えながらその役目を果たしている。

流石に実験体扱いは怖いのか、今度は握った湯呑みにじわじわとひびが入る。永遠亭で最近湯呑みと胃薬の数が減ってきている直接的、間接的な要因である幽香は、既に治った手足を不満そうに震わせながら、再び紙面へと視線を移す。

ぐしゃぐしゃになった跡がありながらも、筆者直々に運んできた新聞はその情報伝達力に影響を出していない。特に損傷の激しい、水元鉄生についての記事があるのは一面記事――では無く、三面記事。『歩く三面記事』に相応しい掲載の仕方と言えよう。

「……あンの馬鹿天狗……ふざけた記事書いて……ああイライラするッ！」

早くも砕け散る陶器。職人が見たら涙を飲みながら卒倒しそうな光景である。なにせ椀子蕎麦の様に壊れた椀の横から新しいものが充填されてるのだから。

「……ストレス発散は家に帰ってからにして下さいよ」

「そんな事したら咲夜の傍に居られないでしょ」

破片を回収しながら替えの湯呑みを用意する鈴仙のボヤきに少しばかりの理性を持って答える。何せまだ娘が目を覚ましてすらいないのだ、心配しない方がおかしい。

鉄生みたく、とおくへいってしまわないように――

「――――――ッ！！」

派手に飛び散る湯呑みが幽香の掌を赤く染めたが、その痛みよりも自分の考えたコトが心を抉った。

段々、否定出来なくなる。

段々、信じてしまいそうになる。

鉄生がいなくなった事を。

鉄生が■んでしまった事を。

「なんで……？　なんで、なの……」

痛んだ机へ零れ落ちていくのは、言葉と涙と血。汚れていくのは、新聞紙と机と心。

何時まで、信じていればいいの？

何時まで、疑っていればいいの？

「……なんで、死んじゃったのよ……鉄生……ッ」

嗚呼、こんな事を言っちゃいけない。口から出て行った言葉には意志がある、と鉄生は言っていた。

そう、だから――――

「――――おかあ、さん？」

――――その言葉が、どんな悪いコトを引き起こすか、分かったものじゃない。

◆◇◆◇◆◇

黄昏時に、竹林を駆ける小さな影。

黄金の様な光に当てられて輝くその髪は、銀色の細糸を彷彿させる。

そんな美しい髪を振るいながら、十六夜咲夜は走っていた。

何故か。それは本人にも分からなかった。ただ、目の前にある現実から数時間だけでも逃げたいのだ。

父親が死んだ、と言う現実から。

血に濡れた手よりも咲夜の注目を引いたのは、母親の苦しそうな呟き。ぐしゃぐしゃになった顔と、ぐしゃぐしゃになった新聞紙を鑑みれば、その言葉が比喩表現とは一線を画しているのが分かる。

聞いた時は、なんの事か分からなかった。

けれど、あの夜の事を思い出すにつれて理解が深まり――――外へ、竹林へ走っていた。

嗚呼、自分は何をしているのか。信じられないから逃げるのか。逃避にならない逃走をしていて、自分が救われると思っているのか。母親が救われると思っているのか。

何処へ行く訳で無く走る。走る。走る。何(現実)から逃げているのか、何(幻想)へ向かっているのか。起動したばかりの頭は足への命令を怠り、主の意志などお構い無しだ。

だが、損傷が完全に消え去った訳で無い。やがて紅く滲み、はらけ

出す包帯達。それは、十六夜咲夜の稼働限界を間接的に伝える身体の信号だった。

何時の間にか、息を切らしていた。咳き込みながらも空気を吸い、傾く体幹を修正して進む。無意志に動かない身体を意志で動かす。動け、と思って動かす身体はホンモノでは無い。ならばこの身体はニセモノなのだろうか？

ニセモノ――――十六夜咲夜と言う名前も、両親との関係も、全部ニセモノだ。なのに、今自分は十六夜咲夜として父親の水元鉄生の死から逃避しようとしている。それなら、ホンモノと遜色無いと言ってもいいのだろうか。

――――私達は、ホンモノの家族だよね？

ああ、私はそれが聞きだいのか。水元鉄生が逝って哀しいのは、父親と言う存在だったから哀しいのかと、水元鉄生に確かめたかったのか。死人に口無し、と分かっているのに。

馬鹿みたいだ、と認識した途端に抜けていく力。打ちつけられた膝には鈍い感覚しか伝わらず、頬に伝う涙の熱さも感じられない。

ただただ溢れる涙は、心にあった突っかかりが無くなったからだろうか。それ自体に哀しみも憎しみも、怒りも感じない。

『■　■　■　■　■　■』

ぼやけた頭が、等間隔な地響きを感じ取る。弱い振動がどんどんと強くなるのが、短くなった髪が揺れる事で感じ取る。

ふと、思い返す。以前にこうやってがむしゃらに走って妖怪に遭った時、颯爽と助けてくれた父親の姿を。あの時の涙は後悔と恐れだったけれど――――

今は、どうなんだろう。この感情の無い涙では、きっと父親は助けてくれないかな。父親が死んで、哀しんだ心を表に出せない娘では助けてくれないかな。

目の前には幻想郷（ココ）に来たばかりに遭った奇形の妖怪の大型種。人間型の油粘土を潰して捻ったような、醜悪な雑魚。

けれど、今の私にはどうも出来ない。逃げようにも足は動かず、寝たきりの自分にナイフを付けている訳が無い。ただ、最期を迎えるのを待つだけだ。

呟く。ごめんなさい、と。

死者になる事を、死者に対して謝る。もしかしたら、天国で叱られるかもしれない。でも天国に行けるなら、父親に聞く事が出来る。

私達は、ホンモノの家族だよね、と。

不気味なモノから視線を外し、天を仰ぎ見る。黄昏時の曖昧な空色は、まるで私の様だと想いながら、目を閉じた。

そして、十六夜咲夜の願いは叶った。

百十、真夏の夜の幻<前>（後書き）

あくまで魂合変内でですが、幽香はかなり人間に近付いていると思います。なにせ人間と一緒に暮らしていたんだから
妖怪って長く生きるのが当たり前だけど、人間はそんな事は無い。
そんな人間の激しい生き方が長く続いて、その傍にいたなら影響を受けない訳が無い
だから、幽香だけは人間らしい哀しみ方をしてる……筈。上手く表現出来てたらいいなぁ

あ、今更ですが、足跡代わりに感想を書いて頂けると嬉しいです。
完結する前に言うのはなんですが、読み切った感想なんかは是非ともお寄せ下さい

百十一、真夏の夜の幻＆ｌｔ；中＆ｇｔ；（前書き）

今回は結構読みにくい文章になってます。なんか思うままに書いてたらこうなってもうた
不評ならば修正……はしません。面倒だから
それでは、どうなるかな～？（ｂｙケフカ）

百十一、真夏の夜の幻<中>

◇◆◇◆◇◆

「――――用心だよ、用心。それに越した事は無いだろ。竜神が出てきたのだって用心を怠った結果だしな」

「――――最初は家、次に神社に蜻蛉返りで、此処が最後だ。いやさ、もっと早く行こうとはしたんだよ？　ただ此処って地に足付いてる奴じゃあまともに通れない仕組みみたいでさ」

「――――いや、あそこに行ったらどうなるか分かったもんじゃない。レミリアって変な所で怒るし、フランに至っては瞬時に壊しそうだ」

「――――頭突きなんて食らったら流石にヤバいって。紫じゃあ無いが俺はもやしっ子なんだからさ。丁重にお断りする」

「――――白浪天狗に見つかったら面倒だし、なによりお前さんらは行かないって分かってたからな。そこまで縁は無いし。ああでも、マヨヒガになら行くべきだったか。八雲本家の場所は知らないが」

「――――冥界への道なら、今は通行止めだぞ。閻魔サマが倒れてるもんだから、肉体がある奴はそうそう通れなくなってるとか。お陰で妖夢がエラい目に遭ったとか遭わなかったとか。え？　なぁに、単なる噂だって。話し掛けなくても耳に入るさ」

「――――確かに向日葵なら、まだ見事に咲き誇ってたな。流石幽香、一日二日世話しなくてもへこたれるなんて花は作ってない、か。まぁ一ヶ月近く経っちまってるから今は分からんが」

◆◇◆◇◆◇

十六夜咲夜が走り去った後の永遠亭は、天地がひっくり返る様な騒ぎだった。なにせ飛べもしない患者が夕暮れの竹林へと逃げ出してしまったのだ、捜索隊を出すと同時にもう一人（大妖怪）が後を追わない様にとストッパーを掛ける必要があったのだ。尤も、兎が何羽集まってどうにか出来る風見幽香では無いのだが。

そして子を追う親は橙色の光の檻を抜けながら、どうにか子へと追いすがろうとする。だがここは迷いの竹林と呼ばれる程の難所、そう簡単には目的へは辿り着かない。求めれば遠ざかり、忌めば近くなる。そんなマーフィーの法則が発動するのを肌で感じられる場所は此処くらいでは無いだろうか。フラワーマスターと言われた大妖怪でも、頼みの竹が口を噤めば迷うのは必至。

故に、迷子となる。

息を切らせて飛び、走り、駆け抜ける。がむしゃら加減は娘と変わる所は無く、身体能力の高さからかはっちゃけ振りは娘以上だ。

何時もは傘を持つ左手には何もなく、

何時もは手を握る右手にも何もなく、

ただそれだけで、風見幽香の心のざわめきは治まる事を知らない。

揺らぐ心を意識すると、誰もいない事が分かってしまう。

誰もいないから、手は、空いたまま。

負のスパイラルは夕空から夜空へと変わる色の様に深くなり、それと同時に彼女の移動速度は最高記録を常時更新中となっている。その姿はまるで、深い闇へと落下していく人形。

陽光を名残惜しむ事も無く、赤い瞳は前を見る。尤も、此処では視覚的に捉える「前」が「前方」とは限らないのだが、それでも、視線は揺れはしなかった。

◇◆◇◆◇◆

「――なんでだろうなぁ。死ぬには良い日、って訳でも無かったと思うんだが。彼の人が言った通り、死ぬには良い日なんて死ぬまで無い、ってのは本当なのかもな」

「――結局は、気紛れ……いや、違うな。俺はただ、漸く借金を返せただけだ。今まで待たせてた分、随分と重くなっちまったけど」

「――そりゃ勿論、死だ。もっと早く返済するべきだったのに、利息がとんでもなく付いちまった」

「――だって、さ。俺が今まで死ななかったから、こんなに――」

◆◇◆◇◆◇

アテもなく走るには、ここの竹林は広すぎた。治ったばかりの足が悲鳴を上げた頃に、私はやっとそう思えた。きっと咲夜も思っただろう。

どれだけ視界が捻れでいても、変わり映えのしない竹の中では意味が無い。

『周囲はおんなじ様な竹ばかりで、風景に大差は無い。所々には怪しげな術が混ざっていて、無意識のうちに網膜に負担をかける……なんか抜けてるような』

鉄生が呟いていた文言。難しい顔でごにょごにょ言っては、何時もの気楽な笑みに戻る。彼の変な癖だった。けれど、そんな癖ですら、今は愛おしい。

『慌てんなよ幽香。好きにやらせんのも良いし、腹が減ったらその内帰ってくるだろ』

今、鉄生が隣にいるなら、こう言うだろうか。いや、自分が原因で娘が飛び出していったんだ、親バカらしい彼なら誰よりも先に走り去るだろうか。

『俺がなにやったってんだよ！　別に泣くような事なんてしてないってのに、咲夜の奴ッ！　泣く位なら逃げないでこっち来いってのッ！』

場違いな想像に、口角が緩む。目元が和らぐ。そして――――鼻先で感じ取った匂いで、眉間に皺が寄る。

血の匂い。それが自分の傷口からでは無く、空に漂っているモノだと気付くには、少しばかりの時間が必要だった。

竹林の迷いでも、匂いを掻き消す事は出来ていない。弱い香りでも、辿る事が出来れば迷わずに元へ進める。

『トラブルの時はさ、格好良く登場したいのが男心って奴だろ。いっつも即興で考えてるんだぜ？　あそこから出たらカッコイイかなーとか……C96なんざ持ってねーよ。ロットンとか言った奴表に出ろ』

私にはそんな事は考えられない。即時速攻解決が一番だ。

この匂いが間違いである事を確かめない事には、私が何時まで正気でいられるか分かったものじゃない――――――――！！

◇◆◇◆◇◆

「――――どこぞの御仁が言ってたな。『男女間でトラブルがあった時、どちらも悪くなければ、男が謝るもんだ』って。……受け売りで悪いがよ、全く以てその通りだ。――悪かった、ごめん」

「――――そりゃあ、俺が謝っても意味は無いだろうがよ。それでも、生者への贈り物としてはかなり上等だと思うぜ？」

「――――だって、死人に口無し、だろ？」

◆◇◆◇◆◇

彼を見た途端、構えていた腕に籠もっていた筈の力が霧散していく。

刻まれた月光の下に、彼は立っていた。

その右手には無骨な剣の様な、槍の様な武器を持ち

その左腕には銀髪の子を抱え

足元には血の海と奇妙な肉塊が広げながらも

風見幽香を、見つめていた。

「――――あ」

流れる黒髪は、青白い光を放つ。反射光とは知ってる筈なのに、まるで髪自体が光っているみたい。

その幻想（見間違い）は、きっと月明かりが白銀を思わせたからだろう。

「――――や、ッぱり……」

顔には、何時（平和な）もの笑み。風見幽香の隣にいた顔が、十六夜咲夜を愛した顔が、人里で好まれた顔が、新聞で知られた顔が、地底を騒がせた顔が、

――――そして、竜神に対してさえも捧げられた顔が、

誰に対しても向けられた顔が、そこにあった。

「――――い、きッ、てて……くれたんだ……」

涙が遮る視界にも、白い袴は問題無く入る。しかし涙と竹林の闇が純白である筈の装束を蝕み、黒が彼を包み込む。

黒髪の青年には、それがとても似合っていた。

「――――てッ……しょう……ッ！」

◇◆◇◆◇◆

「――――俺は……そうだな、蜥蜴の尻尾と言うか、スパイ大作戦のテープと言うか。とにかく、俺は違うとだけ言っておく」

「――――こんな紛いモノで騙せる程、竜神はあまかねーよ。腕を媒体にしてたらもっと保つのを作れたろうが、それじゃあまた乗っ取られる危険があるからな」

「――――そろそろ、伝えて構わないか？　“水元鉄生の遺言”を」

◆◆◆◆◆◆

「――――〈咲夜が起きたら伝えておいてくれ。『こんな駄目な父親は忘れろ』って〉だとさ。まさしくその通りだ、死者に引き摺られる様な事は絶対にやっちゃあいけねぇ」

「――――幽香には、コレを渡しておけとさ。〈どうせなら、何時も持ってて、忘れないで欲しい〉って。……チッ、我ながらおかしな奴だ。娘には忘れてくれって言っておきながら、妻には忘れない

で欲しいってか。馬鹿らしい」

◇◇◇◇◇◇◇

柔らかな笑みを浮かべた彼は、泣き顔の私を見て、こう言った。

「最初に言っておくぞ、風見幽香。俺は偽物だ。本物はとっくの昔に冥土に旅立った」

百十一、真夏の夜の幻<中>（後書き）

ロットンの持ってた銃って見る限りＣ９６だと思う……調べてないから間違ってるかも。間違ってたらゴメンナサイ

んな事よりも、鉄生はやっぱり死んでました。現れた鉄生（自称偽物）の目的とは!?　どういった結末を迎えるか!?　次話を待てい！

百十二、真夏の夜の幻＆ｌｔ；解＆ｇｔ；（前書き）

最終話、で御座います。今まで本当にご愛読ありがとうございました。始めたからには終わらせると心に決めていたので、こうやって完結出来て幸いです。

拙い自分の書き方で、感動的な場面が台無しかもしれません。寧ろ嘲笑を誘うかもしれません。小説とは言えないかもしれません。ですが、これがＤＨＭＯの書いた物語です。出来れば嘲られず、それなりに微笑ましく終われたら幸いです。

では、どうぞ。

百十二、真夏の夜の幻<解>

◆◇◆◇◆◇

竹林の、少し開けた場所。焚き火を囲んで座っているのは、我が子を抱えた風見幽香と、いる筈の無い白袴の鉄生。

木がはぜる音もしない妖力の火は、暗い顔を優しく彩る。

「……咲夜は、どうしたの？」

ポツリと呟く幽香。さっきまでは走り回る位だった我が子が、どうしてこうも寝てしまったのか。その意味を込めての質問だ。

「寝てるだけだ。勘違いされたら困るからな」

「勘違い？」

更に問うと、穏やかな顔を少ししかめて返答。

「……父親がまだ生きてる、って。そんな酷な思い出を残してやりたくは無い」

「ッ……」

二人が避けたい部分。触れられない部分。どんな質問でも、彼に向けられたモノならそうなってしまう。

「……アナタはやっぱり、違うのね」

「何回もそう言ってるだろ。俺は……偽物だ」

◇◆◇◆◇◆

「覚えてる？　……って訊くのもおかしいけど。何時かの夏に、鉄生が渡してくれた指輪」

「ああ。渡した時には着けてくれたけど、次の日からは着けてなかったからさ、結構心配してた。好みじゃなかったんじゃないか、って」

「アレ、まだ大切に取ってあるのよ。本当はずうっと着けてたいけど、私が着けてたらすぐに壊れちゃうから」

「手荒に扱う事前提かよ」

「あら、毎日の様に手合わせをしてくれたのはだぁれ？」

◇◆◇◆◇◆

「……まだ外と幻想郷(中)を行き来してた頃か」

「うん。あの時、なんでついて行かなかったと思う？」

「そういや、花の手入れだって他の奴らに頼んでれば良い訳だしな。ついて来られない理由が他にあったのか」

「他の人に任せてきちんと世話されなかったらヤダ、ってのもあったけど……ほら、良く言うじゃない？」

「なにをさ」

「『恋は障害がある方が燃え上がる』って。それに、いっつも一緒にいるのも良くないから」

「……そんなもんか？」

「そんなもんよ」

◇◆◇◆◇◆

「そう言えば、鉄生の家族ってどうしたの？」

「……家族？」

「そう、家族」

「目の前に愛する妻と子がおりますが言わせんな馬鹿死んでても死にたくなる」

「それも嬉しいけどそうじゃなくて、鉄生の両親とか、兄弟とか。元が人間なら、いたんでしょ？」

「ああ、そゆこと。……もう、諦めてる」

「え？」

「会いたいと思った頃にはなんとやら。会おうにも会えないし、会ったら会ったで……白昼夢を見ちまったからな。とにかく、俺はもう忘れる事にした」

◇◆◇◆◇◆

「最初は寝首でも掻いてやろうと思ってた。なんで自分がこんな馬鹿みたいな奴に負けたんだ、仕返しでもなんでもしてやるって」

「……」

「けどね、段々バカらしくなったの。いっつも笑ってる鉄生を、本

当に楽しく生きてそうな鉄生を見てると――――同じ妖怪なのに、なんでこうも違うんだろう、って思えてきた」

「……」

「私もああやって笑っていられるのか。笑っていたい。笑って、一緒にいたい。何時の間にか、そう考えてた」

「わーった、分かったからそろそろ止めてくれ。本人と違うとは言えちょっと耐えられん」

「本人じゃなかったらとっくに顔をしかめてると思うけど？　紫なんかに聴かせるともう反吐が出るって顔するけど」

「……しかめもしない理由を言わせたいみたいな雰囲気だな」

「よく分かってるじゃない」

「……ケッ」

◇◆◇◆◇◆

「切欠は些細な事だ。子供らと遊んでる所を校長殿に見られて、それからそれとなく言われ続けてた。まぁ、八雲からの頼まれ事があったから無視してたけど、最終的に無視出来る感じじゃなかったからな」

「やっぱり自主的じゃなかったんだ。ホッとした」

「食い扶持を稼ごうと夫が働いてたってのにその言い草かよ」

「だって折角二人きりだったのに、仕事なんて持ったら台無しじゃない」

「ッ……」

「早く飽きるかな、って思ってたのに、存外に長かったから驚いたし、ちょっと妬いてた」

「……よくもまぁ、臆面も無くそんな事を……」

「これでも照れてるつもりなんだけど？　ほら、頬も赤いし」

「焚き火の照りと区別がつかんよ」

◇◆◇◆◇◆

「怪我して帰ってくる事も多かったわね」

「自業自得だ」

「潔いのは好きだけど、この場合は開き直ってるだけよ」

「好き勝手にやった代償があんなんなら、安いもんだろ」

「……どこに行っても鉄生は鉄生だったのね」

◇◆◇◆◇◆

「ヴィンセントを連れてきたのも俺だったからなぁ。その付き合いの中でまぁ色々」

「結構な気に入られ様だったじゃない。よく面倒も見てたみたいだし」

「まッ、友人のケツを拭ってるだけだ。アイツが中途半端にしていきやがったんだから、仕方無い」

「本当は？」

「娘がいるみたいで楽しかったから」

「……」

「……正直の何が悪い」

◇◆◇◆◇◆

「じゃあ、咲夜は末っ子みたいなものよね。レミリア、フランに咲夜、と」

「あー……まぁ、そう言えばそうなるが」

「私はあんまり上の二人に構って無かったけど、だとしたら紅魔館でのお母さん役って誰よ？」

「……紅美鈴、かね。消去法で」

「小悪魔とか、パチュリーとかは？」

「いやそれは客人だし。妖精メイドは言わずもがな、とすればまともな奴がいない」

「……意外と人員不足なのね」

「おっかない最終兵器がいるからかもな」

◇◆◇◆◇◆

「いきなり新聞を首筋に狙われた時は死ぬかと思ったな」

「思わず撃ち落としちゃったし」

「正当防衛だろ、どう考えても」

「あんな押し売りよりも強引な手だと、ねぇ」

「取材に答えると分かったら分かったでピーチクパーチクうるさくなったしなー」

「あそこまでつけ上がるとは思わなかったの？」

「考え無しは何時も通りだろうが」

◇◆◇◆◇◆

「白玉楼の主は？」

「なんだっけ……八雲の手伝いをした時に知り合ったんだっけ」

「掴み所の無いのが第一印象だったわ。それと大食らいも」

「まぁ、幽霊だし。体も底も亡いんだろ」

「ついでに遠慮もね」

「……なんかあったのか」

◇◆◇◆◇◆

「妖忌」

「……こらまた懐かしい名前を」

「ついでに訊かせて。刀も持たずに去っていったらしいけど、その立ち会いには鉄生しかいなかった。なにか知ってるんでしょ？」

「まぁ、一応は。息子夫婦に会いに行くとかなんとかと俺は聞いた」

「……なんで半端な頃に？」

「……さぁ？　思い立ったが吉日って奴じゃないか？」

◇◆◇◆◇◆

「医者の伝手は？」

「俺も大怪我負ったからな。ホラ、フランドールの時に」

「ああ……そう言えば、恨んでないの？」

「誰を」

「フランをよ。目を潰されたり、凍死しかけたり、あんまり良く思ってないんじゃない？」

「つったって、どれもフランドールが悪い訳じゃ無いんだから、俺が恨む恨まないも無い。俺の意志でやったんだから」

「そんなの、善人過ぎよ」

「んなこたぁ無い。ただ可愛いのに甘いだけ」

「……私には？」

「んな事言えるか阿呆」

◇◆◇◆◇◆

「冥界と言えば」

「言えば？」

「閻魔とドコまで行ったのよ」

「……」

「怒らないから、なんて生温い事は言わないから、さっさと吐きな

さい」

「……いや、俺は相手から貰った感情をお返ししてるだけだから、っつかそれについてはもう言ったろ！　今更蒸し返すなよ！」

「ど・う・な・の・よ」

「キス止まりです頼むからそれ以上追求せんといて下さいお願いします」

「……だったら、不問に処する」

「有り難き幸せ」

◇◆◇◆◇◆

「博麗神社はどうだったの？」

「綺麗さっぱりなんにも無くなってた。けど溶岩の影響が出てたのは境内だけか。周りの森にはなんも」

「……巫女達にも迷惑掛けてたわね」

「怖い奴は一人しかいなかったがね」

「だから迷惑掛けてたって言ってるのよ」

「妖怪の凶行を未然に防げるかのテストをするのの何処が悪い」

「凶行って言うのに茶菓子をくすねたり賽銭箱を盗んだりってのが入ってるなんて驚きだわ」

◇◆◇◆◇◆

「何時の間にか馴染んでたよな」

「順応性が高かったのね」

「そう言う問題か？」

「だって、普通の子ならイタズラばっかりしてる男をずうっと『お父さん』って慕ってられる？　一緒にお風呂入れる？　一緒に寝れる？」

「いやそこは俺から滲み出るカリスマと言う名のオーラが何故目を逸らして溜め息を吐くか風見幽香」

◇◆◇◆◇◆

「あの時は地底に行ってたんだよ。なんの因果か知らんが」

「地底……って、何がいたの？」

「知らんのかいな。鬼だよ。鬼。それと厄介な奴らも押し込められてるみたいだ」

「厄介って、どんな？」

「某幽波紋使いばりに心を読んだり、死体愛好癖があったりする姉妹とか。後者は実際に会ってないから定かではないけど」

「……随分、その、ふぁんたすてぃっくな所ね」

「まぁ、幻想郷だからな」

◇◆◇◆◇◆

「寺子屋での咲夜って、結局見れたの？」

「修行中でも勉強はさせたさ。尤も、元から結構頭良いからな。必要無いかもしれない」

「……浮いたり、してない？」

「ハブられたりはしてないけど、やっぱなぁ。引っ込み思案ってか、

人見知りってか。休み時間でもあんまり友達と話したりしないで、本読んだりとか」

「うーん……どうしよう？　寺子屋の事、話したりするべきかな？」

「どないしょうもない。こればっかは本人が決める事だ。関わりたくないなら関わらない、話したいなら話す。自分の意志位は表せるよ、あの子は」

「……やっぱり、可愛い我が子なのね」

「じゃなきゃ一緒に風呂も入らないし寝たりもしない」

「……私は？」

「それはもおええっての」

◆◇◆◇◆◇

空の色が薄まり始めた頃に、その人形は立ち上がり、幽香を見た。その顔に柔らかさは無く、使命を帯びている。

「そろそろ伝えて構わないか。“水元鉄生の遺言”を」

とうとう、彼はその話題に触れた。風見幽香が避けていた話を、いとも簡単に出してきた。

「……ええ、そうね。もう、逃げちゃダメ、なのね」

「……悪いな」

一瞬、躊躇う眼。人形とは言え、彼女を愛している事には代わりは無い。膝から咲夜をそっと降ろし覚悟を決めた風見幽香は、人形に取って眩しく、申し訳無かった。

「――――〈咲夜が起きたら伝えておいてくれ。『こんな駄目な父親は忘れろ』って〉だとさ。まさしくその通りだ、死者に引き摺られる様な事は絶対にやっちゃあいけねぇ」

自嘲気味な口調。その口調には、人形の存在自体を嘲る意味も含めていた。死者の姿を模した身体は、それ自体が生者への足枷となる。

「〈咲夜へのプレゼントは用意してあるが、貰わない方が幸せかもしれない〉とも言ってたっけか。まぁ、オリジナルが考えてた事は分からんがな」

思案顔を頭を掻く動作で直し、大地に刺していた武器に手を取る。鈍い銀色を放つそれは先端が完全には尖っておらず、取っ手はUの字に歪曲していた。その形はまるで――

「……傘？」

「幽香には、コレを渡しておけとさ。〈どうせなら、何時も持ってて、忘れないで欲しい〉って。……チッ、我ながらおかしな奴だ。娘には忘れてくれって言っておきながら、妻には忘れないで欲しいってか。馬鹿らしい」

自分がそのおかしな奴の分身だと言うのに、心底阿保らしそうな顔をしている。けれど声色には蔑みの感情は無く、寧ろ暖かみを感じる。

「ほらよ。布地は用意出来なかったみたいだから、自分で調達してくれ。ああ、前に香霖堂で買った残りがあったか？　ま、そこまで仕上げられずにすまんな」

受け取った形見。鉄とも銀とも付かないその輝きを放つ無骨な骨組みは、よく見れば美しい模様が入っている。波の様な、木目の様な模様。重さも忘れる程、魅入ってしまえる。

「ダマスカス鋼、だったか。それを真似たんだとさ。鉄や銀じゃ味気ない、金じゃ集まらないし軟らかすぎる。てな訳で、色んな金属を混ぜて、その紋様を作った、と。なけなしの霊力と地脈を織り込んで作ってたから、そう簡単には壊れない筈だぞ」

風見幽香の手荒い使い方に着いて行けるかどうかは分からないが、と付け加えるのは忘れていない。そんな事は幽香にも分かっているが、間違っても壊すような真似はしないだろう。

「大丈夫よ。一生、大切にするから」

両腕で抱き締めながら、そう誓う。閉じた瞼の裏に浮かんだのは、向日葵畑で笑う鉄生。その思い出が零れ落ちる様に、涙が頬を伝う。

「……あくまで“俺の意見”だが、妖怪の一生は長いんだ。俺達の事を忘れてしまって構わない。俺達が重石になるのなら、何時でも切り離してくれ」

「そんな事、ある訳無い」

信頼と、束縛への肯定を込めた言葉。死者への信頼が答えられる日は来るのだろうか。生者からの信頼に死者は応えられるのだろうか。

不意にそう問われた人形は、逃げる事にした。

「……そんじゃ、そろそろいくわ。もう壊れる頃合いだ」

安らぎ顔の二人に背を向け、日が昇り出す方角へと進もうとする人形。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「待って！」

後ろからの抱擁。それは、先程から接触を拒んでいた人形でもかわせなかった。

「……俺は、偽物なんだ。お前に嘘を付く訳にはいかない。離してくれ」

「だから、咲夜に何も言わないの？　あの子に、なにも言ってあげないの？」

頑なに拒み続ける人形を、必死で説得する幽香。だが、どうにも持ち主以外の命令は聞こうとしない。

「風見幽香――――」

「幽香、って呼びなさい。人形なら、大人しく操られなさいよ」

真剣が飛んできそうな声に、思わず溜め息が出る。本物と寸分違わぬ性能、それは意志の硬さもなのだろうか。

「……俺はただの水元鉄生の残滓なんだよ、幽香。伝えたい事を伝えたら消える様に仕組まれてるんだ」

「なんでよ……ずっと一緒にいてくれた方がいいじゃない！　なんでまた消えなきゃいけないの？　なんで……一緒に、いられないの？」

思い出話に花を咲かせていた頃には聴けなかった、幽香の涙声。背中に押し付けてくる触覚。そして――――泣かせてしまったと言う、後悔。

「ワガママ、言うな。幽香がガラクタと一緒にいるなんて、俺が許せなくなりそうだ。紛い物なんだって、俺は」

抵抗の言葉にも、力が入らない。反面、胴を抱く腕には力が入っていき、その拘束をより強くしていく。

「てっ、しょう……いかないで……」

「――――――ッ！」

甘える様な、縋る様な、呟き。その一瞬弱くなった拘束は、人形であろうと見逃せる筈も無かった。

幽香の腕を振り払い、前に数歩進む。だが、その数歩で人形は動きを止めた。

「……どう、したの？」

「……わからんかなぁ」

クルリと向き直り、髪が空を泳ぐ。逆光で見えない顔は、何故か微笑んでる様で、はにかんでいる様だった。

「さっきのままだと、俺が幽香を抱きしめられないだろっ」

ちょっと投げやりな言葉とは裏腹に、優しい慰め方。人形には有り得ない暖かさが役立ったのは、これが最初で最後かもしれない。

永遠が欲しい。そう思ったのは、どちらだろうか。どちらもだったろうか。けれど、彼は永遠には見放されていた。

だから、妖怪（エイエン）とは別れを告げなければならなかった。

「――――さよなら、幽香。今まで楽しかった。……月並みだが、愛してる」

そうして彼は、二度と振り向かなかった。

次振り返ったら、今度は自分が泣いてしまうから。

◆◇◆◇◆◇

崩れていくカラダ。

溶けていくイシキ。

人間が死ぬ時もそうなのだろうか。人形の自分には分からない。

無くなっていくショッカク。

霞んでいくシカイ。

自分の場合は、段々無くなっていくんだ。自身を水元鉄生と構成するモノの存在が、希薄になり、消える。

「――――――ハッ。消えるも何も、もとより無い身――」

どこへやらと、朝霧が如く無くなれば。そう思っていたのに

「――だから、俺を追い掛けても、意味は無いんだよ。十六夜咲夜」

これでは、夢幻に消える夢すら、叶えられない。

「おとう、さん……」

「……」

荒い息。走ってきたらしい。俺に追い掛ける価値があるだろうか。

俺にお父さんと呼ぶ価値があるだろうか。

「どこ、いっちゃうの？」

「……」

信心を忘れていない声。疑わない声。どうせなら罵ってくれた方がマシだ。

「なんで、私の事、置いてっちゃうの？」

「……」

未練がましいと自分でも分かる。こうやって声を掛けられただけで歩を止めて、少しでも此処にいようとする。さっさと消えてしまえば、葛藤も無い筈なのに。

「……お父さん……私の事、嫌いになったの？」

「……」

もしかすると、幽香よりも強力かもしれない。素で泣き落としが出来るとは侮りがたい。

抗うココロ。

失せないオモイ。

耐えるイシ。

二言三言で、奮い立たされてしまう。

残りたいタマシイ。

もっと生きていたいと――思って、しまう。

「……咲夜」

日の出を拝みながら、ふと口から名前が出る。偽物だと認識した時、意識して止めていた呼び方だと言うのに。

「もう俺はやる事が済んだんだ、いる意味が無い。それに、いない人間がいていい道理も無い」

「……お父さんは、ここにいるよ。いない人なんかじゃない、ここにいる。だって、こうやって触れるもん」

視界が上にズレる。どうやら、咲夜が後ろ髪を掴んだ様だ。全く、感覚が無いからいいものの、イヤなものはイヤなんだが。

「実体があればいる、ってのは間違いだ。そこになにも無ければ無い、って事を認めるには、幻想郷の在り方も壊す事になる。俺は実体があっても、中身は劣化コピーなんだ。本物と比べる事自体が愚かしい」

俺は水元鉄生じゃない。姿は同じでも、声は同じでも、思考も知識も記憶も同じでも、二番目であれば一番目と同一である訳が無い。同じであるなら、自論を振りかざしたりなんかはしない。

「お前が知ってる『水元鉄生』はもういないんだよ、咲夜。さっさと忘れちまえ」

握る力によって、拒否が示される。そろそろ髪の毛を維持するのも億劫に、と思った瞬間、長い黒髪は突然別れを告げた。ブチブチと

千切れるのでは無く、掴んでいた蜘蛛の糸が切れる様に。残ったのは、純正人間だった頃の髪型。

「丁度良い、か。妖怪混じりだった頃とは違うんだから、決別する意味もあっていい」

「あ、あれ……！？」

尻餅を付いた咲夜が掴んでいたモノはあっと言う間に土気色になり、ボロボロと崩れ去る。焼身が死因なら、灰燼に帰すと言う表現に間違いは無いのかもしれない。灰とも砂ともつかないソレは、重力を感じないかの様に空へ飛び去り、消えていった。

「なんかあったな。髪の毛ってのは魂を宿すモノだから、遺骨やらの代わりに遺すって。魂もなにも無いんだから、存在しないのは当たり前か」

自嘲と微笑みを使い分ける姿は、確かに人間とも妖怪とも取れない。表情の方向性は同じだと言うのに、これほどまで相手に与える印象を変えられるのだろうか。

「おとう、さん……やだよ……ッ！」

今度は、胴体への衝撃。視界が揺れるのはそうだが、背中が変に窪んだ気がするし、首の所に巻き付く腕が暖かい。

「そうやって飛びつかれたら、只でさえ少ない寿命が縮んじまうよ。もうガラス細工よりも脆くなってんだから」

ぱらぱらと身体の隅々から落ちだす粒子は、消えていく命と正比例

な量であろう。こうやって身体だけでなく、子供一人分まで耐える両足を褒めてやりたい。

「お母さんも泣いちゃうよッ！？　寺子屋のみんなも泣いちゃうよッ！？　お父さんがいなくなったら、みんな、みんなッ……ぅ、ぅぅ、おとおさぁん……」

咲夜が今まで堪えていた感情が、滝の様に俺へと降り注ぐ。感覚が無くなった筈の首筋はどんどん熱くなり、それと同時に咲夜の泣き声も大きくなる。いや、ほんとうになきごえなのか？　どうにもみみがきかなくなってきた。こうやってものをかんがえるのも、すごくむずかしい。まるでねむくなるように、まるでちおけていくように、おれというそんざいがきはくになっているんだ

「――――」

さくやがないているのに、なぜかとてもうれしい。くびとおなじように、じんわりとむねがあったかくなっていく。なんでだろう？　ほんにんでもこんなことになるのだろうか。ほんものでも――――

「――――ああ、そうか」

わかった。なんでうれしいのか。おれは、さいごにほんものいじょうになれたのかもしれない。いや、ほんにんより、しあわせになれたんだとおもう。そうおもわなきゃやってらんない。

◆◇◆◇◆◇

「ほんものでも、こうやってなきつかれながらいけなかったんだ。うれしいって、おもえる、わけだ、よな――――――」

――――――辛うじて動いていた唇も止まり、完全に硬直する。その姿は石膏像の様に白く、無機質。

今にも崩れそうな肩に手を掛けて、顔を覗き込んだ。死に顔を見る、と言う意味は無く、ただ、どんな顔をしているのか、と言う興味から。

泣いているのか。怒っているのか。そんな事ばかり思ってしまう咲夜だったが、人形の顔を見た途端、そんな考えは無くなった。

それは涙だらけの瞳でも分かる程、とても晴れやかな、父親の笑みだった。

百十二、真夏の夜の幻＆lt；解＆gt；（後書き）

……いやー、長かった。と言っても一年経ってませんし文字数もしけてますが、なんとか終わりました、東方魂合変。副題を付けるなら「水元鉄生の奇妙な人生」とでも。ジョジョみたく気の効いた文言が思い付けないちくせう

去年から今に掛けて、本当に紆余曲折ありました。最初の頃なんて小説の書き方すら知りませんでした。今も分かってない所も多々あります。

主人公が死ぬエンドはかなり初期の方から思い描いてました。火炙りにする案もあったんですが、それだと幽香から離れてしまいそうだったので今みたいな同士討ちエンドに。

そーいえば色んな所で言ってるのですが、実は自分、最初の時はあんまり幽香が好きじゃなかったです。いや、好きは好きだったのですが、最初は嫁にする気なんてさらさら無かったんです。幽香の魅力って怖い。

因みに、嫁候補は八雲藍でした。無理な登場の仕方はそれのせい。

そう言えば、鉄生の名前って結構意味があるんですよね。「水元」はユーザー名と被るし、「鉄生」は能力に。偶然って本当に怖い。

他の名前？　ノリ。

書きたい事は沢山あるのですが、そろそろお別れです。シーユー！

んな訳あるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　まだ終わりじゃないっ！　東方魂合変次回作、『東方災生変』！　何時出すか未定！　エンドは決定！　お楽しみにッ！

あ、関係無いですが、この話を投稿した９／２９は自分の誕生日です。誕生日になにやってんだろうね、俺。

読み切って下さった方は感想を残して頂ければ作者が幸せです。勿論二部が始まった後でも構いません。何時でも何処でも何度でも御感想をお寄せ下さい。足跡代わりに、是非。

それではッ、第二部で会える事を願ってッ！アリーヴェデルチ！（さよならだ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0824p/

東方魂合変

2011年9月29日18時18分発行